



WebSphere Process Server のインストールと構成

お願い

本書に記載されている情報をご使用になる前に、253 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6、リリース 0、モディフィケーション 2 (製品番号 5655-N53)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： WebSphere Process Server for z/OS
Version 6.0.2
Installing and Configuring WebSphere Process Server version

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2007.3

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2006, 2007. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2007

目次

WebSphere Process Server のインストールおよび構成	1
インストールおよび構成の概説	2
始める前に	3
z/OS へのインストールについて	24
アップグレード・プロセスについて	44
z/OS での製品の構成について	48
WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成の計画	59
ハードウェアおよびソフトウェア要件	65
基本オペレーティング・システムの準備	65
z/OS へのインストールの準備	66
異機種混合セルを使用したセル内の混合プラットフォームのサポート	68
製品バージョン情報	68
システムへの製品コードのロードの計画	70
構成の計画	74
Business Process Choreographer の使用計画	103
ソフトウェアのインストール	103
インストール・メディアから z/OS への製品コードのロード	103
インストール・スクリプトの実行	107
WebSphere Process Server Client のインストール	111
WebSphere Process Server Client のサイレント・インストール	115
共存	120
共存のサポート	120
ポート競合の回避	121
複数バージョンの WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、および WebSphere Business Integration Server Foundation でのポート番号設定	122
WebSphere Process Server Client をインストールして、各種 WebSphere 製品の既存のインストール済み環境と共存させる	127
ソフトウェアの構成	131
ビジネス・プロセス・コンテナのキュー・リソースを WebSphere MQ を使用して構成する場合の考慮事項	132
データベース仕様書	133
データベースを作成する際の考慮事項	155
データベースおよびストレージ・グループの作成	157
応答ファイルでの作業	161
スタンドアロン構成の作成	200
Network Deployment 構成の作成	208
空の管理対象ノード構成の作成	214
空の管理対象ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合	217
コンソールの設定を調整するための変数の jacl スクリプトのダウンロードおよび実行	219
セル間で Service Component Architecture の各種サービスにアクセスできるようにする	221
手動によるデータベースの構成	234
Business Process Choreographer の構成	236
スタンドアロン・サーバーとしての WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成の確認	236
製品保守の適用	237
サービス・レベルの適用または前の受け入れ済みサービス・レベルへの復元	237
アンインストール	238
概説	238
インストール・スクリプトの実行による WebSphere Process Server for z/OS のアンインストール	238
Business Process Choreographer のアンインストール	241
Common Event Infrastructure 構成の除去	241

インストールおよび構成のトラブルシューティング	244
WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成のメッセージ参照情報	248
ログ・ファイル	249
特記事項	253
プログラミング・インターフェース情報	255
商標	255

WebSphere Process Server のインストールおよび構成

このセクションでは、WebSphere® Process Server for z/OS® の準備、インストール、および構成に必要な情報を示します。

WebSphere Process Server 資料 (PDF 形式)

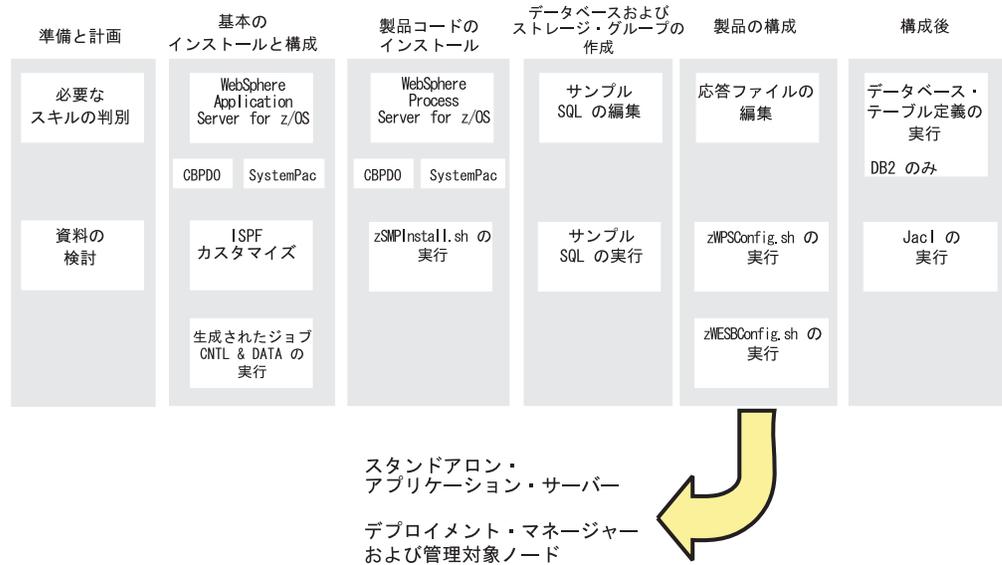
作業の概要: インストールおよび構成

ここでは、サポートされる構成の WebSphere Process Server for z/OS インストールおよび構成作業の流れについて説明します。

始める前に

このセクションでは、インストールの前および後に実行する必要がある作業を含む、IBM® WebSphere Process Server のインストールおよびカスタマイズのコンテキストについて説明します。

以下の図に、製品のインストールおよび構成を行うための作業の流れの概要を示します。



カスタマイズされた完全な WebSphere Process Server アプリケーション・サービス提供環境を作成するには、製品バイナリーをインストールし、WebSphere Process Server の定義を作成し、必要に応じてユーザー・プロファイルを拡張して、サーバーを立ち上げる必要があります。

インストールおよび構成の概説

このセクションでは、WebSphere Process Server for z/OS のインストールと構成の手順を理解するのに役立つ情報を示します。ここでは、WebSphere Process Server for z/OS のパッケージ化と用語、ソフトウェアのインストールおよび構成の作業フローについて説明します。

WebSphere Process Server for z/OS のインストールと構成を行う前に、『インストールおよび構成の概説』のセクションに記載されている内容をすべてお読みください。

WebSphere Application Server for z/OS のインストールおよび構成との関係

WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成は、WebSphere Application Server for z/OS のインストールおよび構成と緊密に統合されており、依存関係にあります。

WebSphere Application Server for z/OS と WebSphere Process Server for z/OS との関係は、スタンドアロンの WebSphere Process Server for z/OS サーバーの作成処理時に問題になります。このサーバーを作成するには、あらかじめ WebSphere Application Server for z/OS をカスタマイズしておく必要があります。こうすると、このスタンドアロン・アプリケーション・サーバーのデフォルト・プロファイルは WebSphere Process Server for z/OS スタンドアロン・サーバーの構成データによって「拡張」されるため、このスタンドアロン・アプリケーション・サーバーがスタンドアロン・サーバーとして構成されます。

WebSphere Application Server for z/OS は、WebSphere Process Server for z/OS 内にデプロイメント・マネージャーを作成する場合にも使用されます。デプロイメント・マネージャーは、そのセル内のすべての管理対象ノードの構成を管理し、アプリケーションをセル内の管理対象ノードにデプロイします。

重要: ほかのプラットフォームでは、WebSphere Application Server ランタイム環境に関連付けられた構成ファイルはプロファイルと呼ばれます。プロファイルをコピーおよび操作するには、`manageprofiles` コマンドを使用します。

WebSphere Application Server for z/OS では、すべてのランタイム環境は ISPF カスタマイズ・ダイアログによって作成され、**default** というプロファイル名が使用されます。WebSphere Process Server for z/OS の構成処理を行うと、アプリケーションおよびリソースがこのデフォルト・プロファイルに追加され、これによって WebSphere Process Server for z/OS ランタイム環境が作成されます。

インストールおよび構成作業の流れ

以下の図に、WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成を行うための作業の流れの概要を示します。



カスタマイズされた完全な WebSphere Process Server アプリケーション・サービス提供環境を作成するには、製品バイナリーをインストールし、WebSphere Process Server の定義を作成し、必要に応じてユーザー・プロファイルを拡張して、サーバーを立ち上げる必要があります。

始める前に

WebSphere Process Server for z/OS を正常にインストールして構成するには、十分な準備が整っていることを確認する必要があります。インストールを開始する前に、スキルと研修の必要性の評価、資料のインストール、ハードウェアおよびソフトウェア要件の確認、インストールと構成の計画、基本オペレーティング・システムの準備を行ってください。

ドキュメンテーションのインストール

z/OS 上に、WebSphere Process Server for z/OS インフォメーション・センターのサーバー・コピーをインストールして実行することができます。

z/OS でのインフォメーション・センターのインストールおよび実行の要件と考慮事項

ドキュメンテーションは、Eclipse 文書プラグインとしてパッケージされ、IBM WebSphere ヘルプ・システムを使用して表示する必要があります。この IBM WebSphere ヘルプ・システム (つまりビューアー) および文書プラグイン形式は、Eclipse Project によって開発されたオープン・ソースの方法を基にしています。IBM 製品の文書プラグインは、一貫した命名規則 (com.ibm.xxx.doc) に従うフォルダーに格納されています。

IBM WebSphere ヘルプ・システムは、WebSphere Process Server for z/OS プロダクト・テープにパッケージされています。このトピックの情報は、WebSphere Process Server for z/OS 製品インストールの一部として、IBM WebSphere ヘルプ・システムが z/OS にロードされていることを前提とします。

WebSphere Process Server for z/OS インフォメーション・センターのサーバー・コピーをインストールおよび実行する場合は、以下の要件および考慮事項を認識している必要があります

- z/OS 上のインフォメーション・センターのサポートは、ブラウザを使用したりモート・アクセスのサーバー・モードのみで提供されます。
- インフォメーション・センターは、JRE を使用します。z/OS 上でインフォメーション・センターを実行する場合は、オペレーティング・システムに付属する JRE を使用する必要があります。
- インフォメーション・センターは、z/OS 1.4 以降の UNIX[®] System Services (USS) で実行されます。
- インフォメーション・センターを表示する際に最良の結果を得るためには、以下のブラウザのいずれかを使用することをお勧めします。
 - Microsoft[®] Internet Explorer 6.0
 - Mozilla 1.7
- インフォメーション・センター内で PDF 文書を表示するには、Adobe Acrobat Reader 4.05 以上がインストールされ、Acrobat Web プラグインがブラウザにインストールされていなければなりません。
- z/OS システム上のファイルを扱う作業をするには、システム管理者によって適切な権限またはアクセス権が設定されるようにします。
- インフォメーション・センターで最初に検索を実行するときは、事前に生成された検索索引を unzip し、追加のファイルがあれば索引を作成するため、遅延が生じます。サーバー環境では、インフォメーション・センターで検索を実行するすべてのブラウザ・ロケールごとに、索引付けが 1 回行われます。例えば、あるユーザーのブラウザ・ロケールが **en_gb**、別のユーザーのロケールが **en_us** である場合、両方のユーザーが検索索引を作成します。
- 情報をオフラインで扱うための別の選択肢としては、WebSphere Process Server for z/OS ライブラリー・ページから資料の PDF バージョンをダウンロードすることができます。

注: 既に Eclipse ヘルプ・システムまたは WebSphere Integration Developer などの Eclipse ベースの IDE がある場合は、WebSphere Process Server for z/OS 文書プラグインのみをインストールして、そのツール内で資料を表示することもできます。

ドキュメント・プラグインのインストール

ビューアーで IBM 製品資料を表示するには、IBM WebSphere Help System の eclipse/plugins フォルダに、新規または更新された文書プラグインをインストールする必要があります。ヘルプ・システムは、IBM 製品文書プラグインを含む Eclipse 文書プラグインとしてパッケージされた情報を扱います。IBM 製品プラグインのフォルダは、共通の命名規則 (com.ibm.xxx.doc) を使用しているため、容易に識別できます。

文書プラグインをインストールするには、以下のステップを実行します。

1. Eclipse ヘルプ・システムをインストールするには、以下のステップを実行します。

- a. `cd install_root/zos.iehs/lib` を実行して、このディレクトリーに移動します。
- b. ファイル **IBM-Help-zOS.tar** を見つけます。
- c. **IBM-Help-zOS.tar** を `untar` するディレクトリーを作成します。以下に例を示します。

```
mkdir<dirname>
```

ここで、<dirname> は、ユーザー定義のロケーションです。

- d. 次のコマンドを使用して、選択したディレクトリーにファイルを `untar` します。

```
tar -xvf IBM-Help-zOS.tar -C <directory name>
```

これにより、ヘルプ・システムが指定したディレクトリーに抽出されます。

2. IBM 製品の Web ページ <http://www.ibm.com/software/integration/wps/library/infocenter/> から文書プラグインを入手します。
3. 必要な文書プラグインをダウンロードします。

マシン上のローカル・ディレクトリーに ZIP ファイルをダウンロードしてから、FTP を使用して、z/OS システム上のディレクトリー <directory name>/eclipse/plugins にファイルを転送することができます。

このディレクトリーは、ヘルプ・システムを `untar` したときに作成したディレクトリーです。

- FTP を使用する前にプラグインの `tar` ファイルを作成した場合は、上述の `tar` コマンドを使用してプラグインを抽出することができます。
- FTP を使用する前にプラグインの ZIP ファイルを作成した場合は、`jar` コマンドを使用して正しいディレクトリーにプラグインを `unzip` することができます。例えば、`jar -xvf <plugins.zip>` と入力することができます。ここで、`plugins.zip` はユーザー定義名です。

これらのコマンドは、ディレクトリー構造を維持します。プラグインの抽出時に、それらが **eclipse/plugins** ディレクトリーに配置されたことを確認してください。

注: このフォルダーは、IBM WebSphere ヘルプ・システムの `eclipse/plugins` フォルダーである必要があります。ご使用のシステムには、これ以外の `eclipse/plugins` フォルダーが存在する場合があります。

4. **IC_start.sh** スクリプトおよび **IC_end.sh** スクリプトのアクセス権を変更して、インフォメーション・センターを開始および停止するファイルを編集および実行できるようにしてください。
5. `ibm_help` ディレクトリーで提供されている始動ファイル **IC_start.sh** を編集して、Java™ のロケーションを指すようにしてください。

例えば、`export PATH=/usr/lpp/java142/J1.4/bin:$PATH` という記述をファイルに追加することができます。ここで、`/java142/J1.4/bin:$PATH` は Java のロケーションです。

注: Eclipse を使用するには Java™ 1.4.2 を実行する必要があります。これは、z/OS を除くすべてのプラットフォームのインフォメーション・センターに付属しています。

6. ファイル `IC_start.sh` ではポート番号も指定されています。デフォルトは 8888 です。-port パラメーターを編集すると、これを変更することができます。

ビューアーの開始

インフォメーション・センターを実行するためのバッチ・ファイルが、単一のワークステーションでローカルに提供されるか、または複数ユーザー用にサーバーで提供されます。

ISPF から、または Telnet を使用して、インフォメーション・センターを開始できます。

サーバーでインフォメーション・センターを開始するには、以下のステップを実行します。

1. ヘルプ・システムをインストールしたディレクトリーを開きます。
2. ファイル `IC_start.sh` を実行します。

インフォメーション・センターを、バックグラウンド・タスクとして実行することができます。これは、ワークステーションからログオフしても、インフォメーション・センターが継続して実行されることを意味します。コマンド `./IC_start.sh &` を使用します。

3. インフォメーション・センターが開始したことを確認するには、ブラウザを開き、ファイル `IC_start` で指定されているサーバーの名前とポート番号を使用して URL を入力します。

例えば、`http://winmvs26.site.company.com:8888` と指定することができます。デフォルト・ポートは 8888 ですが、始動ファイル `IC_start` を編集して、-port パラメーターを適切な値に設定することにより、この値を変更することができます。

注: インフォメーション・センターで最初に検索を実行するときは、事前に生成された検索索引を `unzip` し、追加のファイルがあれば索引を作成するため、遅延が生じます。ローカルのインフォメーション・センターでは、このアクションは 1 度のみ実行されます。サーバー環境では、インフォメーション・センターで検索を実行するすべてのブラウザ・ロケールごとに、索引付けが 1 回行われます。例えば、あるユーザーのブラウザ・ロケールが `en_gb`、別のユーザーのロケールが `en_us` である場合、両方のユーザーが検索索引を作成します。

ビューアーのシャットダウン

ISPF から、または Telnet を使用して、インフォメーション・センターを開始できます。

サーバーでインフォメーション・センターをシャットダウンするには、以下のステップを実行します。

1. ヘルプ・システムをインストールしたディレクトリーを開きます。

2. ファイル `IC_end.sh` を実行します。

インフォメーション・センターを、バックグラウンド・タスクとして実行することができます。これは、ワークステーションからログオフしても、インフォメーション・センターが継続して実行されることを意味します。コマンド `./IC_end.sh &` を使用します。

補助 CD にパッケージ化されているヘルプ・システムの使用による文書のインストール

IBM WebSphere ヘルプ・システムのサーバー版の WebSphere Process Server for z/OS プロダクト・テープへのパッケージ化以外に、WebSphere Process Server for z/OS 製品に付属している補助的な Message Service Client CD (Linux® オペレーティング・システムの場合は LCD8-0507、Windows® オペレーティング・システムの場合は LCD8-0506) に収録されているバージョンのヘルプ・システムがあります。

文書プラグインをインストールするには、以下の手順を実行します。

1. Messaging Clients の補助 CD に収録されている IBM WebSphere Help System をインストールします。

ヘルプ・システムのコンポーネントは、`¥IEHS` ディレクトリーにあります。

2. IBM 製品の Web ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wps/infocenter/>) から文書プラグインを入手します。
3. この文書プラグイン・フォルダーをヘルプ・システムの `eclipse¥plugins` フォルダーにコピーします。

例えば、ヘルプ・システムを `C:¥WebSphere Help System` にインストールした場合は、文書プラグイン・フォルダーを `C:¥WebSphere Help System¥eclipse¥plugins` にコピーします。

これは IBM WebSphere Help system の `eclipse¥plugins` フォルダーでなければなりません。システム上には別の `eclipse¥plugins` フォルダーもあります。

4. 新しく追加されたドキュメント・プラグインを確認するには、次の『ビューアーの開始』セクションの説明に従ってビューアーを開始します (また、以下の『ビューアーのシャットダウン』セクションの説明に従ってビューアーをシャットダウンします)。

CD からインストールしたヘルプ・システムのビューアーの開始

ビューアーを開始するには、次のようにします。

1. WebSphere Help System フォルダーを開きます。
2. `help_start.bat` ファイルをダブルクリックします。

注: 初めて開始するときには、システムが始動し、ドキュメント・プラグインが表示されるまでに数分かかります。

CD からインストールしたヘルプ・システムからのビューアーのシャットダウン

ビューアーのウィンドウを単に閉じることによってビューアーを閉じても、プロセスはバックグラウンドで実行され続けます。これにより、後続のセッション時には

かなり高速で起動することができます。ただし、新規プラグインを使用してドキュメント・プラグインをインストールするか、Help System を更新する場合は、これらのプロセスをシャットダウンする必要があります。使用しないときにはビューアーをシャットダウンすると、システム・メモリーも解放されます。マシンをシャットダウンすると、Help System のすべてのプロセスもシャットダウンします。

ビューアーをシャットダウンするには、次のようにします。

1. WebSphere Help System フォルダを開きます。
2. help_end.bat ファイルをダブルクリックします。

別の言語での情報の表示

別の言語で情報を表示するには、オペレーティング・システムの地域設定を希望のロケールおよび言語に変更します。

重要: システムは、製品所有者によって提供されている翻訳されたドキュメンテーションを表示します。希望の言語のドキュメンテーションが製品所有者によって提供されていない場合で、英語のドキュメンテーションが提供されている場合、ブラウザの言語オプションが別の言語に設定されているとしても、システムはデフォルトで英語のドキュメンテーションを表示します。

z/OS インストール用語

z/OS インストール用語とは、WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成に関する資料の中で使用される用語および語句を指します。これらの用語および語句に精通することによって、z/OS のインストールや構成の概念およびタスクを容易に理解することができます。

主な用語

この製品は WebSphere Application Server for z/OS 上にインストールされるため、WebSphere Application Server for z/OS の用語にも精通する必要があります。WebSphere Application Server for z/OS コンポーネントおよび構成タイプについて詳しくは、『WebSphere Application Server for z/OS の用語の理解』を参照してください。

読者は一般的にこれらの用語を既に知っているかもしれませんが、以下の定義は製品インストールのコンテキスト内で用語を定義しています。

カスタムビルト・プロダクト・デリバリー・オプション (CBPDO)

未インストールの製品および未統合のサービスで構成されるソフトウェア・デリバリー・パッケージ。CBPDO でオーダーしたもの (スタンドアロンの製品または z/OS エlement およびフィーチャー、あるいはその両方) をインストールするには、SMP/E を使用する必要があります。CBPDO は、z/OS インストールの 2 つの認められた方法の 1 つです。もう 1 つは ServerPac です。

Ant スクリプト

Ant スクリプトは、インストール手順の一部としてさまざまな Ant タスクを実行するターゲットを定義するために使用される XML ファイルです。

Ant スクリプトは構成タイプに関連付けられます。アクション・レジストリは、Ant スクリプトが実行される優先順位およびシーケンスを設定します。

コマンド行

コマンド、オプション番号、または選択を入力することができる、ディスプレイ上のブランク行。

SMP/E を使用してインストール・メディアの内容をアンロードしてから、製品のインストール・スクリプトおよび構成スクリプトをコマンド行から実行します。Ant 構成スクリプトは、ログ・ファイルにメッセージを送信します。インストールおよび拡張プロセスに関連するメッセージは、インストールおよび構成スクリプトを実行したユーザーに向けて表示されます。

この製品をコマンド行からインストールした場合、値の入力を求めるプロンプトは出されません。

構成タイプ

WebSphere Process Server for z/OS をインストールおよび構成する対象の WebSphere Application Server for z/OS 構成に関連付けられたサーバー・タイプ。WebSphere Application Server for z/OS 構成タイプには、以下のものがあります。

- スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・セル
- Network Deployment セル
- Network Deployment セル内の管理対象ノード

WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトは、プロパティー値を含む応答ファイルを指します。これらのプロパティー値は、WebSphere Process Server for z/OS 構成データで WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルを拡張するために使用されます。

サーバー・タイプに関する詳細情報 (各タイプの説明およびこれらの各サーバー・タイプ用の WebSphere Application Server for z/OS のインストールおよび構成方法に関する情報を含む) については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターを参照してください。

マウント・ポイント

Linux および UNIX オペレーティング・システムでは、ファイル・システムのマウント先のディレクトリー。他のファイル・システムは、このディレクトリーの下にマウントされます。

インストール HFS

SMP/E を使用してインストール・メディアの内容をアンロードすると、一般に インストール HFS または *smpe_root* と呼ばれる HFS が生成されます。このルート HFS は読み取り専用です。

UNIX System Services がインストール HFS を認識すると、その他の HFS をこのルートからのパスにマウントすることができます。定義済みのインストール HFS には、/tmp、/bin、/lib、/etc、/usr/lpp などのディレクトリーが含まれています。UNIX Systems Services、内にあるすべてのアプリケーションについて、製品実行可能コード・ファイルおよびパラメーター・ファイルを保持する HFS が存在します。

WebSphere Process Server for z/OS および WebSphere Application Server for z/OS のコードのかなりの部分が HFS ファイル・システムの形式で提供されます。WebSphere Application Server for z/OS ファイル・システムは、SBBOHFS と呼ばれる MVS™ データ・セットにパッケージ化されます。このデータ・セットがマウント・ポイントでマウントされて、WebSphere Application Server for z/OS インストールの SMP/E ホーム・ディレクトリーとなります。WebSphere Process Server for z/OS ファイル・システムは、SBPZHFS と呼ばれる MVS データ・セットにパッケージ化されます。このデータ・セットがマウント・ポイントでマウントされて、WebSphere Process Server for z/OS インストールの SMP/E ホーム・ディレクトリーとなります。

インストール HFS やその他のディレクトリーの命名規則については、『ディレクトリーの規則』を参照してください。

構成 HFS

WebSphere Application Server for z/OS 内の構成ファイル・システム (構成 HFS と呼ばれる) のマウント・ポイントを指します。WebSphere Application Server for z/OS の各アプリケーション・サービス提供環境 (スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードまたは Network Deployment セル) では、構成ファイルは 1 つ以上の WebSphere 構成ディレクトリー内に格納されます。この構成ディレクトリーは、構成 HFS (または *configuration_root*) と呼ばれます。これらの構成ディレクトリーはユーザー定義ディレクトリーであり、WebSphere Application Server for z/OS 構成プロセスを通じて作成されます。作成されたディレクトリーには、インストール HFS (*smpe_root*) ディレクトリー内のファイルへのシンボリック・リンクが含まれています。

構成 HFS やその他のディレクトリーの命名規則については、『ディレクトリーの規則』を参照してください。

ISPF 対話式システム生産性向上機能 (ISPF)。フルスクリーン・エディターおよびダイアログ・マネージャーの役割を果たす IBM ライセンス・プログラム。アプリケーション・プログラムの作成に使用されるこのプログラムは、標準的な画面パネルと、アプリケーション・プログラムおよび端末ユーザー間の対話式ダイアログを生成する手段を提供します。WebSphere Application Server for z/OS では、WebSphere 管理者は ISPF カスタマイズ・ダイアログを使用して、WebSphere Process Server for z/OS をインストールおよび構成する WebSphere 環境を構成します。

WebSphere Process Server for z/OS 自体は ISPF カスタマイズ・パネルを利用しませんが、基本製品に対する ISPF カスタマイズの役割を理解する必要があり、一般の基本製品構成が、製品のインストールおよび構成にどのように関係するかを熟知している必要があります。

Jacl Java コマンド言語。Java 2 環境向けのスクリプト記述言語です。Web コンテンツを作成し、Java アプリケーションを制御するために使用されます。

製品管理者は、インストール後用の Jacl スクリプトをコマンド行から実行して、さらに環境を構成することができます。これらのスクリプトは、WebSphere wsadmin ツール (*install_root/bin* ディレクトリーにあります) を使用して実行する必要があります。

製品のインストール後または構成後に製品の管理者が実行する Jacl スクリプトのタイプおよび Jacl スクリプトの数は、使用するデータベースやサイトによる WebSphere Process Server for z/OS の使用方法などの環境変数によって異なります。

ソフトウェアのインストール

ソフトウェアのインストール は、製品インストール・メディアの内容を z/OS システムへロードしてから、インストール・スクリプトを実行して、製品を使用可能にする WebSphere 製品定義をインストールする、複数フェーズ・プロセスです。

製品を z/OS にインストールして実行するサイトにおいて、インストール・メディアの内容のロードを担当するのは、通常システム・プログラマーです。ほとんどの場合、システム・プログラマーは、SMP/E を使用してインストール・メディアの内容をシステムにロードします。

インストール・メディアの内容がシステムへ正常にロードされた後、システム・プログラマーは、製品インストール・スクリプトを実行することによって、インストール・プロセスを続行できます。あるいは、システム・プログラマーが製品管理者に製品コードが正常にロードされたことを通知し、製品管理者がインストール・スクリプト **zSMPInstall.sh** を実行することもできます。

インストール・スクリプトを実行すると、読み取り専用のインストール HFS への *symlink* が作成され、製品が使用可能になります。これらの *symlink* は、JAR ファイルやシェル・スクリプトなどの、インストール・ルートにある読み取り専用ファイルを指します。

ソフトウェアの構成

z/OS では、ソフトウェアの構成 という語句は、製品がシステムにロードされた後およびインストール・スクリプトが実行された後に 製品管理者が実行するアクティビティを指します。製品を構成するには、以下の作業を行う必要があります。

- デフォルト・プロファイルの拡張。

デフォルト・プロファイルを拡張するために、製品管理者が以下のようにコマンド行から 2 つの構成スクリプトのいずれかを実行することができます。

- **zWPSConfig.sh** を実行して、WebSphere Process Server for z/OS のすべてのフィーチャーおよび機能からなる構成データによってデフォルト・プロファイルを拡張します。
- **zWESBConfig.sh** を実行して、WebSphere Process Server for z/OS のエンタープライズ・サービス・バス・サブセット機能からなる構成データによって、デフォルト・プロファイルを拡張します。

注: WebSphere Process Server for z/OS を、ESB 専用のサーバーとしてライセンスおよび構成する場合、将来のある時点で完全な WebSphere Process Server 機能を持つように再構成する選択肢が常にあります。

- jacl スクリプトとして実装されたコマンド行スクリプト記述を使用する管理コンソールの更新。

Profile ユーザー、グループ、プログラム、デバイス、またはリモート・ロケーションの特性を説明するデータ。

WebSphere Application Server for z/OS では、プロファイルは、ユーザー・データのコレクションと、WebSphere ランタイム環境を定義する共用製品バイナリーを表します。z/OS では、プロファイルは常に 1 つだけ存在し、そのプロファイルにそれぞれの構成内で **default** という名前が付けられます。

WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行するときには、WebSphere Process Server for z/OS 構成データで WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルを拡張します。デフォルト・プロファイルを拡張するアクションをプロファイル拡張と呼びます。プロファイル拡張アクションは、応答ファイルのプロパティーで呼び出される Ant スクリプトです (応答ファイルに対するパスは製品構成コマンドの一部です)。これらのアクションは、変更されたテンプレートを既存の WebSphere Application Server for z/OS プロファイルに適用します。

応答ファイル

セットアップおよび構成データによってカスタマイズ可能な EBCDIC ファイル。

コマンド行から製品構成スクリプトを実行するときは、応答ファイルに対するディレクトリー・パス参照をコマンド構文に含め、プロファイル拡張処理を自動化します。

応答ファイルを対話式に使用することはできません。応答ファイルは、製品がサポートする特定の構成に関連付けられています。構成スクリプトを実行する際に、製品のインストール先の WebSphere Application Server for z/OS 構成に関連付けられた応答ファイルを指定します。

シェル・スクリプト

シェル・コマンドのファイル。ファイルが実行可能ファイルである場合、ユーザーは、**sh** シェル・コマンドまたは TSO/E OMVS コマンドでシェル・コマンドまたはオペランドとしてファイルの名前を指定して、そのファイルを実行することができます。シェル・スクリプトは、TSO/E REXX exec に類似しています。

製品インストーラーには、製品をインストールして使用可能にするシェル・スクリプトと、製品構成データおよび定義を使用してデフォルト・プロファイルを拡張することによって製品を構成するシェル・スクリプトが含まれています。

キーワード

プログラミング言語、人工言語、アプリケーション、またはコマンドの定義済みの語の 1 つ。

製品をインストールして構成するために実行するシェル・スクリプトには、キーワードが含まれています。

製品のインストールに使用するシェル・スクリプトでは、キーワードの前にダッシュ (-) が付けられており、以下のようなものがあります。

- -smproot
- -runtime

- -install
- -prereqonly

インストールの前提条件を検査します。

- -trace

オプションで、トレース情報を記録します。

製品の構成に使用するシェル・スクリプトでは、キーワードの前にダッシュ (-) が付けられており、以下のようなものがあります。

- -augment
- -response
- -Z

オプションで、応答ファイルの値をオーバーライドします。

- -trace

オプションで、トレース情報を記録します。

製品のアンインストールに使用するシェル・スクリプトでは、キーワードの前にダッシュ (-) が付けられており、以下のようなものがあります。

- -uninstall
- -response
- -Z

オプションで、応答ファイルの値をオーバーライドします。

- -trace

オプションで、トレース情報を記録します。

いくつかのキーワードでは、製品の使用可能化に関して固有の情報を提供するパラメーターの形式の修飾子が必要です。インストール・スクリプトがサポートするキーワードおよびキーワード・パラメーターの詳細な説明については、『インストール・スクリプトについて』を参照してください。構成スクリプトがサポートするキーワードおよびキーワード・パラメーターについて詳しくは、『構成スクリプトについて』を参照してください。

キーワード・パラメーター

キーワードと、それに続く 1 つ以上の値からなるパラメーター。

製品をインストールして構成するために実行するシェル・スクリプトには、キーワードが含まれ、その後 1 つ以上の値が続きます。

シンボリック・リンク

symlink と呼ばれるシンボリック・リンクは、別のファイルまたはディレクトリーのパス名を含み、そのファイルまたはディレクトリーへのポインターとして機能するファイルのタイプです。

SMP/E を使用してインストール・メディアの内容をアンロードした後で、**zSMPIInstall.sh** という名前のインストール・スクリプトを実行します。インストール・スクリプトを実行した結果、読み取り専用の HFS へのシンボリック・リンクが作成されます。

構成ルートにある WebSphere Process Server for z/OS ファイルのほとんどが、WebSphere Application Server for z/OS および WebSphere Process Server for z/OS の `smpe_root` (インストール HFS) 内のファイルへのシンボリック・リンクです。これにより、多くのサーバー構成で同じインストール製品コードを共用できるので、構成 HFS のサイズを削減できます (構成 HFS には実際の製品ファイルは含まれていないため)。シンボリック・リンクはオペレーティング・システムによって処理されて、`smpe_root` (インストール HFS) 内の実際のファイルが導き出されます。

z/OS UNIX System Services (USS)

XPG4 UNIX 1995 仕様に準拠する UNIX 環境を作成し、z/OS オペレーティング・システム上に 2 つのオープン・システム・インターフェースを提供する z/OS のエレメント。

- アプリケーション・プログラム・インターフェース (API)
- 対話式シェル・インターフェース

以前は、UNIX System Services は、OpenEdition と呼ばれていた OS/390® のコンポーネントでした。

製品インストール・プロセスでは、z/OS UNIX System Services は、インストール・スクリプトおよび構成スクリプトを実行するためのシェルまたはコマンド・インターフェースを提供します。

インストール: 学習用リソース

以下のリンクを使用して、WebSphere Process Server のインストールおよびカスタマイズについての関連する補足情報を検索します。情報は IBM および IBM 以外のインターネット・サイトにあり、情報の技術的な正確性はサイトの提供者が管理しています。

これらのリンクは便宜上提供しているものです。多くの場合、情報は、IBM WebSphere Process Server 製品に固有のものではありませんが、同製品を理解する上で、これらの情報の全部、または一部が役立ちます。可能な場合は、技術文献や Redbooks^(TM) へのリンクも提供します。これらは製品の特長領域についての詳細な考察を記載しており、リリース資料を広範囲に補うものです。

以下に関する追加情報へのリンクを示します。

- 『計画、ビジネス・シナリオ、および IT アーキテクチャー』
- 16 ページの『プログラミングの説明および例』
- 16 ページの『プログラミング仕様』
- zSeries[®] リソース
- 16 ページの『管理』
- 17 ページの『サポート』

計画、ビジネス・シナリオ、および IT アーキテクチャー

- WebSphere Process Server detailed system requirements

WebSphere Process Server について、ハードウェアおよびソフトウェアに関する製品の前提条件を確認するための公式サイト。

- IBM developerWorks® WebSphere

WebSphere 製品を扱う開発者用の技術情報のホーム。 WebSphere ソフトウェアをダウンロードし、WebSphere Business Integration (WebSphere Process Server が属する) などの developerWorks^(R) ゾーンへのファースト・パスを取得し、WebSphere の紹介、チュートリアル、テクノロジー・プレビュー、トレーニング、および RedbooksTM によって WebSphere 製品について学習し、WebSphere 製品に関する質問への回答を参照し、最新の開発文書および技術文書を入手できる WebSphere コミュニティーに参加することができます。

- IBM developerWorks: New to WebSphere Business Integration

WebSphere Business Integration の入門者向けリソース・センター。ここでは、Eclipse ベースの WebSphere Business Integration バージョン 6 製品群が連携する仕組みを概説し、上位のビジネス・モデルから サービス指向アーキテクチャー (SOA) 内で統合されたデプロイ済みアプリケーションまで紹介します。

- IBM WebSphere Process Server ホーム・ページ

IBM WebSphere Process Server ホーム・ページには、フィックス、APAR、ツール、および試行プログラムに関するサポート・リンクおよびダウンロードを含む、役立つ情報が含まれています。

- IBM WebSphere Process Server ライブラリーおよびインフォメーション・センター Web サイト

IBM WebSphere Process Server ライブラリー Web サイトには、WebSphere Process Server インフォメーション・センターへのリンクが含まれています。

- IBM WebSphere ソフトウェア・プラットフォーム・ホーム・ページ

IBM WebSphere ソフトウェア・プラットフォーム・ホーム・ページでは、WebSphere 製品を紹介しています。また、ビジネスの拡大に合わせて拡張可能なソフトウェアにより、企業がいかに簡単に e-business を導入できるかについても説明しています。

- IBM developerWorks: IBM Patterns for e-business

IBM developerWorks サイトは、e-business 用 IBM パターンのソースであり、e-business ネットワークおよびアーキテクチャーの設計とインプリメントに使用できる、再使用可能な検査済み知的資産が集められています。

- User centered design (UCD) for different project types, part 2

この Web ページは、2 つの記事のうちの後のものであり、さまざまな種類のプロジェクトにおいて、IBM の科学者が最も有用であると見なした設計作業について説明しています。この記事では、設計プロトタイプ、ユース・ケース・モデル、および設計仕様文書を含めた、ユーザー・インターフェース設計要素を具体的に示しています。

- z/OS Technical Overview: WebSphere Process Server and WebSphere Enterprise Service Bus

この IBM Redpaper では、WebSphere Process Server V6 for z/OS (主にビジネス・プロセスの実行に使用される) および WebSphere Enterprise Service Bus V6 for z/OS (ESB のインプリメントに使用される) が System z™ や z/OS の長所をどのように利用しているかについて説明します。

プログラミングの説明および例

- IBM developerWorks

IBM developerWorks には、Web 開発関連のトピックに関する解説を含め、開発者用の多くの優れたリソースが掲載されています。 JDBC API に関する優れた解説があります。

- IBM Redbooks

IBM Redbooks サイトには、WebSphere Process Server が拡張する製品 WebSphere Application Server 関連の多くの資料があります。

プログラミング仕様

- J2EE 情報

J2EE 仕様の詳細については、Sun サイトを参照してください。

zSeries リソース

- z/OS Internet Library

z/OS Internet Library には、z/OS のエレメント、機能、ソフトウェア製品に関する資料があります。

- IBM Education Assistant

このサイトは、ユーザーが IBM ソフトウェア製品を正しく使用できるように、ナレーション説明、Show Me Demonstration (デモンストレーション表示)、チュートリアル、リソースのリンクを統合しています。 資料には、WebSphere Process Server for z/OS および WebSphere Application Server for z/OS の情報が含まれます。

- SMP/E Internet Library

この SMP/E Internet Library には、SMP/E 技術文書とホワイト・ペーパーが含まれています。

- z/OS basic skills information center

z/OS basic skills information center には、z/OS の概念、プログラミング、およびセキュリティに関するトピックが掲載されています。

管理

- IBM Terminology Web サイト

この用語集では、多くの IBM 製品の用語を、調べやすいように 1 箇所にまとめて定義を示しています。基本的なコンピューター用語に加え、多くのさまざまな IBM ブランドおよび製品ファミリーからの用語および定義も含まれています。すべての IBM コンピューター用語を包括的に扱っているわけではありません。

このリソースは、情報をお知らせする目的でのみ提供されており、定期的に更新されます。ここに記載された情報の正確性については、IBM は責任を負いません。

サポート

- WebSphere Process Server サポート・ページ

技術的な質問に対する回答を迅速に見つけるには、IBM の Web ベースのサポートとサービスのリソースを利用してください。 <http://www.ibm.com/software/support/> の IBM Software Support ポータルから、この広範な Web ベース・サポートに簡単にアクセスし、製品カテゴリーまたはプロダクト名を基に検索することができます。例えば、WebSphere Process Server に固有の問題が発生している場合は、製品リストで「**WebSphere Process Server**」を選択してください。WebSphere Process Server サポート・ページが表示されます。

- z/OS のサポート・ページ

このサポート・ページでは、z/OS プラットフォームを対象とした Web ベースのサポートおよびサービスのリソースを提供します。

- IBM e-server Support: Fix Central

zSeries ファミリーのフィックスをダウンロードするための Web 機能。

必要なスキルの判別

プロジェクト・チームを編成するに当たっては、WebSphere Process Server for z/OS の実装に必要なスキルを考慮してください。

z/OS 関連のスキル向上を支援するための資料は、z/OS Internet Library という Web サイトにあります。

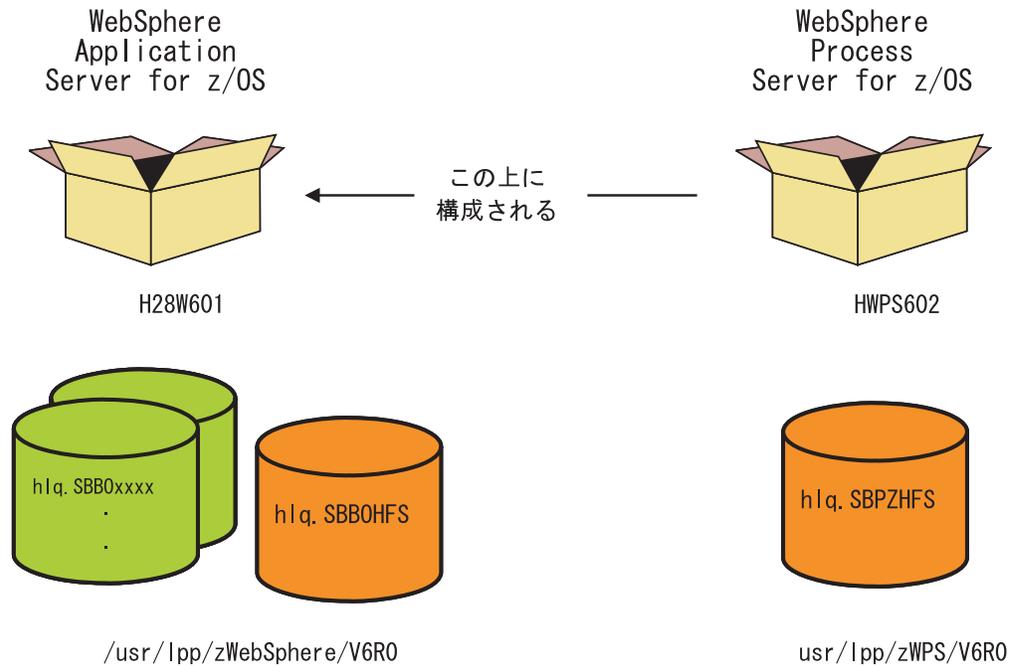
WebSphere Application Server for z/OS に必要なスキルの要件に関する資料は、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターにあります。

パッケージ

このトピックでは、WebSphere Process Server for z/OS に付属するコンポーネントについて、そのリストを示して説明します。

z/OS プラットフォームでの実行を目的としたプログラム・コンポーネントは、1 本の磁気テープの形態で提供されます。WebSphere Application Server for z/OS V6.0.2 (最新のサービス・レベル適用済み) は、WebSphere Process Server for z/OS 製品の磁気テープに収録されています。

z/OS プラットフォームでの実行を目的としたコンポーネントの他に、z/OS 以外のシステムでの実行を目的としたコンポーネントがいくつかあります。これらのコンポーネントの一部は、CD-ROM で提供されます。



WebSphere Process Server for z/OS に付属するソフトウェア

WebSphere Process Server for z/OS パッケージには、WebSphere Process Server for z/OS のインストール、WebSphere Process Server 環境のセットアップ、アプリケーションのアセンブルおよびデプロイを行うときに必要なソフトウェアが収録されています。磁気テープ・メディアには WebSphere Application Server for z/OS が収録されています。これは、WebSphere Process Server for z/OS をインストールする前にインストールおよび構成する必要があります。CD-ROM には、お客様の実稼働環境や開発環境に付加価値とツール・サポートを提供するオプションの補助ソフトウェア・プログラムも収録されています。

19 ページの表 1 では、WebSphere Process Server for z/OS とともに磁気テープで提供されるソフトウェアのリストを示し、その内容を説明します。

表 1. 磁気テープで提供されるソフトウェア

ソフトウェア	説明
WebSphere Process Server for z/OS	<p>サービス指向アーキテクチャー (SOA) を基本にした、単一の単純化プログラミング・モデルである WebSphere Process Server は、オープン・スタンダードに基づくすべての統合スタイルを実現しサポートすることにより、多種多様な要員、ワークフロー、アプリケーション、システム、プラットフォーム、およびアーキテクチャーにまたがるビジネス・プロセスを自動化する次世代のビジネス・プロセス・サーバーです。 WebSphere Process Server の新機能は、以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • サービス・コンポーネント・アーキテクチャー - 既存の IT を利用する単純化された統合フレームワーク • ヒューマン・タスク、ロール・ベースのタスク割り当て、多層エスカレーションなど、あらゆるスタイルの統合に対するサポート。コンポーネント・アセンブリのビジュアル・エディター • 比較的低いスキルで、ビジネス・プロセスを実行中に変更 • ビジネス・シナリオに基づいてインターフェースを動的に選択するための、ビジネス・ルール、ビジネス状態マシン、およびセレクター • 最も広範な統合範囲 - Enterprise Service Bus (ESB) 技術に基づいて構築され、IBM WebSphere アダプターをサポート
WebSphere Application Server for z/OS	<p>WebSphere Application Server for z/OS は、業界最高峰の Java ベース・アプリケーション・プラットフォームで、ダイナミックな e-business の世界でのエンタープライズ・データやトランザクションを統合します。WebSphere Process Server の基盤になっている WebSphere Application Server は、優れたアプリケーション・デプロイメント環境を提供し、トランザクション管理だけでなく、WebSphere 製品ファミリーから期待されているセキュリティ、パフォーマンス、可用性、接続性、スケーラビリティについても拡張機能を提供するアプリケーション・サービス機能も備えています。Network Deployment 構成の WebSphere Application Server によって、クラスタリング、エッジ・オブ・ネットワーク・サービス、Web サービス機能の強化、分散構成の高可用性を実現できます。詳しくは、『WebSphere Application Server for z/OS パッケージ化』を参照してください。</p>

表 1. 磁気テープで提供されるソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
WebSphere Application Server Application Clients	WebSphere Application Server for z/OS の一部として提供されているアプリケーション・クライアント・モジュールは、Java アプリケーションにアクセスするためのクライアントが格納されている Java Archive (JAR) ファイルです。基本の WebSphere Application Server 製品と通信する J2EE および thin アプリケーション・クライアントを実行するには、Application Server のエレメントをクライアントの実行先ワークステーションにインストールしておく必要があります。ただし、システムに Application Server がインストールされていない場合は、使用しているクライアント・アプリケーションにスタンドアロンのクライアント・ランタイム環境を提供する Application Clients をインストールできます。
IBM Eclipse Help System	IBM Eclipse Help System は、磁気テープや Message Service Client の CD-ROM で提供されますが、WebSphere Process Server 資料のダウンロード可能版を Eclipse 文書プラグインとしてパッケージ化しています。この資料は、IBM Eclipse Help System を使用して表示する必要があります。このヘルプ・システム (つまりビューアー) および文書プラグイン形式は、Eclipse Project によって開発されたオープン・ソースの方法を基にしています。
DataDirect Java ^(TM) Database Connectivity (JDBC) ドライバー	Microsoft ^(R) SQL Server との接続を有効にするために DataDirect Technologies 社が開発した 2 つの JDBC ドライバーで、WebSphere Application Server for z/OS の一部として提供されます。これらのドライバーとは、SequeLink ドライバーおよび Connect JDBC ドライバーです。

21 ページの表 2 では、WebSphere Process Server for z/OS とともに CD-ROM で提供されるソフトウェアのリストを示し、その内容を説明します。

表2. CD-ROM で提供されるソフトウェア

ソフトウェア	説明
WebSphere Process Server Client	<p>WebSphere Process Server Client は、SOA コア機能および Business Process Choreographer 機能を備えた WebSphere Application Server for z/OS 構成を、WebSphere Process Server のフルインストールを行う必要なく実現します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Windows • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for AIX® • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Solaris on SPARC • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Solaris on x86 64-bit • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for HP-UX • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for HP-UX on Itanium® 64-bit • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on x86 32-bit • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on x86 64-bit • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on iSeries™ and pSeries® • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on zSeries 31-bit • WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on zSeries 64-bit
IBM Message Service Clients	<p>メッセージング機能と Web サービス機能を非 Java 環境で提供するソフトウェア。提供された以下のクライアントを使用することにより、アプリケーションと WebSphere Process Server 間の対話を拡張します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM Message Service Client for C/C++ は JMS モデルを拡張して、C および C++ アプリケーションへのメッセージングを可能にします。 • IBM Message Service Client for .NET を使用すると、.NET アプリケーションを JMS ベースの情報の流れに加えることができます。 • IBM Web Services Client for C/C++ は、JAX RPC のような C++ 対応の Web サービス・クライアントであり、このソフトウェアを使用すると、WebSphere 上でホストされる Web サービスに C および C++ のアプリケーションを接続できます。
WebSphere Application Server Toolkit	<p>WebSphere Application Server Network Deployment など、アプリケーション・サーバーに公開するための基本的なアセンブリー・ツールおよびデプロイメント・ツールを提供します。このツールキットを使用して、基本的な単体テスト、デバッグ、プロファイル作成の各機能を実行することもできます。</p>

表 2. CD-ROM で提供されるソフトウェア (続き)

ソフトウェア	説明
WebSphere Application Server Edge Components	WebSphere Application Server Edge Components は、Edge Components を備え、高可用性で大容量の環境というニーズに対応しています。Edge Components には高性能のロード・バランシング、キャッシング、および集中セキュリティ機能があります。詳細については、WebSphere Application Server Network Deployment Edge Components の Web ページを参照してください。
IBM Tivoli® Access Manager Servers	IBM Tivoli Access Manager for e-business は、すぐに使用可能な e-ビジネス・アプリケーションを統合して、機密保護機能のある、統一した、パーソナルな e-ビジネス体験を提供します。認証および許可 API の統合によって、Tivoli Access Manager for e-business は拡大する企業内に分散する可能性のあるビジネス上重要なアプリケーションおよびデータに対して機密保護機能のあるアクセスが可能になります。詳しくは、IBM Tivoli Access Manager for e-business を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS の入手方法

以下のいずれかの方法で、製品コードを取得することができます。

- IBM Custom-Built Product Delivery Option (CBPDO) - システム・プログラマーが SMP/E を使用して製品コードをアンロードし、z/OS システムにロードします。
- IBM SystemPac® / ServerPac - システム・プログラマーが CustomPac サービス・レベルに対応する SMP/E データ・セットを z/OS システムにコピーします。

このソフトウェアを購入するには、IBM 担当員または IBM 販売店にお問い合わせいただくか、<http://www.ibm.com/software/integration/wps/> で WebSphere Process Server のホーム・ページにアクセスして、「How to buy」のリンクを選択します。詳しくは、25 ページの『インストール・フェーズ』を参照してください。

ディレクトリーの規則

製品情報の中で、**smpe_root**、**configuration_root**、およびその他のディレクトリーが表記されている場合、それは特定ディレクトリーの場所を示しています。このトピックでは、WebSphere Process Server for z/OS で使用する規則について説明します。

WebSphere Process Server for z/OS 製品は、WebSphere Application Server for z/OS で使用されるディレクトリーの規則に厳密に準拠するとともに、以下に示す WebSphere Process Server for z/OS 特有の規則もあります。

WebSphere Application Server for z/OS ディレクトリーの命名規則については詳しくは、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『Directory naming conventions』を参照してください。

smpe_root

SMP/E を使用してインストールされた製品コードのルート・ディレクトリーを指します。WebSphere Application Server for z/OS および WebSphere Process Server for z/OS にはそれぞれ独自の smpe_root があります。

WebSphere Application Server for z/OS のデフォルトの `smpe_root` は `/usr/lpp/zWebSphere/V6R0` です。

WebSphere Process Server for z/OS のデフォルトの `smpe_root` は `/usr/lpp/zWPS/V6R0` です。

`smpe_root` という語は、製品のインストール `HFS` という語と同義です。

WebSphere Process Server for z/OS のインストール・スクリプト・コマンドには、WebSphere Process Server for z/OS `smpe_root` のパスが組み込まれます。このインストール・スクリプト・コマンドでは、`smpe_root` のパスの前に `-smproot` キーワードが付けられます。

configuration_root

WebSphere Application Server for z/OS 内の構成ファイル・システム (構成 `HFS` と呼ばれる) のマウント・ポイントを指します。

`configuration_root` には、各種 `app_server_root` ディレクトリーと、それらに関連付けられた特定のシンボリック・リンクが含まれています。

`configuration_root` の下にある各種ノード・タイプは、z/OS 下の独自のカタログ式プロシージャを必要とします。

WebSphere Application Server for z/OS のデフォルト `configuration_root` は `/WebSphere/V6R0` です。

app_server_root

WebSphere Application Server ノードのトップ・ディレクトリーを指します。

このノードは、どのタイプでも構いません (アプリケーション・サーバー、デプロイメント・マネージャー、または非管理ノードなど)。各ノードには独自の `app_server_root` があります。古いバージョンの WebSphere Application Server for z/OS 製品情報では、このディレクトリーを「`WAS_HOME`」ディレクトリーと呼んでいる場合もあります。対応する製品変数は、`was.install.root` および `WAS_HOME` です。

デフォルト値は、ノード・タイプによって異なります。

スタンドアロン・アプリケーション・サーバー構成タイプの場合、一般的なデフォルトは以下のとおりです。

- `/configuration_root/AppServer`

デプロイメント・マネージャー構成タイプの場合、一般的なデフォルトは以下のとおりです。

- `/configuration_root/DeploymentManager`

WebSphere Application Server for z/OS の `/configuration_root/app_server_root` は、WebSphere Process Server for z/OS インストール・スクリプトのコマンド構文で参照され、そのパス指定の前にはキーワード `-runtime` が付けられます。

profile_root

インスタンス化された特定 WebSphere Application Server プロファイルのホーム・ディレクトリーを指します。

対応する製品変数は、`server.root` および `user.install.root` です。

一般に、このディレクトリーは `app_server_root/profiles/profile_name` と同じです。z/OS 上では、これは必ず `app_server_root/profiles/profile_name` となります。なぜならば、WebSphere Application Server for z/OS ではプロファイル名として「default」のみが使用されるためです。

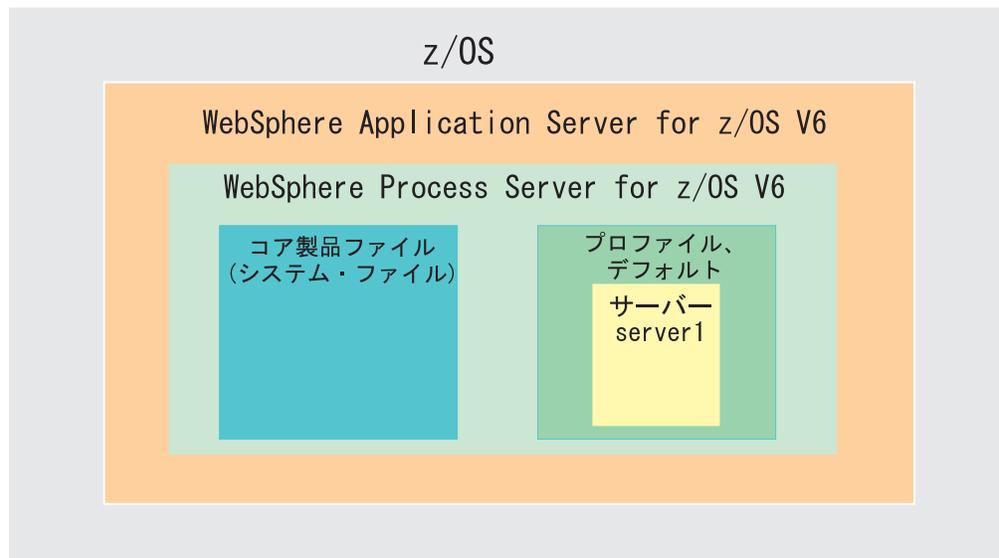
WebSphere Process Server for z/OS 構成プロセスにより、WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルは「拡張」され、WebSphere Process Server for z/OS 機能を備えるようになります。

z/OS へのインストールについて

製品を z/OS にインストールするには、製品をインストール・メディアから z/OS システムにロードし、コマンド行からインストール・スクリプトを実行する必要があります。

z/OS 上での製品のインストールは、複数のロールにまたがる複数フェーズのプロセスです。インストールを構成するフェーズについて詳しくは、25 ページの『インストール・フェーズ』を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS をインストールする前に、WebSphere Application Server for z/OS をインストールおよび構成する必要があります。WebSphere Application Server for z/OS をインストールして構成すると、デフォルト・プロファイルが作成されるので、このデフォルト・プロファイルを WebSphere Process Server for z/OS 構成で拡張します。



WebSphere Application Server for z/OS は、WebSphere Process Server for z/OS パッケージの一部として組み込まれています。

インストールおよび構成スクリプト

z/OS にインストールされる多くの製品とは異なり、WebSphere Process Server for z/OS ではインストール固有の構成データの作成に ISPF ダイアログを利用しません。その代わりに、この製品にはインストール・スクリプト `zSMPInstall.sh` と 2 つの構成スクリプト `zWPSConfig.sh` および `zWESBConfig.sh` が付属しています。

構成スクリプトについて詳しくは、『構成スクリプトについて』を参照してください。

インストール・スクリプトの結果

インストール・スクリプトを実行した結果、すべてのコンポーネントおよび機能がシステムにインストールされます。システムにインストールする機能を選択できないという意味では、製品のインストールは「カスタマイズ」できません。しかし、構成コマンドのキーワードおよびキーワード・パラメーターによってインストールする製品機能を構成できます。構成スクリプトについて詳しくは、『構成スクリプトについて』を参照してください。

インストール・フェーズ

z/OS 上での WebSphere Process Server for z/OS のインストールは、複数のロールにまたがる複数フェーズのプロセスです。

一般に、インストールのフェーズ 1 では、インストール・メディアの内容をロードして z/OS システムへロードします。このフェーズはシステム・プログラマーが担当します。システム・プログラマーは、インストールの全体的な生産性の向上を目的として、オペレーティング・システムの使用を計画、保守、制御します。

インストールのフェーズ 2 では、インストール・スクリプトを実行して、製品を使用可能に設定するのに必要な WebSphere 定義を作成します。この 2 番目のフェーズは、製品管理者のロールが担当します。

ロールとインストール・フェーズの関係を以下に示します。

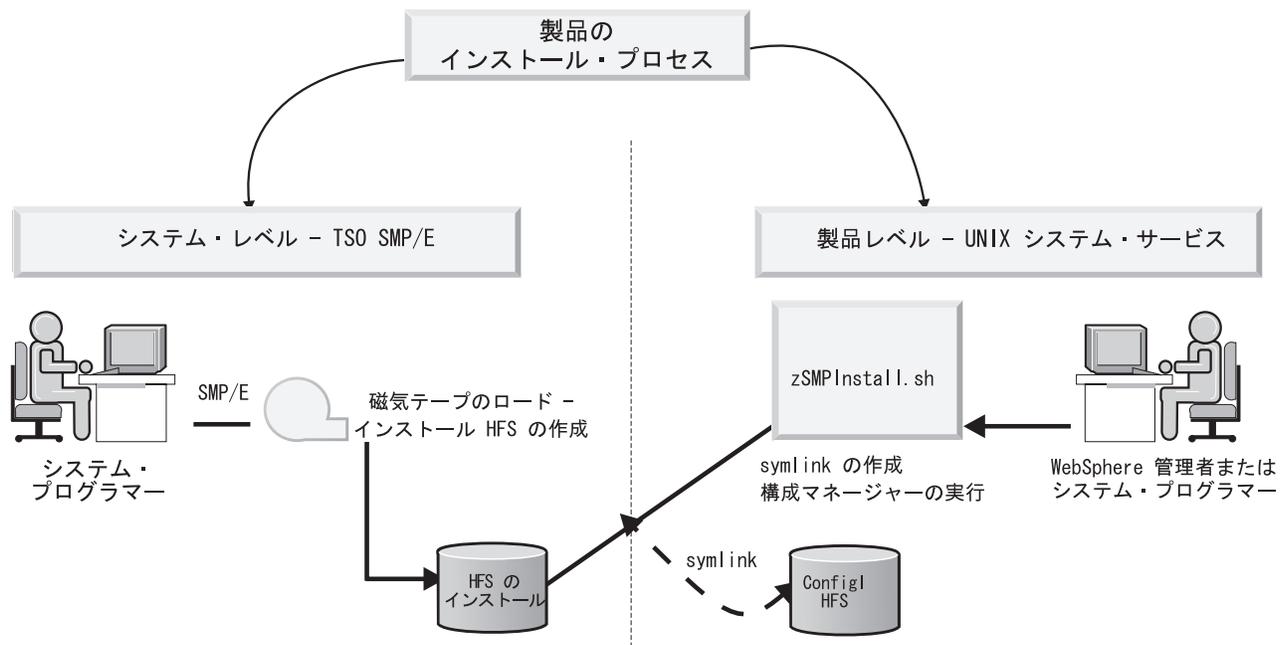


図 1. WebSphere Process Server for z/OS のインストール・プロセス

製品のインストールは、この両方のフェーズ（製品コードのロードとインストール・スクリプトの実行）が正常に実行されて初めて、インストールが完了しているものと見なされます。

次の図は、インストール・フェーズを示しています。

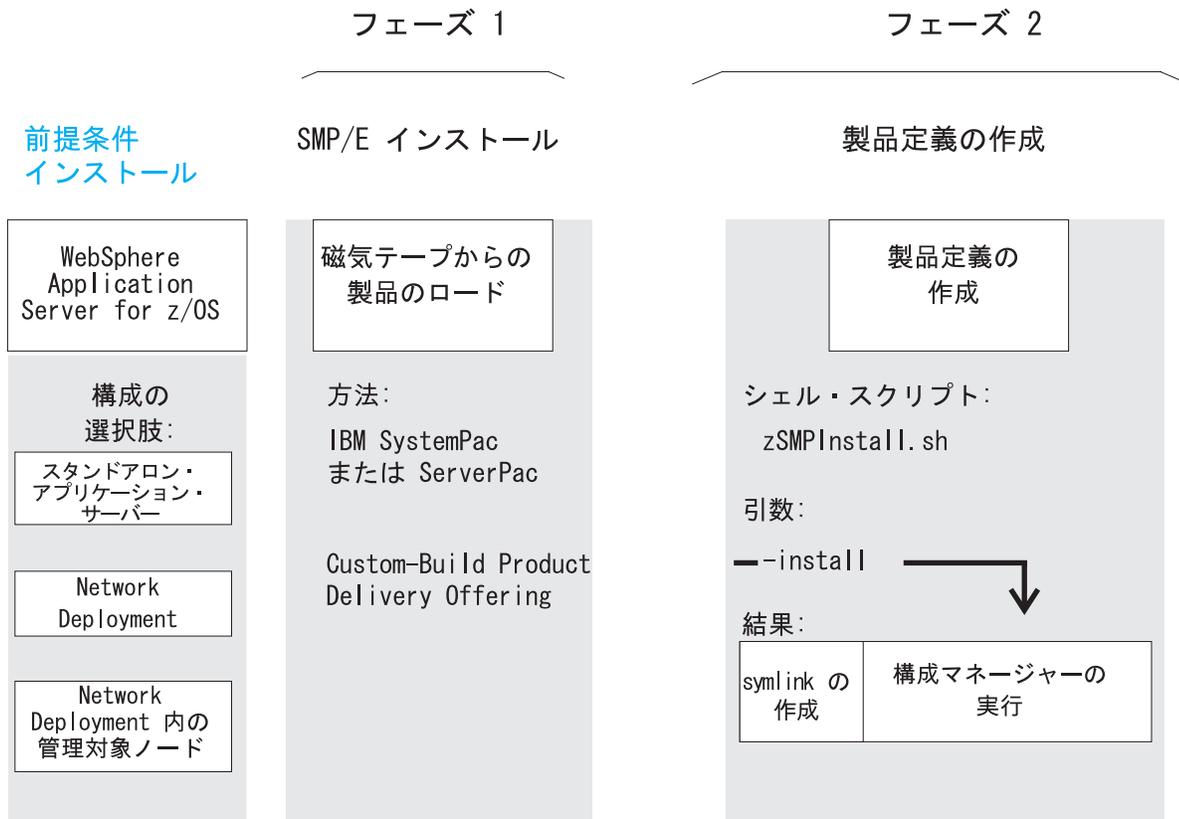


図2. インストール・フェーズ

フェーズ 1 - インストール・メディアからの製品コードのロード

製品のデリバリー・パッケージが IBM Custom-Built Product Delivery Option (CBPDO) であった場合、システム・プログラマーは、システム修正変更プログラム拡張版 (SMP/E) (System Modification Program/Extended (SMP/E)) を使用して製品コードをアンロードし、z/OS システムにロードします。システム・プログラマーは、プログラム・ディレクトリーを手引きとしてこのプロセスを進めます。プログラム・ディレクトリーには、製品コードのインストールに関連した資料や手順に関する情報が含まれています。PDF 形式のプログラム・ディレクトリーは、WebSphere Process Server for z/OS ダウンロード・ページ (<http://www-306.ibm.com/software/integration/wps/library/infocenter/>) からダウンロードできます。

製品のデリバリー・パッケージが IBM SystemPac/ServerPac であった場合、システム・プログラマーは、CustomPac サービス・レベルに対応する SMP/E データ・セットを z/OS システムにコピーします。

以下の図に、内容をインストール・メディアから z/OS にロードするためにサポートされる方法を示します。

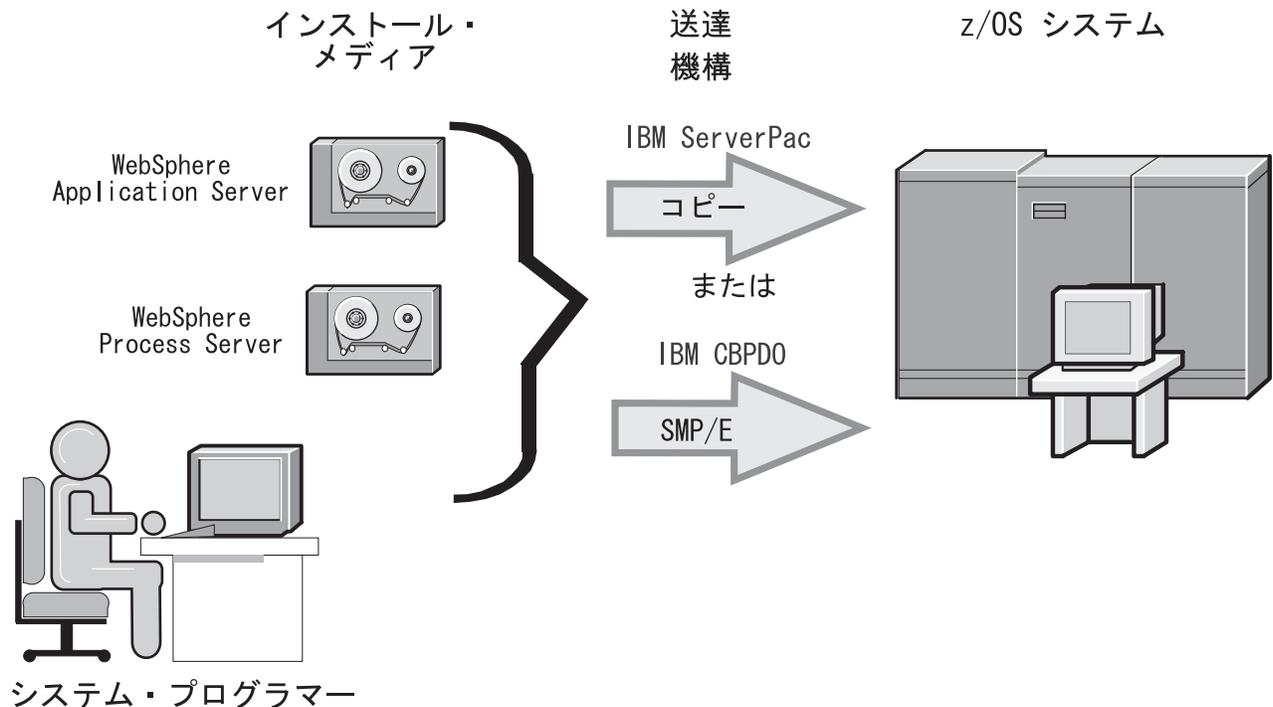


図3. 製品コードの z/OS へのロード

注: インストールのこのフェーズでは、正しいバージョンの WebSphere Application Server for z/OS がインストールされ、カスタマイズされていることが前提となっています。バージョンの互換性を確保するために、SMP/E のインストール・プロセスにより、WebSphere Application Server for z/OS のバージョン・レベルが確認されます。WebSphere Application Server for z/OS のバージョンが WebSphere Process Server をサポートするために必要なレベルでない場合は、システム・プログラマーが WebSphere Application Server for z/OS のバージョンを更新するための適切なアクションを取る必要があります。サービスを WebSphere Application Server for z/OS に適用する方法については、WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターの『製品保守の適用』を参照してください。

インストールの第 1 フェーズを完了すると、結果として読み取り専用のインストール HFS (smpe_root と呼ばれる) が生成されます。

製品コードをインストール・メディアからシステムに正常にロードした後、WebSphere 管理者が、インストール・スクリプトを実行してインストールのフェーズ 2 を実装します。

システム修正変更プログラム拡張版 (SMP/E)

ここでは、SMP/E について説明します。

- SMP/E は、z/OS 上での製品のインストール、サービス、および保守のプロセスに不可欠の要素です。

- SMP/E を使用することにより、SMP/E システム修正変更 (SYSMOD) 形式でパッケージされたすべてのソフトウェアをインストールし、保守することができます。
- SMP/E を実行するには、バッチ・ジョブを使用するか、または対話式システム生産性向上機能/プログラム開発機能 (ISPF/PDF) のダイアログを使用します。
- SMP/E のダイアログを使用すると、SMP/E データベースの照会、および SMP/E コマンドを処理するジョブの作成やサブミットを対話式に行うことができます。
- SMP/E によるインストールの手引きは、プログラム・ディレクトリーにあります。

SMP/E が稼働するシステムは、**駆動システム** と呼ばれます。

製品コードは、磁気テープから、*smpe_root* と呼ばれるディレクトリーにロードされます。本書では、*smpe_root* という用語と **インストール HFS** という用語を同じ意味で使用します。*smpe_root* は読み取り専用で、固有の HFS 上にあるため、単独でのマウントやアンマウントが可能です。

WebSphere Application Server for z/OS と WebSphere Process Server for z/OS には、それぞれ独自の *smpe_root* があります。

WebSphere Process Server for z/OS の場合、*smpe_root* のデフォルト・パス名は `/usr/lpp/zWPS/V6R0` です。

WebSphere Application Server for z/OS の場合、*smpe_root* のデフォルト・パス名は `/usr/lpp/zWebSphere/V6R0` です。

注: WebSphere Process Server for z/OS のインストール・スクリプトを実行する場合は、キーワード **-smproot** の後に、SMP/E インストールによって作成された WebSphere Process Server for z/OS *smpe_root* ディレクトリーの完全修飾パス名を指定します。

フェーズ 2 - インストール・スクリプトの実行

インストール処理のフェーズ 2 では、WebSphere 管理者がコマンド行からインストール・スクリプト **zSMPIInstall.sh** を実行することによって必要な製品定義を作成します。

インストールのこのフェーズが完了すると、結果として製品管理者は以下の作業を行ったこととなります。

- WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS ディレクトリーから WebSphere Process Server for z/OS *smpe_root* への **symlink** が作成された。
- **Ant** スクリプト・アクションが呼び出され、管理コンソールの WebSphere Process Server for z/OS 製品定義が更新された。
- 必要に応じて **applyPTF** 処理が実行された。

インストール・スクリプトは、各サーバー・インスタンスの構成 HFS (*configuration_root* と呼ばれる) を更新します。WebSphere Application Server for z/OS のデフォルトの構成 HFS は `/WebSphere/V6R0` です。

構成ルートは、構成済みの製品インストールのカスタマイズ後の構成文書およびファイルを格納する書き込み可能な HFS です。

注: 構成 HFS には、各種 *app_server_root* ディレクトリー (/AppServer および /DeploymentManager) と、それらに関連付けられた特定のシンボリック・リンクが含まれています。構成 HFS の下にある各種ノード・タイプは、z/OS 下の独自のカタログ式プロシージャを必要とします。

構成 HFS にも、*smpe_root* へのシンボリック・リンク (*symlinks* と呼ばれる) が含まれます。

symlinks は、*smpe_root* ルートを起点として、JAR ファイルやシェル・スクリプトなどの読み取り専用ファイルを指し示します。*smpe_root* は SMP/E によって更新され、構成 HFS は SMP/E 構成後タスクによって製品始動時にノードごとに更新されます。

インストール・スクリプトの実行が正常に完了すると、WebSphere 管理者は、製品を使用するための構成を開始できます。製品の構成処理について詳しくは、『z/OS での製品の構成について』を参照してください。

以下の図は、SMP/E を使用した磁気テープの内容のロードと、インストール・スクリプト **zSMPIInstall.sh** の実行による製品定義の作成を含むインストール・プロセスを示しています。

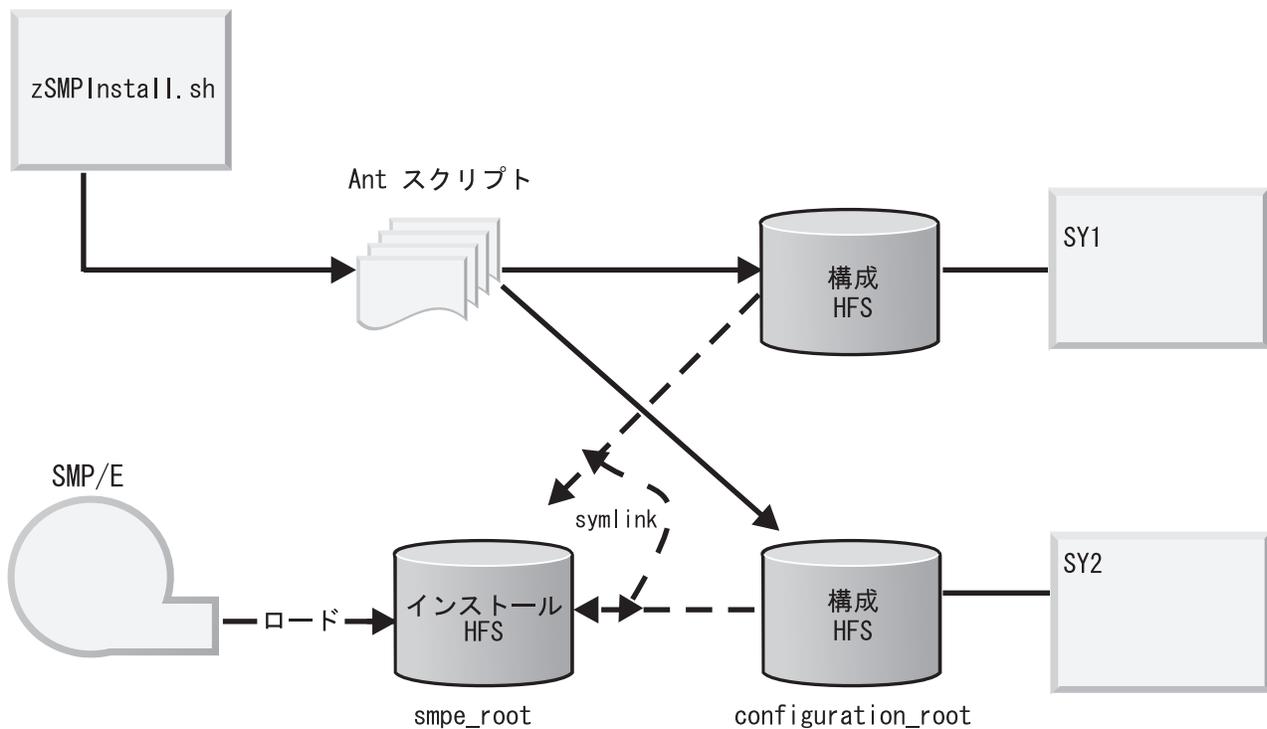


図 4. WebSphere Process Server for z/OS のインストールのプロセス・フロー

注:

- 読み取り専用インストールの共用 HFS は共用として示されていますが、ディスクの共用やコピーの作成は、インストールを実行するシステム・プログラマーが決定することができます。この決定は、インストール後の構成手順には影響しません。
- HFS は `smpe_root` にインストールされます。これは、アンパック手順が SMP/E によって制御され、コードのサービスも SMP/E によって制御されることを意味します。

インストール・スクリプトについて

インストール・スクリプトは、製品を使用可能にする WebSphere Process Server for z/OS 定義を作成します。

このトピックで説明するコマンドは、SMP/E インストールによって作成された完全修飾の WebSphere Process Server for z/OS パス内にあるため、このパス名から実行する必要があります。

この完全修飾パス名のデフォルトは、`/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/bin`です。

管理者は、インストール・スクリプト (**zSMPInstall.sh**) に各種のコマンド引数を指定して実行することができます。

このスクリプトは、SMP/E を使用してインストールされた製品コードに対して、一連のアクションを呼び出します。

zSMPInstall.sh を実行するとシンボリック・リンクが作成され、管理コンソールが WebSphere Process Server for z/OS の製品定義で更新されます。

アンインストール・コマンドは、WebSphere Process Server for z/OS のインストールに使用するスクリプトと同じスクリプトから実行します。**-uninstall** コマンドについて詳しくは、『アンインストール・コマンドについて』を参照してください。

コマンド行の構造

以下の図は、**zSMPInstall.sh** のコマンド行の構造を示したものです。コマンド行の各部分にはラベルを付け、キーワードおよびキーワード・パラメーターの例を示しています。

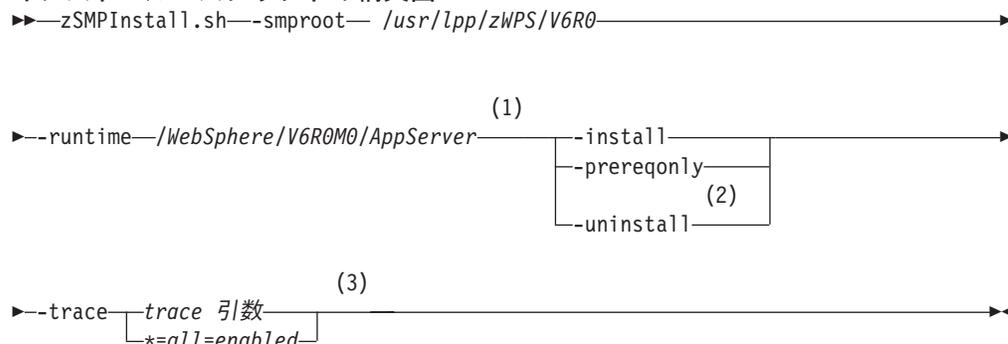
インストール・スクリプト名	WebSphere Process Server <code>smpe_root</code>	アプリケーション・サーバー構成 HFS および <code>app_server_root</code>	プロシージャー	トレース・オプション
<code>zSMPInstall.sh</code>	<code>-smproot <smpe_root></code>	<code>-runtime <configuration HFS></code>	<code>-install</code> <code>-prereqonly</code> <code>-uninstall</code>	<code>-trace</code>

コマンド構文

以下の構文図に、インストール・コマンドで許可されるすべての構文を示します。

注: 構文図の読み方について詳しくは、『構文図の解釈』を参照してください。

インストール・スクリプトの構文図



注:

- 1 インストール済み環境に適用するキーワード・パラメーターを入力します。
-smproot および -runtime のキーワード・パラメーターはユーザー定義であるため、この例で示すデフォルト値とは異なる場合があります。-smproot のキーワード・パラメーター値は、SMP/E のインストールによって作成された WebSphere Process Server for z/OS 製品の smpe_root ディレクトリー (インストール HFS) を表します。-runtime のキーワード・パラメーター値は、WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS と app_server_root ディレクトリー名の組み合わせを表します (/WebSphere/V6R0/AppServer など)。WebSphere Application Server for z/OS の各アプリケーション・サービス提供環境 (スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードまたは Network Deployment セル) では、1 つ以上の WebSphere 構成ディレクトリー内に構成ファイルが格納されます。これらの構成ディレクトリーは、WebSphere Application Server for z/OS 構成プロセスによって作成され、製品ディレクトリー内のファイルへのシンボリック・リンクを格納します。-runtime パスは、WebSphere Application Server for z/OS アプリケーション・サービス提供環境の作成時に設定したパスと一致する必要があります。このパスは、構成タイプによって異なります。例えば、デプロイメント・マネージャーの構成ルートは /WebSphere/V6R0/DeploymentManager となり、スタンドアロン・アプリケーション・サーバーの構成ルートは /WebSphere/V6R0/AppServer となります。
- 2 これらの引数は、zSMPInstall.sh で実行する製品のインストール操作を決定します。これらの引数のうちの 1 つを選択して、製品のインストールの進め方を制御します。-install 引数は、管理コンソールを WebSphere Process Server for z/OS の製品定義で更新するアクションを実装します。-uninstall コマンドの使用方法については詳しくは、『アンインストール・コマンドについて』を参照してください。
- 3 -trace を指定すると、コマンドが適切なトレース・ファイルに書き込みを行います。

インストール・スクリプトのコマンド行引数およびパラメーター

コマンド行から zSMPInstall.sh を実行して、製品定義のインストールに必要なコマンド引数のシーケンスを組み込みます。

zSMPInstall.sh を実行すると、WebSphere Process Server for z/OS フィーチャーは、-runtime パラメーター値によって指定されたディレクトリーに拡張されま

す。-runtime パラメーター値は、WebSphere Application Server for z/OS の構成 HFS と app_server_root ディレクトリー名の組み合わせです (/WebSphere/V6R0/AppServer など)。

結果は、コマンドに組み込まれた引数およびパラメーターによって異なります。

次の表に、インストール・スクリプト・コマンドの引数 (キーワードおよびパラメーター) と、それによって発生するアクションを示します。zSMPInstall.sh を実行した結果発生するさまざまな操作の詳細については、この表の後の『インストール操作』のセクションを参照してください。

表3. インストール・スクリプトのコマンド行引数

キーワードおよびパラメーター	説明
-smproot	<p>このキーワードおよびそれに関連したキーワード・パラメーターは必須です。</p> <p>パラメーター値は、WebSphere Process Server for z/OS のインストール階層ファイル・システム (HFS) ディレクトリーであり、WebSphere Process Server for z/OS の SMP/E インストールによって作成される <i>smpe_root</i> と呼ばれます。</p> <p>このディレクトリーへの標準パスは <i>/usr/lpp/zWPS/V6R0</i> です。</p>
-runtime	<p>このキーワードおよびそれに関連したキーワード・パラメーターは必須です。</p> <p>このパラメーター値は、WebSphere Application Server for z/OS の構成 HFS と app_server_root ディレクトリー名の組み合わせです (/WebSphere/V6R0/AppServer など)。スタンドアロン構成の場合、このディレクトリーへの標準パスは <i>/WebSphere/V6R0M0/AppServer</i> です。</p> <p>デプロイメント・マネージャー構成の場合、このディレクトリーへの標準パスは <i>/WebSphere/V6R0/DeploymentManager</i> です。</p>

表 3. インストール・スクリプトのコマンド行引数 (続き)

キーワードおよびパラメーター	説明
<p>以下のキーワードは、相互に排他的です。スクリプト・コマンドにいずれか 1 つのみを指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • -prereqonly • -install • -uninstall 	<p>-prereqonly は、引数および環境を検証します。結果は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 前提条件を確認する。 • 引数を検証する。 <p>-install を指定した場合の結果は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 前提条件を確認する (-prereqonly を参照)。 • WebSphere Process Server 読み取り専用 HFS ディレクトリーから WebSphere Application Server for z/OS /lib および /bin ディレクトリーへのシンボリック・リンクを作成し、WebSphere Process Server 定義をインストールする。 • インストール後のファイルを作成する。 • コードの基本許可を更新する。 • 構成マネージャーのスクリプト・アクションを実行することにより、WebSphere Process Server フィーチャーを使用可能に設定する。 <p>これにより、管理コンソールのプラグイン拡張機能が新しく作成されます。これらのリソースには、以下のものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> - Business Process Choreographer - WebSphere Process Server コア・リソース - Common Event Infrastructure (CEI) <p>-uninstall、-uninstall コマンドの使用方法について詳しくは、『アンインストール・コマンドについて』を参照してください。</p>
<p>-trace</p>	<p>-trace キーワードはオプションです。</p> <p>この引数をスクリプト・コマンドに組み込む場合、この引数の修飾子としてパラメーターを入力する必要があります。</p> <p>-trace 引数を使用しない場合は、トレースの指定として「*=all=disabled」を使用します。</p> <p>-trace の有効なパラメーターは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • *=all=enabled <p>トレースが使用可能なすべての Java クラスに関するトレース情報を記録する場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • Installer=all=enabled <p>インストーラーの Java クラス・グループのみに関するトレース情報を記録する場合</p>

インストール・アクション

引数と環境の検証

引数と環境の検証 には、製品のインストールと製品を使用可能にする設定に関連した以下の操作が含まれます。

1. **-smproot** 引数とそのパラメーター値が指定されていること、およびこの値に指定された `smproot` ディレクトリーが存在することを確認します。
2. **-runtime** 引数とそのパラメーター値が指定されていること、およびこの値に指定されたランタイム・ディレクトリーが存在することを確認します。
3. 製品のインストール引数 (`-prereqonly`、`-install`、または `-uninstall`) が 1 つだけ指定されていることを確認します。
4. `-trace` キーワードが指定されている場合は、値も一緒に指定されていることを確認します。

`-trace` キーワードが指定されていない場合は、デフォルトの「`*=all=disabled`」に設定します。

5. 認識されないキーワードが指定されていないことを確認します。
6. ランタイム・ディレクトリー内にトレース・ファイルがない場合はこれを作成します。

デフォルトのファイル名は `/configuration_root/app_server_root/logs/wbi/zSMPInstall.trace` です。例えば、スタンドアロン構成の場合は `/WebSphere/V6ROM0/AppServer/logs/wbi/zSMPInstall.trace`、デプロイメント・マネージャー構成の場合は `/WebSphere/V6ROM0/DeploymentManager/logs/wbi/zSMPInstall.trace` です。

7. ランタイム・ディレクトリー内にログ・ファイルを作成します。

デフォルトのファイル名は `/configuration_root/app_server_root/logs/wbi/zSMPInstall.log` です。例えば、スタンドアロン構成の場合は `/WebSphere/V6ROM0/AppServer/logs/wbi/zSMPInstall.log`、デプロイメント・マネージャー構成の場合は `/WebSphere/V6ROM0/DeploymentManager/logs/wbi/zSMPInstall.log` です。

8. 前提条件である WebSphere Application Server for z/OS が必要なレベルであることを確認します。

シンボリック・リンクの作成

シンボリック・リンクの作成 には、製品のインストールと製品を使用可能にする設定に関連した以下の操作が含まれます。

1. 読み取り専用の WebSphere Process Server for z/OS `smpe_root` ディレクトリー内のすべてのファイルに対するシンボリック・リンク・ファイルをランタイム・ディレクトリーに作成します。

例: スタンドアロン構成の場合、`/configuration_root/app_server_root/profileTemplates/default.bfm/actionRegistry.xml` という名前のファイル (タイプ

"Sympl") が作成され、これが SMP/E インストール HFS ファイル /usr/lpp/zWPS/V6R0/profileTemplates/default.bfm/actionRegistry.xml へのシンボリック・リンクになります。

2. /configuration_root/app_server_root/bin/zWESBConfig.sh 内に、SMP/E インストール HFS ファイル /usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/bin/zWESBConfig.sh へのシンボリック・リンクとなるファイルを作成します。

注: 上記のディレクトリー・パスで、/configuration_root/app_server_root は、WebSphere Application Server for z/OS の構成 HFS と app_server_root ディレクトリー名の組み合わせを表します。例えば、スタンドアロン・サーバーの場合は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/、デプロイメント・マネージャー構成の場合は /WebSphere/V6R0/DeploymentManger です。

3. /configuration_root/app_server_root/bin/zWPSCConfig.sh内に、SMP/E インストール HFS ファイル /usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/bin/zWPSCConfig.sh へのシンボリック・リンクとなるファイルを作成します。

注: 上記のディレクトリー・パスで、/configuration_root/app_server_root は、WebSphere Application Server for z/OS の構成 HFS と app_server_root ディレクトリー名の組み合わせを表します。例えば、スタンドアロン・サーバーの場合は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/、デプロイメント・マネージャー構成の場合は /WebSphere/V6R0/DeploymentManger です。

インストーラー後のファイルの作成

インストーラー後のファイルの作成 には、製品のインストールと製品を使用可能にする設定に関連した以下の操作が含まれます。

1. サービス製品ディレクトリーがない場合はこれを作成します。

デフォルトのファイル名は /configuration_root/app_server_root/properties/service/product/WBI です。例えば、スタンドアロン構成の場合は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/service/product/WBI、デプロイメント・マネージャー構成の場合は /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/properties/service/product/WBIです。

2. サービス製品バックアップ・ディレクトリーがない場合はこれを作成します。

デフォルトのファイル名は /configuration_root/app_server_root/properties/service/product/WBI/backup です。例えば、スタンドアロン構成の場合は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/service/product/WBI/backup、デプロイメント・マネージャー構成の場合は /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/properties/service/product/WBI/backupです。

3. サービス・ログ・ディレクトリーがない場合はこれを作成します。

デフォルト名は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/service/logs/WBI です。

デフォルトのファイル名は /configuration_root/app_server_root/properties/service/logs/WBI です。例えば、スタンドアロン構成の場合は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/service/logs/WBI、デプロイメント・マネージャー構成の場合は /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/properties/service/logs/WBIです。

4. WebSphere Process Server for z/OS の smpe_root 読み取り専用ディレクトリーにあるサービス・レベル・プロパティー (デフォルト名は /usr/lpp/zWPS/V6R0/

properties/service/product/WBI/service/service-level.properties) を、サービス製品ディレクトリー (デフォルト名は /configuration_root/app_server_root/properties/service/product/WBI/service-level.properties) にコピーします。

注: 上記のサービス製品ディレクトリー・パスで、/configuration_root/app_server_root は、WebSphere Application Server for z/OS の構成 HFS と app_server_root ディレクトリー名の組み合わせを表します。例えば、スタンドアロン・サーバーの場合は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/、デプロイメント・マネージャー構成の場合は /WebSphere/V6R0/DeploymentManger です。

- ランタイム・ディレクトリー (デフォルト名は /configuration_root/app_server_root/properties/service/product/WBI/service) 内に、読み取り専用インストールの HFS ディレクトリー・サービス・ディレクトリー (デフォルト名は /usr/lpp/zWPS/V6R0/properties/service/product/WPS/service/) に対するシンボリック・リンク・ファイルを作成します。

注: 上記のランタイム・ディレクトリー・パスで、/configuration_root/app_server_root は、WebSphere Application Server for z/OS の構成 HFS と app_server_root ディレクトリー名の組み合わせを表します。例えば、スタンドアロン・サーバーの場合は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/、デプロイメント・マネージャー構成の場合は /WebSphere/V6R0/DeploymentManger です。

- ランタイム・ディレクトリーにインストーラー・プロパティ・ファイルを作成します (デフォルト名は /configuration_root/app_server_root/properties/service/product/WBI/zWSPPostInstaller.properties)。

注: 上記のディレクトリー・パスで、/configuration_root/app_server_root は、WebSphere Application Server for z/OS の構成 HFS と app_server_root ディレクトリー名の組み合わせを表します。例えば、スタンドアロン・サーバーの場合は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/、デプロイメント・マネージャー構成の場合は /WebSphere/V6R0/DeploymentManger です。

書き込まれた **zWSPPostInstaller.properties** ファイルには、以下の行があります。

注: WBI_TIME.created や WBI_BUILD_LEVEL.current_level などのいくつかの行には、変数データが含まれています。

```
#-----  
# WPS Post Installer Properties File  
#  
# WebSphere Process Server 6.0  
#  
# Licensed Materials - Property of IBM  
# 5655-N53  
# (C) Copyright IBM Corporation 2006. All Rights Reserved.  
# US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or disclosure  
# restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.  
#  
#-----  
WBI_TIME.created=Apr 5, 2006 3:53:47 PM EDT  
WBI_TIME.modified=  
WBI_PATH.smpe_root=/usr/lpp/wbi/zWPS/V6R0  
WBI_PATH.config_root=/WebSphere/V6R0M0/AppServer  
WBI_PATH.service_root=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/service/product/WBI  
WBI_PATH.backup_root=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/service/product/WBI/backup  
WBI_BUILD_LEVEL.target_rollback_level=  
WBI_BUILD_LEVEL.initial_install=00611.10  
WBI_BUILD_LEVEL.current_level=00611.10  
WBI_BUILD_LEVEL.last_component_install=00611.10
```

コードの基本許可の更新

コードの基本許可の更新には、製品のインストールと製品を使用可能にする設定に関連した以下の操作が含まれます。

1. `variables.xml` ファイルの `WAS_SERVER_ONLY_default_jvm_options` シンボル名の値文節に `-Dwps.smpe.install.root=WPS SMP/E HFS` というストリングを挿入することにより、JVM オプションに `SMP/E` の読み取り専用インストール `HFS` ディレクトリーを追加します。`variables.xml` ファイルのデフォルトのロケーションは `/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default/config/cells/SY1/nodes/SY1/variables.xml` です。

例:

```
<entries xmi:id="VariableSubstitutionEntry_1122997753573"
  symbolicName="WAS_SERVER_ONLY_default_jvm_options"
  value="-Dwps.smpe.install.root=/usr/lpp/zWPS/V6R0 ..."
```

2. オリジナルの `variables.xml` ファイル (つまり、上記の変更を行っていないファイル) を同じディレクトリーの `variables.xml.wps` ファイルに保管します。
3. `server.policy` ファイルに次の行を挿入して、`server.policy` を更新します。`server.policy` のデフォルトのロケーションは `/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default/properties/server.policy` です。

```
// WPS for z/OS の場合は以下が追加されます
grant codeBase "file:${wps.smpe.install.root}/-" {
  permission java.security.AllPermission;
};
```
4. オリジナルの `server.policy` file (つまり、上記の変更を行っていないファイル) を同じディレクトリーのファイル `server.policy.wps` に保管します。

構成マネージャーの更新

構成マネージャーの更新には、製品のインストールと製品を使用可能にする設定に関連した以下の操作が含まれます。

1. 構成マネージャーを 6.0 のフルインストール・ディレクトリーで呼び出すことにより、WebSphere の構成 `HFS` 上で管理コンソールを再ビルドします。フルインストール・ディレクトリー (WebSphere Application Server for z/OS `smpe_root` ディレクトリーへのシンボリック・リンク) には、実行すべきいくつかの `Ant` ファイルが格納されています。このインストール・ディレクトリーのデフォルトの名前は `/WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/version/install.wbi/6.0.0.0/config/full/install` です。

実行する `Ant` スクリプトには、以下のものがあります。

```
90SConfigNoProfileFirstStepsESB.ant
90SConfigNoProfileFirstStepsWBI.ant
90SConfigureWSPProfileForWBI.ant
90SInstallCEI.ant
90SUpdateJavaOptions.ant
91SConfigNoProfileFirstStepsCharset.ant
98SDeployBPCAdminConsolePlugins.ant
98SDeployServerAdminConsolePlugins.ant
99SDeployCoreAdminConsolePlugins.ant
```

アンインストール・コマンドについて

アンインストール・コマンドは、WebSphere Process Server for z/OS のインストールに使用するスクリプトと同じスクリプトから実行します。

アンインストール・アクションは、**-uninstall** キーワードで `zSMPInstall.sh` を実行することによって実装されます。

アンインストールのコマンド行引数およびパラメーター

次の表に、WebSphere Process Server for z/OS のアンインストールに使用するコマンド引数を示します。

表 4. WebSphere Process Server for z/OS をアンインストールするためのコマンド行引数

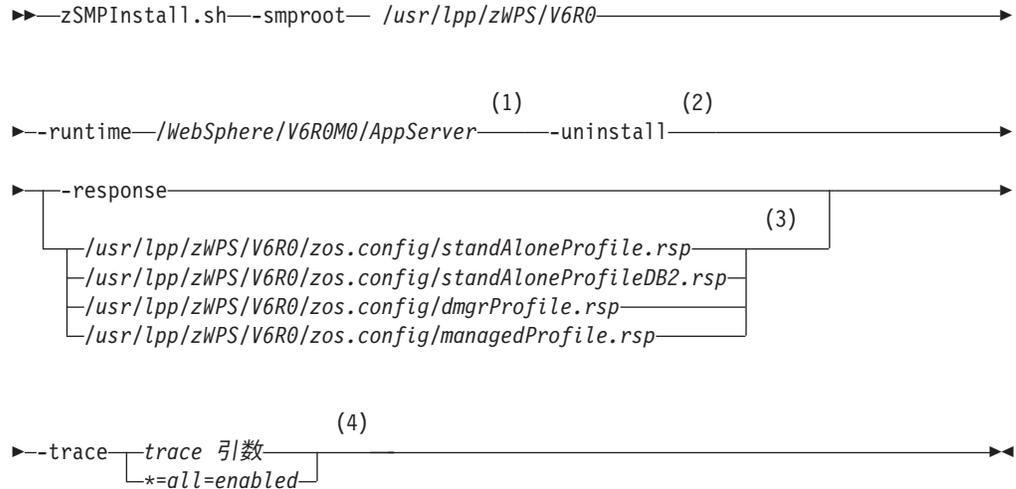
説明	インプリメンテーション・メソッド	結果
管理コンソールから製品定義を除去し、デフォルト・プロファイルを拡張解除します。	<p>製品のアンインストールに必要なコマンド引数のシーケンスを組み込んで、コマンド行から <code>zSMPInstall.sh</code> を実行します。</p> <p>WebSphere Process Server for z/OS をアンインストールするには、次のコマンド行引数およびパラメーターで <code>zSMPInstall.sh</code> を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • -smproot <p>このキーワードおよびそれに関連したキーワード・パラメーターは必須です。パラメーター値は、SMP/E のインストールによって作成された WebSphere Process Server for z/OS <code>smpe_root</code> ディレクトリー (インストール HFS) です。このディレクトリーへの標準パスは、<code>/usr/lpp/zWPS/V6R0</code> です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • -runtime <p>このキーワードおよびそれに関連したキーワード・パラメーターは必須です。</p> <p>このパラメーター値は、WebSphere Application Server for z/OS の構成 HFS と <code>app_server_root</code> ディレクトリー名の組み合わせです。スタンドアロン構成の場合、このディレクトリーへの標準パスは <code>/WebSphere/V6R0M0/AppServer</code> です。</p> <p>デプロイメント・マネージャー構成の場合、このディレクトリーへの標準パスは <code>/WebSphere/V6R0/DeploymentManager</code> です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • -uninstall <p>アンインストール・アクションを駆動するために使用するアンインストール・キーワード。</p> <ul style="list-style-type: none"> • -response <p>アンインストール・アクションにはデフォルト・プロファイルの拡張解除が含まれるため、必ず <code>-response</code> キーワードを含める必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • -trace <p>これはオプションの引数です。この引数をスクリプト・コマンドに組み込む場合、この引数の修飾子としてパラメーターを入力する必要があります。</p>	<p>WebSphere Process Server for z/OS の製品ディレクトリーから製品の機能を除去します。</p> <p>-uninstall を指定した場合の結果は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 構成マネージャーのスクリプト・アクションを実行することにより、WebSphere Process Server フィーチャーを使用不可に設定する。 <p>これにより、管理コンソール・プラグイン拡張機能がすべて除去されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • WSPROFILE のスクリプト・アクションを使用して、プロファイル拡張を除去する。 <p>これにより、デフォルト・プロファイルが拡張解除されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • インストール後のファイルを削除する • コードの基本許可を除去する <p>-trace を指定した場合の結果は次のとおりです。</p> <p><code>-trace</code> 引数を使用しない場合は、トレースの指定として「<code>*=all=disabled</code>」を使用します。</p> <p><code>-trace</code> の有効なパラメーターは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • *=all=enabled <p>トレースが使用可能なすべての Java クラスに関するトレース情報を記録する場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • Installer=all=enabled <p>インストーラーの Java クラス・グループのみに関するトレース情報を記録する場合</p>

コマンド構文

以下の構文図に、アンインストール・コマンドで許可される構文を示します。

注: 構文図の読み方について詳しくは、『構文図の解釈』を参照してください。

アンインストール・スクリプトの構文図



注:

- 1 インストール済み環境に適用するキーワード・パラメーターを入力します。
-smprot および -runtime のキーワード・パラメーターはユーザー定義であるため、この例で示すデフォルト値とは異なる場合があります。-smprot のキーワード・パラメーター値は、SMP/E のインストールによって作成された WebSphere Process Server for z/OS 製品の smpe_root ディレクトリー (インストール HFS) を表します。-runtime のキーワード・パラメーター値は、WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS と app_server_root ディレクトリー名の組み合わせを表します (/WebSphere/V6R0/AppServer など)。WebSphere Application Server for z/OS の各アプリケーション・サービス提供環境 (スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードまたは Network Deployment セル) では、1 つ以上の WebSphere 構成ディレクトリー内に構成ファイルが格納されます。これらの構成ディレクトリーは、WebSphere Application Server for z/OS 構成プロセスによって作成され、製品ディレクトリー内のファイルへのシンボリック・リンクを格納します。-runtime パスは、WebSphere Application Server for z/OS アプリケーション・サービス提供環境の作成時に設定したパスと一致する必要があります。このパスは、構成タイプによって異なります。例えば、デプロイメント・マネージャーの構成ルートは /WebSphere/V6R0/DeploymentManager となり、スタンドアロン・アプリケーション・サーバーの構成ルートは /WebSphere/V6R0/AppServer となります。
- 2 **-uninstall** 引数は、管理コンソールから製品定義を除去し、デフォルト・プロファイルを拡張解除するアクションを実装します。
- 3 拡張解除するプロファイルに関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。
- 4 **-trace** を指定すると、コマンドが適切なログ・ファイルに書き込みを行います。

アンインストール・アクション

構成マネージャーの復帰

構成マネージャーの復帰には、製品のアンインストールとデフォルト・プロファイルの拡張解除に関連した以下のアクションが含まれます。

1. 構成マネージャーを 6.0 のフルアンインストール・ディレクトリーで呼び出すことにより、管理コンソール・プログラムをインストール前の状態に戻します。

フルアンインストール・ディレクトリー (WebSphere Application Server for z/OS インストール HFS へのシンボリック・リンク) には、実行すべきいくつかの Ant ファイルが格納されています。

このインストール・ディレクトリーのデフォルトの名前は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/version/install.wbi/6.0.0.0/config/full/uninstall です。

実行する Ant スクリプトには、以下のものがあります。

```
90SDeleteFirstStepsFilesESB.ant
90SDeleteFirstStepsFilesWBI.ant
90SRemoveJavaOptions.ant
90SUninstallCEI.ant
98SUndeployBPCAdminConsolePlugins.ant
98SUndeployServerAdminConsolePlugins.ant
99SUndeployCoreAdminConsolePlugins.ant
```

構文図の解釈

以下で説明する規則に基づいて、構文図を解釈します。

本書では、WebSphere Process Server for z/OS インストール・スクリプトおよび構成スクリプトのコマンドを構文図で説明しています。

構文図は、コマンド行でコマンドを入力する方法を示したコマンドのビジュアル表示です。構文図の図形という性質によって、概念の接続性からコマンド文法の構造までを理解することができます。

構文図を解釈するには、一番上の行の左端から始めて、左から右、上から下の方向に読み進めます。横線は、コマンドを入力するときに使用するパラメーターのメインパスを表します。メインパスから外れているパラメーターはオプションであり、このようなパラメーターには、入力省略時のデフォルトがある場合があります。

注: 本書の構文図は例に過ぎません。構文図は WebSphere Process Server for z/OS をインストールおよび構成するために実行するコマンドを説明していますが、コマンド行に入力する一部の値は可変です。

記号および句読点

構文図では、以下の記号を使用します。

記号	説明
>>-	コマンド構文の開始を示します。
> -	コマンド構文が続くことを示します。
	コマンド構文の断片または一部分の開始および終了を示します。

記号	説明
><	コマンド構文の終了を示します。

構文図で示されるコロン、セミコロン、コンマ、引用符、負符号 (-) などの句読点はすべて組み込む必要があります。

パラメーター

構文図では、以下の種類のパラメーターが使用されます。

必須 必須パラメーターはメインパス上に示されます。

オプション

オプション・パラメーターはメインパスの下に示されます。

パラメーターは、キーワードまたは変数に分類されます。キーワードは、図に記載されているとおり正確に入力する必要があります。図には変数が示されますが、これはユーザーが指定する名前または値です。例の中では、これらの変数はイタリックで表記されます。

表 5. 構文図の項目の説明

構文図の説明	例
<p>キーワード:</p> <p>キーワードは、コマンド行のアクションを駆動します。</p> <p>キーワードの前にはダッシュ (-) が付き、その後にスペースと、別のキーワードまたはキーワード・パラメーターが続きます。</p>	<pre>>>-keyword1 -keyword2----->< >>-keyword keyword parameter--><</pre>
<p>記号:</p> <p>この記号は、構文図に示されているとおりに入力します。</p>	- Hyphen
<p>オプションの選択項目:</p> <p>複数の項目が階層状に示されていて、そのうちの 1 つが線上にある場合、項目を 1 つ選択する必要があります。</p> <p>この例では、A、B、または C のいずれか 1 つを選択する必要があります。</p>	<pre>>>--A+----->< +-B-+ '-C-'</pre>

表 5. 構文図の項目の説明 (続き)

構文図の説明	例
<p>変数:</p> <p>イタリック体の小文字で示された項目 (<i>var_name</i>) は、変数を示します。</p> <p>この例では、キーワード・コマンドを入力するときに、<i>var_name</i> を指定することができます。</p>	<pre>>>-keyword--var_name-----><</pre>

コマンド構文の例

以下に、前のセクションで説明した構文図のガイドラインに従った WebSphere Process Server for z/OS インストールおよび構成コマンドの例を示します。

製品のインストール

```
zSMPInstall.sh -smproot /usr/lpp/zWPS/V6R0 -runtime /WebSphere/V6R0M0/AppServer
-install
```

上記の例では、シェル・スクリプト・コマンドにキーワード **-smproot** とそのキーワード・パラメーター値が含まれており、このキーワード・パラメーター値は、SMP/E インストールによって作成された WebSphere Process Server for z/OS 製品の `smpe_root` ディレクトリー (インストール HFS) (`/usr/lpp/zWPS/V6R0`) を表しています。このコマンドには **-runtime** キーワードとその関連キーワード・パラメーターも含まれており、このキーワード・パラメーターは WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS と `app_server_root` ディレクトリー名の組み合わせ (`WebSphere/V6R0M0/AppServer`) を表しています。ディレクトリー・パスは可変であるため、イタリック体で示しています。

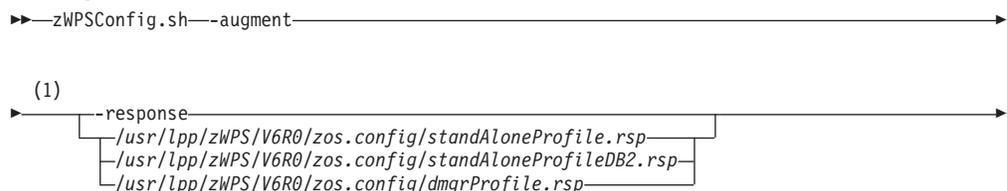
スタンドアロン・サーバー用の製品の構成

```
zWPSConfig.sh -augment -response /usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfileDB2.rsp
```

上記の例では、構成コマンドに **-augment** キーワードを組み込んでプロファイル拡張アクションを実行しています。このアクションは、応答ファイルのプロパティーで呼び出される Ant スクリプトです。**-augment** キーワードの後に、直接 **-response** キーワードと関連したキーワード・パラメーター (応答ファイルの絶対パス) を続けています。応答ファイルのパスは可変であるため、イタリック体で示しています。

製品を構成するためのすべてのオプションを示す構文図は、以下のようになります。

WebSphere Process Server for z/OS を構成するための構文図



▶--Z <指定変更を行うためのプロパティ・ファイル内の値の名前>。—————▶

▶--trace (-trace を指定すると、コマンドが適切なログ・ファイルに書き込みを行います)—————▶

注:

- 1 WebSphere Process Server for z/OS をインストールする構成に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例のこの絶対パス名では、インストーラーがデフォルトの応答ファイルを使用することを前提としています。ほとんどの場合、ユーザーは、デフォルト応答ファイルをコピーし、環境のニーズに合わせて値を編集することになります。このため、ほとんどの場合、パス名はカスタマイズした応答ファイルの絶対パスを表します。

-response のキーワード・パラメーター値に注意してください。構文図では上下に積み重ねられており、コマンドに組み込む応答ファイルに応じて選択できることを示しています。

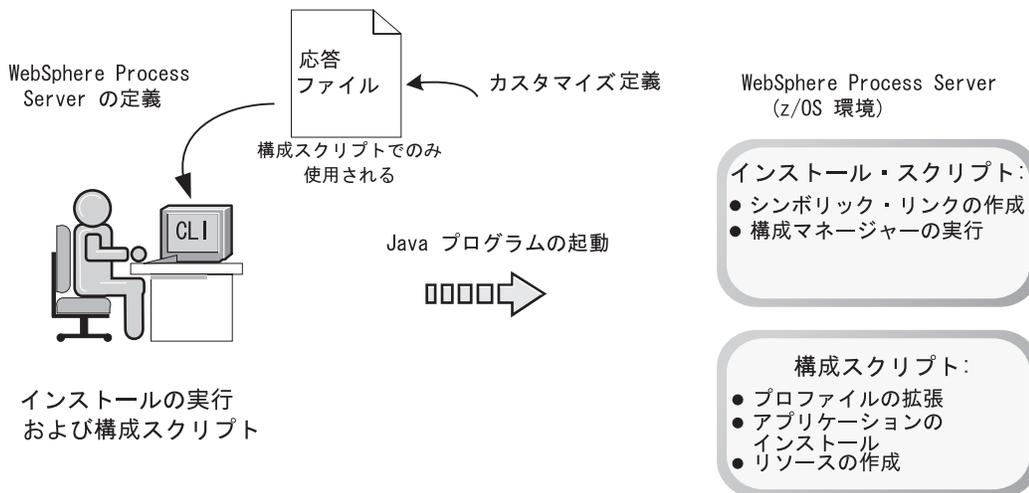
コマンド行プロシージャについて

WebSphere Process Server for z/OS をインストールし、構成するには、コマンド行からシェル・スクリプトを実行します。

スクリプトを使用したインストール作業および構成作業を実行するには、z/OS システムとの間で Telnet セッションを確立してから、スクリプトを実行します。インストール・スクリプト (**zSMPIInstall.sh**) および構成スクリプト (**zWPSConfig.sh**) または構成スクリプト (**zWESBConfig.sh**) では、応答ファイルからの入力を使用して、ランタイム環境のセットアップ方法を決定します。

注: 代わりに、ISPF コマンド・シェルで TSO コマンド **OMVS** を入力するか、他の任意の ISPF パネルから **TSO OMVS** と入力することによって、OS/390 UNIX コマンド・シェルからスクリプトを実行することもできます。

応答ファイル とは、セットアップおよび構成データによってカスタマイズすることができる EBCDIC ファイルのことです。応答ファイルは対話式に使用できないため、使用する環境定義を指定してからスクリプトを実行する必要があります。



コマンド行インターフェース (CLI) を使用してスクリプトを実行すると、スクリプトにより、z/OS 環境内で Java プログラムが呼び出されます。このプログラムは、ランタイム環境のインストールおよび構成に必要なタスクを実行します。具体的には、シンボリック・リンクを作成し、構成マネージャーを実行します。さらに、アプリケーションのインストール、リソースやバスなどの作成を行う多数の Ant スクリプトを実行することにより、デフォルト・プロファイルを拡張します。

構成スクリプトは、応答ファイルに指定されている WebSphere Process Server 定義に依存するため、コマンド行プロシージャはサイレント または無人 インストールと呼ばれることもあります。

アップグレード・プロセスについて

WebSphere Process Server for z/OS のアップグレードは、複数のロールにまたがる複数フェーズのプロセスです。

WebSphere Process Server for z/OS 製品をアップグレードするには、次のいずれかの方法を使用します。

- 既存のインストール HFS に新しい製品バージョンをオーバーレイする
- アップグレード・スクリプトを実行して、旧バージョンを新規のインストール済み製品バージョンに更新する

シナリオ 1: 既存インストール HFS への新バージョンのオーバーレイ

このシナリオでは、SMP/E を使用して既存インストール HFS 上に製品の新しいバージョンをロードすることにより、WebSphere Process Server for z/OS をアップグレードします (図 1)。

注: 構成は、その構成 HFS にのみアクセスできます。構成 HFS のシンボリック・リンクによって、インストール HFS 内のコードにアクセスできるようになります。

その後、サーバー・コントローラーが起動すると、*applyPTF.sh* スクリプトが実行されます。このスクリプトは、構成 HFS のレベルを、インストール HFS のレベルと

照らし合わせてチェックします。この 2 つが同じ保守レベルの場合は、サーバーが始動します。構成 HFS のレベルがインストール HFS よりも低い場合、`applyPTF.sh` スクリプトは、インストール HFS の保守レベルによって指定された構成 HFS への変更を行ってから、サーバーを始動します。

注: 構成 HFS のレベルがインストール HFS よりも高い場合、(例えば、保守で低いレベルに下げる場合など)、サーバーは始動できません。

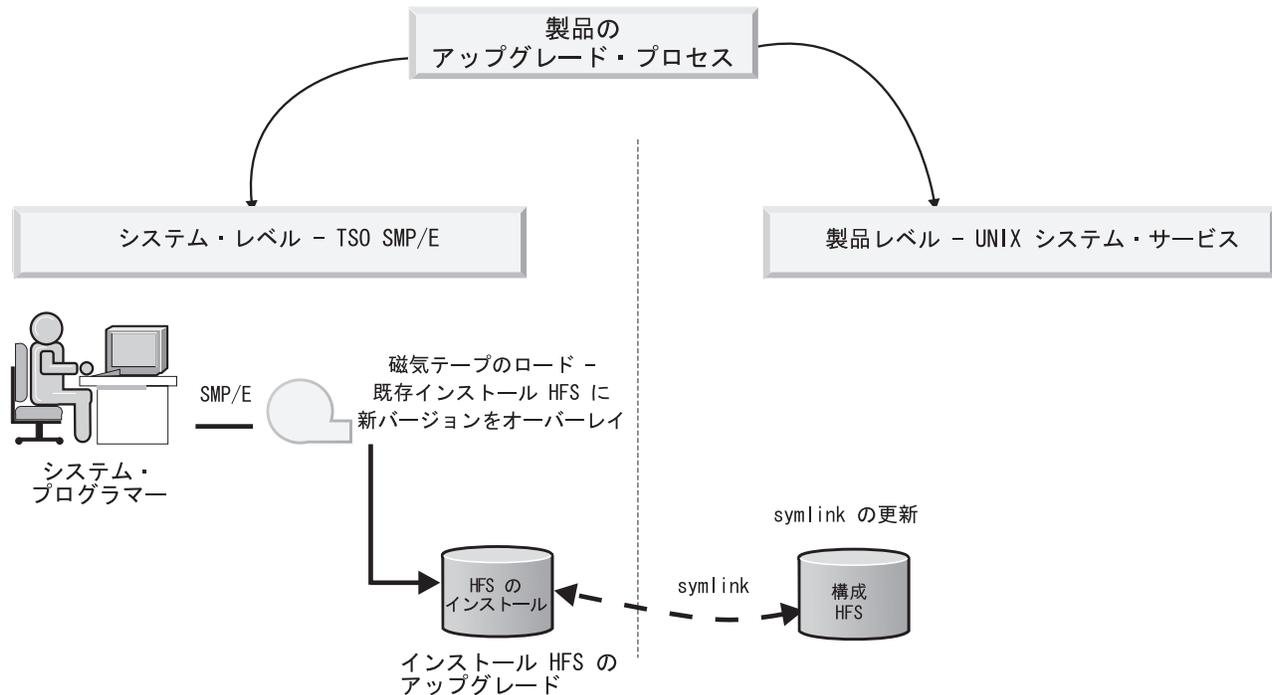


図 5. 既存インストール HFS のオーバーレイによる WebSphere Process Server for z/OS 製品のアップグレード

シナリオ 2: アップグレード・スクリプトの使用

このシナリオでは、SMP/E を使用して、既存インストール HFS とは別に製品の新バージョンをロードすることにより、WebSphere Process Server for z/OS をアップグレードします (図 2)。

その後、アップグレード対象のアプリケーション・サーバーごとにアップグレード・スクリプトを実行できます。このアップグレードによって、サービス・レベル symlink は、アプリケーション・サーバーの既存インストール HFS から新規インストール HFS に変更されます。

その後、サーバー・コントローラーが始動すると、`applyPTF.sh` スクリプトが実行されます。このスクリプトは、構成 HFS のレベルを、インストール HFS のレベルと照らし合わせてチェックします。この場合は、構成 HFS のレベルがインストール HFS よりも低いので、`applyPTF.sh` スクリプトは、インストール HFS の保守レベルによって指定された構成 HFS への変更を行ってから、サーバーを始動します。

図 2 では、WebSphere Process Server for z/OS の新バージョンはアプリケーション・サーバー A で稼働するためのインストールおよび構成が完了しています。アプ

リケーション・サーバー B をアップグレードする場合、システム・プログラマーはアップグレード・スクリプトを実行できます。このスクリプトによって、アプリケーション・サーバー B の構成 HFS が更新されて、サービス・レベル symlink がアプリケーション・サーバー A に関連する新規インストール HFS を指すようになります。このインストール・アップグレードは、`applyPTF.sh` スクリプトが実行されると完了します。

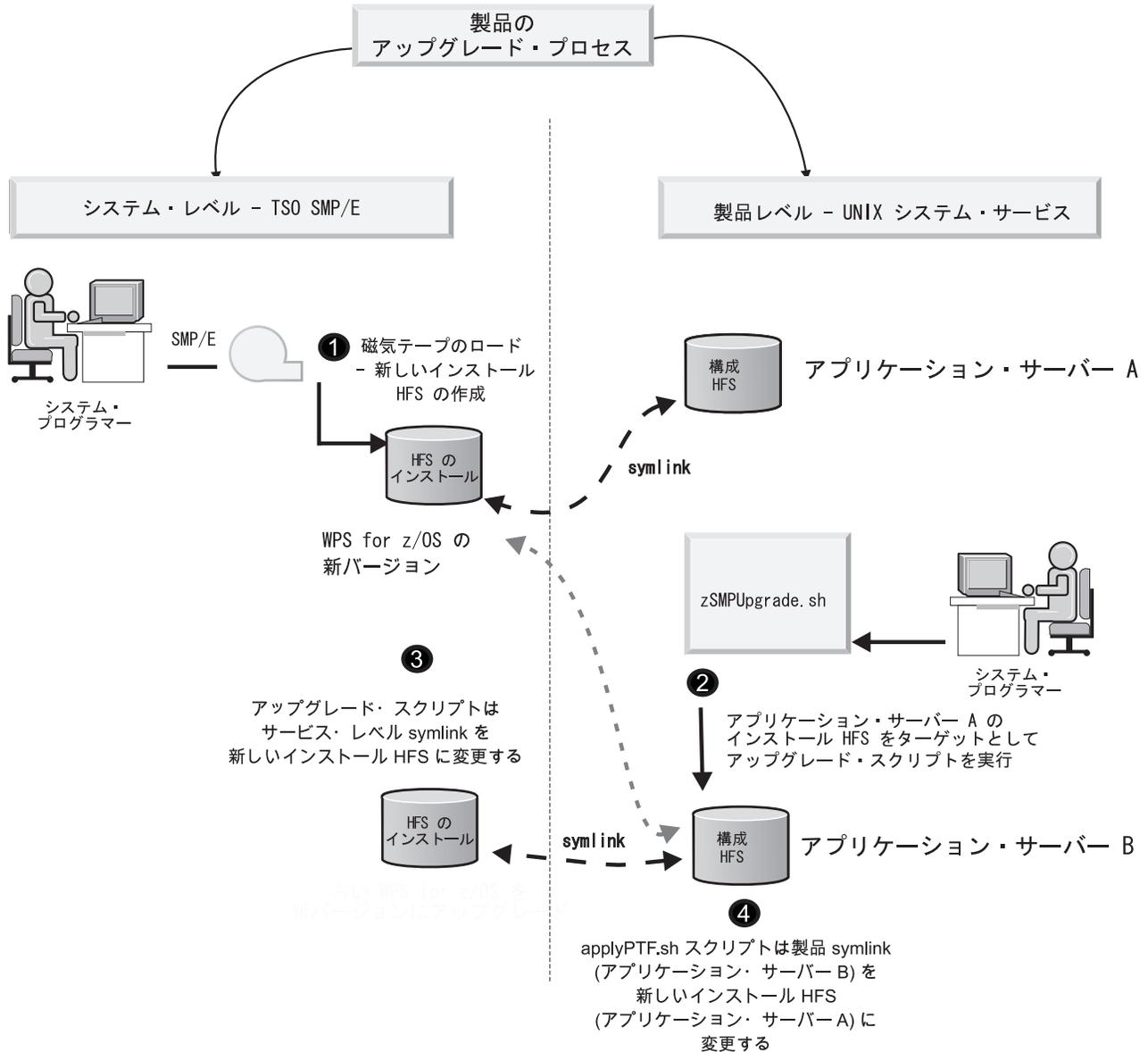


図 6. アップグレード・スクリプトを使用した WebSphere Process Server for z/OS 製品のアップグレード

中間シンボリック・リンクによるアップグレード・スクリプトの使用

この例は、図 2 のシナリオと類似していますが、インストール HFS と構成 HFS の間の直接の symlink ではなく、中間シンボリック・リンクが使用されます。中間シンボリック・リンクは、インストール HFS を指す標準の symlink であり、構成

HFS はこの中間シンボリック・リンクを指します。ノードをほかのサービス・レベルに変更する場合は、単に中間シンボリック・リンクを変更するだけです。

アップグレード対象のアプリケーション・サーバーごとにアップグレード・スクリプトを実行できます。このスクリプトでは、新バージョンのインストール済み HFS を使用して、更新対象の構成 HFS の symlink を更新します。構成 HFS は中間シンボリック・リンクを指すので、追加の間接的な層が存在します。

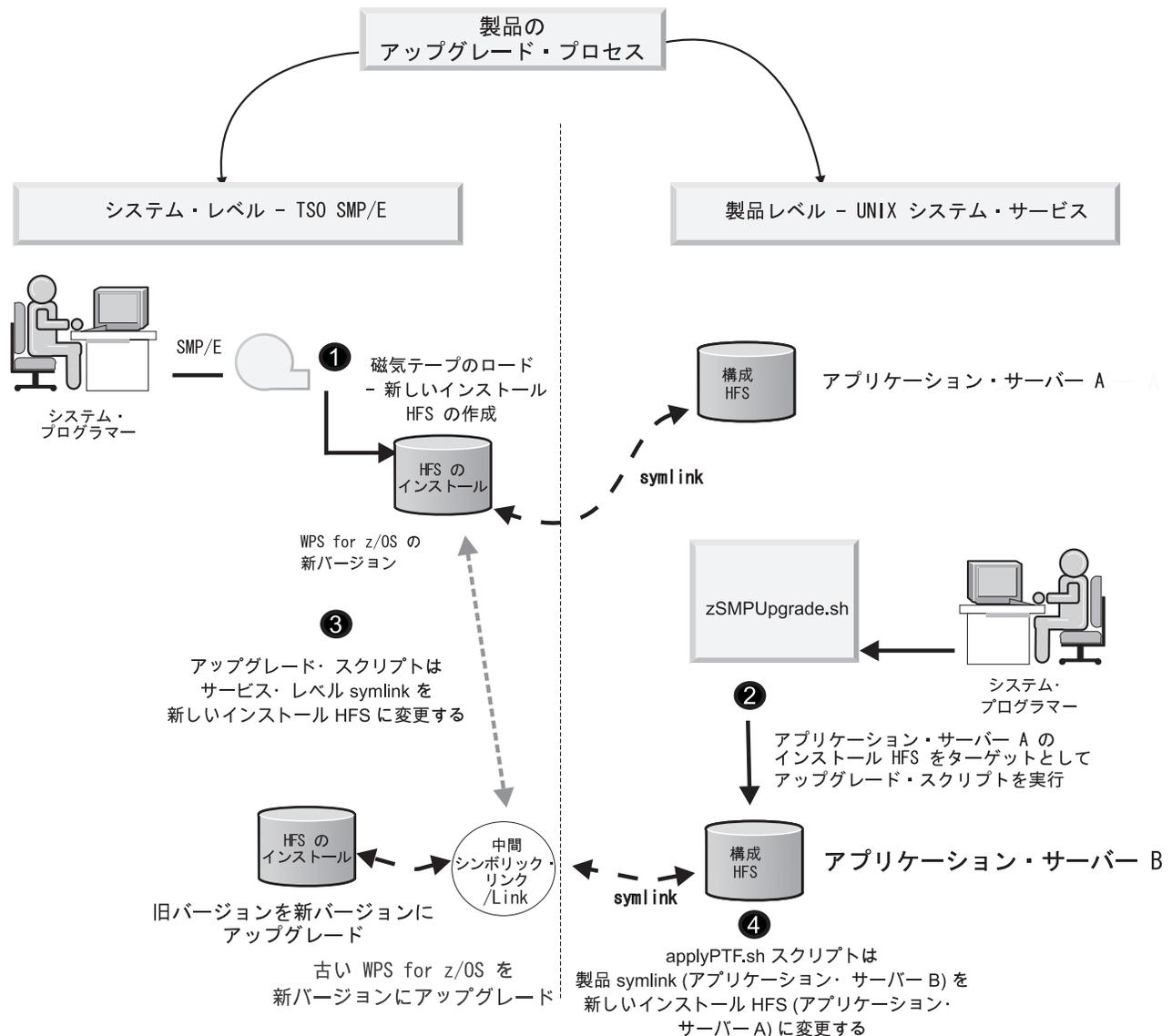


図 7. アップグレード・スクリプトを使用した WebSphere Process Server for z/OS 製品のアップグレード

アップグレード・スクリプトについて

アップグレード・スクリプトを実行すると、WebSphere Process Server for z/OS 製品のサービス・レベルをより新しいバージョンに更新するアクションが実行されます。

このトピックで説明するコマンドは、WebSphere Process Server for z/OS SMP/E インストール HFS 内にあるため、このインストール HFS から実行する必要があります。製品のデフォルトのインストール HFS ディレクトリーは /usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/bin です。

管理者は、アップグレード・スクリプト (**zSMPUpgrade.sh**) を実行できます。

このスクリプトでは、新バージョンの WebSphere Process Server for z/OS のインストール HFS パスを、-smproot のソース・インストール・ディレクトリーとして使用します。これは、アップグレードするターゲット・アプリケーション・サーバーの構成 HFS を再構成する際に使用されます。

コマンド行の構造

以下の図は、**zSMPUpgrade.sh** のコマンド行の構造を示したものです。コマンド行の各部分にはラベルを付け、キーワードおよびキーワード・パラメーターの例を示しています。

コマンド行の構造

WebSphere Process Server for z/OS 定義のアップグレード

スクリプト名 wps およびベースのインストール HFS パス

```
zSMPUpgrade.sh -smproot <newer version install HFS>-Runtime<older version base install HFS>
```

z/OS での製品の構成について

WebSphere Process Server for z/OS を構成するには、コマンド行から構成スクリプトを実行して、スクリプト化されたアクションを使用してプロファイル拡張を使用可能にする必要があります。

WebSphere Process Server for z/OS を構成する前に、まず WebSphere Application Server for z/OS のインストール、カスタマイズ、および構成を行う必要があります。さらに、データベース・タイプによっては、WebSphere Process Server for z/OS を構成する前に、適切なデータベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。データベースおよびストレージ・グループを作成する方法については、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。WebSphere Process Server for z/OS が使用するデータベースの仕様については、『データベース仕様書』を参照してください。

製品の構成



製品の構成スクリプトは、コマンド行から実行されます。

z/OS で WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトが応答ファイルを使用することによって駆動される構成オプションがいくつかあります。

応答ファイルの内容は、WebSphere Process Server for z/OS 構成データで WebSphere Application Server for z/OS プロファイルを拡張するために使用されます。

プロファイル拡張

プロファイル拡張とは、WebSphere Process Server for z/OS 構成データを既存の WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルに追加して、そのプロファイルを WebSphere Process Server for z/OS プロファイルに変換するプロセスです。

注: z/OS では、プロファイルは常に 1 つだけ存在し、そのプロファイルにそれぞれの構成内で **default** という名前が付けられます。

プロファイル拡張では、WebSphere Application Server for z/OS 製品構成に WebSphere Process Server for z/OS のフィーチャーや関数を追加することによって、製品構成の機能が拡張されます。

デフォルト・プロファイルを拡張するスクリプトを実行する前に、作成する WebSphere Process Server for z/OS 構成に固有の応答ファイルを編集する必要があります。拡張アクションは、応答ファイル内のプロパティを使用して呼び出される Ant スクリプトです。

WebSphere Process Server for z/OS を構成するには、製品管理者が以下のいずれかの構成スクリプトを実行します。

- zWPSConfig.sh
- zWESBConfig.sh

この 2 つの構成スクリプトでは、WebSphere Process Server for z/OS の構成時の柔軟性を考慮しています。プロセス・サーバーがメディエーションのみを実行する場合は、スクリプト **zWESBConfig.sh** を実行します。メディエーションのみを実行する構成では、使用しない機能が除外されてサーバーの占有スペースが削減され、サーバー起動の高速化やメモリー消費量の削減が可能になります。プロセス・サーバーをビジネス・プロセスに使用する場合は、**zWPSConfig.sh** を実行します。スクリプト **zWPSConfig.sh** は、アプリケーション・サーバーをプロセス用に構成する場合に必要です。

プロファイル拡張が実行される方法は、WebSphere Application Server for z/OS 構成タイプによって異なります。ディレクトリー構造 (製品の構成によって異なります) は、インストーラーの構成マネージャー部分に渡されます。構成マネージャーは、/actions サブディレクトリーで Ant スクリプトを実行し、この結果、管理コンソールが WebSphere Process Server の定義で更新されます。

構成スクリプトについて

構成スクリプトを使用して、デフォルト・プロファイルを拡張します。

WebSphere Process Server には、**zWPSConfig.sh** と **zWESBConfig.sh** という 2 つの構成スクリプトが付属しています。

このトピックで説明するコマンドは、スタンドアロン構成を作成する場合は /WebSphere/V6R0M0/AppServer/bin ディレクトリーに格納され、デプロイメント・マネージャー構成の場合は /WebSphere/V6R0/DeploymentManager に格納されています。そのため、コマンドを実行するときは、それぞれのディレクトリーから実行する必要があります。

この 2 つの構成スクリプトでは、WebSphere Process Server for z/OS の構成時の柔軟性を考慮しています。スクリプト **zWESBConfig.sh** を使用すると、製品管理者は「ESB のみ」の構成としてサーバーを構成することができます。これによって、使用しない機能を除外してサーバーの占有スペースを減らすことができ、サーバー起動の高速化やメモリー消費量の削減が可能になります。スクリプト **zWPSConfig.sh** では、サーバーをプロセス・サーバーとして構成し、サーバーがプロセスを処理できるようにします。どのスクリプトを実行するかは、業務の目的やサーバーのパフォーマンスを考慮して決定します。エンタープライズ・サービス・バス機能について詳しくは、『エンタープライズ・サービス・バスの概要』を参照してください。WebSphere Process Server の機能について詳しくは、「製品概説」の『WebSphere Process Server のアーキテクチャーの概要』を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS の使用方法に応じて、コマンド行プロンプトから **zWPSConfig.sh** と **zWESBConfig.sh** の 2 つの構成スクリプトのいずれかを実行します。この 2 つのスクリプトでは、同じコマンド引数をサポートします。

どちらの構成スクリプトを実行した場合も結果として、デフォルト・プロファイルが WebSphere Process Server for z/OS の構成データで更新されます。

ESB のみの構成を作成する場合は、後で Process Server 構成に変更できます。詳しくは、『再構成処理について』を参照してください。

構成スクリプトを実行するためのコマンドは、応答ファイルに対するパスを含みます。応答ファイルに設定したプロパティ値は、製品の構成情報を作成するときを使用します。応答ファイルで特定のパラメーターを設定したときの選択内容によっては、追加の構成後作業が必要になる場合があります。構成後の作業が必要になるパラメーター設定について詳しくは、『応答ファイルでの作業』を参照してください。

コマンド行の構造

以下の図は、構成スクリプトのコマンド行の構造を示したものです。コマンド行の各部分にラベルを付けており、コマンド引数の例を示しています。

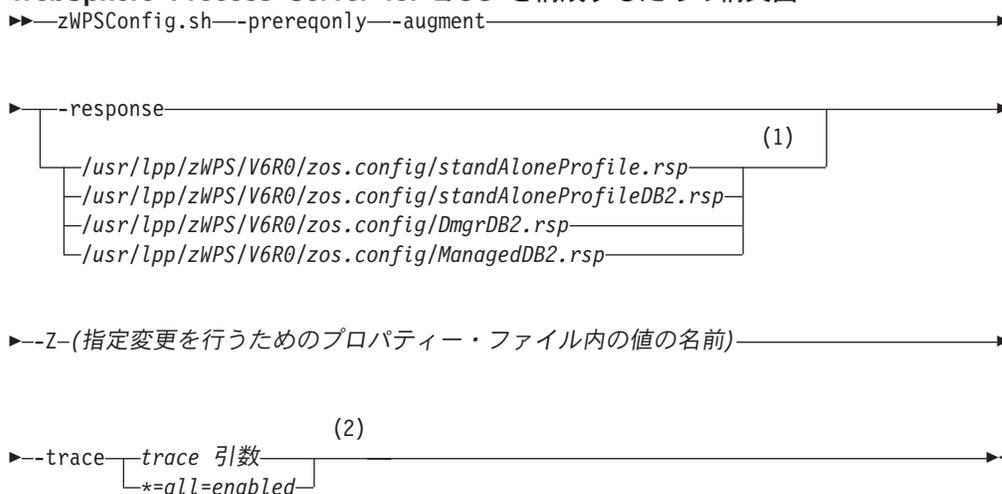
コマンド行の構造 デフォルト・プロファイルの拡張

スクリプト名	プロシージャ	構成応答 ファイル	プロパティの オーバーライド	トレース・ オプション
zWPSConfig.sh zWESBConfig.sh	-augment	-response <response file path>	-Z <property name>	-trace

コマンド構文

以下の構文図は、構成スクリプトのコマンド構文を示します。

WebSphere Process Server for z/OS を構成するための構文図



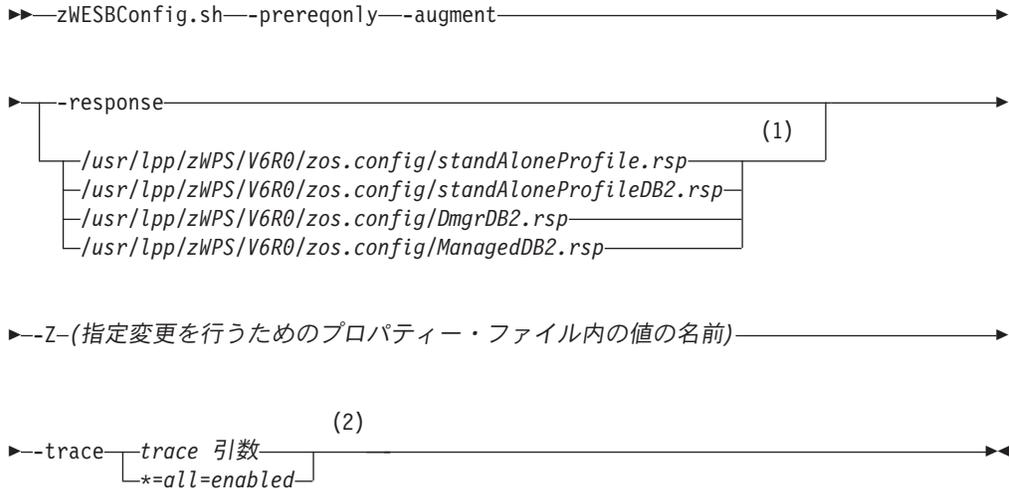
注:

- 1 作成している構成情報に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例では、製品に付属している応答ファイルへのデフォルトのパスを示します。コマンドを実行する場合、**-response** パラメーターは、環境に固有の値を使用して変更した応答ファイルへの絶対パスを表します。
standAloneProfileDB2.rsp、 DmgrDB2.rsp および ManagedDB2.rsp という名前

の応答ファイルで DB2® for z/OS データベースを作成するために必要な情報は、DB2 for z/OS バージョン 7 または DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートするよう設定できるプロパティを含みます。デフォルトでは、DB2 for z/OS バージョン 8 用の値が設定されます。

- 2 **-trace** を指定すると、コマンドが適切なトレース・ファイルに書き込みを行います。

WebSphere Process Server for z/OS を ESB 専用サーバーとして構成するための構文図



注:

- 1 作成している構成情報に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例では、製品に付属している応答ファイルへのデフォルトのパスを示します。コマンドを実行する場合、**-response** キーワードとそのパラメーターは、環境に固有の値を使用して変更した応答ファイルへの絶対パスを表します。standAloneProfileDB2.rsp、DmgrDB2.rsp および ManagedDB2.rsp という名前の応答ファイルで DB2 for z/OS データベースを作成するために必要な情報は、DB2 for z/OS バージョン 7 または DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートするよう設定できるプロパティを含みます。デフォルトでは、DB2 for z/OS バージョン 8 用の値が設定されます。
- 2 **-trace** を指定すると、コマンドが適切なトレース・ファイルに書き込みを行います。

コマンド行引数およびパラメーター

製品の構成コマンドを実行した結果として、デフォルト・プロファイルが WebSphere Process Server for z/OS 構成データで拡張されます。

所定の構成を行うために必要な一連のキーワードおよびキーワード・パラメーターを指定して、コマンド行から **zWPSConfig.sh** を実行します。

次の表に、製品の構成コマンドの引数 (キーワードおよびパラメーター) と、そのコマンド引数を指定してスクリプトを実行した結果を示します。

表 6. WebSphere Process Server for z/OS の構成 - プロセス・サーバーとしてのサーバーの稼働

キーワードおよびパラメーター	説明
-prereqonly	<p>引数および応答ファイル・プロパティを検証します。</p> <p>注: -prereqonly と -augment のアクションは相互に排他的です (いずれか 1 つのみを実行します。両方を同時に実行することはできません。)</p>
-augment	<ul style="list-style-type: none"> • 前提条件を確認する。 • 引数を検証する。 • スクリプト・アクションを使用して、プロファイル拡張を使用可能に設定する。 <p>応答ファイルのプロパティ値の指定に従って、WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルを WebSphere Process Server for z/OS 構成データで拡張します。</p>
-response	<p>-response キーワードに対する修飾子としてキーワード・パラメーターを入力する必要があります。例、-response <absolute path of response file></p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server for z/OS を構成するためのプロパティを含む応答ファイル。 • 以下の構成用のサンプル応答ファイルが用意されています。 <ul style="list-style-type: none"> - Cloudscape™ を使用するスタンドアロン - DB2 for z/OS を使用するスタンドアロン - DB2 for z/OS を使用する管理対象ノード - DB2 for z/OS を使用するデプロイメント・マネージャー <p>注: DB2 for z/OS をサポートする応答ファイルには、DB2 for z/OS バージョン 7 および DB2 for z/OS バージョン 8 の値が含まれます。デフォルト値は、DB2 for z/OS バージョン 8 に設定されます。</p>

表 6. WebSphere Process Server for z/OS の構成 - プロセス・サーバーとしてのサーバーの稼働 (続き)

キーワードおよびパラメーター	説明
-Z	<p>-Z<propertyOverride></p> <p>これはオプションのキーワードです。このキーワードをスクリプト・コマンドに組み込む場合は、この引数に対する修飾子としてパラメーターを入力する必要があります。</p> <p>このオプションを使用すると、ユーザーが提供された応答ファイルに指定されている個々のプロパティを指定変更することができます。これにより、応答ファイルは更新されません。</p> <p>例えば、下記のコマンド行に表示されているパラメーターおよび値 nodeName=NODE1 は、応答ファイルに指定された <i>nodeName</i> のみをオーバーライドします。</p> <pre>zWPSConfig.sh -augment -response /web/usr/wbi/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfile.rsp -ZnodeName=NODE1'</pre> <p>このように -Z オーバーライドを特別に指定する方法が意味をなすのは、本質的に同じプロパティを持つ製品構成スクリプトを複数のノードで実行したい場合です。</p> <p>注: 応答ファイルに指定されているプロパティのうちの 4 つ以上のプロパティを指定変更する場合は、コマンド行が非常に長くなる可能性があります。この場合は、propertyOverride 値に対応するように応答ファイルを更新することを考慮してください。</p>
-trace	<p>-trace キーワードに対する修飾子としてキーワード・パラメーターを入力する必要があります。</p> <p>デフォルトの -trace の指定は「*=all=disabled」です。</p> <p>トレースが使用可能なすべての Java クラスに関するトレース情報を記録する場合は、「*=all=enabled」を指定してください。</p> <p>インストーラーの Java クラス・グループのみに関するトレース情報を記録する場合は、「Installer=all=enabled」を指定してください。</p>

所定の構成を行うために必要な一連のコマンド・キーワードおよびキーワード・パラメーターを指定して、コマンド行から **zWESBConfig.sh** を実行します。

zWESBConfig.sh 製品構成スクリプトを実行した結果として、デフォルト・プロファイルが Enterprise Service Bus 機能用の構成データで拡張されます。

次の表に、製品の構成コマンドの引数 (キーワードおよびパラメーター) と、そのコマンド引数を指定してスクリプトを実行した結果を示します。

表 7. WebSphere Process Server for z/OS の構成 - ESB のみのサーバーとしてのサーバーの稼働

キーワードおよびパラメーター	説明
-prereqonly	<p>引数および応答ファイル・プロパティを検証します。</p> <p>注: -prereqonly と -augment のアクションは相互に排他的です (いずれか 1 つのみを実行します。両方を同時に実行することはできません。)</p>
-augment	<ul style="list-style-type: none"> • 前提条件を確認する。 • 引数を検証する。 • スクリプト・アクションを使用して、プロファイル拡張を使用可能に設定する。 <p>ESB のみのサーバーとして構成された WebSphere Process Server for z/OS 用の構成データで WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルを拡張します。</p>
-response	<p>-response キーワードに対する修飾子としてキーワード・パラメーターを入力する必要があります。例、-response <absolute path of response file></p> <ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Process Server for z/OS を構成するためのプロパティを含む応答ファイル。 • 以下の WebSphere Application Server for z/OS 構成用のサンプル応答が用意されています。 <ul style="list-style-type: none"> - Cloudscape を使用するスタンドアロン - DB2 for z/OS を使用するスタンドアロン - DB2 for z/OS を使用する管理対象ノード - DB2 for z/OS を使用するデプロイメント・マネージャー <p>注: DB2 for z/OS をサポートする応答ファイルには、DB2 for z/OS バージョン 7 および DB2 for z/OS バージョン 8 の値が含まれます。デフォルト値は、DB2 for z/OS バージョン 8 に設定されます。</p>

表 7. WebSphere Process Server for z/OS の構成 - ESB のみのサーバーとしてのサーバーの稼働 (続き)

キーワードおよびパラメーター	説明
-Z	<p>-Z<propertyOverride></p> <p>これはオプションのキーワードです。このキーワードをスクリプト・コマンドに組み込む場合は、この引数に対する修飾子としてパラメーターを入力する必要があります。</p> <p>このオプションを使用すると、ユーザーが提供された応答ファイルに指定されている個々のプロパティを指定変更することができます。これにより、応答ファイルは更新されません。</p> <p>例えば、下記のコマンド行に表示されているパラメーターおよび値 nodeName=NODE1 は、応答ファイルに指定された <i>nodeName</i> のみをオーバーライドします。</p> <pre>zWESBConfig.sh -augment -response /web/usr/wbi/zWESB/V6R0/zos.config/standAloneProfile.rsp -ZnodeName=NODE1'</pre> <p>このように -Z オーバーライドを特別に指定する方法が意味をなすのは、本質的に同じプロパティを持つ製品構成スクリプトを複数のノードで実行したい場合です。</p> <p>注: 応答ファイルに指定されているプロパティのうちの 4 つ以上のプロパティを指定変更する場合は、コマンド行が非常に長くなる可能性があります。この場合は、propertyOverride 値に対応するように応答ファイルを更新することを考慮してください。</p>
-trace	<p>-trace キーワードに対する修飾子としてキーワード・パラメーターを入力する必要があります。</p> <p>デフォルトの -trace の指定は「*=all=disabled」です。</p> <p>トレースが使用可能なすべての Java クラスに関するトレース情報を記録する場合は、「*=all=enabled」を指定してください。</p> <p>インストーラーの Java クラス・グループのみに関するトレース情報を記録する場合は、「Installer=all=enabled」を指定してください。</p>

拡張操作

引数と環境の検証

引数と環境の検証 には、以下の操作が含まれます。

1. 引数 (-prereqonly または -augment) が 1 つだけ指定されていることを確認します。
2. -response 引数とそのパラメーター値が指定されていること、および値の中に指定されている応答ファイルが存在することを確認します。
3. すべての **-Z** 引数に等号 (=) が含まれていることを確認します。

4. `-trace` 引数が指定されている場合は、値も一緒に指定されていることを確認します。

`-trace` 引数が指定されていない場合は、デフォルトの「`*=all=disabled`」に設定します。

5. 認識されないキーワードが指定されていないことを確認します。
6. ランタイム・ディレクトリー内にトレース・ファイルがない場合はこれを作成します。

WebSphere Process Server 構成の場合、デフォルトのファイル名は `/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWPSConfig.trace` です。

ESB のみのサーバー構成の場合、デフォルトのファイル名は `/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWESBConfig.trace` です。

7. ランタイム・ディレクトリー内にログ・ファイルを作成します。

WebSphere Process Server 構成の場合、デフォルトのファイル名は `/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWPSConfig.log` です。

ESB のみのサーバー構成の場合、デフォルトのファイル名は `/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWESBConfig.log` です。

8. 応答ファイルを読み取って、その値を応答プロパティー・テーブルにロードします。
9. 応答プロパティー・テーブル内に `-Z` キーワード・コマンド行値を追加するか、このテーブル内のいずれかの `-Z` キーワード・コマンド行値を置き換えます。
10. 応答プロパティー・テーブルに `profileName`、`profilePath`、`nodeName`、`cellName`、および `serverName` プロパティーが指定されていること、および指定されたプロパティーが有効であることを確認します。

注: `serverName` プロパティーは、指定された場合にのみ検証されます。管理対象ノード応答ファイルの場合、`serverName` プロパティーは不要です。

11. 前提条件 WebSphere Application Server が、サポートされるレベルであることを確認します。

プロファイル拡張

プロファイル拡張には、以下の操作が含まれます。

1. (WSPROFILE) スクリプト・アクションを使用してプロファイル拡張を使用可能に設定します。

このためには、`Profile Updater` を呼び出して、これに `profileTemplate` ディレクトリーを渡します。

渡される `profileTemplate` は、応答ファイルの `templatePath` 値に基づいて決まります。この値は、`zWPSConfig.sh` または `zWESBConfig.sh` コマンド行で参照されます。

すべての応答ファイル・プロパティと同様、`templatePath` 値は、コマンド行で `-Z` 引数を使用して指定変更される可能性があります。

デフォルト応答ファイルの `templatePath` は `templatePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.*` のようになります。ここで、**default.*** は、すべての WebSphere Process Server for z/OS `profileTemplate` に対して `Profile Updater` を起動するワイルドカードを表します。

スタンドアロン構成用のテンプレートには、以下のものがあります。

```
/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.wbicare  
/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.bfm  
/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.wbiserver
```

Network Deployment 構成用のテンプレートには、以下のものがあります。

```
/WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profileTemplates/default.wbicare  
/WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profileTemplates/default.bfm  
/WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profileTemplates/default.wbiserver
```

profileTemplate プロパティについては、『サンプル応答ファイル』を参照してください。

再構成処理について

ESB のみのサーバーをプロセス・サーバーに再構成できます。

ESB のみの構成に対して **zWPSConfig.sh** を実行すると、WebSphere Process Server for z/OS が完全な機能を持つプロセス・サーバーとして再構成されます。

ESB のみのサーバーから完全なプロセス・サーバーへの再構成は、ビジネス・モデルが変化した場合などに行います。例えば、プロセス・フローを使用および実行するための新しいビジネス要件が考えられます。ESB のみの構成は `Business Process Choreographer` 機能を含まないため、サーバーを再構成してその機能を組み込む必要があります。

zWPSConfig.sh を実行すると、既存の ESB のみの構成があることが検証され、アクションの一部として、サーバーを完全なプロセス・サーバーとして構成するために必要なコンポーネント (`Business Process Choreographer` など) がその ESB のみの構成に追加されます。

コマンド構文

以下の構文図に、ESB のみのサーバーを完全なプロセス・サーバーに再構成するための構成スクリプトの構文を示します。

ESB のみのサーバーを完全なプロセス・サーバーに再構成するための構文図

▶▶—zWPSConfig.sh—augment————→



注:

- 1 作成している構成情報に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例では、製品に付属している応答ファイルへのデフォルトのパスを示します。コマンドを実行する場合、**-response** パラメーターは、環境に固有の値を使用して変更した応答ファイルへの絶対パスを表します。
standAloneProfileDB2.rsp、 DmgrDB2.rsp および ManagedDB2.rsp という名前の応答ファイルで DB2 for z/OS データベースを作成するために必要な情報は、DB2 for z/OS バージョン 7 または DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートするよう設定できるプロパティを含みます。デフォルトでは、DB2 for z/OS バージョン 8 用の値が設定されます。
- 2 **-trace** を指定すると、コマンドが適切なログ・ファイルに書き込みを行います。

構成スクリプトのキーワードおよびキーワード・パラメーターについては、トピック『構成スクリプトについて』の表『WebSphere Process Server for z/OS の構成 - プロセス・サーバーとしてのサーバーの稼働』を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成の計画

WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成には、WebSphere Process Server for z/OS のほかに WebSphere Application Server for z/OS についての計画アクティビティーが含まれます。

以降のセクションで提供する情報では、実行する必要がある作業を示し、WebSphere Process Server for z/OS をインストールし構成するために役立つ資料リソースの参照先を記載します。

以下のステップを実行して計画を実装し、各項目が完了するごとに、その項目に完了の印をつけます。

システムの計画

表 8. システムの計画

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	必要なスキルを判別する。	『必要なスキルの判別』を参照してください。
	システム要件を判別する。	WebSphere Process Server のシステム要件 Web サイトを参照し、バージョン 6.0.1 <i>Process Server for z/OS</i> を選択します。 WebSphere Process Server for z/OS は、WebSphere Application Server for z/OS の上にインストールされます。システム要件のリストについては、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターで文書化されている『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。
	セキュリティー・オプションについて理解し、システムの保護に備えてください。	セキュリティー・オプションは WebSphere Application Server for z/OS で設定されています。WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『環境の保護計画』情報を参照してください。
	必要に応じて、各 z/OS システムでワークロード管理をゴール・モードで実装する。	WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『ワークロード管理 (WLM) の準備』を参照してください。
	各 z/OS システム上で Resource Recovery Services を実装する (まだ実装されていない場合)。	WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『Resource Recovery Services の準備』を参照してください。
	パフォーマンスおよびモニター・システムについて計画する。	WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『エンド・ユーザー応答時間のモニター』を参照してください。
	問題診断手順を計画および定義する。	WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『問題診断の計画』を参照してください。
	WebSphere Application Server for z/OS をインストールする前に自動再起動管理を検討する。	WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『自動再始動管理』を参照してください。

表 8. システムの計画 (続き)

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	インストール・メディアから z/OS へプログラム・マテリアルをロードする準備としての計画タスクを実行する。	<p>WebSphere Application Server for z/OS インストール・メディアのアンロードに関連した計画タスクについては、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『インストールの計画』を参照してください。</p> <p>WebSphere Process Server for z/OS インストール・メディアのアンロードに関連した計画タスクについては、『製品コードのアンロードの計画』を参照してください。</p>

WebSphere Application Server for z/OS のインストール

表 9. インストール・メディアからのコードのロード

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	WebSphere Application Server for z/OS インストール・メディアの内容をシステムにロードする。	これを実行する方法については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『製品および追加のソフトウェアのインストール』を参照してください。
	基本オペレーティング・システムを準備します。	これを実行する方法については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『基本オペレーティング・システムの準備』を参照してください。

WebSphere Application Server for z/OS をカスタマイズします。

表 10. WebSphere Application Server for z/OS をカスタマイズします。

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	WebSphere Application Server for z/OS ランタイム環境について計画する。	これを実行する方法については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『製品構成の計画』を参照してください。

表 10. WebSphere Application Server for z/OS をカスタマイズします。(続き)

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	<p>WebSphere Application Server for z/OS をカスタマイズします。</p> <p>注: WebSphere Application Server for z/OS ランタイム環境を、作成する WebSphere Process Server for z/OS の構成をサポートするようにカスタマイズします。</p> <p>重要: WebSphere Application Server for z/OS 内に空の管理対象ノードを作成するときに、ジョブ BBOWMNAN を実行しないようにしてください。このジョブを実行すると、ノードが指定のデプロイメント・マネージャー・セルに統合されます。WebSphere Process Server for z/OS 構成プロセスの一部としてデプロイメント・マネージャー・セルを統合するため、ここではノードを統合する必要はありません。</p>	<p>この実行方法については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『インストール後の製品の構成』を参照してください。</p> <p>WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成サーバーを作成する場合は、最初に WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターにある説明に従って、スタンドアロン・アプリケーション・サーバー構成を作成する必要があります。WebSphere Application Server for z/OS のスタンドアロン・サーバー構成を作成すると、デフォルト・プロファイルが提供され、それを WebSphere Process Server for z/OS 構成データで拡張することができます。</p> <p>WebSphere Process Server for z/OS のデプロイメント・マネージャー構成を作成する場合は、最初に WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターにある説明に従って、デプロイメント・マネージャー・サーバー構成を作成する必要があります。WebSphere Application Server for z/OS のデプロイメント・マネージャーを作成すると、デフォルト・プロファイルが提供され、それを WebSphere Process Server for z/OS 構成データで拡張することができます。</p>

WebSphere Process Server for z/OS のインストール

表 11. WebSphere Process Server for z/OS のインストール

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	<p>Program Directory for WebSphere Process Server for z/OS を印刷する。</p>	<p>Program Directory は、製品インストール・メディアと共にパッケージされ、また、WebSphere Process Server for z/OS ライブラリー・ページ から PDF として入手することもできます。</p>

表 11. WebSphere Process Server for z/OS のインストール (続き)

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	インストール・メディアからシステムへ WebSphere Process Server for z/OS 製品コードをロードする。	『インストール・メディアからシステムへの製品コードのロード (Load the product code from the installation media onto the system)』を参照してください。
	インストール・スクリプトを実行する。	<p>インストール・スクリプト (zSMPInstall.sh) を実行する前に、コマンド行インストールでサポートされるさまざまなキーワードおよびキーワード値を理解する必要があります。</p> <p>インストールを進めるキーワードおよびキーワード・パラメーターを理解するには、30 ページの『インストール・スクリプトについて』を参照してください。</p> <p>インストール・スクリプトの実行方法については、『インストール・スクリプトの実行』を参照してください。</p>

WebSphere Process Server for z/OS の構成

インストール・スクリプトを実行したら、コマンド行から別のスクリプトを実行して、WebSphere Process Server for z/OS の製品構成情報を作成する必要があります。WebSphere Process Server for z/OS の使用を計画する方法に応じて、以下のよう
に、2 つの製品構成スクリプトのいずれかを実行することができます。

- zWESBConfig.sh

構成しているサーバーがメディアエーション・フローのみを実行する場合は、この構成スクリプトを実行します。

- zWPSConfig.sh

構成しているサーバーがプロセス・フローを実行する場合は、この構成スクリプトを実行します。

表 12. WebSphere Process Server の製品構成タスク

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	製品構成スクリプトを理解する。	<p>48 ページの『z/OS での製品の構成について』を参照してください。</p> <p>コマンド行構成スクリプトでサポートされるさまざまなキーワードおよびキーワード値を理解するには、50 ページの『構成スクリプトについて』を参照してください。</p>

表 12. WebSphere Process Server の製品構成タスク (続き)

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行する前に、データベースに関する考慮事項を把握し、必要なセットアップ手順を実行する。	WebSphere Process Server for z/OS の構成計画の一部として、DB2 for z/OS がセットアップされていることを確認してください。 『データベースを作成する際の考慮事項』を参照してください。
	データベースおよびストレージ・グループを作成する。	データベースと、データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS フィーチャーに関連付けるストレージ・グループを作成します。 『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。
	応答ファイルの使用法を理解する。	WebSphere Process Server for z/OS 構成プロセスでは、応答ファイルを使用して、作成する構成に関係のある構成パラメーターを決定します。デフォルト値を設定した応答ファイル・テンプレートが製品に付属しています。 使用するよう選択した応答ファイル・テンプレート内のデフォルト値の一部を編集する必要があります。 『応答ファイルでの作業』を参照してください。
	構成スクリプトを実行して、製品構成を作成する。	106 ページの『構成スクリプトの実行について』を参照してください。

環境構成変数と応答ファイルの構成の仕方によっては、WebSphere Process Server for z/OS の構成を完了するために、追加の構成作業を行う必要がある場合があります。

表 13. WebSphere Process Server の構成後タスク

チェック欄	タスクの説明	インフォメーション・センターのリソース
	(条件) - 製品の構成スクリプトがデータベース定義を自動的に作成しなかった場合は、SQL を実行してデータベース定義を作成してください。	『手動によるデータベースの構成』を参照してください。

ハードウェアおよびソフトウェア要件

このトピックには、WebSphere Process Server のインストールに必要な、ハードウェア要件とソフトウェア相互要件および前提条件に関する追加情報へのリンクが含まれています。

プラットフォーム固有のディスク・スペース所要量、サポートされているオペレーティング・システム、およびオペレーティング・システムを準拠させるためにインストールする必要があるオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチについては、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> で WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を確認し、ご使用のバージョンの WebSphere Process Server のリンクを選択してください。

サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

基本オペレーティング・システムの準備

基本 z/OS 環境および z/OS に関連するサブシステムのすべてを、ご使用の WebSphere Process Server for z/OS インストールをサポートできるように準備します。

1. 基本 z/OS 環境をサポートするために十分なスキル・レベルを持つようにします。
2. WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の、製品および追加ソフトウェアのインストール方法を説明するステップを完了します。

『製品および追加のソフトウェアのインストール』を参照してください。

3. WebSphere Application Server for z/OS の実行を計画している z/OS システムを識別します。

このトピックでは、WebSphere Application Server for z/OS について計画およびカスタマイズする前に満たす必要のある、前提条件製品および z/OS サブシステムの前提条件に関する情報を提供します。

WebSphere Application Server for z/OS 製品コードをインストールした後に、基本オペレーティング・システムを準備します。

以下のタスクを実行して、WebSphere Application Server for z/OS を実行するように z/OS ターゲット・システムを準備します。

WebSphere Application Server for z/OS を実行するように基本オペレーティング・システムを準備すると、デフォルトでは WebSphere Process Server for z/OS を実行するように準備することになります。

基本オペレーティング・システムの準備方法の説明については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『基本オペレーティング・システムの準備』を参照してください。

基本オペレーティング・システムを準備するステップを完了すると、WebSphere Process Server for z/OS 製品コードのインストールに移る前に、WebSphere Application Server for z/OS 製品構成を完了する必要があります。

z/OS へのインストールの準備

このタスクを使用して、WebSphere Process Server for z/OS 製品コードのインストールの準備をします。

インストールおよび構成のアクティビティーを開始する前に、z/OS サブシステムを準備して、このセクションのその他のタスクを実行します。

このタスクでは、ユーザーが WebSphere Application Server for z/OS を正常にインストールおよびカスタマイズしたこと、および基本オペレーティング・システムを準備したことを前提とします。

『WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成の計画』を印刷して検討します。

製品のインストールおよび構成の担当者のチームを召集します。そのチームは、WebSphere Process Server for z/OS の計画、インストール、および構成に必要なスキルを有するメンバーで構成してください。詳しくは、17 ページの『必要なスキルの判別』を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS メディアの内容をシステムにアンロードする前、およびインストール・スクリプトと構成スクリプトを実行する前に、このトピックでリストしたタスクを実行します。

適切に準備すると、後のインストールおよび構成プロセスにおける問題を回避するために役立ちます。

1. WebSphere Process Server for z/OS の SMP/E インストールに必要な計画を実行します。70 ページの『システムへの製品コードのロードの計画』を参照してください。
2. WebSphere Process Server for z/OS インストール・メディアの内容をシステムにロードした結果作成された、読み取り専用のインストール HFS (`smpe_root`) の名前を調べておきます。

読み取り専用のインストール HFS は `smpe_root` と呼ばれ、以下のようなデフォルト値を持ちます。 `/usr/lpp/zWPS/V6R0`

この読み取り専用のインストール HFS の `/zos.config/bin` サブディレクトリー内で、インストール・スクリプト (`zSMPIInstall.sh`) を実行する必要があります。

WebSphere Process Server for z/OS の `smpe_root` は、インストール・スクリプト (`zSMPIInstall.sh`) を実行するときに指定する必要がある `-smproot` キーワードの値でもあります。例えば、`-smproot /usr/lpp/zWPS/V6R0` のように指定します。

3. WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS と `app_server_root` ルート・ディレクトリー名の組み合わせを調べておきます。

WebSphere Application Server for z/OS の各アプリケーション・サービス提供環境 (スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードまたは Network

Deployment セル) では、1 つ以上の WebSphere 構成 HFS ディレクトリー内に構成ファイルが格納されます。これらの構成 HFS ディレクトリーは、WebSphere Application Server for z/OS 構成プロセスによって作成され、WebSphere Application Server for z/OS 製品ディレクトリー内のファイルへのシンボリック・リンクを格納します。

WebSphere Process Server for z/OS インストール・スクリプトを実行すると、製品の構成スクリプト (zWPSCConfig.sh および zWESBConfig.sh) が WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS ディレクトリー構造の /bin サブディレクトリーにコピーされます。構成スクリプトの実行は、このディレクトリーから行います。

WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS と app_server_root 名の組み合わせは、インストール・スクリプト (zSMPInstall.sh) を実行するときに指定する必要がある **-runtime** キーワードの値でもあります。この WebSphere Application Server for z/OS の app_server_root は変化するため、**-runtime** キーワードに指定する値も変化します。例えば、スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードの構成ルートのデフォルト値は、 /WebSphere/V6R0M0/AppServer です。Network Deployment セル用の構成ルートのデフォルト値は /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager になります。

WebSphere Application Server for z/OS のファイル・システムについては、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターにある『製品のファイル・システム (Product file system)』を参照してください。

4. インストール・スクリプトおよび構成スクリプトを実行する権限を持っていることを確認してください。
5. インストール・スクリプト (zSMPInstall.sh) と 構成スクリプト (zWPSCConfig.sh および zWESBConfig.sh) の両方について、タスク・キーワードの使用法を理解しておきます。キーワードとキーワード・パラメーターの説明については、30 ページの『インストール・スクリプトについて』および 50 ページの『構成スクリプトについて』を参照してください。
6. データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS コンポーネントおよびフィーチャーのデータベース仕様を理解します。『データベース仕様書』を参照してください。
7. 一部の WebSphere Process Server for z/OS 機能ではデータベースを使用するため、必要なデータベースおよびデータベースのストレージ・グループを作成してあることを確認します。製品の構成スクリプトを実行するには、その前にデータベースおよびデータベースのストレージ・グループを作成しておく必要があります。必要なデータベースおよびデータベースのストレージ・グループを作成する方法については、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。
8. 応答ファイルの値を環境の構成に適用する方法を理解します。応答ファイルの値を環境に合わせて編集することが必要になります。製品の構成コマンドでは、変更した応答ファイルのパス名を指定します。応答ファイルの内容については、『応答ファイルでの作業』を参照してください。

以上の準備を正常に完了したら、WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成のプロセスを開始する準備は完了です。

異機種混合セルを使用したセル内の混合プラットフォームのサポート

綿密に計画することによって、分散オペレーティング・システムと z/OS オペレーティング・システムの両プラットフォームのノードが含まれるデプロイメント・マネージャー・セルを作成できます。

例えば、z/OS ノード、Linux ノード、UNIX^(R) ノード、および Windows ノードが含まれたデプロイメント・マネージャー・セルを作成できます。このような構成は、異機種混合セルと呼ばれます。

異機種混合セルでは、しっかりと計画を立てることが必要です。「Heterogeneous Cells - cells with nodes on mixed operating system platforms」ホワイト・ペーパーに、異機種混合セルを作成するのに必要な計画およびシステムの考慮事項が概説されています。

管理コンソールを使用して新規サーバーを作成する場合は、サーバーの初期構成設定を提供するサーバー・テンプレートを選択します。サーバーを作成する管理対象ノードを選択した後、ユーザーは、そのノードのオペレーティング・システム・プラットフォームに使用できるテンプレートを管理コンソール上で選択できます。

製品バージョン情報

smpe_root 内の *properties/version* ディレクトリーには、ビルド・バージョンおよびビルド日付などの、製品およびそのインストール済みコンポーネントに関する重要なデータが含まれています。

製品情報ファイル

この情報は、*WBI.product* ファイルおよび *[component].component* ファイルに含まれています。

historyInfo コマンドを実行して、インストール済み保守パッケージに関するレポートを作成します。*historyInfo* コマンドは、コンソール上でレポートを作成し、また、*config_root/properties/version/history* ディレクトリー内のトラッキング・ファイルも作成します。

タイム・スタンプの付いた詳細なログが、*configuration_root* の *properties/version/log* ディレクトリー内の各アップデート・プロセスを記録します。

この項では、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.x の製品バージョン情報を格納する XML データ・ファイルについて説明します。デフォルトでは、これらのファイルの文書タイプ宣言 (DTD) は、*smpe_root* (サーバー・ルート・ディレクトリー) の *properties/version/dtd* フォルダーにあります。詳しくは、このトピックのセクション『ディレクトリー・ロケーション (Directory locations)』を参照してください。

バージョン情報を格納する、*properties/version* ディレクトリー内の XML ファイル :

platform.websphere

このファイルが存在するという事は、WebSphere Application Server 製品がインストールされていることを示します。以下にファイルの例を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8">
<!DOCTYPE websphere PUBLIC "websphereId" "websphere.dtd"
<websphere name="IBM WebSphere Application Server" version="6.0"/>
```

properties/version ディレクトリー内の以下の XML ファイルは、インストール済み項目と、製品エディション、バージョン、コンポーネント、およびビルド情報などのインストール・イベントを表します。

WAS.product

このファイルが存在するという事は、特定の WebSphere Application Server 製品がインストールされていることを示します。インストールされた製品のタイプは、<id> タグによって示されます。ファイル内のデータは、バージョン、ビルド日付、およびビルド・レベルを示します。

例えば、<id>ND</id> 製品は、インストールされた製品が WebSphere Application Server Network Deployment であることを示します。以下にファイルの例を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8">
<!DOCTYPE websphere PUBLIC "productId" "product.dtd"
<product name name="IBM WebSphere Application Server - ND">
<id>ND</id>
<version>6.0.0</version>
<build-info date="02/03/05" level="s0461.18"/>
</product>
```

WBI.product

このファイルが存在するという事は、特定の WebSphere Process Server for z/OS 製品がインストールされていることを示します。インストールされた製品のタイプは、<id> タグによって示されます。ファイル内のデータは、バージョン、ビルド日付、およびビルド・レベルを示します。

例えば、<id>WBI</id> 製品は、インストールされた製品が Network Deployment 構成上の WebSphere Process Server for z/OS であることを示します。以下にファイルの例を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8">
<!DOCTYPE websphere PUBLIC "productId" "product.dtd">
<product name name="IBM WebSphere Process Server">
<id>WBI</id>
<version>6.0.0</version>
<build-info date="02/03/05" level="s0461.18"/>
</product>
```

レポート

インストールが完了すると、WebSphere Application Server for z/OS レポートに、インストール済みの WebSphere Process Server for z/OS 製品が反映されます。詳しくは、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『product version information』のトピックを参照してください。

システムへの製品コードのロードの計画

インストール・メディアから z/OS システムへ WebSphere Process Server for z/OS のプログラム・マテリアルをインストールするための準備を行うには、以下の操作を実行します。

1. 『WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成の計画』内の該当する情報を確認してください。
2. WebSphere Process Server for z/OS のプログラム・ディレクトリーのコピーを印刷します。

プログラム・ディレクトリーは、製品のインストール、保守、サービス提供、および使用に必要な、固有のプログラム情報を提供します。

3. インストール中に必要な参照情報として、『インストール: 学習用リソース』を確認します。

WebSphere Process Server for z/OS のインストール・スクリプトを実行する前に、製品コードをインストール・メディアからシステムにロードします。

以下のいずれかの形式で、IBM から WebSphere Process Server for z/OS の製品コードを入手してください。

- **IBM ServerPac または SystemPac。** ロード可能な製品ライブラリーとそれに対応する SMP/E データ・セットから構成されます。ServerPac や SystemPac には、1 つ以上の製品 (必要であれば、z/OS などの基本オペレーティング・システムを含みます) の保守が統合化されたプログラム・ライブラリーが含まれています。プログラム・ライブラリー・データ・セットは、ServerPac または SystemPac のインストールの一部としてディスクにロードされます。インストール後に、SMP/E を使用して保守を実行します。
- **IBM Custom-Build Product Delivery Option (CBPDO)。** SMP/E relfile から構成されます。CBPDO には、1 つ以上の製品の SMP/E relfile と保守が含まれています。SMP/E コマンド (APPLY / ACCEPT) または対応するパネルを使用して、各製品をインストールします。インストール後に、SMP/E を使用して保守を実行します。

SMP/E による WebSphere Process Server for z/OS のインストールを開始する前に、このセクションに示す作業を実行してください。製品コードの配置と命名の計画を立てることにより、将来の製品の保守やマイグレーション・タスクの作業が容易になります。

1. WebSphere Process Server for z/OS をインストールする z/OS システムがハードウェアおよびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。詳しくは、ハードウェアおよびソフトウェアの要件を参照してください。
2. 使用するソフトウェアのデリバリー・オプションを確認します。製品のデリバリー・オプションを確認するには、z/OS および OS/390 のデリバリー・オプションを参照してください。詳しくは、『IBM Custom-Build Product Delivery Option の使用』または『IBM SystemPac または ServerPac の使用』を参照してください。
3. WebSphere Process Server for z/OS 製品のデータ・セットについて確認します。詳しくは、『製品データ・セットについての計画』を参照してください。

4. WebSphere Process Server for z/OS 製品のディレクトリーについて確認し、マウント・ポイントの規則の計画を立てます。詳しくは、『製品の HFS ディレクトリーについての計画』を参照してください。

計画プロセスを終了したら、インストール・メディアからシステムへ WebSphere Process Server for z/OS のプログラム・マテリアルをインストールする準備ができています。『インストール・メディアからの製品コードのロード』を参照してください。

製品の HFS ディレクトリーについての計画

WebSphere Process Server for z/OS の製品コードは、MVS 区分データ・セット (製品データ・セット) および MVS 階層ファイル・システム (HFS) ディレクトリー (製品ディレクトリーおよびそのサブディレクトリー) 内にあります。

ここでは、WebSphere Process Server for z/OS の製品ディレクトリーについて説明します。

製品ディレクトリー

WebSphere Process Server for z/OS 製品のすべての HFS ファイルは、インストール HFS ディレクトリーとそのサブディレクトリー内にあります。製品および資料すべてにおいて、WebSphere Process Server for z/OS の製品ディレクトリーの完全修飾パス名を表す際に WebSphere Process Server for z/OS `smpe_root` が使用されています。

WebSphere Process Server for z/OS `smpe_root` ディレクトリーのデフォルト値は `/usr/lpp/zWPS/V6R0` です。

製品ディレクトリーおよびそのすべてのサブディレクトリーは、同じ階層ファイル・システム (HFS) または zSeries ファイル・システム (ZFS) データ・セット内にあります。このデータ・セットは、z/OS のルートまたはバージョン・データ・セットと同じである場合 (推奨されません) と、WebSphere Process Server for z/OS のみに使用される別のデータ・セットである場合があります。インストール・ジョブおよびプログラム・ディレクトリーでは、このような別のデータ・セットが割り振られることが前提となっています。このデータ・セットは `wps_hlq.SBPZHFS` という名前です。`wps_hlq` は製品データ・セット名の高位修飾子を表します。

製品ディレクトリーと構成ディレクトリー

WebSphere Process Server for z/OS の各アプリケーション・サービス提供環境 (スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードまたは Network Deployment セル) では、1 つ以上の WebSphere 構成ディレクトリー内に構成ファイルが格納されます。これらの構成ディレクトリーには、製品ディレクトリー内のファイルへのシンボリック・リンクが含まれます。

WebSphere Process Server for z/OS および WebSphere Process Server for z/OS のディレクトリー命名規則について詳しくは、『ディレクトリーの規則』を参照してください。

製品データ・セットについての計画

ここでは、WebSphere Process Server for z/OS の製品データ・セットについて説明し、データ・セットの命名規則の推奨事項を記述します。

WebSphere Process Server for z/OS の製品コードは、MVS 区分データ・セット (製品データ・セットが格納されています) および MVS 階層ファイル・システム・ディレクトリー (製品ディレクトリーおよびそのサブディレクトリーが格納されています) 内にあります。

製品データ・セットのデフォルトの高位修飾子は BPZ です。

注: これ以降のセクションでは、WebSphere Process Server for z/OS 製品データ・セットの特定セットに対するデータ・セット名の高位修飾子を、*wps_hlq* で表します。

製品データ・セットの内容

WebSphere Process Server for z/OS の製品データ・セットは、ターゲット・データ・セット (製品のカスタマイズおよび実行中に使用) と配布ライブラリー (必要に応じて、保守の「バックオフ」に使用) に分けられます。

WebSphere Process Server for z/OS のターゲット・ライブラリーには、以下のものがあります。

wps_hlq.SBPZEXEC
CLIST スクリプト

wps_hlq.SBPJCL
インストール・ジョブの JCL

WebSphere Process Server for z/OS の配布ライブラリーには、以下のものがあります。

wps_hlq.ABPZANT
HFS ファイル

wps_hlq.ABPZEBCD
HFS ファイル (EBCDIC)

wps_hlq.ABPZEXEC
カスタマイズ・ダイアログ

wps_hlq.ABPJCL
インストール・ジョブの JCL

各ターゲット・ライブラリーおよび配布ライブラリーの割り振り情報については、WebSphere Process Server for z/OS のプログラム・ディレクトリー (GI10-0781) を参照してください。この情報の更新は、WebSphere Process Server for z/OS の各リリースの Preventive Service Planning (PSP) パッケージに含まれています。

製品データ・セットの命名規則

上記に示したように、製品が正しく機能するためには、特定の WebSphere Process Server for z/OS データ・セットが同じデータ・セット名の高位修飾子を持っている

必要があります。すべての製品データ・セットが同じ高位修飾子を持っていると、製品の保守やマイグレーションが容易になります。

一方、保守が行われている間も WebSphere Process Server for z/OS の稼働を続けるために、製品データ・セットのコピーが 2 つ以上 (稼働中のアプリケーションの実行環境用のコピーとサービスを適用するコピー) が必要です。

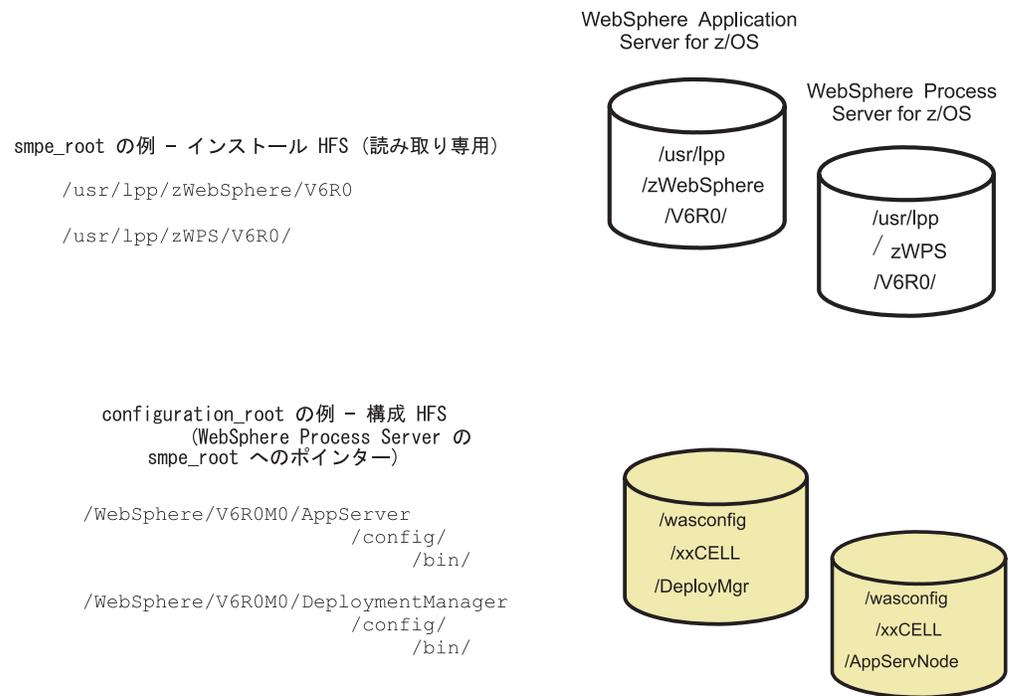
WebSphere Process Server for z/OS の個々のリリースおよび保守レベルに、中間レベルの修飾子を選択することをお勧めします。この中間レベルの修飾子を選択すると、テストと実動の区別を非常に単純に示すことができます。例えば、「BPZ.V6PROD.*」や「BPZ.V6TEST.*」で表します。あるいは、「WPS.W600102.*」や「WPS.W600103.*」などで特定のサービス・レベル情報を組み込むことができます。

製品データ・セット名はさまざまな場所に指定する必要があるため、不当な混乱を避けるために、保守の目的を達成するデータ・セット命名スキームの中で最も単純なものを使用してください。

製品のファイル・システムについて

WebSphere Process Server for z/OS SMP/E のインストールにより生成されたファイル・システム内のファイルは、階層構造に編成されます。

WebSphere Application Server および WebSphere Process Server の HFS 構造



階層ファイル・システム (HFS) 内のすべてのファイルは、1 つのディレクトリーに属します。同様に、各ディレクトリーは、階層内のそれより高いレベルの別のディレクトリーに属します。

インストール HFS (smpe_root) は、上から下へ編成する構造でデータを格納するファイル構成を表します。データへのすべてのアクセスは、階層の全レベルにおいて最上部から始まり、下方へ進みます。

HFS の最上位、つまり開始点が ルート・ディレクトリー です。ルート・ディレクトリーは、スラッシュ (/) で始まるディレクトリーです。マウントされた区画を含むファイル・システムのすべての項目は、ルート・ディレクトリーの下にあります。

各ディレクトリーには、ディレクトリーそのものに関する情報と、そのディレクトリー内のファイルに関する情報 (ファイル名、ファイルのサイズ、ファイルの作成や変更の日付、その他の関連情報など) が格納されます。

HFS ファイル構造のルート・ディレクトリーから下方までの全体が単一のデータ・セットとして IBM メインフレーム上に格納され、z/OS が特定のディレクトリーやファイルに対するアクセス権を管理します。z/OS は、固有の HFS 機能によって階層ファイル进行管理することができます。このため、HFS ファイルを UNIX システム・サービスと z/OS 環境の両方で使用することができます。これにより、UNIX 環境で稼働するように設計されているアプリケーション・プログラムが、常に z/OS の下にあるようにファイルを扱うことができます。

ほとんどの HFS ファイルはデータを格納しますが、一部のファイルは実行可能モジュールである場合があります。また、UNIX シェル・スクリプトで構成されるファイルもあります。実行可能モジュール、つまりプログラムは、z/OS ロード・ライブラリー内にあるコンパイル済みのリンクされたプログラムと同様です。UNIX シェル・スクリプトはプロシージャーと同類です。UNIX シェル・スクリプトは一連の UNIX コマンド (および、オプションのスクリプト・コマンド) から構成され、これらはファイルを起動すると順を追って実行されます。

WebSphere Process Server for z/OS および WebSphere Process Server for z/OS のディレクトリー命名規則について詳しくは、『ディレクトリーの規則』を参照してください。

構成の計画

サーバーは、その機能を提供するため、さまざまなアプリケーション・サービス提供環境で構成することができます。使用する構成手順は、アプリケーション・サービス提供環境によって異なります。

スタンドアロン・アプリケーション・サーバーをセットアップするか、Network Deployment セルをセットアップするかを決定します。詳しくは、『スタンドアロン構成または Network Deployment 構成からの選択』を参照してください。

構成のタイプ

サーバーは、個別のスタンドアロン・サーバー または管理対象サーバー・グループの形でサーバー・ハードウェア上に構成することができます。

- **スタンドアロン・サーバー**構成には、独自の管理コンソールとすべてのサンプル・アプリケーション (スタンドアロン応答ファイルのプロパティ設定により

サンプル・アプリケーション・ギャラリーを作成するように選択した場合) があります。各スタンドアロン・サーバーは、完全に操作可能であり、他のすべてのサーバーから独立して管理されます。

スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・セルは、アプリケーションをデプロイして実行することができる、最も単純な WebSphere Process Server for z/OS の構成です。スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・セルには、以下の要素があります。

- 基本セルおよびノード構成
- ロケーション・サービス・デーモン
- 管理コンソール・アプリケーションを稼働するプロセス・サーバーとして構成されたアプリケーション・サーバー。このサーバー上に追加のアプリケーションをデプロイし実行することができます。

WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成では、Cloudscape または DB2 for z/OS データベースがサポートされます。WebSphere Process Server for z/OS を DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成で使用するを計画している場合は、DB2 for z/OS の使用に関連した追加の構成手順を実行する必要があります。

より複雑、より堅固な WebSphere Process Server for z/OS アプリケーション・サービス提供環境が必要な場合は、Network Deployment セルの構成をお勧めします。

- **Network Deployment** 構成では、セル内のすべての管理対象ノードの構成を管理したり、セル内の選択した管理対象ノードにアプリケーションをデプロイしたりするなどの、集中管理タスクにデプロイメント・マネージャーを使用します。

Network Deployment セルには、以下の要素があります。

- セルの構成。
- 管理コンソール・アプリケーションを実行するデプロイメント・マネージャー。
- セルの部分をホストする各 z/OS ターゲット・システム上の 1 つ以上のアプリケーション・サーバー・ノード (1 つを推奨)。各ノードは、ノード・エージェントといくつかのアプリケーション・サーバーで構成されます。
- 各 z/OS システム上の単一ロケーション・サービス・デーモン。

WebSphere Process Server for z/OS の Network Deployment 構成では、DB2 for z/OS データベースがサポートされます。Network Deployment 構成では、Cloudscape は使用できません。DB2 for z/OS の使用に関連した追加の構成手順を実行する必要があります。

- **管理対象ノード構成**では、Network Deployment セルにプロセス・サーバーを追加するために、セル内に新しい管理対象ノードを作成する必要があります。

構成プロセスのこの部分では、選択された z/OS システム上に、サーバー・ノード構造、ノード・エージェント (ノード管理のため)、およびロケーション・サービス・デーモン (まだ存在していない場合) が作成されます。これは、デプロイメント・マネージャーが構成されている同じ z/OS システムでも、同じ Sysplex 内の別の z/OS システムでも構いません。

管理対象ノードが作成され、Network Deployment セルに統合されたら、管理コンソールまたはスクリプトを使用してアプリケーション・サーバーを追加します。

管理対象サーバー・ノード用に作成された構成ファイル・システムおよびユーザー ID を、ノード内のアプリケーション・サーバーでも同様に使用することができます。

スタンドアロン構成または Network Deployment 構成の選択

Network Deployment 構成にする場合の WebSphere Process Server for z/OS の構成は、WebSphere Process Server for z/OS スタンドアロン・サーバーの構成とはまったく異なります。

WebSphere Process Server for z/OS の構成プロセスでは、まず、WebSphere Application Server for z/OS をインストールして構成する必要があります。WebSphere Application Server for z/OS をインストールして構成すると、アプリケーション・サービス提供環境が構築されるので、この環境に WebSphere Process Server for z/OS 構成を作成します。

WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン・セルと Network Deployment セルの相違点の詳細を以下の表に示します。

表 14. スタンドアロン構成と Network Deployment 構成の相違点

タイプ	構成プロセス	アドレス・スペース	管理上の分離	操作上の分離	複数サーバー バント可能か	クラスター 化可能か
スタンドアロン	ISPF カスタマイズ・ダイアログを介して、スタンドアロン・サーバー・ノードをセットアップします。管理コンソールまたはスクリプトを介して、ノード内に追加サーバーをセットアップします。 スタンドアロン応答ファイルを使用して構成スクリプトを実行することにより、スタンドアロン・アプリケーション・サーバーをプロセス・サーバーとして構成します。	最小: 4 (ロケーション・サービス・デーモン、コントローラー、サーバーバント、制御領域付加属性) 最大: リソースによってのみ制限されます。	各スタンドアロン・サーバー・ノードは、独立した管理可能ドメインです。	サーバーは別々に始動および停止できます。各サーバーには、独立した非共用 JNDI ネーム・スペースがあります。	はい	いいえ

表 14. スタンドアロン構成と Network Deployment 構成の相違点 (続き)

タイプ	構成プロセス	アドレス・スペース	管理上の分離	操作上の分離	複数サーバント可能か	クラスター化可能か
Network deployment	<p>ISPF カスタマイズ・ダイアログを介して、各デプロイメント・マネージャー・ノードをセットアップします。ノードを統合しないでください。</p> <p>デプロイメント・マネージャー応答ファイルを使用して構成スクリプトを実行することにより、プロセス・サーバーとしてデプロイメント・マネージャーを構成します。</p> <p>管理対象ノード応答ファイルを使用して構成スクリプトを実行することにより、管理対象ノード構成を作成します。</p>	<p>最小: 7 (ロケーション・サービス・デーモン、アプリケーション・サーバー・コントローラー、アプリケーション・サーバー・サーバント、アプリケーション・サーバー制御領域付加属性、デプロイメント・マネージャー・コントローラー、デプロイメント・マネージャー・サーバント、ノード・エージェント)</p> <p>最大: リソースによってのみ制限されます。</p>	セル内のすべてのノードは、同一の管理可能ドメイン内にあります。	サーバーは別々に始動および停止できます。JNDI ネーム・スペースは、セル内のすべてのサーバー間で共有します。	はい	はい

スタンドアロン構成の計画上の考慮事項

WebSphere Process Server for z/OS スタンドアロン構成を計画する上で最も重要な考慮事項は、スタンドアロン構成をサポートするデータベースの選択に関することです。

Cloudscape を使用するスタンドアロン・サーバーに WebSphere Process Server for z/OS を構成する場合、データベースをはじめとする構成のすべての部分は UNIX ファイル・システム内部 (つまり、スタンドアロン・サーバーの構成 HFS 内部) にあります。これにより、構成に関してユーザーが決定を下すことなく、すべての作業をシェル・スクリプトで行うことができるので、サーバーの構成が容易になります。

DB2 for z/OS に定義されたデータベースを使用するスタンドアロン・サーバーを構成する場合は、このほかにも計画すべき事項や、データベースを構成するための手動ステップがあります。それでも、WebSphere スタンドアロン構成は単純なので、WebSphere 内部のリソースの構成はとても簡単です。

Network Deployment 構成の計画上の考慮事項

Network Deployment 構成の場合は、DB2 のデータベース構成での選択項目だけでなく、WebSphere 構成での選択項目も多くなります。このため、構成のステップや、考慮すべき事項も多くなります。主な違いは、Network Deployment 構成では、デプロイメント・マネージャーとアプリケーション・サーバーが別々のノードに配置されるということです。どちらのノードも、WebSphere Process Server for z/OS のサポートを追加するために「拡張」する必要がありますが、アプリケーション・サーバー・ノードの拡張は、そのノードがセルに統合される前に実行しなければなりません。

トポロジーの計画についての考慮事項

大規模なソフトウェアのインストール計画の最初のステップの 1 つに、そのソフトウェアが属するトポロジーを決定するという作業があります。WebSphere はミドルウェアであるため、トポロジーが非常に複雑化する可能性があり、深慮が必要な場合があります。

以下に、適切な WebSphere トポロジーの計画を立てる際に考慮する必要のある項目を示します。通常、これらの問題には WebSphere Process Server for z/OS のインストール計画を立てるときに対処します。

- セキュリティー
- コスト
- 管理 (保守容易性)
- パフォーマンス (スループット、応答時間)
- 可用性
- スケーラビリティ
- セッションの状態

これらのトピックの詳細については、WebSphere Application Server for z/OS の資料を参照してください。

スタンドアロン (単一のサーバー) のトポロジーでは、即時起動や開発環境用のフレームワークが提供されます。また、比較的規模の小さい企業では、要件を満たすために必要なものが単一サーバーのトポロジーのみという場合もあります。

Network Deployment (マルチサーバー) のトポロジーでは、1 つのネットワーク環境内で複数の Sysplex 間に分散するアプリケーション・サーバーの管理を円滑に行うことができます。

WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン・セルと Network Deployment セルの違いについて詳しくは、WebSphere Process Server for z/OS 資料インフォメーション・センターの『スタンドアロン構成または Network Deployment 構成からの選択』のトピックを参照してください。

スタンドアロン構成

WebSphere Process Server for z/OS は、WebSphere Application Server for z/OS のスタンドアロン構成で稼働するようにインストールし、構成することができます。この構成を基本 WebSphere Application Server for z/OS 構成といいます。

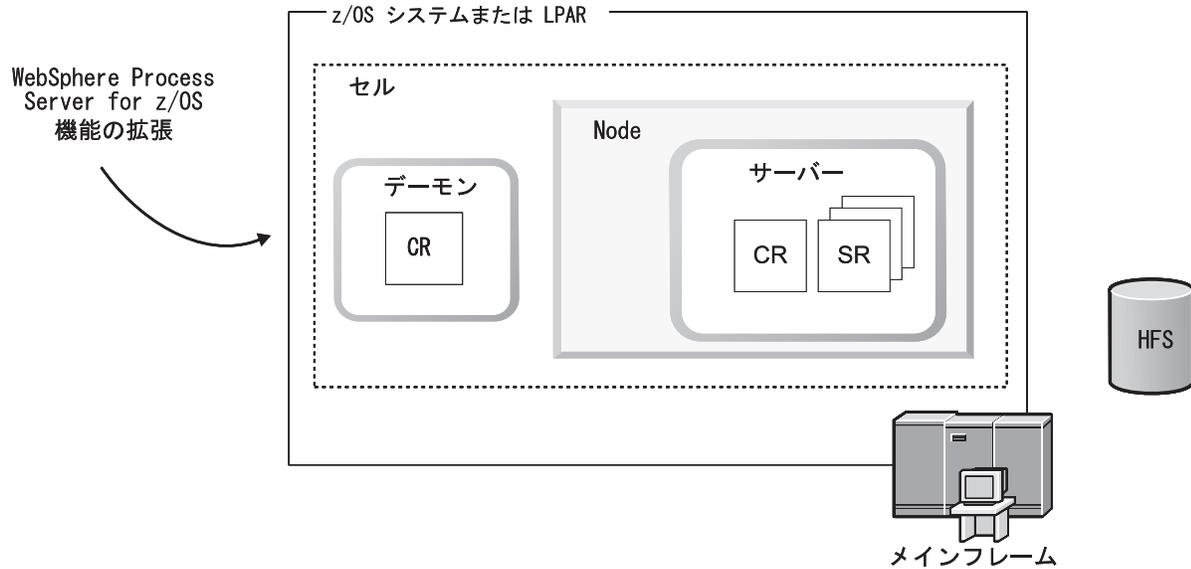
スタンドアロン・アプリケーション・サーバー

スタンドアロン・アプリケーション・サーバーは、WebSphere Application Server for z/OS における最も扱いやすく、最も単純な操作構造です。この構成では、1 つ以上のサーバー・インスタンス、デーモン・サーバー、1 つのノード、および 1 つのセルが単一の z/OS システムまたは LPAR で稼働します。

- セル は、管理可能ドメインの境界を表します。
- ノード とは、管理の目的で単一のシステム上にグループ化されたサーバーの集合です。
- デーモン は、要求を管理して、ワークロード管理との対話を所有します。

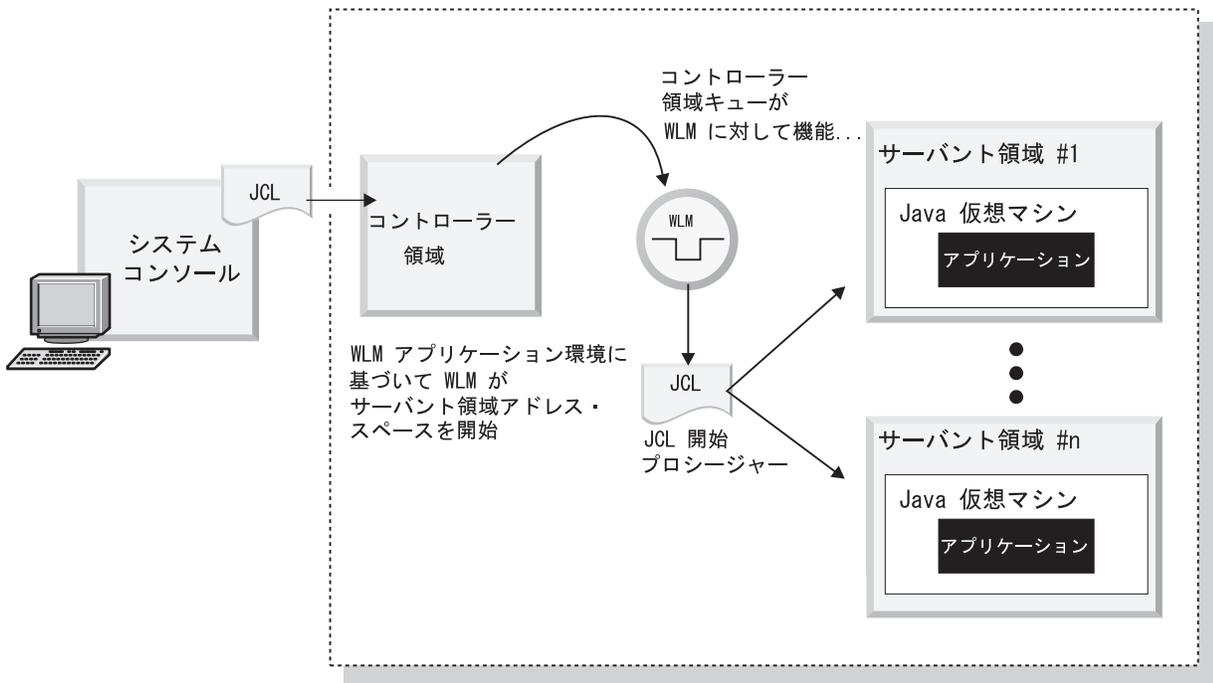
定義および構成ファイルはすべて、スタンドアロン・アプリケーション・サーバー用の HFS ディレクトリー構造の中に保管されます。アプリケーション・サーバーは、構成リポジトリーに対して XML/XMI ファイル・セットを使用します。アプリケーション・サーバーの管理は、管理コンソールと呼ばれる Web ブラウザー・ベースのグラフィカル・ユーザー・インターフェースと、非グラフィカルのコマンド行スクリプト・クライアントの 2 つのツールを基に行われます。

基本 WebSphere Application Server for z/OS



アプリケーション・サーバー

サーバー・インスタンスは、コントローラー領域 とサーバント領域 から構成されます。WebSphere Application Server では、コントローラーおよびサーバントのアドレス・スペース内に Java 仮想マシン (JVM) が存在します。1 つのコントローラー領域と 1 つ以上のサーバント領域をサーバー と呼びます。コントローラーとサーバントの構造設計により、ワークロード・マネージャー (WLM) がコントローラー領域によってキューに入れられたワークロードに基づいて、複数のサーバントを開始することができます。



デーモン・サーバー

デーモン・サーバーは、コントローラー領域を 1 つだけ持つ特殊なサーバーです。アプリケーションの要求の受け入れと開始を行うのが、サポート・デーモンです。この処理を実行するには、デーモンはアクティブなサーバーを認識し、その中のすべてのアプリケーションを認識する必要があります。デーモンは、システムごとのセルにつき 1 つだけ存在します。

ノード

ノードとは、任意のシステムまたは LPAR 上のサーバーの集合です。セル内のノード名は固有でなければなりません。ノードの目的は、構成に複数のシステムまたは LPAR が含まれていて、環境全体が中央の管理コンソールから管理されている場合に、より明確になります。これは、中央の管理者からコマンドを受け取り、このコマンドをノード内のサーバーに対して実行する特殊サーバーであるノード・エージェントと一緒に存在することが前提となっています。スタンドアロン・アプリケーション・サーバーでは、独自のサーバーの 1 つで管理 Web インターフェースが実行されるため、このようなノード・エージェントが存在しません。

スタンドアロン・アプリケーション・サーバーのインストール環境は、1 つのアプリケーション・サーバー・プロセスを Network Deployment セルから独立して実行する単一ノードです。

セル

セルとは、管理可能ドメインまたは境界を構成するノードの集合です。セル名は固有でなければならず、Sysplex を超えて拡張することはできません。この最も単純な例は、スタンドアロンのアプリケーション・ノードです。管理可能ドメインはそれ自体にしか拡張されません。このため、管理可能ドメインは非常に小さくなります。セルは、Sysplex 内の複数のシステムまたは複数の LPAR 間にまたがって存在

し、多数のノードから成るように拡張することができます。これにより、管理可能ドメインが非常に大きくなります。スタンドアロンのアプリケーション・サーバー・ノードでも、複数のサーバーで構成される場合があります。この場合も、管理可能ドメインが拡大します。非常に単純であるか、非常に大きく複雑な構成であるかにかかわらず、管理可能ドメインは常に必要です。

スタンドアロン構成の利点

さまざまな理由により、テスト・システムと実動システムを完全に分離することを常にお勧めします。テストという性質上、会社が依存するアプリケーションに真新しい変更内容を導入することになります。テスト中に変更内容によって大きな障害が発生したときに、分離されていないと、テスト環境のアプリケーション・コードの不具合によって、実動システムが減速してしまう恐れがあります。

WebSphere を 1 つの LPAR に集中化させる理由として、次の 3 つの代表的なものがあります。

- 会社が非常に大規模で、テスト・グループごとに 1 つの LPAR を用意してアプリケーションを実行させる。
- 会社が比較的小規模で、実動とテストを 1 つの zSeries システムで実行する必要がある。1 つの LPAR をテスト用とし、他のすべての LPAR を実動用にする場合など。
- 会社が WebSphere を使用するかどうかを決定しようとしていて、実現可能性のテストのために少しのリソースを犠牲にする。

複数のスタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードを単一の LPAR で稼働するように構成することができます。ただし、それぞれのスタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードは他のノードと分離していて、それぞれが固有のサーバー・ルート (HFS)、セル、ノード、TCP ポート、および管理インターフェースを所有しています。

スタンドアロン・バージョンの管理コンソール・アプリケーションを実行するアプリケーション・サーバーに、サーバントを追加することはできません。

スタンドアロン・セルにアプリケーション・サーバーを追加定義することはできませんが、管理コンソールを使用して追加したアプリケーション・サーバーを制御することはできません。

WebSphere Process Server for z/OS スタンドアロン構成では、以下のデータベースがサポートされます。

- Cloudscape

Cloudscape データベースを使用するスタンドアロン WebSphere Process Server for z/OS 構成は、応答ファイルに最小限のカスタマイズを行うだけで作成できます。この構成の場合は、最小限の労力で、作業用の WebSphere Process Server for z/OS セルを実現できます。

この構成では、アプリケーションをテストするための機能を十分に備えたサーバーが最小限の労力で実現されるので、初めて使用する構成タイプとしてはこの構成をお勧めします。

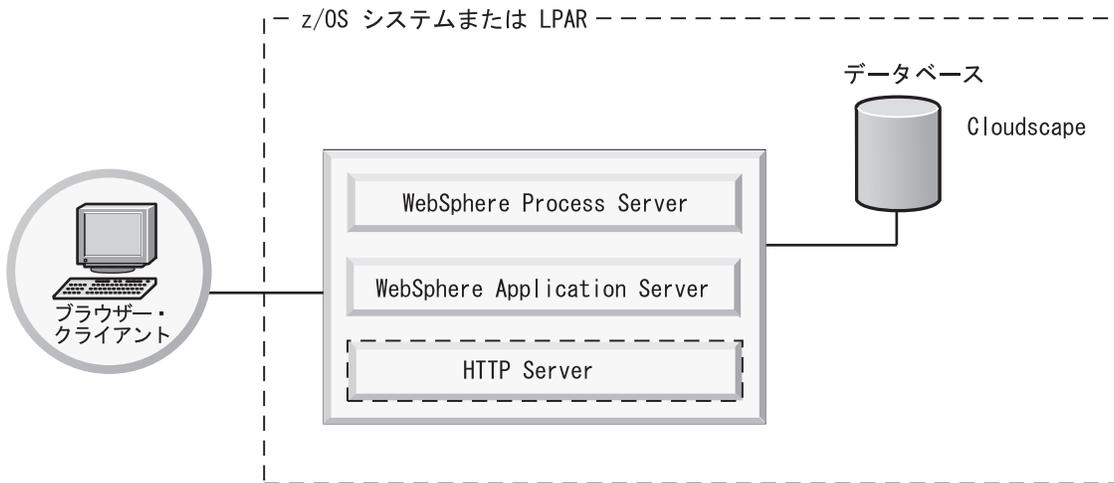
- DB2 for z/OS バージョン 7 およびバージョン 8

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン WebSphere Process Server for z/OS 構成の場合は、データベースをセットアップおよび構成するための追加手順が必要です。

作業の流れ: スタンドアロン構成の作成:

このトピックでは、WebSphere Process Server for z/OS をインストールしてスタンドアロン構成を作成するための作業の流れを示します。

WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成では、Cloudscape または DB2 for z/OS データベースがサポートされます。 Cloudscape を使用したスタンドアロン構成を以下の図に示します。



WebSphere Process Server for z/OS をインストールしてスタンドアロン構成を作成するには、WebSphere Application Server for z/OS のインストールおよびカスタマイズ手順を含む一連のステップを実行する必要があります。

以下の手順のリストに、WebSphere Process Server for z/OS をインストールしてスタンドアロン構成を作成するための作業の流れを順に示します。これらの作業の実行方法について詳しくは、このインフォメーション・センターおよび (該当する場合は) WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターを参照してください。

このトピックで説明する作業の流れでは、ユーザーが SMP/E を使用して既に WebSphere Process Server for z/OS と WebSphere Application Server for z/OS をシステムにロード済みであることを前提としています。

注: WebSphere Application Server for z/OS および WebSphere Process Server のプログラム・ディレクトリーを使用すると、ガイドに従ってモジュールをメディアから z/OS システムにアンロードする SMP/E 処理を実行できます。 SMP/E インストールが完了すると、インストール HFS (smpe_root) になります。

1. インストールを準備および計画します。

WebSphere Process Server for z/OS と WebSphere Application Server for z/OS の両方の必要な資料にアクセスできるようにしてください。

WebSphere Process Server を実行するように z/OS ターゲット・システムを準備します。

2. 使用するデータベース (Cloudscape または DB2 for z/OS) を決定します。

ヒント: 初めて使用するユーザーは、まずは Cloudscape を使用したスタンドアロン構成をインストールおよび作成してみて、その後、DB2 など、使用可能な他の複雑なトポロジーを試してみてください。

DB2 for z/OS を使用するスタンドアロン構成を作成する場合は、以下の DB2 関連作業を行う必要があります。

- DB2 内で作成するすべてのデータベース、ストレージ・グループ、テーブル、索引、およびビューに適用する命名規則を決定します。

サイト独自の標準に基づいて、命名規則が事前に決められている場合もあります。

- DB2 データ定義言語 (DDL) ステートメントを実行するのに、SPUFI のような z/OS ツールを使用するか、シェル・スクリプトや Ant スクリプトなどの UNIX ツールを使用するかを決定します。
- DB2 内の WebSphere Process Server for z/OS オブジェクトに適用するセキュリティの扱い方を決定します。

3. スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・セルを作成します。

ISPF カスタマイズ・ダイアログを使用してスタンドアロン・アプリケーション・サーバー・セルを作成します (WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターを参照してください)。

ISPF カスタマイズ・ダイアログが完了し、生成されたジョブを実行した結果として、デフォルト・プロファイルがスタンドアロン構成に関連付けられます。

ISPF カスタマイズで指定した値は、WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトが使用する応答ファイルに複製する必要があります。これらの値には、以下のものがあります。

- セル名
- ノード名
- サーバー名
- テンプレート・パス
- プロファイル・パス

4. WebSphere Process Server for z/OS smpe_root に対してインストール・スクリプトを実行し、シンボリック・リンクおよび製品定義を作成します。

このステップを行うには、コマンド行から WebSphere Process Server for z/OS インストール・スクリプト (zSMPInstall.sh) を実行します。

インストール・コマンドには、WebSphere Process Server for z/OS smpe_root のほか、WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS / app_server_root のキーワード・パラメーターが含まれています。

インストール・スクリプトが完了すると、WebSphere Process Server for z/OS フィーチャーが WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS に展開されます。例えば、/WebSphere/V6R0/ AppServer のようになります。

5. データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS コンポーネントのデータベースおよびストレージ・グループを作成します。

WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行する前に、WebSphere Process Server for z/OS が使用するデータベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。

注: このステップは、使用するデータベースが DB2 for z/OS の場合にのみ適用されます。

データ定義言語 (DDL) ステートメントを使用して、データベースを DB2 z/OS に定義します。

6. スタンドアロン応答ファイルのプロパティを編集します。

WebSphere Process Server for z/OS は、サポートされる各構成に対するサンプル応答ファイルを含みます。

スタンドアロン構成のサンプル応答ファイルには、以下の 2 つがあります。

- standAloneProfile.rsp

standAloneProfile.rsp には、Cloudscape データベースの構成パラメーターが含まれています。

この応答ファイルを使用すると、アプリケーションをテストするための機能を十分に備えた WebSphere Process Server for z/OS サーバーが最小限の労力で実現されるので、初めて構成する場合はこの応答ファイルを使用してください。

注: standAloneProfile.rsp を使用して作成されたスタンドアロン構成は、実稼働環境用ではありません。

- standAloneProfileDB2.rsp

standAloneProfileDB2.rsp には、DB2 for z/OS データベースの構成パラメーターが含まれています。

この応答ファイルを使用するには、DB2 for z/OS データベースをセットアップするための追加の構成要件を満たす必要があります。

この応答ファイルは、DB2 for z/OS バージョン 7 および DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートします。デフォルト・プロパティは DB2 for z/OS バージョン 8 を想定しています。

DB2 for z/OS バージョン 7 をインストールしている場合は、DB2 for z/OS バージョン 7 をサポートするように、この応答ファイルのデフォルト値を変更する必要があります。この応答ファイルでは、特に DB2 for z/OS バージョン 7 に適用されるプロパティがコメント化されています。

この応答ファイルのプロパティ値は、ご使用の環境に合わせて編集する必要があります。

この応答ファイルは、構成コマンドのキーワード・パラメーターとして使用します。そこに含まれる WebSphere Process Server for z/OS プロファイル情報は、カスタマイズ・ダイアログに入力し、結果として得られたジョブを実行してスタンドアロン・アプリケーション・サーバー・セルを作成したときに作成されたデフォルト・プロファイルの拡張に使用されます。

7. 構成スクリプトを実行することによって、WebSphere Process Server for z/OS を構成します。

構成スクリプトを実行した結果として、構成アクションが、スタンドアロン応答ファイルの WebSphere Process Server for z/OS 構成データでスタンドアロン・デフォルト・プロファイルを拡張します。さらに、データベース・テーブルの DDL および SQL が生成されます。

注: standAloneProfileDB2.rsp 応答ファイルでは、生成された DDL および SQL を実行するアクションを起動するようにプロパティを設定すると、データベース定義を自動的に作成できます。データベース管理者がデータベースの自動更新を許可しない可能性もあるので、データベース定義を作成する DDL および SQL スクリプトの実行を遅らせることもできます。その場合は、構成プロセス終了後にこれらのスクリプトを手動で実行する必要があります。

8. WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトによって生成された DDL および SQL を実行することによって、データベース定義を手動で作成します。

(DB2 for z/OS のみ) データベース定義を自動的に作成するように応答ファイルを構成しなかった場合は、生成された DDL および SQL を手動で実行してデータベース定義を作成する必要があります。

9. パフォーマンスの調整を行います。プラットフォームの最適なパフォーマンスを得るために、『アプリケーション・サービス提供環境のチューニング』を参照してください。

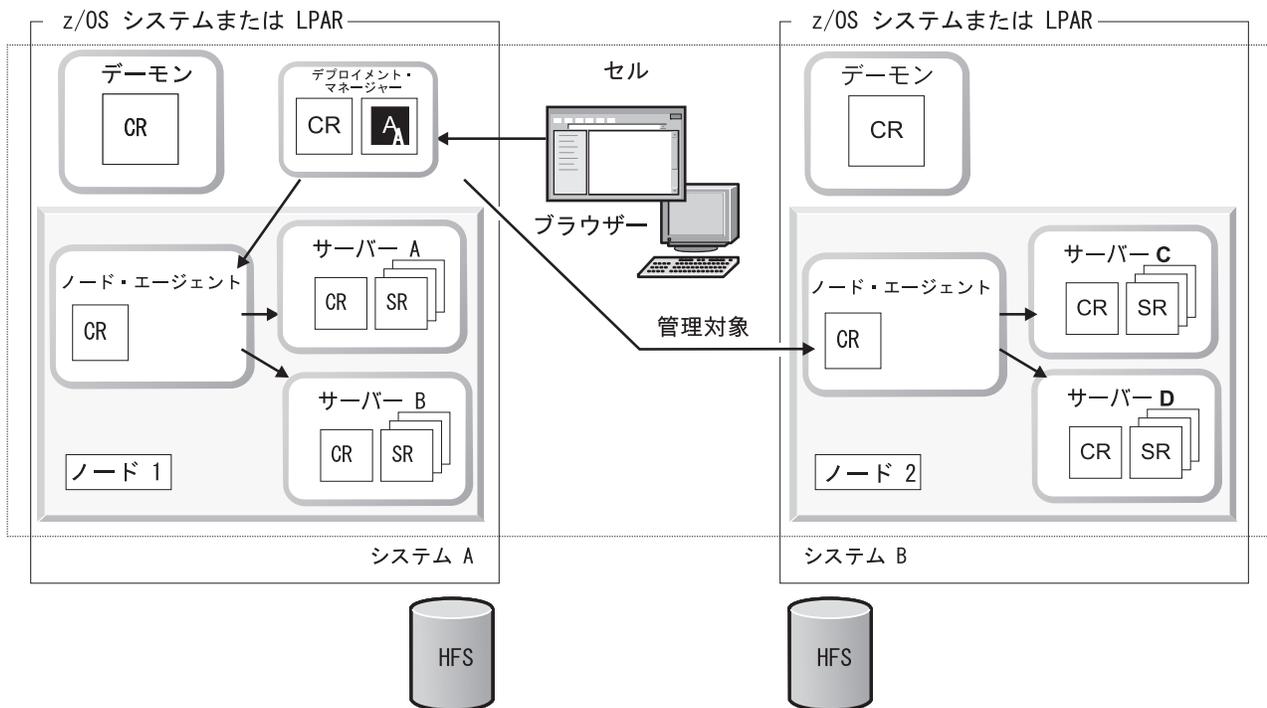
Network Deployment 構成

WebSphere Process Server for z/OS は、WebSphere Application Server *Network Deployment* 構成で稼働するようにインストールし、構成することができます。この構成も、WebSphere Application Server for z/OS デプロイメント・マネージャー 構成と呼ばれます。

Network Deployment 構成

Network Deployment 構成では、1 つのネットワーク環境内の複数の Sysplex 間に分散するアプリケーション・サーバーの管理を円滑に行うことができます。この機能により、アプリケーションやサーバーを共有することができます。

- デプロイメント・マネージャー とは、ネットワーク内で管理サービスを提供する特殊なアプリケーション・サーバーです。
- ノード・エージェント は、デプロイメント・マネージャーがノード内のアプリケーション・サーバーを管理するために通信を行う単一の特殊なコントローラー領域のことです。



Sysplex

Sysplex とは、カスタマーのワークロードを処理するために、特定のマルチシステム・ハードウェア・コンポーネントやソフトウェア・サービスを介して、相互に通信し合い協働する z/OS システムの集合です。この例では、単一のセルに複数のノードが存在し、それらが 1 つの *Sysplex* 内でシステム間にまたがっていることに注意してください。このセルは、デプロイメント・マネージャーの管理下にあります。セルが複数の z/OS システムにまたがっている場合でも、1 つのセルにつき、1 つのデプロイメント・マネージャーのみが許可されます。

デプロイメント・マネージャー

デプロイメント・マネージャー・ノードは、管理制御の中心点です。管理アプリケーション (図の A を参照) は、デプロイメント・マネージャー内で稼働します。デプロイメント・マネージャーは、サーバーと直接対話せず、ノード・エージェントと通信し、ノード・エージェントが代わりにノード内のサーバーを制御します。セルが *Sysplex* 内のどれほど多数のシステム間にわたっている場合でも、1 つのセルに存在するデプロイメント・マネージャーは 1 つだけです。

`addNode` シェル・スクリプトを使用するか、管理コンソールを介して、基本アプリケーション・ノードを 1 つのデプロイメント・マネージャー・セルに統合 (結合) することができます。

ノード・エージェント

ノード・エージェント は、ノード・レベルでの管理を担当します。デプロイメント・マネージャーがアプリケーション・サーバーを管理するためには、管理される

アプリケーション・サーバーをノードにグループ化する必要があります。ノードは、システムまたは LPAR 上に存在します。ノードごとに 1 つのノード・エージェントがあります。

ノード・エージェントは、特殊なサーバーでもあるため、サーバント領域がありません。ノード・エージェントは、デプロイメント・マネージャーに対して、すべての構成変更をスケジュールされた間隔で通信します。随時変更通知を高速化するために、デプロイメント・マネージャーに変更を強制的に送ることもできます。

Network Deployment 構成の利点

Network Deployment 構成では、アプリケーションおよびサーバーが真に共有になりました。この構成では、管理コンソールにログオンしたユーザーの誰もがサーバーとアプリケーションを起動し停止することができます。スタンドアロン構成では、個々のサーバー内の管理アプリケーションからしか起動と停止が許可されません。個々のサーバーから管理を除外することで、管理機能を拡張することができます。

複数のスタンドアロン・サーバーを使用する代わりにセル内の同数の管理対象ノードを使用する主な利点は、デプロイメント・マネージャーがセルに提供する集中管理機能にあります。

サーバーのセット全体でサービス要求などのワークロードのバランスをとりたい場合は、サーバー・クラスターを作成し、次にサーバーをそのクラスターのメンバーとして追加することができます。また、バックアップ・クラスターを作成して、割り当て先のサーバー・クラスターに対してフェイルオーバー・サポートを提供することもできます。

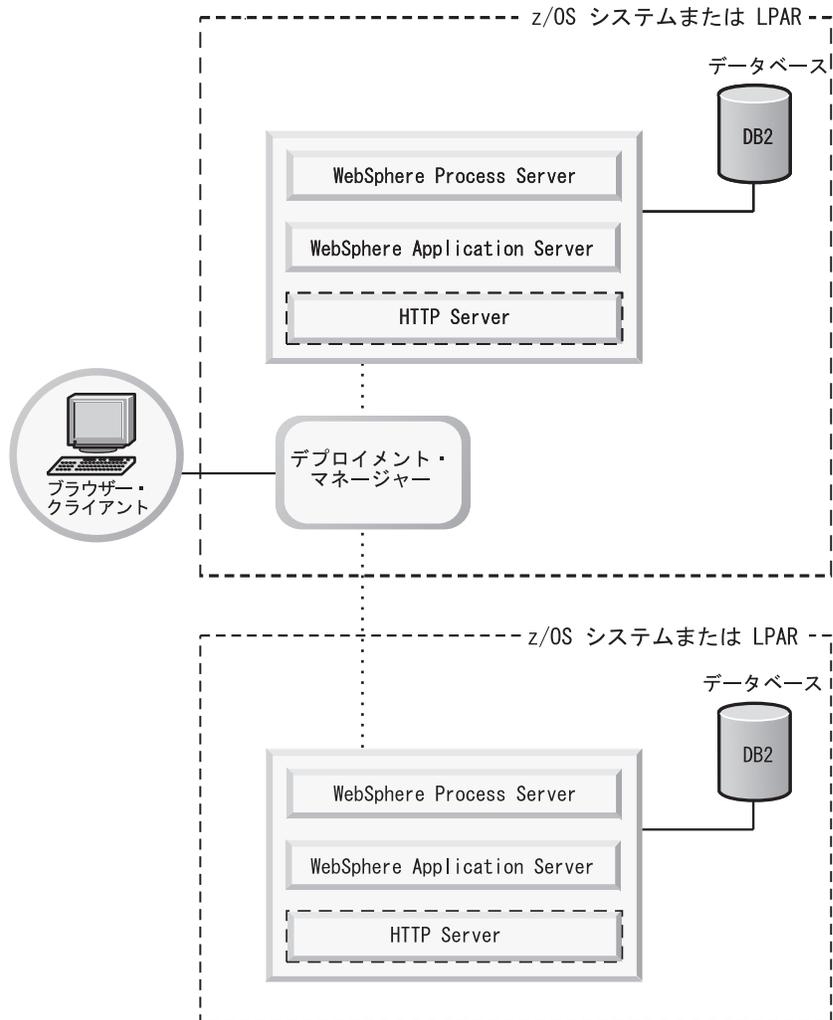
構成プロセスのこの部分では、デプロイメント・マネージャーが稼働する z/OS システムの初期セル構成、デプロイメント・マネージャー、およびロケーション・サービス・デーモンが作成されます。Network Deployment セルが作成された後に、管理対象ノードを新規に作成し統合するか、スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードを Network Deployment セルに統合することにより、アプリケーション・サーバー・ノードを追加します。

WebSphere Process Server for z/OS の Network Deployment 構成では、DB2 for z/OS データベースのみがサポートされます。

Network Deployment (ND) セルを構成する場合、WebSphere Application Server for z/OS プロファイル、リソース、コンテナ、アプリケーション、およびその他のインフラストラクチャーに関してはより複雑になりますが、データベース・セットアップ要件に関しては、DB2 を使用するスタンドアロン・サーバーと同様です。

作業の流れ: Network Deployment 構成の作成:

このトピックでは、WebSphere Process Server for z/OS をインストールして Network Deployment 構成を作成するための作業の流れを示します。



WebSphere Process Server for z/OS をインストールして Network Deployment 構成を作成するには、WebSphere Application Server for z/OS のインストールおよびカスタマイズ手順を含む一連のステップを実行する必要があります。

以下の手順のリストに、WebSphere Process Server for z/OS をインストールして Network Deployment 構成を作成するための作業の流れを順に示します。これらの作業の実行方法について詳しくは、このインフォメーション・センターおよび (該当する場合は) WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターを参照してください。

このトピックで説明する作業の流れでは、ユーザーが SMP/E を使用して既に WebSphere Process Server for z/OS と WebSphere Application Server for z/OS をシステムにロード済みであることを前提としています。

注: WebSphere Application Server for z/OS および WebSphere Process Server のプログラム・ディレクトリーを使用すると、ガイドに従ってモジュールをメディアから z/OS システムにアンロードする SMP/E 処理を実行できます。SMP/E インストールが完了すると、インストール HFS になります。

Network Deployment セルの作成

1. インストールと構成を準備し、計画します。

WebSphere Process Server for z/OS と WebSphere Application Server for z/OS の両方の必要な資料にアクセスできるようにしてください。

WebSphere Process Server を実行するように z/OS ターゲット・システムを準備します。

2. WebSphere Application Server for z/OS および WebSphere Process Server for z/OS の SMP/E インストールを実行して、それぞれの製品の smpe_root ディレクトリを作成します。
3. Network Deployment セルを作成します。

ISPF カスタマイズ・ダイアログを使用して Network Deployment セルを作成します (WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターを参照してください)。

ISPF カスタマイズで指定したいいくつかの値は、WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトが使用するデプロイメント・マネージャー応答ファイルに複製する必要があります。これらの値には、以下のものがあります。

- セル名
- ノード名
- サーバー名
- テンプレート・パス
- プロファイル・パス

ISPF カスタマイズ・ダイアログが完了し、生成されたジョブを実行した結果として、デフォルト・プロファイルが Network Deployment 構成に関連付けられます。

4. WebSphere Process Server for z/OS smpe_root に対して WebSphere Process Server for z/OS インストール・スクリプトを実行し、シンボリック・リンクおよび製品定義を作成します。

このステップを行うには、コマンド行から WebSphere Process Server for z/OS インストール・スクリプト (zSMPInstall.sh) を実行します。

インストール・コマンドには、WebSphere Process Server for z/OS smpe_root のほか、WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS / app_server_root のキーワード・パラメーターが含まれています。このコマンドが完了すると、WebSphere Process Server for z/OS フィーチャーが WebSphere Process Server for z/OS 構成 HFS ディレクトリに展開されます。例えば、/WebSphere/V6R0/DeploymentManager のようになります。

5. DB2 for z/OS の前提条件アクションを実行します。

Network Deployment 構成では、DB2 for z/OS データベースのみがサポートされます。

6. データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS コンポーネントのデータベースおよびストレージ・グループを作成します。

WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行する前に、WebSphere Process Server for z/OS が使用するデータベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。

7. デプロイメント・マネージャー・サーバーを停止します (必要な場合)。
8. デプロイメント・マネージャー応答ファイル (DmgrDB2.rsp) のプロパティを編集します。

WebSphere Process Server for z/OS には、Network Deployment 構成用のサンプル応答ファイルがあります。この応答ファイルのプロパティ値は、ご使用の環境に合わせて編集する必要があります。

この応答ファイルは、構成コマンドのキーワード・パラメーターとして使用します。そこに含まれる WebSphere Process Server for z/OS プロファイル情報は、カスタマイズ・ダイアログに入力し、結果として得られたジョブを実行して Network Deployment セルを作成したときに作成されたデフォルト・プロファイルの拡張に使用されます。

9. DB2JccConfiguration.properties ファイルを作成します。
10. ディレクトリーをデプロイメント・マネージャーの bin ディレクトリーに変更します。
11. まだ管理者のユーザー ID に切り替えていない場合は、管理者のユーザー ID に切り替えます。
12. WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行します。

構成スクリプトを実行した結果として、構成アクションが、デプロイメント・マネージャー応答ファイルの WebSphere Process Server for z/OS 構成データで Network Deployment デフォルト・プロファイルを拡張します。さらに、データベース・テーブルの DDL および SQL が生成されます。

注: 生成された DDL および SQL を実行するアクションを起動するように応答ファイルを構成すると、データベース定義を自動的に作成できます。これは、WebSphere Process Server for z/OS データベースの場合にのみ可能です。

13. WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトによって生成された DDL および SQL を実行することによって、データベース定義を手動で作成します。

データベース定義を自動的に作成するように応答ファイルを構成しなかった場合は、生成された DDL および SQL を手動で実行してデータベース定義を作成する必要があります。

14. パフォーマンスの調整を行います。プラットフォームの最適なパフォーマンスを得るために、『アプリケーション・サービス提供環境のチューニング』を参照してください。

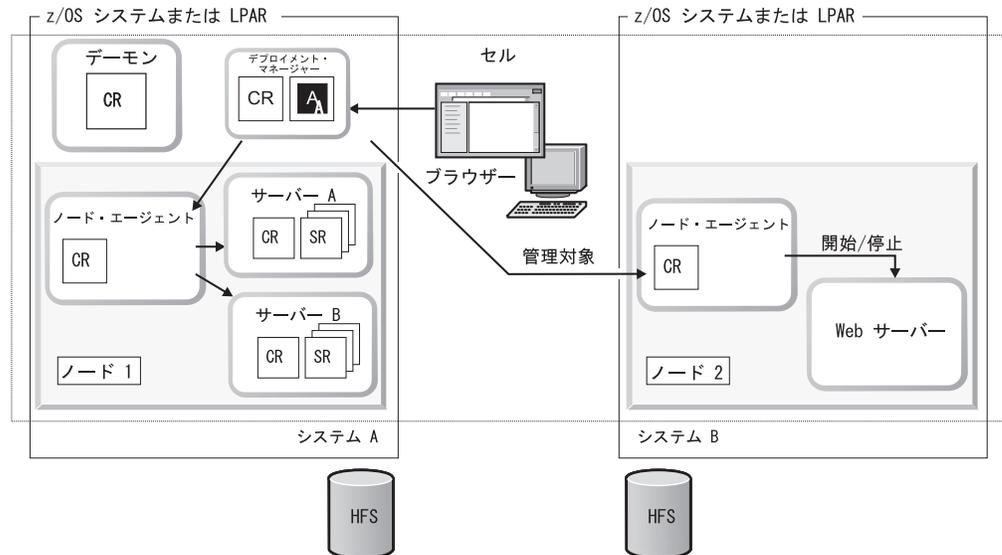
管理対象ノードの構成

WebSphere Process Server for z/OS は、WebSphere Application Server for z/OS の管理対象ノード構成で稼働するようにインストールし、構成することができます。

管理対象ノード

管理対象ノードとは、デプロイメント・マネージャーによって管理される Web サーバーのことです。管理対象ノード構成では、Web サーバーの起動と停止の機能、およびプラグイン構成ファイルを Web サーバーに自動的にプッシュする機能が提供されます。Web サーバーの管理対象ノードでは、Web サーバー・システム上にアプリケーション・サーバー・ノードを作成する必要があります。Web サーバーを、アプリケーション・サーバー・ノードをインストールすることができるファイアウォールの背後にインストールするときに、アプリケーション・サーバー・ノードがよく使用されます。

空の管理対象ノードを作成して、それを既存の Network Deployment セルに追加することができます。管理対象ノードでは、ノード・エージェントは構成できますが、アプリケーション・サーバーは含まれません。アプリケーション・サーバーは、既存の Network Deployment セルに統合できるため、管理コンソールを使用してノードに追加することができます。

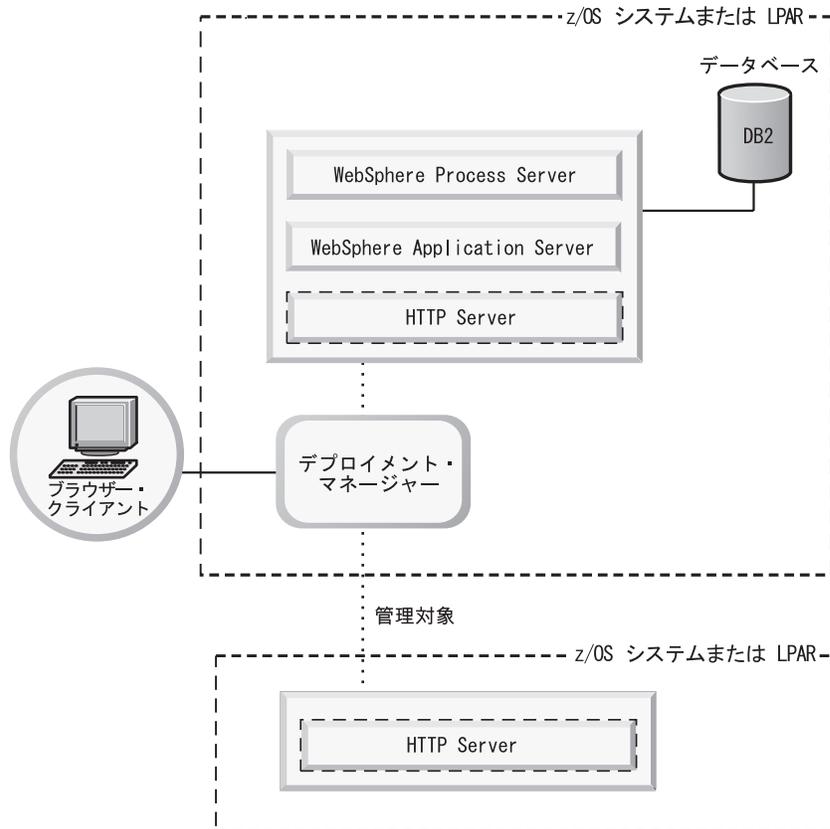


非管理対象ノード

Web サーバーの非管理対象ノードとは、デプロイメント・マネージャーによって管理されない構成内の Web サーバーのことです。このノードは、アプリケーション・サーバー・ノードをインストールすることができないファイアウォールの外部に Web サーバーをインストールするときによく使用されます。

作業の流れ: 管理対象ノード構成の作成:

このトピックでは、WebSphere Process Server for z/OS をインストールして管理対象ノード構成を作成するための作業の流れを示します。



WebSphere Process Server for z/OS をインストールして管理対象ノード構成を作成するには、WebSphere Application Server for z/OS のインストールおよびカスタマイズ手順を含む一連のステップを実行する必要があります。

以下の手順のリストに、WebSphere Process Server for z/OS をインストールして管理対象ノード構成を作成するための作業の流れを順に示します。これらの作業の実行方法について詳しくは、このインフォメーション・センターおよび (該当する場合は) WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターを参照してください。

このトピックで説明する作業の流れでは、ユーザーが SMP/E を使用して既に WebSphere Process Server for z/OS と WebSphere Application Server for z/OS をシステムにロード済みであること、および WebSphere Process Server for z/OS デプロイメント・マネージャーが構成済みであることを前提としています。

注: WebSphere Application Server for z/OS および WebSphere Process Server のプログラム・ディレクトリーを使用すると、ガイドに従ってモジュールをメディアから z/OS システムにアンロードする SMP/E 処理を実行できます。SMP/E インストールが完了すると、インストール HFS になります。

1. インストールを準備および計画します。

WebSphere Process Server for z/OS と WebSphere Application Server for z/OS の両方の必要な資料にアクセスできるようにしてください。

WebSphere Process Server を実行するように z/OS ターゲット・システムを準備します (65 ページの『基本オペレーティング・システムの準備』を参照してください)。

2. 空の管理対象ノードを作成します。

ISPF カスタマイズ・ダイアログを使用して空の管理対象ノードを作成します (WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターを参照してください)。

注: この時点では、ジョブ **BBOWMNAN** を実行してデプロイメント・マネージャーにノードを統合しないでください。ノードを既存の Network Deployment セルに追加するプロセスは、この後の『管理対象ノードをデプロイメント・マネージャーに統合します』というステップで実行します。

ISPF カスタマイズで指定したいいくつかの値は、WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトが使用する管理対象ノード応答ファイルに複製する必要があります。これらの値には、以下のものがあります。

- セル名
- ノード名
- テンプレート・パス
- プロファイル・パス

3. WebSphere Process Server for z/OS インストール HFS に対してインストール・スクリプトを実行し、シンボリック・リンクおよび製品定義を作成します。

このステップを行うには、コマンド行から WebSphere Process Server for z/OS インストール・スクリプト (zSMPInstall.sh) を実行します。

インストール・コマンドには、WebSphere Process Server for z/OS `smpe_root` のほか、WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS / `app_server_root` のキーワード・パラメーターが含まれています。このコマンドが完了すると、WebSphere Process Server for z/OS フィーチャーが構成 HFS ディレクトリーに展開されます。例えば、`/WebSphere/V6R0/AppServer` のようになります。

4. 管理対象ノードの応答ファイル (ManagedDB2.rsp) にあるプロパティを編集します。

WebSphere Process Server for z/OS には、管理対象ノード構成用のサンプル応答ファイルがあります。この応答ファイルのプロパティ値は、ご使用の環境に合わせて編集する必要があります。

この応答ファイルは、構成コマンドのキーワード・パラメーターとして使用します。そこに含まれる WebSphere Process Server for z/OS プロファイル情報は、カスタマイズ・ダイアログに入力し、結果として得られたジョブを実行して WebSphere Application Server for z/OS 管理対象ノード構成を作成したときに作成されたデフォルト・プロファイルの拡張に使用されます。

5. **DB2JccConfiguration.properties** ファイルをまだ作成していない場合は、このファイルを作成します。
6. ディレクトリーをデプロイメント・マネージャーの `bin` ディレクトリーに変更します。

7. まだ管理者のユーザー ID に切り替えていない場合は、管理者のユーザー ID に切り替えます。
8. WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行します。

構成スクリプトを実行した結果として、構成アクションが、デプロイメント・マネージャー応答ファイルの WebSphere Process Server for z/OS 構成データで管理対象ノードのデフォルト・プロファイルを拡張します。さらに、データベース・テーブルの DDL および SQL が生成されます。

注: 生成された DDL および SQL を実行するアクションを起動するように応答ファイルを構成すると、データベース定義を自動的に作成できます。データベース管理者がデータベースの自動更新を許可しない可能性もあるので、データベース定義を作成する DDL および SQL スクリプトの実行を遅らせることもできます。その場合は、構成プロセス終了後にこれらのスクリプトを手動で実行する必要があります。

9. 管理対象ノードをデプロイメント・マネージャーに統合します。

空の管理対象ノードを作成するときジョブ BBOWMNAN を実行しなかった場合は、そのジョブを実行します。

10. 管理対象ノード構成を管理します (セクション『WebSphere Process Server for z/OS の管理 (Administering WebSphere Process Server for z/OS)』のトピック『クラスター化環境の構築 (Creating a clustered environment)』を参照してください)。
11. パフォーマンスの調整を行います。プラットフォームの最適なパフォーマンスを得るために、『アプリケーション・サービス提供環境のチューニング』を参照してください。

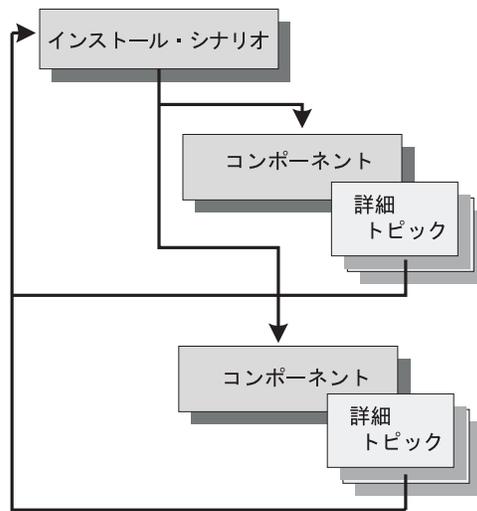
インストールおよび構成のシナリオ

WebSphere Process Server には、ユーザーが特定のビジネスのニーズに合わせてアセンブルする多数の製品やコンポーネントが含まれています。このセクションに示すトピックでは、さまざまなシナリオでの WebSphere Process Server の計画、インストール、構成、および検証について説明します。以下に示す情報は、インストールおよび構成を規定するものではありませんが、この情報を使用すれば、ユーザーに適した環境を構築できます。

始める前に

WebSphere Process Server 環境の計画を立てます。計画については個々のコンポーネントに固有の考慮事項がありますが、インストールを開始する前に環境の計画を立てることをお勧めします。

シナリオの使用法



1. インストール・シナリオを選択します。シナリオの中で、コンポーネントごとのリンクをたどります。
2. コンポーネント内で、リンクを順番にたどり、そのコンポーネントの計画、インストール、構成、および検証の方法を示した詳細なトピックにアクセスします。各ステップに、さらに詳細な説明へのリンクがあります。
3. 1 つのコンポーネントが終了したら、そのシナリオに戻って次のコンポーネントに進みます。

インストールのシナリオ

以下のシナリオでは、WebSphere Process Server とのそのコンポーネントのインストールおよび構成の推奨順序を示しています。

- インストールの実行およびスタンドアロン構成の作成
- インストールの実行および Network Deployment 構成の作成
- インストールの実行および管理対象ノード構成の作成
- アンインストールの実行

スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・セルの計画:

スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・セルは、WebSphere Process Server for z/OS アプリケーションをデプロイして実行することができる、最も単純な WebSphere Process Server for z/OS の構成です。

スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・セルには、以下の要素があります。

- 基本セルおよびノード構成
- ロケーション・サービス・デーモン
- 管理コンソール・アプリケーションを実行するアプリケーション・サーバー。このサーバー上に追加のアプリケーションをデプロイし実行することができます。

スタンドアロン・バージョンの管理コンソール・アプリケーションを実行するアプリケーション・サーバーに、サーバントを追加することはできません。スタンドア

ロン・セルにアプリケーション・サーバーを追加定義することはできますが、管理コンソールを使用して追加したアプリケーション・サーバーを制御することはできません。

WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン・アプリケーション・サーバー構成では、Cloudscape または DB2 for z/OS データベースがサポートされます。

Cloudscape データベースを使用するスタンドアロン WebSphere Process Server for z/OS 構成は、応答ファイルに最小限のカスタマイズを行うだけで作成できます。この構成の場合は、最小限の労力で、作業用の WebSphere Process Server for z/OS セルを実現できます。

注: Cloudscape データベースを使用するスタンドアロン WebSphere Process Server for z/OS 構成は、実稼働環境には適していません。

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン WebSphere Process Server for z/OS 構成の場合は、DB2 for z/OS をセットアップするための前提条件作業や、応答ファイルの追加調整が必要です。

より複雑または堅固な WebSphere Process Server for z/OS アプリケーション・サービス提供環境が必要な場合は、Network Deployment セルの構成をお勧めします。

Network Deployment セルの計画:

Network Deployment セルは、アプリケーションをデプロイし実行することができる、全機能を持った WebSphere Process Server for z/OS の構成です。

Network Deployment セルには、以下の要素があります。

- セルの構成。
- 管理コンソール・アプリケーションを実行するデプロイメント・マネージャー。
- セルの部分をホストする各 z/OS ターゲット・システム上の 1 つ以上のアプリケーション・サーバー・ノード (1 つを推奨)。各ノードは、ノード・エージェントといくつかのアプリケーション・サーバーで構成されます。
- 各 z/OS システム上の単一ロケーション・サービス・デーモン。

構成プロセスのこの部分では、デプロイメント・マネージャーが稼働する z/OS システムの初期セル構成、デプロイメント・マネージャー、およびロケーション・サービス・デーモンが作成されます。Network Deployment セルが作成された後に、管理対象ノードを新規に作成し統合するか、スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードを Network Deployment セルに統合することにより、アプリケーション・サーバー・ノードを追加します。

デプロイメント・マネージャー・ノードを構成するときは、以下の点に注意してください。

- このオプション用のターゲット・データ・セットを割り振る場合は、スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードで使用したものと同一ターゲット・データ・セットを使用することができますが、これは推奨されません。各構成のジョブ名は相互に非常に類似しています。同じターゲット・データ・セットを使

用した場合、2つのジョブ・セットが区別し難くなる可能性があります。このため、ターゲット・データ・セットを新規作成して、2つのジョブ・セットを互いに区別しておくことをお勧めします。

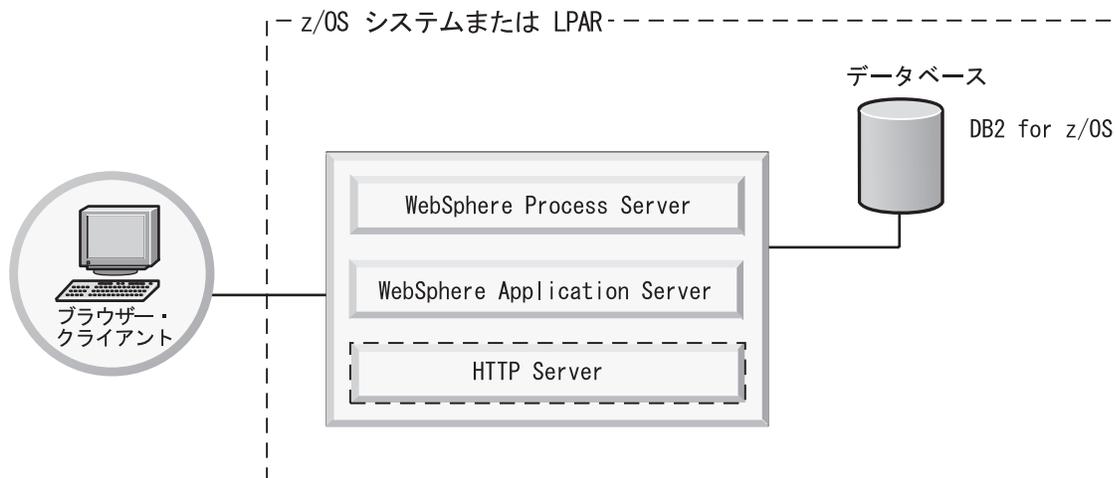
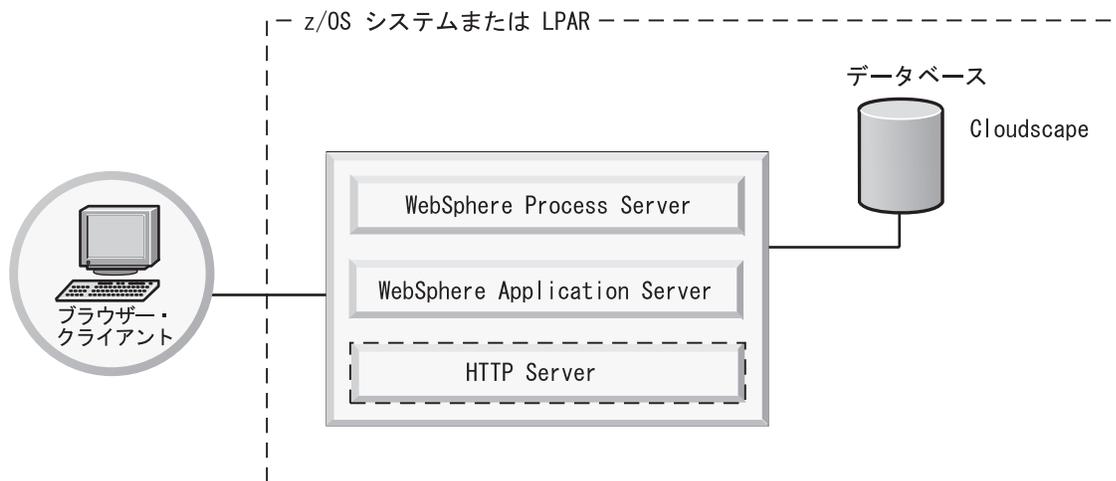
- 可能であれば、ルート HFS がすべてのプロセッサ間で共有され、デプロイメント・マネージャーの構成が、構成 HFS 内のシステムの汎用マウント・ポイント上に存在するように HFS をセットアップしてください。

シナリオ: WebSphere Process Server for z/OS のインストールとスタンドアロン構成の作成:

このシナリオでは、WebSphere Process Server for z/OS をインストールして、スタンドアロン構成を作成する方法の概要を示します。

以下の概要を参照して、スタンドアロン構成での WebSphere Process Server インストールのオプションを選択してください。

WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成では、Cloudscape または DB2 for z/OS のいずれかのデータベースがサポートされます。



1. WebSphere Application Server for z/OS

- アプリケーション・サービス提供環境のインストール

2. WebSphere Process Server for z/OS

- z/OS へのインストールの準備
- 基本 z/OS 環境の準備

注: システム上にある WebSphere Process Server for z/OS のバージョンが、インストールする製品が必要とする前提条件レベルを満たしていない場合、SMP/E はインストールを停止します。基本製品が、インストールされる製品をサポートするレベルになるようにするため、WebSphere Process Server for z/OS サービスの適用が必要となる場合があります。

- 製品コードのロードの計画
- WebSphere Process Server for z/OS インストール・メディアからの製品コードのロード (Load the product code from the installation media WebSphere Process Server for z/OS)
- 製品コードがアンロードされたことの確認
- インストール・スクリプトの実行
 - 適切な信用証明情報を使用してシステムにログオンし、製品をインストールします。
 - `-install` 引数を指定して、インストール・スクリプト **zSMPInstall.sh** を実行します。
- データベースを作成する際の考慮事項
- データベースおよびストレージ・グループの作成
- 応答ファイルでの作業
- 構成 (Configuring)
- インストールおよび構成の確認 (Verifying the installation and configuration)

3. Business Process Choreographer

- Business Process Choreographer の使用計画
- Business Process Choreographer の構成

4. Common Event Infrastructure

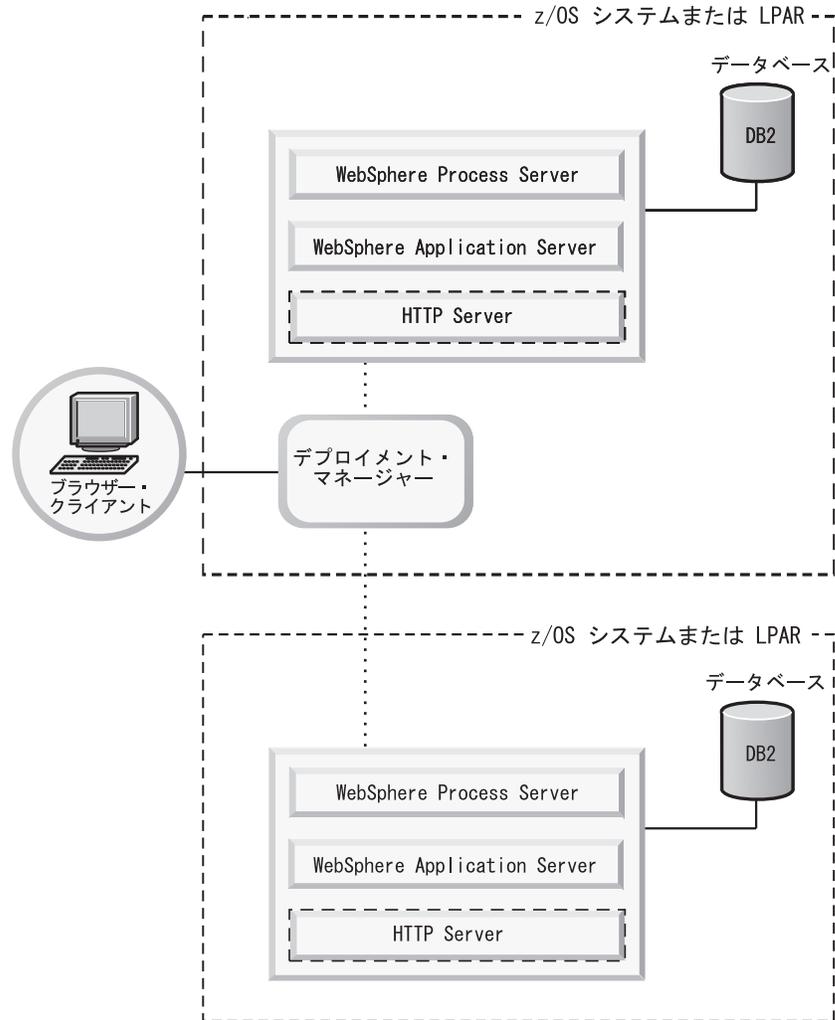
- Common Event Infrastructure の管理

これで、インストール済み環境の使用を開始できます。

シナリオ: WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよびデプロイメント・マネージャー構成の作成:

このシナリオでは、WebSphere Process Server for z/OS のデプロイメント・マネージャー構成の作成方法の概要を示します。

以下の概要を参照して、WebSphere Process Server for z/OS を Network Deployment 構成でインストールする際のオプションを選択してください。



1. WebSphere Application Server for z/OS
 - アプリケーション・サービス提供環境のインストール
2. WebSphere Process Server for z/OS
 - z/OS へのインストールの準備
 - 基本 z/OS 環境の準備

注: システム上にある WebSphere Process Server for z/OS のバージョンが、インストールする製品が必要とする前提条件レベルを満たしていない場合、SMP/E はインストールを停止します。基本製品が、インストールされる製品をサポートするレベルになるようにするため、WebSphere Process Server for z/OS サービスの適用が必要となる場合があります。

- 製品コードのアンロードの計画
- WebSphere Process Server for z/OS インストール・メディアからの製品コードのロード (Loading the product code from the installation media WebSphere Process Server for z/OS)
- 製品コードがアンロードされたことの確認
- インストール・スクリプトの実行

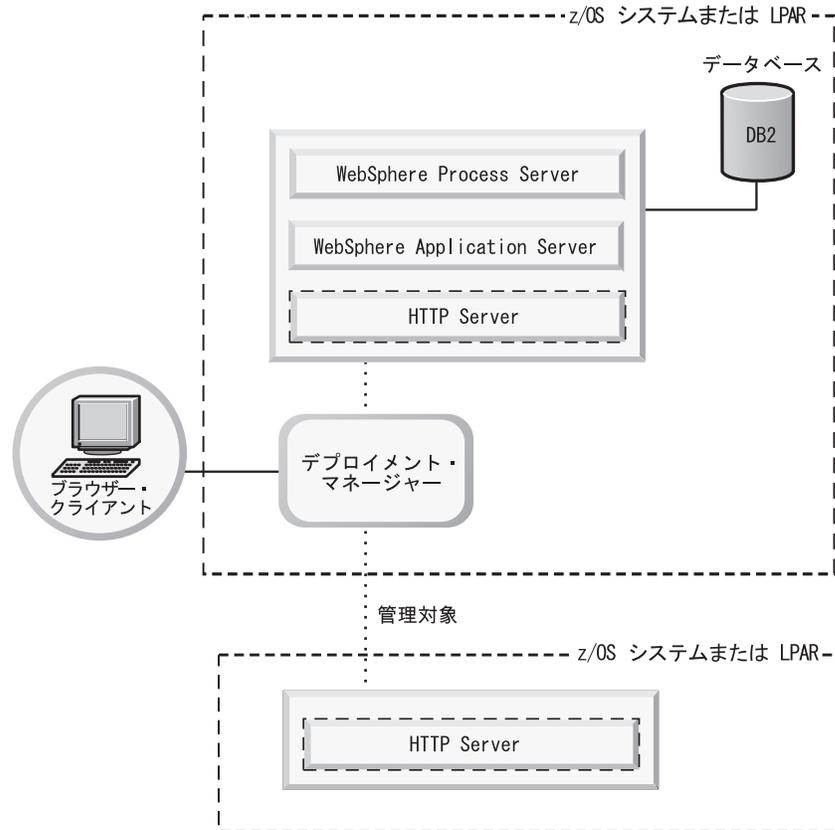
- 適切な信用証明情報を使用してシステムにログオンし、製品をインストールします。
 - `-install` 引数を指定して、インストール・スクリプト `zSMPInstall.sh` を実行します。
- データベースを作成する際の考慮事項
 - データベースおよびストレージ・グループの作成
 - 応答ファイルでの作業
 - 構成 (Configuring)
 - インストールおよび構成の確認 (Verifying the installation and configuration)
3. Business Process Choreographer
 - Business Process Choreographer の使用計画
 - Business Process Choreographer の構成
 4. Common Event Infrastructure
 - Common Event Infrastructure の管理

これで、インストール済み環境の使用を開始できます。

シナリオ: WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび Network Deployment 構成の完了:

このシナリオでは、WebSphere Process Server for z/OS をインストールし、Network Deployment 構成を完了する方法の概要を示します。

以下の概要を参照して、WebSphere Process Server for z/OS を管理対象ノード構成でインストールする際のオプションを選択してください。



1. WebSphere Application Server for z/OS
 - アプリケーション・サービス提供環境のインストール
2. WebSphere Process Server for z/OS
 - z/OS へのインストールの準備
 - 基本 z/OS 環境の準備

注: システム上にある WebSphere Process Server for z/OS のバージョンが、インストールする製品が必要とする前提条件レベルを満たしていない場合、SMP/E はインストールを停止します。基本製品が、インストールされる製品をサポートするレベルになるようにするため、WebSphere Process Server for z/OS サービスの適用が必要となる場合があります。

- 製品コードのアンロードの計画
- インストール・メディアからの製品コードのロード (Load the product code from the installation media)
- 製品コードがアンロードされたことの確認
- インストール・スクリプトの実行
 - 適切な信用証明情報を使用してシステムにログオンし、製品をインストールします。
 - -install 引数を指定して、インストール・スクリプト **zSMPInstall.sh** を実行します。
- データベースを作成する際の考慮事項

- データベースおよびストレージ・グループの作成
 - 応答ファイルでの作業
 - 構成 (Configuring)
 - インストールおよび構成の確認 (Verifying the installation and configuration)
3. Business Process Choreographer
- Business Process Choreographer の使用計画
 - Business Process Choreographer の構成
4. Common Event Infrastructure
- Common Event Infrastructure の管理

これで、インストール済み環境の使用を開始できます。

シナリオ: アンインストール:

このシナリオでは、WebSphere Process Server for z/OS のアンインストール方法の概要を示します。

以下のシナリオは、WebSphere Process Server for z/OS の完全なアンインストールを実行する方法を説明しています。

注: 部分アンインストールまたはインクリメンタル・アンインストールはサポートされていません。

WebSphere Process Server for z/OS

- WebSphere Process Server for z/OS のアンインストール
 - 適切な信用証明情報を使用してシステムにログオンし、製品をインストールします。
 - `-uninstall` 引数を指定して、インストール・スクリプト `zSMPInstall.sh` を実行します。スクリプトは以下のタスクを実行します。
 - 構成マネージャーのスクリプト・アクションを実行することによって、WebSphere Process Server for z/OS を使用不可にします。これにより、管理コンソール・プラグイン拡張機能がすべて除去されます。
 - `WSPROFILE` スクリプト・アクションを使用してプロファイル拡張を除去する。これにより、WebSphere Process Server for z/OS デフォルト・プロファイルの拡張解除が実行されます。
 - インストール後のファイルを削除します。
 - コード・ベース許可を除去します。

注: 共用の共通コンポーネントが他のアプリケーションによって共用されている場合、コマンド行プロンプトは、製品のアンインストールにより他のアプリケーションが正しく機能しなくなる可能性があることを警告します。

ユーザーが、アンインストール・プロセスを継続すると確認することによって、アンインストールの続行を明示的に選択しなければ、アンインストールはこの時点でブロックされます。

ユーザーは、拡張されたデフォルト・プロファイルが削除される (下位の WebSphere Application Server for z/OS または WebSphere Application Server Network Deployment for z/OS がアンインストールされている場合) か、あるいは拡張されたプロファイルが使用できなくなることを警告されます。

WebSphere Process Server for z/OS 製品がシステムから除去されました。

Business Process Choreographer の使用計画

ビジネス・プロセス・コンテナとヒューマン・タスク・コンテナの構成を計画するには、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2 インフォメーション・センターで、『WebSphere Process Server のインストールと構成 (Installing and configuring WebSphere Process Server)』 > 『WebSphere Process Server のインストールの計画 (Planning to install WebSphere Process Server)』 > 『Business Process Choreographer の使用計画 (Planning to use Business Process Choreographer)』のトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer PDF* でも検索できます。

ソフトウェアのインストール

WebSphere Process Server をインストールするには、磁気テープから製品をロードし、インストール・スクリプトを実行して製品の定義を作成する必要があります。オプションとして、Message Service Client を、Message Service Client がサポートしているプラットフォームにインストールすることもできます。

インストール・メディアから z/OS への製品コードのロード

WebSphere Process Server for z/OS の製品コードは、IBM ServerPac/SystemPac または IBM Custom-Built Product Delivery Option (CBPDO) のいずれかを使用してインストールされます。z/OS 環境では、製品のメディアからシステムへのロードは、通常システム・プログラマーが担当します。

1. サポートされるバージョンの WebSphere Application Server for z/OS がインストールおよびカスタマイズされたことを確認します。

WebSphere Application Server for z/OS のインストールおよびカスタマイズの方法については、『アプリケーション・サービス提供環境のインストール』を参照してください。

2. 『システムへの製品コードのロードの計画』の手順を完了します。
3. Program Directory for WebSphere Process Server for z/OS へのアクセス権を持つようにします。

プログラム・ディレクトリーは、SMP/E インストールを実行するための 1 次ユーザー・アシスタンスです。

PDF 形式のプログラム・ディレクトリーは、WebSphere Process Server for z/OS ダウンロード・ページ (<http://www-306.ibm.com/software/integration/wps/library/infocenter/>) からダウンロードできます。

このセクションでは、CBPDO または IBM ServerPac/SystemPac のいずれかを使用して WebSphere Process Server for z/OS プログラム・マテリアルを z/OS システムへインストールする方法について説明します。

1. 適切な WebSphere Process Server for z/OS 製品を含む IBM ServerPac/SystemPac または IBM CBPDO をオーダーします。
2. 選択した配送手段のための指示に従います。

- a. *IBM SystemPac* または *ServerPac* を使用

IBM SystemPac または ServerPac は、ロード可能な製品ライブラリーおよび対応する SMP/E データ・セットで構成されています。

- b. *IBM Custom-Build Product Delivery Offering* の使用

CBPDO には、1 つ以上の製品の SMP/E relfile と保守が含まれています。

3. 製品保守時に、将来使用できるようにインストール・マテリアルをファイリングします。

インストール・メディアからシステムへの製品コードのアンロードを完了したら、製品管理者がインストール・スクリプト (`zSMPInstall.sh`) を実行して製品を使用可能にする WebSphere 定義を作成できるように、製品管理者に通知してください。詳しくは、『インストール・スクリプトの実行』を参照してください。

IBM SystemPac または ServerPac の使用

IBM CustomPac (SystemPac、ServerPac、または ProductPac[®]) は、ディスクへのデータ・セットのロードおよび初期カスタマイズの実行に使用される IBM ダイアログにバンドルされた、一連のプリロード済み製品データ・セットです。

一般に、CustomPac オファリングのインストール中には、SMP/E の作業は必要ありません。代わりに、CustomPac サービス・レベルに対応する SMP/E データ・セットが、製品データ・セットと共にディスクにロードされます。その場合も、CustomPac インストール後に、SMP/E を使用して予防および修正サービスをインストールすることができます。

IBM SystemPac または ServerPac を使用する場合、SystemPac または ServerPac に付属する「*ServerPac: Installing your Order*」の指示に従ってください。

SystemPac または ServerPac のインストールに使用される ISPF ダイアログについては、「*z/OS IBM ServerPac インストール・ダイアログの使用法 (SA88-8647)*」を参照してください。

注:

- 保守の目的で製品ライブラリーのコピーを少なくとも 2 つ保持および保守できるような製品データ・セット命名規則を選択してください。

詳しくは、『製品データ・セットについての計画』を参照してください。

- 駆動システムからインストールを実行する場合、ターゲット・システムの保守レベルが WebSphere Process Server for z/OS の要件を満たしていることを確認してください。

- インストールが完了したら、製品データ・セットが z/OS ターゲット・システムで使用可能になり、製品コード HFS が各ターゲット・システムの /usr/lpp/zWPS/V6R0 または選択した類似のマウント・ポイントにマウントされていることを確認してください。

詳細については、以下を参照してください。

- http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/zos_os390/support の eSupport web サイト
- PSP バケット
- <http://www-306.ibm.com/software/support/> の IBM Software Support Center Web サイト

IBM Custom-Build Product Delivery Option の使用

IBM Custom-Build Product Delivery Option (CBPDO) は、累積サービスと共にバンドルされている 1 つ以上の IBM ソフトウェア製品のプロダクト・テープのセットです。 SMP/E を使用してシステム上に製品およびサービスをインストールします。

CBPDO を使用する場合、注文品に付属する「*WebSphere Process Server for z/OS: Program Directory*」の指示に従ってください。

注:

- 保守の目的で製品ライブラリーのコピーを少なくとも 2 つ保持および保守できるような製品データ・セット命名規則を選択してください。

詳しくは、『製品データ・セットについての計画』を参照してください。

- 駆動システムからインストールを実行する場合、ターゲット・システムの保守レベルが WebSphere Process Server for z/OS の要件を満たしていることを確認してください。
- インストールが完了したら、製品データ・セットが z/OS ターゲット・システムで使用可能になり、製品コード HFS が各ターゲット・システムの /usr/lpp/zWPS/V6R0 または選択した類似のマウント・ポイントにマウントされていることを確認してください。

詳細については、以下を参照してください。

- http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/zos_os390/support の eSupport Web サイト
- PSP バケット
- <http://www-306.ibm.com/software/support/> の IBM Software Support Center Web サイト

製品コードがアンロードされたことの確認

WebSphere Process Server for z/OS の SMP/E によるインストールが正常に実行されたことを確認します。

- コードがシステムに正常にアンロードされたことを確認します。

システム管理者は、プロダクト・テープの内容の z/OS オペレーティング・システムへのロードに関連する資料および手順についての情報を、*Program Directory for WebSphere Process Server for z/OS* に頼っています。

SMP/E インストールの検査は反復プロセスであり、戻りコードは、プロダクト・テープの内容をシステムにロードするために実行するさまざまなジョブの成功または失敗を示します。

SMP/E インストール用には、インストール検査テスト (IVT) はありません。システム管理者が SMP/E の専門知識を持ち、インストールのこの部分を容易にするための SMP/E 資料を利用できることが前提となります。

以下の SMP/E 文書が推奨されます。

- z/OS: SMP/E コマンド、SA88-8623
- z/OS: SMP/E メッセージ、コード、および診断、GA88-8622
- z/OS: SMP/E 解説書、SA88-8624
- z/OS: SMP/E ユーザーズ・ガイド、SA88-8625
- z/OS: MVS 初期設定およびチューニング 解説書、SA88-8564

これで、製品コードをシステムに正常にロードできたため、製品を使用可能にする WebSphere 定義のインストール計画の作成を開始できます。

構成スクリプトの実行について

WebSphere Process Server for z/OS 構成データによってデフォルト・プロファイルを拡張するには、構成スクリプトを実行します。

構成スクリプトは、特定の構成情報に対応する応答ファイルに依存します。このため、提供されている応答ファイルは、製品によってサポートされている構成を表します。

構成スクリプトを実行すると、特定の構成情報に対応する応答ファイルへのパスがコマンドに組み込まれます。応答ファイルに設定したプロパティ値は、製品の構成情報を作成するときに使用します。

以下の内容は、製品構成スクリプトによってサポートされている構成のリストです。

- 以下のデータベースをサポートしているスタンドアロン・サーバー構成
 - Cloudscape V5.1
 - DB2 for z/OS バージョン 7
 - DB2 for z/OS バージョン 8

これらの構成に対応するデフォルトの応答ファイルは、以下に示すようにインストール HFS に存在します。

- /usr/lpp/zWPS/V6R0/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfile.rsp
- /usr/lpp/zWPS/V6R0/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfileDB2.rsp

注: DB2 for z/OS データベースの作成に必要な情報は、standAloneProfileDB2.rsp という応答ファイル内にあります。この応答ファイルには、DB2 for z/OS

バージョン 7 または DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートするよう設定できるプロパティが格納されています。デフォルト値は、DB2 for z/OS バージョン 8 に合わせて設定されています。

- 以下のデータベースをサポートしている Network Deployment 構成
 - DB2 for z/OS バージョン 7
 - DB2 for z/OS バージョン 8

これらの構成に対応するデフォルトの応答ファイルは、以下に示すようにインストール HFS に存在します。

- /usr/lpp/zWPS/V6R0/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/**dmgrProfile.rsp**

注: DB2 for z/OS データベースの作成に必要な情報は、dmgrProfile.rsp という応答ファイル内にあります。この応答ファイルには、DB2 for z/OS バージョン 7 または DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートするよう設定できるプロパティが格納されています。デフォルト値は、DB2 for z/OS バージョン 8 に合わせて設定されています。

- 以下のデータベースをサポートしている管理対象ノード構成
 - DB2 for z/OS バージョン 7
 - DB2 for z/OS バージョン 8

これらの構成に対応するデフォルトの応答ファイルは、以下に示すようにインストール HFS に存在します。

- /usr/lpp/zWPS/V6R0/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/**managedProfile.rsp**

注: DB2 for z/OS データベースの作成に必要な情報は、managedProfile.rsp という応答ファイル内にあります。この応答ファイルには、DB2 for z/OS バージョン 7 または DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートするよう設定できるプロパティが格納されています。デフォルト値は、DB2 for z/OS バージョン 8 に合わせて設定されています。

コマンドを実行する手順は、WebSphere Process Server for z/OS 構成のそれぞれについてほぼ同一 (違いはコマンド内で参照される応答ファイル) ですが、WebSphere Process Server for z/OS 構成のそれぞれに関しては微妙な違いが存在します。コマンド行から構成スクリプトを実行する場合は、その前にそれぞれの WebSphere Process Server for z/OS のタイプについて読んでおいてください。

インストール・スクリプトの実行

WebSphere Process Server for z/OS に関する必要な WebSphere 定義をインストールして作成するには、インストール・スクリプト (**zSMPInstall.sh**) を実行します。

インストール・スクリプトを実行すると、以下のアクションが実行されます。

- WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS から WebSphere Process Server for z/OS smpe_root (インストール HFS) への symlink を作成する。
- WebSphere Process Server for z/OS 製品定義によって管理コンソールを更新する Ant スクリプト・アクションを呼び出す。
- 必要に応じて **applyPTF** 処理を実行する。

インストール・スクリプトによって呼び出されるアクションの詳細については、『インストール・スクリプトについて』を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS のインストール・スクリプトを実行するには、z/OS UNIX System Services の実用的な知識が必要です。以下の資料が利用できます。

- z/OS V1R7.0 UNIX System Services User's Guide
- z/OS V1R7.0 UNIX System Services Command Reference

以下の点を確認します。

1. 『作業の概要: インストールおよび構成』を読み直し、インストール・プロセスと構成プロセスの作業の流れを理解すること。
2. インストール済み環境でセキュリティーおよびシステムのアクセス権を管理するシステム・プログラマーによって、正しくシェルを利用できるようにユーザーがセットアップされていること。

これには、ユーザーの RACF[®] (セキュリティー) プロファイルに変更を加え、UNIX シェル内でホーム・ディレクトリーを作成する作業が含まれます。ユーザーは常に、UNIX セッションの開始時にホーム・ディレクトリーから作業を始めます。このディレクトリー内で、プログラムの実行に必要な可能性のあるすべての環境変数ファイルを保持します。これらのファイルには、Java プログラムで使用される Java クラスのロケーションなど、特定の言語で必要な情報が含まれています。ホーム・ディレクトリーを、作業データの保持用のルート・ディレクトリーとして使用することもできます。WebSphere Application Server for z/OS に使用するセキュリティー定義を管理しやすくするためのツールや手法については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『Resource Access Control Facility Tools』を参照してください。

3. WebSphere Application Server for z/OS がインストールされ、カスタマイズされていること。

システム・プログラマーが WebSphere Application Server for z/OS の SMP/E によるインストールを完了し、必要なカスタマイズ作業を実行し、その結果生成された、必要な構成タイプ (スタンドアロン・アプリケーション・サーバーまたはデプロイメント・マネージャー) 用の構成 HFS を作成するジョブを実行していること。

4. WebSphere Process Server for z/OS 製品コードがシステムにロードされていること。

システム・プログラマーが WebSphere Process Server for z/OS インストール・メディアの内容をシステムに正常にロードすることにより、SMP/E インストールを完了していること。

必要な WebSphere Process Server for z/OS 定義を作成することが目標である場合は、以下の作業を実行します。

1. サーバーが稼働している場合は、サーバーを停止します。

- a. WebSphere Application Server for z/OS の Network Deployment 構成の場合は、デプロイメント・マネージャー・サーバーを停止します。 **stopManager** コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャーを停止することができます。
- b. WebSphere Application Server for z/OS のスタンドアロン・サーバー構成の場合は、スタンドアロン・サーバーを停止します。 **stopServer** コマンドを使用して、単一サーバーを停止することができます。

サーバーの停止方法について詳しくは、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『アプリケーション・サーバーの停止』を参照してください。

2. HFS をバックアップします。 WebSphere Application Server for z/OS システムの構成およびデータのバックアップについては、『WebSphere Application Server for z/OS システムのバックアップ』を参照してください。
3. WebSphere Process Server for z/OS インストール・スクリプトを実行する場所に移動します。

OS/390 UNIX コマンド・シェルからインストール・スクリプトを実行する場合は、以下の手順を実行します。

- a. OS/390 UNIX コマンド・シェルにアクセスします。
- b. ISPF コマンド・シェルで TSO コマンド OMVS を入力するか、他の任意の ISPF パネルから TSO OMVS と入力します。
- c. UNIX シェル内に入ると、コマンド・プロンプト (通常はドル (\$) またはポンド (#) 記号) は、システムが入力を受け入れる準備ができていることを示します。

Telnet からインストール・スクリプトを実行する場合は、以下の手順を実行します。

- a. Telnet セッションに戻ります (必要な場合)。

システム・プロンプトから **telnet TCPIP-Address port number** と入力します。

Telnet コマンドの例は、telnet 99.9.99.999 2023 です。99.9.99.999 は TCP/IP アドレス、2023 はポート番号を表します。

- b. 管理者のユーザー ID を使用して Telnet セッションにログオンしなかった場合は、管理者のユーザー ID に切り替える必要があります。以下に例を示します。

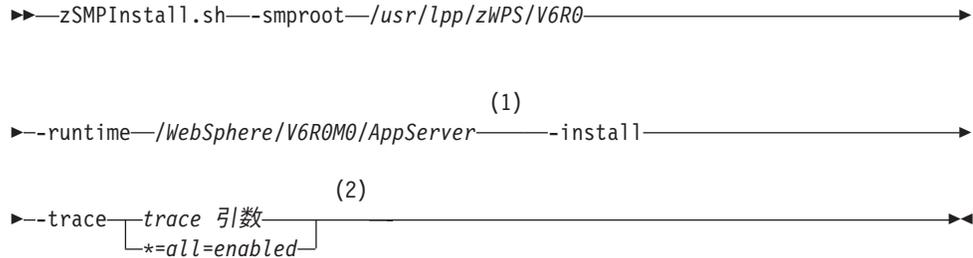
```
su wsadmin
```

- c. WebSphere Process Server for z/OS smpe_root ディレクトリーの zos.config に移動します。

```
cd /usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/bin
```

4. パス `export PATH=.:$PATH` に現行ディレクトリーを追加します。
5. インストール・スクリプトを実行します。 コマンドの実行方法については、次の構文図を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS のインストール・スクリプトを実行するための構文図



注:

- 1 インストール済み環境に適用するキーワード・パラメーターを入力します。 `-smproot` および `-runtime` のキーワード・パラメーターはユーザー定義であるため、この例で示すデフォルト値とは異なる場合があります。`-smproot` のキーワード・パラメーター値は、SMP/E のインストールによって作成された WebSphere Process Server for z/OS 製品の `smpe_root` ディレクトリー (インストール HFS) を表します。`-runtime` のキーワード・パラメーター値は、WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS と `app_server_root` ディレクトリー名の組み合わせ (`/WebSphere/V6R0/AppServer` など) を表します。WebSphere Application Server for z/OS の各アプリケーション・サービス提供環境 (スタンドアロン・アプリケーション・サーバー・ノードまたは Network Deployment セル) では、1 つ以上の WebSphere 構成ディレクトリー内に構成ファイルが格納されます。これらの構成ディレクトリーは、WebSphere Application Server for z/OS 構成プロセスによって作成され、製品ディレクトリー内のファイルへのシンボリック・リンクを格納します。`-runtime` パスは、WebSphere Application Server for z/OS アプリケーション・サービス提供環境の作成時に設定したパスと一致する必要があります。このパスは、構成タイプによって異なります。例えば、デプロイメント・マネージャーの構成ルートは `/WebSphere/V6R0/DeploymentManager` となり、スタンドアロン・アプリケーション・サーバーの構成ルートは `/WebSphere/V6R0/AppServer` となります。
- 2 `-trace` を指定すると、コマンドが適切なトレース・ファイルに書き込みを行います。

標準出力からのメッセージを確認します。これらは、**zSMPIInstall.sh** を実行した画面に表示されるか、またはコマンド行でリダイレクト記号 ("`>`") が使用された場合は、指定されたファイルに出力されます。

エラー・メッセージは表示されていないはずです。

zSMPIInstall.sh が正常に実行された場合の例を以下に示します。

```
コマンド引数の構文解析中...
引数の構文解析が完了しました
構成のセットアップ中...
runtimeRootDirName: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WAS_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WBI_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
構成のセットアップが完了しました
シンボリック・リンクの作成中...
```

```
invokeSymLink
シンボリック・リンクの作成が完了しました
インストール後ファイル更新の実行中...
インストール後更新が完了しました
構成マネージャー更新の実行中...
構成マネージャー更新が完了しました

CWPIZ0256I: 構成のセットアップが完了しました
CWPIZ0257I: シンボリック・リンクの作成中...
CWPIZ0259I: シンボリック・リンクの作成が完了しました
CWPIZ0260I: インストール後ファイル更新の実行中...
CWPIZ0262I: インストール後更新が完了しました
CWPIZ0263I: 構成マネージャー更新の実行中...
Sep 27, 2006 10:47:57 PM com.ibm.ws390.installer.WPSInstaller
INFO: BBZWI218
Sep 27, 2006 10:53:35 PM com.ibm.ws390.installer.WPSInstaller
INFO: BBZWI219
CWPIZ0264I: 構成マネージャー更新が完了しました。
Sep 27, 2006 10:53:35 PM com.ibm.ws390.installer.WPSInstaller
INFO: BBZWI016
```

ソフトウェアが正常にインストールされなかった場合、インストール上の問題を判断する方法について、244 ページの『インストールおよび構成のトラブルシューティング』を参照してください。

インストール・スクリプトを正常に実行したら、ソフトウェアを構成する準備ができています。詳しくは、131 ページの『ソフトウェアの構成』を参照してください。

WebSphere Process Server Client のインストール

WebSphere Process Server for z/OS は CD-ROM にパッケージ化されており、この CD-ROM を使用すると、WebSphere Process Server Client を Linux、UNIX、Windows のいずれかのマシンにインストールして、WebSphere Process Server for z/OS 環境で使用できます。Client のインストール済み環境では、SOA コア機能および Business Process Choreographer 機能を備えた WebSphere Process Server for z/OS 構成を、WebSphere Process Server のフルインストールを行う必要なく実現できます。

Linux、UNIX、Windows のいずれかのマシンで WebSphere Process Server Client をインストールする前に、以下の項目を確認してください。

- WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターにアクセスできる。

WebSphere Process Server Client のインストール先は、Linux、UNIX、Windows のいずれかのマシンになるため、場合によっては、このインフォメーション・センターで内容を確認することが必要になります。

- WebSphere Process Server Client のインストールの一環として WebSphere Application Server Network Deployment をインストールするのか、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.0.x.x の既存のインストール済み環境を使用するのか決定済みである。
- システムはすべてのハードウェア要件を満たしており、必要なすべてのソフトウェア相互前提条件および前提条件をインストール済みである。WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を <http://www.ibm.com/support/>

docview.wss?uid=swg27006205 で参照して、使用しているバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

- インストールに備えて、オペレーティング・システムを Client マシン上で準備済みである。 WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 のインフォメーション・センターで、『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。
- Linux または UNIX システムの root ユーザーとして、または Windows システムの管理者グループのメンバーとして、Client をインストールする。
- 以下のいずれかの CD-ROM から Client をインストールする。
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Windows
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for AIX
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Solaris on SPARC
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Solaris on x86 64-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for HP-UX
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for HP-UX on Itanium 64-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on x86 32-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on x86 64-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on iSeries and pSeries
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on zSeries 31-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on zSeries 64-bit

この手順では、CD-ROM から対話式にインストールすることを前提にしています。

以下の手順を使用して、Client をインストールします。

1. Linux または UNIX システムでは root ユーザーとして、Windows システムでは管理者グループのメンバーとしてログオンします。
2. インストール作業を行うマシンの CD-ROM ドライブに CD-ROM を挿入し、必要に応じてドライブをマウントします。この手順については、WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターの『Linux および UNIX オペレーティング・システムでの CD-ROM のマウント』に記載されています。
3. WBI ディレクトリーに移動し、以下の手順に従って Client のインストール・ウィザードを開始します。
 - **Windows プラットフォームの場合:** install.exe ファイルを実行します。
 - **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** コマンド **install** を実行します。
4. インストーラーの「ようこそ」パネルで、「次へ」を選択します。
5. 「ソフトウェアのご使用条件 (Software License Agreement)」パネルで、IBM および IBM 以外のライセンス条項を検討し、「**IBM および IBM 以外の両方の条件を受諾します (I accept both the IBM and the non-IBM terms)**」を選択して、「次へ」を選択します。

インストール・ウィザードは、前提条件のパッチでサポートされるオペレーティング・システムを検査します。処理が終了すると、システムが検査に合格し

たかどろかが「前提条件の検査 (Checking prerequisites)」パネルに表示されま
す。この手順ではシステムが合格することが前提となっています。

システムが合格しなかった場合は、インストールをキャンセルして必要な変更
を行ってから、インストールを再始動します。

6. 「前提条件の検査 (Checking prerequisites)」パネルで、「次へ」を選択します。

インストール・ウィザードは、WebSphere Process Server、WebSphere Process
Server Client、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application
Server、および WebSphere Application Server Network Deployment がすでにイ
ンストールされているかどうかを検査します。この手順では、WebSphere
Process Server、Client、または WebSphere Enterprise Service Bus はインストー
ルされていませんが、WebSphere Application Server または WebSphere
Application Server Network Deployment がすでにインストールされている可能性
があることが前提となっています。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network
Deployment がまだインストールされていない場合は、「インストール・ロケ
ーション」パネルが表示されます。ステップ 8 に進んでください。

これらの製品のいずれかがシステムにすでにインストールされている場合は、
「検出された既存のインストール (Existing installation detected)」パネルが表示
されます。ステップ 7 に進んでください。

重要: .WASRegistry ファイルに WebSphere Application Server または
WebSphere Application Server Network Deployment の項目がある場合、イ
ンストーラーはこれらの未登録のインスタンスも検出します。このファ
イルは、インストール済み環境の \$USER_HOME ディレクトリーにあります。
これらの製品のいずれかの未登録インストールを WebSphere
Process Server Client のインストールと共に使用することはお勧めしませ
ん。また、サポートもされません。

7. 「検出された既存のインストール (Existing installation detected)」パネルで、以
下のいずれかを行います。
 - WebSphere Application Server Network Deployment の新規コピーをインスト
ールするには、「**WebSphere Application Server Network Deployment 6.0
の新規コピーをインストールする (Install a new copy of WebSphere
Application Server Network Deployment 6.0)**」を選択して、「次へ」を選択
します。既存のインストール済み環境のシステム上に、この製品をインスト
ールするときに考慮が必要な事項の概要を示す警告パネルが表示されます。
「次へ」を選択して警告パネルを閉じます。「インストール・ロケーシ
ョン」パネルが表示されます。ステップ 8 に進んでください。
 - Client を、WebSphere Application Server または WebSphere Application
Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールす
るには、「**WebSphere Application Server Network Deployment バージョン
6.0 の既存のインストールを使用する**」または「**WebSphere Application
Server バージョン 6.0 の既存のインストールを使用する**」を選択して、「次
へ」を選択します。(インストールが複数ある場合、使用するインストールを
ドロップダウン・リストから選択します。)選択したアプリケーションで稼動
中のサーバーがある場合、続行する前にサーバーを停止するよう警告パネル

にアラートが示されます。「次へ」を選択して警告パネルを閉じます。「インストール・タイプ」パネルが表示されます。ステップ 9 に進んでください。

8. 「インストール・ロケーション」パネルで、デフォルトのインストール・ルート・ディレクトリを受け入れるか、または別のディレクトリを指定して、「次へ」を選択します。

デフォルトのインストール・ディレクトリについては、WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターの『デフォルトのインストール・パス』のトピックを参照してください。

重要:

- インストール・ルート・ディレクトリの値を指定しなければ、処理を続行することができません。
 - ディレクトリ名に ASCII 以外の特殊文字を使用しないでください。それらの文字はサポートされていません。
 - **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** インストール・ルート・ディレクトリとしてシンボリック・リンクを使用しないでください。シンボリック・リンクは、サポートされていません。また、ディレクトリ・パスにはスペースを使用しないでください。
 - **Linux プラットフォームの場合:** 製品を正常にインストールするには、インストール・ルート・ディレクトリ・パスを 256 文字以下にする必要があります。
9. 「インストール・タイプ」パネルに、使用できる唯一のインストール・タイプとして「クライアント・インストール」が表示されます。「次へ」をクリックします。
 10. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認してから、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」を選択します。

インストール済みの製品は、WebSphere Application Server Network Deployment と WebSphere Process Server のみです。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、インストール中のコンポーネントを示す進行パネルを表示します。

既存のバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment を使用することを選択した場合、インストール・ウィザードはそのインストールを検査し、以下のいずれかを実行します。

- インストールのサービス・レベルが適切な場合は、何も行いません。
- インストールが以前のサービス・レベルである場合は、必要なフィックスを適用してインストールを適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

インストール終了時には、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。

重要: インストール中にエラーが検出されると、「インストールが完了しました」パネルの代わりに他のパネルが表示されます。例えば、次のようなパネルがあります。

- インストールは完了しましたがエラーが生成されたことを示す「インストールが完了しましたがエラーが発生しました」パネル。
- インストールがすべて失敗したことを示す「インストールは失敗しました」パネル。

これらの各パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターで、以下のトピックを参照してください。

- 『インストールのトラブルシューティング』。インストールのトラブルシューティングに関するヒントが必要な場合に参照してください。
- 『ログ・ファイル』。関連のログ・ファイルの説明が必要な場合に参照してください。
- 『エラー・メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』。エラー・メッセージの説明が必要な場合に参照してください。

11. 「終了」を選択して、インストール・ウィザードを閉じます。

「インストールが完了しました」というパネルが表示されたら、WebSphere Process Server Client は正常にインストールされています。

これで、Client の使用開始準備が完了しました。

WebSphere Process Server Client のサイレント・インストール

応答ファイルというファイルを使用することにより、Linux、UNIX、Windows のいずれかのマシンのうち、z/OS インストール済み環境の一部になっているマシンに WebSphere Process Server Client のサイレント・インストールを実行できます。この場合、サイレント・インストールによって、インストール・プログラムは、グラフィカル・ユーザー（「ウィザード」）インターフェースを表示する代わりに、ユーザーが提供するファイルからユーザーの応答をすべて読み取ることができます。応答ファイル `responsefile.wpsclient.txt` を使用して Client のサイレント・インストールを実行することができます。応答ファイルは、WebSphere Process Server for z/OS に付属の Client CD-ROM に、デフォルト値でパッケージ化されています。

始める前に

Linux、UNIX、Windows のいずれかのマシンで、WebSphere Process Server Client のサイレント・インストールを実行する前に、以下の項目を確認してください。

- WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターにアクセスできる。

WebSphere Process Server Client のインストール先は、Linux、UNIX、Windows のいずれかのマシンになるため、場合によっては、このインフォメーション・センターで内容を確認することが必要になります。

- インストールの方式は、サイレント・インストールにする。WebSphere Process Server Client のインストールを対話式に実行する場合は、『WebSphere Process Server Client のインストール』を参照してください。
- WebSphere Process Server Client のインストールの一環として WebSphere Application Server Network Deployment をインストールするのか、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.0.x.x の既存のインストール済み環境を使用するのか決定済みである。
- システムはすべてのハードウェア要件を満たしており、必要なすべてのソフトウェア相互前提条件および前提条件をインストール済みである。WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を <http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> で参照して、使用しているバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。
- インストールに備えて、オペレーティング・システムを Client マシン上で準備済みである。WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 のインフォメーション・センターで、『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。
- Linux または UNIX システムの root ユーザーとして、または Windows システムの管理者グループのメンバーとして、Client をインストールする。
- 以下のいずれかの CD-ROM の応答ファイルを使用して、Client のサイレント・インストールを実行する。
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Windows
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for AIX
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Solaris on SPARC
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Solaris on x86 64-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for HP-UX
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for HP-UX on Itanium 64-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on x86 32-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on x86 64-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on iSeries and pSeries
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on zSeries 31-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on zSeries 64-bit
- 応答ファイル内で `-silent` オプションを使用しないでください。

応答ファイルのロケーション

応答ファイルのサンプル `responsefile.wpsclient.txt` は、ソフトウェアのインストール時に使用する WebSphere Process Server Client CD-ROM の WBI ディレクトリーにあります。このファイルはインストールされません。

重要: AIX プラットフォームの場合: AIX でのサイレント・インストール用のファイルを準備する場合は、UNIX 行終了文字 (0x0D0A) を使用してオプション応答ファイルの各行を終了します。ファイルを作成する最も安全な方法は、ターゲット・オペレーティング・システム上でファイルを編集することです。

必要なディスク・スペース

必要になるディスク・スペースについては、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006205> で WebSphere Process Server の詳細なシステム要件を参照し、使用しているバージョンの WebSphere Process Server へのリンクを選択してください。

応答ファイルを使用したインストール

サイレントにインストールするには、以下の手順を実行します。

1. Client のインストール先プラットフォームに関連付けられている CD-ROM で、`responsefile.wpsclient.txt` というファイルを、WBI ディレクトリーから使用マシン上の分かりやすい場所にコピーし、`myoptionsfile` などの新しい名前を付けて保管します。

必要に応じてドライブをマウントします。この手順については、WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターの『Linux および UNIX オペレーティング・システムでの CD-ROM のマウント』に記載されています。

2. ターゲット・オペレーティング・システム上で、選択したフラット・ファイル・エディターを使用してこのファイルを編集し、ご使用のシステム用のパラメーターを使用してカスタマイズします。応答ファイル内の指示を読み取って、適切な値を選択します。応答ファイルのサンプルについては、119 ページの『`responsefile.wpsclient.txt` ファイルの例』を参照してください。

重要: 必ず、ファイル内のご使用条件への同意に関する記述において、値を "true" に変更してください。値を "false" のままにすると、インストールが失敗します。

3. `responsefile.wpsclient.txt` のコピーに変更内容を保管します。
4. 以下のコマンドのいずれか 1 つを使用して、WebSphere Process Server Client をインストールします。ここに示すコマンドでは、`responsefile.wpsclient.txt` ファイルが一時ディレクトリーにコピーされ、ファイルがカスタマイズされる前に `myoptions.txt` に名前変更されたことを前提としています。

- **Linux および UNIX プラットフォームの場合:**

```
install -options /tmp/WBI/myoptions.txt -silent
```

- **Windows プラットフォームの場合:**

```
install.exe -options "C:%temp%\WBI\myoptions.txt" -silent
```

`log.txt` のログ・ファイルを調べて、インストールが正常に終了していることを確認します。ファイルの最後の行に `INSTCONFSUCCESS` という語が含まれていれば、WebSphere Process Server Client と WebSphere Application Server Network Deployment (選択した場合) は正常にインストールされています。ログ・ファイルは、以下の場所にあります (`install_root` は、WebSphere Process Server Client のインストール済み環境の場所です)。

- **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** `install_root/logs/wbi/log.txt`
- **Windows プラットフォームの場合:** `install_root\logs\wbi\log.txt`

このログ・ファイルの最後の行に INSTCONFSUCCESS というストリングが含まれている場合、インストールは正常に終了しています。INSTCONFPARTIALSUCCESS または INSTCONFFAILED などの他の用語が、ファイル内の別の行に (あるいは最後の行にも) 出現する場合がありますが、INSTCONFSUCCESS が最後の行に含まれているのであれば、インストールは正常に終了しています。

インストールが正常終了しなかった場合は、他のログ・ファイルを調べて原因を判別してください。

インストールのトラブルシューティングに関するヒントについては、次の『トラブルシューティング』のセクションと、WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターの『インストールのトラブルシューティング』のセクションを参照してください。

トラブルシューティング

ファイルで値を提供するときは正確に行います: 応答ファイルは、インストール・プログラムがそのファイルに含まれるオプション値を読み取れるように、正確にカスタマイズしてください。指定に誤りがあると、インストールが失敗する可能性があります。例えば、大/小文字の区別があるプロパティ名では、常に大/小文字の誤りのないようにしてください。また、値は常に二重引用符で囲みます。

エラーが無効オプション値である場合、InstallShield for Multiplatforms (ISMP) には、インストールを確認して停止しなければならないという警告メッセージが表示されます。

オプション応答ファイルを、製品に同梱される responsefile.wpsclient.txt ファイルと比較し、必要な修正を行います。ファイルの修正後に、再インストールします。

特定のイベントによって、InstallShield for Multiplatforms (ISMP) がインストール・ウィザードをサイレント・モードで開始できなくなる可能性があります (例えば、インストール・ウィザードを起動するためのディスク・スペースが十分でない状況などが考えられます)。インストールが失敗し、インストール・ログに情報がない場合は、-log パラメーターを使用して、ISMP プログラムがインストール・ウィザードの開始に失敗する原因となるイベントのエントリを記録します。このようなイベントを記録するための **install** コマンドの構文は、以下のとおりです。

AIX プラットフォームの場合:

```
install -options "/usr/IBM/WebSphere/silentFiles/myresponsefile.txt"  
        -silent -log # !/usr/IBM/WebSphere/myOptionFiles/log.txt @ALL
```

HP-UX および Solaris プラットフォームの場合:

```
install -options "/opt/IBM/WebSphere/silentFiles/myresponsefile.txt"  
        -silent -log # !/opt/IBM/WebSphere/myOptionFiles/log.txt @ALL
```

Linux プラットフォームの場合:

```
install -options "/opt/ibm/WebSphere/silentFiles/myresponsefile.txt"  
        -silent -log # !/opt/ibm/WebSphere/myOptionFiles/log.txt @ALL
```

Windows プラットフォームの場合:

```
install.exe -options "C:\IBM\WebSphere\silentFiles\myresponsefile.txt"
-silent -log # !C:\IBM\WebSphere\silentFiles\log.txt @ALL
```

responsefile.wpsclient.txt ファイルの例

WebSphere Process Server に付属の応答ファイル (変更前) は、次のような内容になります。

```
#####
#
# Licensed Material - Property of IBM
# 5724-L01, 5655-N53, 5655-FLW
# (C) Copyright IBM Corporation 2006. All Rights Reserved.
# US Government Users Restricted Rights- Use, duplication or disclosure
# restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.
#
#####

#####
#
# InstallShield Options File
#
# Wizard name: Install
# Wizard source: setup.jar
#
# This file can be used to configure Install with the options specified below
# when the wizard is run with the "-options" command line option. Read each
# setting's documentation for information on how to change its value.
#
# A common use of an options file is to run the wizard in silent mode. This lets
# the options file author specify wizard settings without having to run the
# wizard in graphical mode. To use this options file for silent mode
# execution, use the following command line arguments when running the wizard:
#
# -options "D:\installImage\WBI\responsefile.wpsclient.txt" -silent
#
#####

#####
#
# License Acceptance
#
# Valid Options : true  Accepts the license. Will install the product.
#                 false Declines the license. Install will not occur.
#
# If no install occurs, this will be logged to a temporary log file in the user's
# temporary directory.
#
# By changing the silentInstallLicenseAcceptance.value in this response file to
# "true", you agree that you have reviewed and agree to the terms of the IBM
# International Program License Agreement accompanying this program, which is
# located at CD_ROOT\WBI\LICENSES. If you do not agree to these terms, do not
# change the value or otherwise download, install, copy, access, or use the
# program and promptly return the program and proof of entitlement to the party
# from whom you acquired it to obtain a refund of the amount you paid.
#
#
-G licenseAccepted="false"

#####
#
# IBM WebSphere Process Server, V6.0 Install Location
#
# The install location of the product. Specify a valid directory into which the
# product should be installed. If the directory contains spaces, enclose it in
# double-quotes as shown in the Windows example below. Note that spaces in the
# install location is only supported on Windows operating systems.
#
# Below is the list of default install locations for each supported operating
# system. By default, in this response file, the Windows install location is
# used. If you want to use the default install location for another operating
# system, uncomment the appropriate default install location entry (by removing '#'') and
# then comment out (by adding '#'') the Windows operating system entry below.
#
#
```

```

# AIX Default Install Location:
#
# -P wbiProductBean.installLocation=/usr/IBM/WebSphere/ProcServer
#
# HP-UX, Solaris or Linux Default Install Location:
#
# -P wbiProductBean.installLocation=/opt/IBM/WebSphere/ProcServer
#
# Note: On Linux, the default directory has a lowercase "ibm".
#
# Windows Default Install Location:
#
# NOTE: The Windows operating system limits the length of a fully qualified path
#       to 256 characters. A long pathname for the installation root directory makes
#       it more likely that this limit will be exceeded when files are created during
#       normal product use. IBM recommends that you keep the pathname of the installation
#       root directory as short as possible.

-P wbiProductBean.installLocation="C:\Program Files\IBM\WebSphere\ProcServer"

#####
#
# Use Existing IBM WebSphere Application Server V6.0
#
# If you intend to use an existing installation of WebSphere Application Server V6.0 or
# WebSphere Application Server Network Deployment, V6.0, uncomment the following line
# (by removing '#').
#
# -W wasdetectionpanelInstallWizardBean.optionSelected="1"
#
# You must then set the above WebSphere Process Server install location to the install root
# of the existing WAS installation.
#
# Note that the install will fail if WebSphere Process Server has already been installed
# in the existing WAS install location.
#

#####
#
# Setup Type
#
# This value is required for the installation. Do not change this!
#

-W setuptypepanelInstallWizardBean.selectedSetupTypeId="Client"

```

共存

共存は、複数のエンティティーが同じシステムまたはネットワークで動作可能な機能のことです。

共存は、これらのエンティティーのインターオペラビリティを意味するわけではありません。ここで定義するように、共存は、さまざまな WebSphere サーバー構成が共存し、同じ製品のさまざまなバージョンが存在する場合もある単一の環境を指します。

共存のサポート

共存をサポートするには、システム内に共存する製品をインストール、構成、実行、および管理できる必要があります。

WebSphere サーバー構成を共存させるには、以下が必要です。

- WebSphere Application Server for z/OS
- WebSphere Process Server for z/OS

- ESB のみのサーバーとして構成された WebSphere Process Server

共存用にシステムをセットアップする場合は、以下の点に注意してください。

- **WebSphere Application Server for z/OS の依存関係**

WebSphere Process Server for z/OS は WebSphere Application Server for z/OS の上にインストールされるため、WebSphere Process Server for z/OS をインストールおよび構成する前に、あらかじめ WebSphere Application Server for z/OS 用の各サーバーを構成し、WebSphere Application Server for z/OS 共存に準拠させておく必要があります。詳しくは、WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターの『共存サポート』を参照してください。

- **バージョンの共存**

同じシステムに旧バージョンの製品を置くことができます。この製品の旧バージョンは、同じ LPAR 内に置くことも、別個の LPAR に置くこともできます。

WebSphere Process Server for z/OS を WebSphere Business Integration Server Foundation for z/OS サーバーの上にインストールすることはできません。

- **共存の場合のインストール**

共存の場合、以下のインストール・シナリオがサポートされます。

- WebSphere Application Server for z/OS、WebSphere Process Server、および WebSphere ESB の共存 (まだいずれの製品もインストールされていない場合)
- WebSphere Process Server for z/OS と WebSphere Application Server for z/OS の共存 (WebSphere Application Server for z/OS が既に存在する場合)
- 既存の WebSphere Application Server for z/OS における WebSphere Process Server for z/OS と、ESB のみのサーバーとして構成された WebSphere Process Server for z/OS の共存

ポート競合の回避

共存における重要な考慮事項は、ポートの競合を回避することです。

共存を計画している場合は特に、ポート番号の設定を確認します。

WebSphere Process Server for z/OS を、この製品、または WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Business Integration Server Foundation、および WebSphere Application Server for z/OS の別のインストール済み環境と同じサーバー上で共存させる場合は、ポートの競合が発生しないようにする必要があります。

WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Business Integration Server Foundation for z/OS、および WebSphere Application Server for z/OS の各ノードが同じシステム上に存在する場合、WebSphere Process Server for z/OS ノードを WebSphere Process Server for z/OS デプロイメント・マネージャー・セルに追加するときは、この手順を使用してポートの競合が発生しないようにします。

ポートの競合を回避して製品を共存させるための計画の一部として、このタスクでの手順を実行してください。

1. どの製品が共存しているかを調べます。例えば、単一の z/OS システムを使用して複数の WebSphere Process Server for z/OS インスタンスを収容することを

計画している場合は、2 番目以降の WebSphere Process Server for z/OS インスタンスのポートの割り振りを、既にインストールされている WebSphere Process Server for z/OS の最初のインスタンスとのポートの競合を回避するように構成する必要があります。

2. ポートの割り振りを構成します。 ポートの割り振りを構成するには、WebSphere Application Server for z/OS の管理コンソールで、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」>「プロセス・サーバー名 (YourWebServerName)」>「ポート」の順に進みます。

複数バージョンの WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、および WebSphere Business Integration Server Foundation でのポート番号設定

WebSphere Process Server のインストールを WebSphere Process Server の別のインストール、または WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Business Integration Server Foundation のインストールと共存させる場合に、ポートの競合が発生しないようにします。このトピックでは、これらの製品のポート番号の識別に関する参照情報を提供します。

WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.0.0.x、6.0.1.x、6.0.2.x) のポート番号

表 15. WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.0.0.x、6.0.1.x、6.0.2.x) のポート定義

ポート	WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus (下位に WebSphere Application Server Network Deployment を使用)	WebSphere Application Server	ファイル
	値	値	
HTTP_TRANSPORT	9080	9080	serverindex.xml および virtualhosts.xml
HTTP 管理コンソール・ポート (HTTP_TRANSPORT_ADMIN)	9060	9060	serverindex.xml および virtualhosts.xml
HTTPS トランスポート・ポート (HTTPS_TRANSPORT)	9443	9443	serverindex.xml および virtualhosts.xml
HTTPS 管理コンソール・セキュア・ポート (HTTPS_TRANSPORT_ADMIN)	9043	9043	serverindex.xml および virtualhosts.xml
BOOTSTRAP_ADDRESS	9809	2809	serverindex.xml
SOAP_CONNECTOR_ADDRESS	8879	8880	serverindex.xml

表 15. WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.0.0.x、6.0.1.x、6.0.2.x) のポート定義 (続き)

ポート	WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus (下位に WebSphere Application Server Network Deployment を使用)	WebSphere Application Server	ファイル
	値	値	
SAS_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	9401	9401	serverindex.xml
CSIV2_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	9403	9403	serverindex.xml
CSIV2_SSL_MULTIAUTH_LISTENER_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	9402	9402	serverindex.xml
ORB_LISTENER_ADDRESS	9100	9100	serverindex.xml
DCS_UNICAST_ADDRESS	9352	9353	serverindex.xml
SIB_ENDPOINT_ADDRESS	7276	7276	serverindex.xml
SIB_ENDPOINT_SECURE_ADDRESS	7286	7286	serverindex.xml
SIB_MQ_ENDPOINT_ADDRESS	5558	5558	serverindex.xml
SIB_MQ_ENDPOINT_SECURE_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	5578	5578	serverindex.xml
内部 JMS サーバー (JMSSERVER_SECURITY_PORT)	該当なし	5557	serverindex.xml

表 15. WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment (バージョン 6.0.0.x、6.0.1.x、6.0.2.x) のポート定義 (続き)

ポート	WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus (下位に WebSphere Application Server Network Deployment を使用)	WebSphere Application Server	ファイル
	値	値	
DRS_CLIENT_ADDRESS 非推奨: このポートは非推奨で、WebSphere Application Server の現行バージョンでは使用されなくなっています。	7989	7873	serverindex.xml
IBM HTTP Server ポート	該当なし	80	virtualhosts.xml、plugin-cfg.xml、および <i>IHSinstall_root/conf/httpd.conf</i>
IBM HTTPS サーバー管理ポート	該当なし	8008	<i>IHSinstall_root/conf/admin.conf</i>
CELL_DISCOVERY_ADDRESS	7277	該当なし	serverindex.xml
CELL_MULTICAST_DISCOVERY_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	7272	該当なし	serverindex.xml
NODE_MULTICAST_IPV6_DISCOVERY_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	5001	5001	serverindex.xml

ノードをデプロイメント・マネージャーのセルに統合する場合は、デプロイメント・マネージャーは、プロセス・サーバー・ノード上でノード・エージェント・サーバー・プロセスをインスタンス化します。ノード・エージェント・サーバーは、デフォルトでは以下のポート割り当てを使用します。

表 16. WebSphere Process Server nodeagent サーバー・プロセスのポート定義

ポート	値	ファイル
BOOTSTRAP_ADDRESS	2089	serverindex.xml
ORB_LISTENER_ADDRESS	9900	serverindex.xml
SAS_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS	9901	serverindex.xml

表 16. WebSphere Process Server nodeagent サーバー・プロセスのポート定義 (続き)

ポート	値	ファイル
CSIV2_SSL_MUTUALAUTH_LISTENER_ADDRESS	9202	serverindex.xml
CSIV2_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS	9201	serverindex.xml
NODE_DISCOVERY_ADDRESS	7272	serverindex.xml
NODE_MULTICAST_DISCOVERY_ADDRESS	5000	serverindex.xml
NODE_IPV6_MULTICAST_DISCOVERY_ADDRESS	5001	serverindex.xml
DCS_UNICAST_ADDRESS	9353	serverindex.xml
DRS_CLIENT_ADDRESS	7888	serverindex.xml
SOAP_CONNECTOR_ADDRESS	8878	serverindex.xml

WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.1.x と、WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.1.x のポート番号

WebSphere Business Integration Server Foundation は、拡張対象の製品と同じポートを使用します。そのため、WebSphere Application Server Network Deployment を拡張する場合は、表 17 内のその欄の下の値を使用してください。WebSphere Application Server を拡張する場合は、その欄の下の値を使用します。

表 17. WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.1.x と、WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.1.x のポート定義

ポート	WebSphere Application Server Network Deployment	WebSphere Application Server	ファイル
	値	値	
HTTP_TRANSPORT	該当なし	9080	serverindex.xml および virtualhosts.xml
HTTPS トランスポート・ポート (HTTPS_TRANSPORT)	該当なし	9443	serverindex.xml および virtualhosts.xml
HTTP 管理コンソール・ポート (HTTP_TRANSPORT_ADMIN)	9090	9090	serverindex.xml および virtualhosts.xml
HTTPS 管理コンソール・セキュア・ポート (HTTPS_TRANSPORT_ADMIN)	9043	9043	serverindex.xml および virtualhosts.xml
内部 JMS サーバー (JMSSERVER_SECURITY_PORT)	該当なし	5557	server.xml
JMSSERVER_QUEUED_ADDRESS	該当なし	5558	serverindex.xml
JMSSERVER_DIRECT_ADDRESS	該当なし	5559	serverindex.xml
BOOTSTRAP_ADDRESS	9809	2809	serverindex.xml
SOAP_CONNECTOR_ADDRESS	8879	8880	serverindex.xml
DRS_CLIENT_ADDRESS	7989	7873	serverindex.xml

表 17. WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.1.x と、WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.1.x のポート定義 (続き)

ポート	WebSphere Application Server Network Deployment	WebSphere Application Server	ファイル
	値	値	
SAS_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	9401	0	serverindex.xml
CSIV2_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	9403	0	serverindex.xml
CSIV2_SSL_MULTIAUTH_LISTENER_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	9402	0	serverindex.xml
IBM HTTP Server ポート	該当なし	80	virtualhosts.xml、plugin-cfg.xml、および <i>IHSinstall_root/conf/httpd.conf</i>
IBM HTTPS サーバー管理ポート	該当なし	8008	<i>IHSinstall_root/conf/admin.conf</i>
CELL_DISCOVERY_ADDRESS	7277	該当なし	serverindex.xml
ORB_LISTENER_ADDRESS	9100	9100	serverindex.xml
CELL_MULTICAST_DISCOVERY_ADDRESS テーブル・セルのサイズに合わせて、このエントリーに文字スペースが追加されました。実際のエントリーには文字スペースは含まれていません。	7272	該当なし	serverindex.xml

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.1.x のアプリケーション・サーバー・ノードをデプロイメント・マネージャーのセルに統合する場合、デプロイメント・マネージャーは、アプリケーション・サーバー・ノード上でノード・エージェント・サーバー・プロセスをインスタンス化します。ノード・エージェント・サーバーは、デフォルトでは以下のポート割り当てを使用します。

表 18. WebSphere Application Server および WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 5.1.x と、WebSphere Business Integration Server Foundation バージョン 5.1.x の nodeagent サーバー・プロセスのポート定義

ポート	値	ファイル
BOOTSTRAP_ADDRESS	2089	serverindex.xml
ORB_LISTENER_ADDRESS	9900	serverindex.xml
SAS_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS	9901	serverindex.xml
CSIV2_SSL_MUTUALAUTH_LISTENER_ADDRESS	9101	serverindex.xml
CSIV2_SSL_SERVERAUTH_LISTENER_ADDRESS	9201	serverindex.xml
NODE_DISCOVERY_ADDRESS	7272	serverindex.xml
NODE_MULTICAST_DISCOVERY_ADDRESS	5000	serverindex.xml
DRS_CLIENT_ADDRESS	7888	serverindex.xml
SOAP_CONNECTOR_ADDRESS	8878	serverindex.xml

メッセージング・エンジンがサーバーに作成されたら、ポート割り当ては表 19 のように定義されます。スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合、メッセージング・エンジンを作成するアクションは、インストールの一部です。Network Deployment 環境の場合、メッセージング・エンジンは、バス・メンバーの作成またはバス・メンバーへのメッセージング・エンジンの追加を行う管理アクションの一部として作成されます。

表 19. WebSphere Process Server jmsserver サーバー・プロセスのポート定義

ポート	値	ファイル
JMSSERVER_DIRECT_ADDRESS	5559	serverindex.xml
JMSSERVER_QUEUED_ADDRESS	5558	serverindex.xml
SOAP_CONNECTOR_ADDRESS	8876	serverindex.xml
JMSSERVER_SECURITY_PORT	5557	server.xml

WebSphere Process Server Client をインストールして、各種 WebSphere 製品の既存のインストール済み環境と共存させる

WebSphere Process Server for z/OS 環境と、WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、WebSphere Enterprise Service Bus、サポートされているバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境のいずれかを併用する目的で、Linux、UNIX、または Windows マシンに WebSphere Process Server Client をインストールする場合は、この手順を使用します。この手順では、WebSphere Process Server Client の CD から、インストール・ウィザードのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用します。

Linux、UNIX、Windows のいずれかのマシンで WebSphere Process Server Client をインストールする前に、以下の項目を確認してください。

- WebSphere Process Server for Multiplatforms インフォメーション・センターにアクセスできる。

WebSphere Process Server Client のインストール先は、Linux、UNIX、Windows のいずれかのマシンになるため、インフォメーション・センターで z/OS 以外のマシンへのインストールに関する内容を確認する必要があります。

- WebSphere Process Server Client のインストールの一環として WebSphere Application Server Network Deployment をインストールするのか、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.0.x.x の既存のインストール済み環境を使用するのか決定済みである。
- システムはすべてのハードウェア要件を満たしており、必要なすべてのソフトウェア相互前提条件および前提条件をインストール済みである。詳しくは、ハードウェアおよびソフトウェアの要件を参照してください
- インストールに備えて、使用しているオペレーティング・システムを Client マシン上で準備済みである。 WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 のインフォメーション・センターで、『インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。
- Linux または UNIX システムの root ユーザーとして、または Windows システムの管理者グループのメンバーとして、Client をインストールする。
- 以下のいずれかの CD-ROM から Client をインストールする。
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Windows
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for AIX
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Solaris on SPARC
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Solaris on x86 64-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for HP-UX
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for HP-UX on Itanium 64-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on x86 32-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on x86 64-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on iSeries and pSeries
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on zSeries 31-bit
 - WebSphere Process Server 6.0.2 Client for Linux on zSeries 64-bit

手順は、WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server バージョン 6.0.x.x、または WebSphere Application Server for z/OS 6.0.x.x のいずれかがシステムにインストールされていることを前提としています。既存のプロファイルは必要ありません。Client を CD-ROM から対話式にインストールすることも前提になっています。

1. Linux または UNIX システムでは root ユーザーとして、Windows システムでは管理者グループのメンバーとしてログオンします。
2. インストールするマシンの CD-ROM ドライブに CD-ROM を挿入して、以下の作業を行います。

必要に応じてドライブをマウントします。この手順については、WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターの『Linux および UNIX オペレーティング・システムでの CD-ROM のマウント』に記載されています。

3. WBI ディレクトリーに移動し、以下の手順に従って Client のインストール・ウィザードを開始します。
 - **Windows プラットフォームの場合:** install.exe ファイルを実行します。
 - **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** コマンド **install** を実行します。
4. インストーラーの「ようこそ」パネルで、「次へ」を選択します。
5. 「ソフトウェアのご使用条件 (Software License Agreement)」パネルで、IBM および IBM 以外のライセンス条項を検討し、「**IBM および IBM 以外の両方の条件を受諾します (I accept both the IBM and the non-IBM terms)**」を選択して、「次へ」を選択します。

インストール・ウィザードは、前提条件のパッチでサポートされるオペレーティング・システムを検査します。処理が終了すると、システムが検査に合格したかどうか「前提条件の検査 (Checking prerequisites)」パネルに表示されません。この手順ではシステムが合格することが前提となっています。

システムが合格しなかった場合は、インストールをキャンセルして必要な変更を行ってから、インストールを再始動します。

6. 「前提条件の検査 (Checking prerequisites)」パネルで、「次へ」を選択します。

インストール・ウィザードは、WebSphere Process Server、WebSphere Process Server Client、WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、および WebSphere Application Server Network Deployment がすでにインストールされているかどうかを検査します。この手順では、WebSphere Process Server、Client、または WebSphere Enterprise Service Bus はインストールされていませんが、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment がすでにインストールされている可能性があることが前提となっています。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment がまだインストールされていない場合は、「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。ステップ 8 に進んでください。

これらの製品のいずれかがシステムにすでにインストールされている場合は、「検出された既存のインストール (Existing installation detected)」パネルが表示されます。ステップ 7 に進んでください。

重要: .WASRegistry ファイルに WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の項目がある場合、インストーラーはこれらの未登録のインスタンスも検出します。このファイルは、インストール済み環境の \$USER_HOME ディレクトリーにあります。これらの製品のいずれかの未登録インストールを WebSphere Process Server のインストールと共に使用することはお勧めしません。また、サポートもされません。

7. 「検出された既存のインストール (Existing installation detected)」パネルで、以下のいずれかを行います。
 - WebSphere Application Server Network Deployment の新規コピーをインストールするには、「**WebSphere Application Server Network Deployment 6.0**」

の**新規コピーをインストールする (Install a new copy of WebSphere Application Server Network Deployment 6.0)**」を選択して、「次へ」を選択します。既存のインストール済み環境のシステム上に、この製品をインストールするときに考慮が必要な事項の概要を示す警告パネルが表示されます。「次へ」を選択して警告パネルを閉じます。「インストール・ロケーション」パネルが表示されます。ステップ 8 に進んでください。

- Client を、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の既存のインストール済み環境にインストールするには、「**WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 6.0 の既存のインストールを使用する**」または「**WebSphere Application Server バージョン 6.0 の既存のインストールを使用する**」を選択して、「次へ」を選択します。(インストールが複数ある場合、使用するインストールをドロップダウン・リストから選択します。)選択したアプリケーションで稼働中のサーバーがある場合、続行する前にサーバーを停止するよう警告パネルにアラートが示されます。「次へ」を選択して警告パネルを閉じます。「インストール・タイプ」パネルが表示されます。ステップ 9 に進んでください。
8. 「インストール・ロケーション」パネルで、デフォルトのインストール・ルート・ディレクトリを受け入れるか、または別のディレクトリを指定して、「次へ」を選択します。

デフォルトのインストール・ディレクトリについては、WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターの『デフォルトのインストール・パス』のトピックを参照してください。

重要:

- インストール・ルート・ディレクトリの値を指定しなければ、処理を続行することができません。
 - ディレクトリ名に ASCII 以外の特殊文字を使用しないでください。それらの文字はサポートされていません。
 - **Linux および UNIX プラットフォームの場合:** インストール・ルート・ディレクトリとしてシンボリック・リンクを使用しないでください。シンボリック・リンクは、サポートされていません。また、ディレクトリ・パスにはスペースを使用しないでください。
 - **Linux プラットフォームの場合:** 製品を正常にインストールするには、インストール・ルート・ディレクトリ・パスを 256 文字以下にする必要があります。
9. 「インストール・タイプ」パネルに、使用できる唯一のインストール・タイプとして「**クライアント・インストール**」が表示されます。「次へ」をクリックします。
10. 「インストールの要約」パネルで、インストールするコンポーネント、コンポーネントが消費するスペース量、およびコンポーネントのシステム上の場所を確認してから、製品をインストールする場合は「次へ」を、指定内容を変更する場合は「戻る」を選択します。

インストール済みの製品は、WebSphere Application Server Network Deployment と WebSphere Process Server のみです。

インストール・ウィザードは、アンインストーラー・プログラムを作成し、インストール中のコンポーネントを示す進行パネルを表示します。

既存のバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment を使用することを選択した場合、インストール・ウィザードはそのインストールを検査し、以下のいずれかを実行します。

- インストールのサービス・レベルが適切な場合は、何も行いません。
- インストールが以前のサービス・レベルである場合は、必要なフィックスを適用してインストールを適切なレベルに上げ、必要な暫定修正も適用します。

インストール終了時には、「インストールが完了しました」パネルが表示されます。

重要: インストール中にエラーが検出されると、「インストールが完了しました」パネルの代わりに他のパネルが表示されます。例えば、次のようなパネルがあります。

- インストールは完了しましたがエラーが生成されたことを示す「インストールが完了しましたがエラーが発生しました」パネル。
- インストールがすべて失敗したことを示す「インストールは失敗しました」パネル。

これらの各パネルには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ご使用のインストール済み環境でのトラブルシューティングのヒントについては、WebSphere Process Server for Multiplatforms 6.0.2 インフォメーション・センターで、以下のトピックを参照してください。

- 『ログ・ファイル』。関連のログ・ファイルの説明が必要な場合に参照してください。
- 『エラー・メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』。エラー・メッセージの説明が必要な場合に参照してください。

『ログ・ファイル』のトピックに記載されている関連のログ・ファイルの説明や、『エラー・メッセージ: インストールおよびプロファイルの作成と拡張』のトピックに記載されているエラー・メッセージについては、WebSphere Process Server for Multiplatform 6.0.2 インフォメーション・センターを参照し、インストール済み環境のトラブルシューティングのヒントについては、『インストールのトラブルシューティング』のトピックを参照してください。

11. 「終了」を選択して、インストール・ウィザードを閉じます。

ソフトウェアの構成

WebSphere Process Server for z/OS をインストールして、インストール・スクリプト (zSMPInstall.sh) を実行したら、既存の WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルを拡張して、目的の構成を作成する必要があります。

WebSphere Application Server for z/OS では、すべてのランタイム環境は ISPF カスタマイズ・ダイアログによって作成され、*default* というプロファイル名が使用されます。

注: manageprofiles コマンドや、ほかの管理コマンドで指定する -profile オプションは、WebSphere Application Server for z/OS では使用されません。

WebSphere Application Server for z/OS サーバー構成は、*profiles* ディレクトリーの下のディレクトリー構造に保持されます。したがって、基本のスタンドアロン・アプリケーション・サーバーの場合、構成ルートには *profiles* ディレクトリーがあり、そのディレクトリー内には、サーバー固有のすべてのディレクトリーとファイルを格納する「default」ディレクトリーがあります。profiles> default のディレクトリー構造は、デプロイメント・マネージャーや空の管理対象ノードでも同じです。

重要: このディレクトリー構造は重要です。というのも、サーバーや FFDC のログを探すときにこの profiles> default ディレクトリーをナビゲートすることが多いためです。

WebSphere Process Server for z/OS 構成を作成するには、WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイル WebSphere Process Server 構成データで拡張します。この拡張は、作成する構成に固有のパラメーターが含まれている応答ファイルを使用して構成スクリプトを実行することにより実現されます。

WebSphere バージョン 6 ランタイムのサービス統合バス (SIBus) コンポーネントは全面的にデフォルトのプラットフォーム・メッセージング (つまり、WebSphere Application Server 内部に完全に格納されている JMS の Java 実装) を基盤としています。

このセクションのサブトピックを使用して、WebSphere Enterprise のインストール後に実行しなければならない作業の詳細説明を調べてください。タスクをサポートする概念的なトピックへのポインターもあります。

Network Deployment 環境内でサーバーを作成することについてのトピックは、「*WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2 の管理 (Administering WebSphere Process Server for z/OS, version 6.0.2)*」PDF か、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2 オンライン・インフォメーション・センター <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6rxmx/index.jsp> で、『**WebSphere Process Server の管理 (Administering WebSphere Process Server)**』にナビゲートしても参照できます。

ビジネス・プロセス・コンテナのキュー・リソースを WebSphere MQ を使用して構成する場合の考慮事項

WebSphere Process Server for z/OS 製品構成には、Java Message Service (JMS) プロバイダーを使用する機能が含まれます。

ビジネス・プロセス・コンテナの JMS プロバイダーとして WebSphere MQ を使用する予定の場合は、以下の点を考慮する必要があります。

- キューおよびキュー・マネージャーを作成する前に WebSphere MQ をインストールしておく必要があります。
- z/OS では、通常、ビジネス・プロセス・コンテナは既存のキュー・マネージャーおよびリスナーを使用します。
- キュー・マネージャーおよびリスナーを作成するためのシェル・スクリプト・コマンドは、z/OS では使用されません。

- 管理コンソールのインストール・ウィザードを使用する方法や *bpeconfig.jacl* を実行する方法では、キューおよびキュー・マネージャーを自動的に作成することはできません。

管理コンソールのビジネス・プロセス・コンテナ・インストール・ウィザードや *bpeconfig.jacl* によって構成されるのは、*WebSphere* リソースのみです。

インストール・ウィザードまたは *bpeconfig.jacl* のいずれかを使用してビジネス・プロセス・コンテナを構成する場合は、これらに対応する手動の手順を実行して *WebSphere MQ* キューを作成する必要があります。

- *bpeconfig.jacl* または *createQueues.sh* を実行すると、**tmp_crt_ques.mqs** という名前のファイルが作成されます。

このファイル **tmp_crt_ques.mqs** の内容は、キュー定義のサンプルです。

これらのサンプル・キュー定義は、*bpeconfig.jacl* または *createQueues.sh* を実行する前に設定したパラメーターが基本になります。

bpeconfig.jacl または *createQueues.sh* を実行したら、作成された **tmp_crt_ques.mqs** ファイルを *WebSphere MQ* 管理者に渡してください。このファイルの内容を JCL (ジョブ制御言語) スクリプトの *WebSphere MQ z/OS* コマンドで使用すると、*WebSphere MQ* リソースを構成できます。

bpeconfig.jacl の実行方法については、*Business Process Choreographer* の資料に記載されている、キュー・マネージャーおよびキューの作成に関する情報を参照してください。

createQueues.sh の実行方法については、*Business Process Choreographer* の資料に記載されている、キュー・マネージャーおよびキューの作成に関する情報を参照してください。

データベース仕様書

WebSphere Process Server では、情報の保持、格納、追跡のためにさまざまなデータベースを使用します。

WebSphere Process Server の通常の操作では、大量のデータのアクセス、移動、追加が行われます。このデータはいくつかのデータベースに格納されますが、これらのデータベースは、構成スクリプトの実行前に作成します。

これらのデータベースを構成する方法として、次の 2 つのいずれかを選択できます。

- データベースをプログラマチックに構成する

製品構成スクリプトによるプログラマチックなデータベース構成を行うようにするには、応答ファイルに **dbDelayConfig=false** を設定します。

dbDelayConfig=false を指定すると、製品構成プロセスはデータベースに接続して、データ・ソースおよびデータベース・テーブルの定義を自動作成します。

- データベースを手動で構成する

製品構成スクリプトによるプログラマチックなデータベース構成を行わないようにするには、応答ファイルに **dbDelayConfig=true** を設定します。

dbDelayConfig=true を指定した場合は、シェル・スクリプトと ANT タスクを別々に実行して、データ・ソースおよびデータベース・テーブルの定義を手動で作成する必要があります。この作業は、構成スクリプトが正常に実行された後に行います。詳しくは、『[手動によるデータベースの構成](#)』を参照してください。

WebSphere Process Server では、以下のフィーチャーで JDBC データ・ソースおよび対応するリレーショナル・データベース・リポジトリ (Cloudscape または DB2 for z/OS) を使用します。

- AppScheduler、リカバリー、メディエーション、カスタマイズ、およびリレーションシップ
- Business Process Choreographer および Human Task Manager
- サービス統合バス (SIBus)
 - Business Process Choreographer (BPC)、Common Event Infrastructure (CEI)、Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バスおよびシステム・バスのメッセージング・エンジン (ME)。
- Common Event Infrastructure (CEI)
- メディエーション・イベント・ロギング用の WebSphere ESB (Enterprise Service Bus)

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成の場合や、デプロイメント・マネージャー構成の場合は、WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行する前に、以下のフィーチャーのデータベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。

- AppScheduler、リカバリー、メディエーション、カスタマイズ、およびリレーションシップ
- Business Process Choreographer および Human Task Manager
- Common Event Infrastructure (CEI)
- メディエーション・イベント・ロギング用の WebSphere ESB (Enterprise Service Bus)

WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行するときは、応答ファイル内のデータベース名およびストレージ・グループ名が、データベースおよびストレージ・グループの作成時に設定した名前と一致していることを確認してください。データベースおよびストレージ・グループについて詳しくは、『[データベースおよびストレージ・グループの作成](#)』を参照してください。

構成スクリプトによって実行される WebSphere Process Server 構成の一部として、データ・ソース定義がサーバーに作成され、データベース・テーブルおよびテーブル・スペースの SQL が生成されます。データベース管理者 (DBA) はこの SQL をサンプル DDL (データ定義言語) ステートメントとして使用できます。

データベースの構成方法 (製品構成の一部として構成するか、後でシェル・スクリプトと ANT タスクを別々に実行して構成するか) は、インストールおよび構成のシナリオによって異なります。例えば、WebSphere Process Server をインストールおよび構成して、Cloudscape データベースを使用するスタンドアロン・アプリケー

ション・サーバーを作成する場合は、応答ファイル内のデフォルト値を使用して製品構成スクリプトを実行すると、WebSphere Process Server とその各種データベースを構成できます。インストールおよび構成のシナリオが、データベースとして DB2 for z/OS を使用するスタンドアロン・サーバーの場合は、WebSphere Process Server 構成をサポートするように DB2 for z/OS サブシステムを構成するなど、いくつかの追加構成要件を満たす必要があります。

DB2 for z/OS を使用する WebSphere Process Server Network Deployment 構成の場合は、WebSphere Application Server のプロファイル、リソース、コンテナ、アプリケーション、およびその他のインフラストラクチャーがかなり複雑になります。しかしデータベース・セットアップに関しては、DB2 for z/OS を構成するための Network Deployment 構成ステップは、スタンドアロン構成の場合とまったく同様です。

データベースを必要とする WebSphere Process Server フィーチャーと、それぞれのフィーチャーに関連付けられているデータベースのデフォルト名を、表 20 にまとめます。

注: データベース名に割り当てられたデフォルト値は、必要に応じて編集できます。

表 20. WebSphere Process Server のコンポーネントと必要なデータベース

フィーチャー	データベース (デフォルト名)
Business Process Choreographer	BPEDB
Common Event Infrastructure	CEIDB 注: 構成プロセスでは、EVENT および EVENTCAT という 2 つのデータベースがそれぞれ定義されます。これらのデータベース名は、データベースおよびストレージ・グループを作成するときにも設定する必要があります。これらのデータベースには、Common Event Infrastructure データベース・テーブルおよびデータ・ソースの定義が保持されます。
リレーションシップ	WPRCSDB (共通データベース)
メディエーション	WPRCSDB (共通データベース)
リカバリー	WPRCSDB (共通データベース)
Application Scheduler	WPRCSDB (共通データベース)
セレクター/ビジネス・ルール	WPRCSDB (共通データベース)/リポジトリ DB (Cloudscape)
SIBus	ユーザー作成
ESB	ESBDB

バージョンなど、サポートされるデータベースについては、「WebSphere Process Server system requirements」に詳しい説明があります。各データベースは、文字ストリングのパラメーター *dbType* で表されています。*dbType* パラメーターは、ファイル名やファイル・パスで使用されます。サポートされているデータベースの *dbType* の値を 136 ページの表 21 にまとめます。

表 21. サポートされているデータベースとそれぞれに関連付けられている *dbType* の値

データベース	dbType
Cloudscape	Cloudscape V5.1
DB2 Universal OS/390 V7.1	DB2zOSV7
DB2 Universal OS/390 V8.1	DB2zOSV8
DB2 CLI	DB2

ファイル・パスとファイルの命名規則で使用する 2 番目のパラメーターは、*feature* です。このパラメーターでは、対象になっているデータベースを指定します (135 ページの表 20 を参照)。表 22 は、各データベースとそれぞれに関連付けられている *feature* パラメーターをまとめたものです。

表 22. 各データベースとそれぞれに関連付けられている *feature* 名

データベース	フィーチャー
Business Process Choreographer	ProcessChoreographer
Common Event Infrastructure	CEI
共通データベース	CommonDB
ESB	EsbLoggerMediation

WebSphere Process Server をインストールすると、データベース・スクリプトが以下の場所に作成されます。

注: *configuration_root/app_server_root* 変数は、WebSphere Application Server for z/OS 製品構成ルートとアプリケーション・サーバー・ルートを組み合わせたものを表します。これは、*WAS_HOME* ディレクトリとも呼ばれます。例えば、スタンドアロン・サーバーの場合の WebSphere Application Server for z/OS 製品構成ルートは */WebSphere/V6R0M0/AppServer* であり、デプロイメント・マネージャーの場合の WebSphere Application Server for z/OS 製品構成ルートは */WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager* です。

configuration_root/app_server_root/dbscripts/feature/dbType

SQL スクリプトは、各データベースごとに固有の場所に配置されます。この場所には、共通データベースと Business Process Choreographer データベースの両方のスクリプトが保持されます。Common Event Infrastructure データベースおよび ESB ロガー・メディエーション・データベースは、以下の場所をそれぞれ使用します。

configuration_root/app_server_root/profiles/profileName/event/dbscripts/dbType

および

configuration_root/app_server_root/util/EsbLoggerMediation/dbType

データベースの構成作業を先送りするには、応答ファイル・パラメーター *dbDelayConfig* を *true* に設定します。この値を *true* に設定した場合、製品構成スクリプトはデータベース構成タスクを呼び出さないで、ユーザーは用意されているスクリプトを使用してデータベースを手動で構成する必要があります。

重要: Network Deployment 構成の場合は、dbDelayConfig 値の設定にかかわらず、Business Process Choreographer データベースおよび Common Event Infrastructure データベースを手動で構成する必要があります。

データベースの作成を製品構成後に先送りすることにした場合は、応答ファイルに入力されたデータベース・パラメーターを含んだデフォルトのスクリプトが以下の場所に作成されます。

`/configuration_root/app_server_root/profiles/profileName/dbscripts/feature/dbType/dbName`

例、`WebSphere/V6R0/AppServer/profiles/profileName/dbscripts/feature/dbType/dbName`

注: 製品構成の一部としてデータベースを作成する場合、指定するデータベース・パラメーターに誤りがあると、拡張されるプロファイルにエラーが発生します。一方、データベースの作成を先送りすれば、構成はエラーなしで作成されますが、生成されたデータベース・スクリプトにはエラーが含まれているため、データベースを作成する前にスクリプトを編集する必要があります。

スクリプトは、そのままでも実行できますが、特定の要件を組み込むために編集することも可能です。データベースを作成する前に WebSphere Process Server を開始しようとする、エラー・メッセージが生成されます。

スクリプトのパスにはデータベースのタイプ (*dbType*) が含まれているので、スクリプト名にデータベースのタイプを組み込む必要はありません。スクリプトの命名規則を表 23 にまとめます。

表 23. データベース・スクリプトの命名規則

スクリプトのタイプ	スクリプト名
コンポーネント固有のスクリプト	<code>scriptName_componentName.sql</code>
コンポーネントに依存しないスクリプト	<code>scriptName.sql</code>

いずれにしても、JDBC プロバイダーの作成は、応答ファイルに指定したデータベース・パラメーターに基づいて、製品構成時に実行されます。ただし、適切な JDBC プロバイダーがサーバーに存在していれば、その既存の JDBC プロバイダーが使用され、新しいプロバイダーの作成は省略されます。

共通データベースの仕様

WebSphere Process Server を構成するときに、オプションで共通データベースを作成できます。このデータベースは、各種コンポーネントのリポジトリとして機能します。必要に応じて、このデータベースの作成を、製品構成後に先送りすることもできます。

共通データベース (CommonDB) は、以下の WebSphere Process Server コンポーネントで使用します。

- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- メディエーション
- Application Scheduler
- カスタマイズ (セレクターとビジネス・ルール・グループ)

共通データベースは、製品構成スクリプトの実行時に作成することも、WebSphere Process Server の構成後に構成プロセスの一部として生成された SQL を実行して作成することもできます。この SQL には、応答ファイルに指定したデータベース情報が含まれます。

注: 生成された SQL を実行するには、**ws_ant.sh** スクリプトを使用します。

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成またはデプロイメント・マネージャー構成の場合は、*WebSphere Process Server for z/OS* 構成スクリプトを実行する前に、共通データベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。

WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行するときは、応答ファイル内の共通データベース名およびストレージ・グループ名が、共通データベースおよびストレージ・グループの作成時に設定した名前と一致していることを確認してください。データベースおよびストレージ・グループについては、『**データベースおよびストレージ・グループの作成**』トピックを参照してください。

サポートされているデータベース・タイプ

共通データベースとして使用できるのは、以下のデータベースです。

- CloudscapeTM - Cloudscape は、スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプです。Network Deployment 環境では、Cloudscape は使用不可になります。使用しているデータベースが Cloudscape である場合、セレクトターおよびビジネス・ルール・グループのコンポーネントは共通データベースを使用しません。
- DB2 Universal DatabaseTM -
 - DB2 Universal Database for OS/390^(R) V7.1
 - DB2 Universal Database for OS/390 V8.1

DB2 Universal Database バージョン 8.1 は、Network Deployment 環境のデフォルトのデータベース・タイプです。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

セルごとに 1 つの DBMS インスタンスが存在します。

製品構成スクリプトによって起動されるデータベース・アクション

WebSphere Process Server for z/OS の SMP/E インストールの完了後、SQL は *smpe_root/dbscripts/CommonDB/dbType* に配置されます。

WebSphere Process Server for z/OS インストール・スクリプトを実行すると、*smpe_root* から WebSphere Application Server for z/OS */configuration_root/app_server_root* へのシンボリック・リンクが作成されます。

例えば、スタンドアロン構成の場合、シンボリック・リンクのリンク先は *WebSphere/V6R0/AppServer/dbscripts/CommonDB/dbType* となります。

デプロイメント・マネージャー構成の場合、シンボリック・リンクのリンク先は *WebSphere/V6R0/DeploymentManager/dbscripts/CommonDB/dbType* となります。

スタンドアロン・プロファイルおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの拡張

製品構成スクリプトを実行するときに、オプションで共通データベースを作成できます。

データベースの作成を構成スクリプトの実行後に先送りする場合、カスタマイズされたスクリプトは以下の場所に格納されます。

```
configuration_root/app_server_root/profiles/profilename/dbscripts/CommonDB/  
dbType/dbName
```

例えば、スタンドアロン・プロファイルは、`/WebSphere/V6R0/AppServer/profiles/profilename/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` に格納されます。一方、デプロイメント・マネージャー・プロファイルは、`/WebSphere/V6R0/DeploymentManager/profiles/profilename/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` に格納されます。

これらのスクリプトにはシンボリック・プレースホルダーが含まれており、このシンボリック・プレースホルダーは構成スクリプトによって応答ファイルの値に置換されます。

これらのスクリプトが実行するステップは、以下のとおりです。

- 応答ファイルでの選択内容に応じて、共通データベースに新規テーブルおよびテーブル・スペースを作成します (ローカル・データベースの場合にのみ有効)。

注: これらのスクリプトでは、テーブルとテーブル・スペースのみが作成されます。このスクリプトを (構成スクリプトの実行時に) 自動で実行するか、構成スクリプトの実行後に手動で実行するかにかかわらず、スクリプトを実行するためには、共通データベースの作成が前提条件となります。詳しくは、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

注: データベースの作成を構成スクリプトの実行後に先送りすることもできますが、その場合でも、応答ファイル内のデータベース・パラメーターに有効な情報を入力する必要があります。その情報に基づいて、WebSphere Process Server のデータ・ソースが作成されます。

- 応答ファイルで **delayConfig=false** が指定された場合、各コンポーネントは『createTable』 SQL を実行します。以下に例を示します。

```
dbscripts/CommonDB/DB2z0SV8/createTable_customization.sql  
dbscripts/CommonDB/DB2z0SV8/createTable_lockmanager.sql  
dbscripts/CommonDB/DB2z0SV8/createTable_mediation.sql  
dbscripts/CommonDB/DB2z0SV8/createTable_AppScheduler.sql  
dbscripts/CommonDB/DB2z0SV8/createTable_CommonDB.sql  
dbscripts/CommonDB/DB2z0SV8/createTable_Recovery.sql  
dbscripts/CommonDB/DB2z0SV8/createTable_Relationship.sql
```

SQL スクリプト

プロファイルの拡張後 (構成スクリプトの実行後) に、SQL スクリプトを使用してデータベースを構成できます。各共通データベース・クライアントの SQL スクリプトは、以下の場所にあります。共通データベースは、Network Deployment 環境の

中央データベースになります。テーブルは、デプロイメント・マネージャーのデフォルト・プロファイルで作成されるため、管理対象ノードの作成時に SQL スクリプトが実行されることはありません。

データベースの作成を構成スクリプトの実行後に先送りする場合、カスタマイズされたスクリプトは以下の場所に格納されます。

`configuration_root/app_server_root/profiles/profilename/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName`。例えば、`/WebSphere/V6R0/DeploymentManager/profiles/profilename/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` に格納されます。

SQL スクリプトの名前は、データベースに依存しません。データベースは、ファイルのパスで暗黙的に指定されているためです。命名規則は、以下のとおりです。

- コンポーネント固有のスクリプトの場合: `createTable_componentName.sql`。例えば、`createTable_Recovery.sql` などです。

制約事項

プロファイルの拡張時にユーザーが使用できるデータベース・コマンドに関して、いくつかの制約事項があります。

以下のデータベース・タイプでは、「新規データベースの作成」が使用不可になります。

- DB2 Universal Database for OS/390 V7.1
- DB2 Universal Database for OS/390 V8.1

これは、応答ファイル内の `dbCreateNew` プロパティの値を「false」にする必要があるという意味です。

『データベースおよびストレージ・グループの作成』の説明に従って、データベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。

テーブル

共通データベース・スクリプトは、プロファイルの拡張時に静的テーブルのみを作成します。各コンポーネントによって作成されるすべてのテーブルを以下の表にまとめます。

表 24. *WebSphere Process Server* の各コンポーネントによって作成されるテーブル

コンポーネント	テーブル名	スクリプト
リカバリー	FAILEDEVENTS FAILEDEVENTBOTYPES FAILEDEVENTMESSAGE	<code>createTable_Recovery.sql</code>
メディエーション	MEDIATION_TICKETS	<code>createTable_mediation.sql</code>
リレーションシップ	実行時に作成される動的テーブル	<code>createTable_Relationship.sql</code> (テーブル・スペースの作成、DB2 z/OSに限る)

表 24. WebSphere Process Server の各コンポーネントによって作成されるテーブル (続き)

コンポーネント	テーブル名	スクリプト
AppScheduler	WSCH_LMGR WSCH_LMPR WSCH_TASK WSCH_TREG	createTable_AppScheduler.sql
カスタマイズ (選 択/BR)	BYTESTORE BYTESTOREOVERFLOW APPTIMESTAMP	createTable_customization.sql
CommonDB	スキーマ・バージョン情報	createTable_commonDb.sql
ロック・マネージャ	PERSISTENTLOCK	createTable_lockmanager.sql

上記の SQL スクリプトはいずれも、各コンポーネントのスクリプトから commonDBUtility.ant を経由して実行されます (configRecovery > commonDBUtility > execute createTable_Recovery.sql など)。

応答ファイルで **delayConfig=true** と指定されている場合、SQL ファイルは作成されますが、実行されません。この場合は、構成後に手動で SQL を実行する必要があります。詳しくは、『手動によるデータベースの構成』を参照してください。

スクリプトのエクスポート

データベース・スクリプトは、以下のフォルダーにエクスポートされます。

`configuration_root/app_server_root/profiles/profilename/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName`

スクリプトは、応答ファイルの **delayConfig** プロパティに割り当てる値 (true または false) にかかわらず作成されます。これらのスクリプトには、データベース・テーブルおよびテーブル・スペースの基本的な作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、データベース・ツールを使用して、これらのスクリプトを実行します。

ユーザー ID の特権

一般に、応答ファイルで指定するユーザー信任状には、テーブル・スペース、テーブル、索引、およびストアド・プロシージャを作成する権限が必要です。「新規データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。

Common Event Infrastructure データベースの仕様

WebSphere Process Server のイベントをモニターするには、イベントの発生時にイベントをデータベースに取り込む必要があります。そのために使用するのが、Common Event Infrastructure (CEI) データベースです。

WebSphere Process Server の Common Event Infrastructure データベースは、スタンドアロン構成用に作成され、Network Deployment 環境内の各 Common Event Infrastructure サーバー・インスタンスごとに作成されます。Common Event Infrastructure データベースは内部のデバイスであり、ユーザーと直接対話することはありません。Common Event Infrastructure データベースとのすべての対話は、サ

ポートされている Common Event Infrastructure API を使用して実行する必要があります。詳しくは、『イベント・データベースの構成 (Configuring the event database)』を参照してください。

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成の場合や、管理対象ノード構成またはデプロイメント・マネージャー構成の場合は、*WebSphere Process Server for z/OS* 構成スクリプトを実行する前に、Common Event Infrastructure データベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。

WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行するときは、応答ファイル内の Common Event Infrastructure データベース名およびストレージ・グループ名が、データベースおよびストレージ・グループの作成時に設定した名前と一致していることを確認してください。データベースおよびストレージ・グループについて詳しくは、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

サポートされているデータベース・タイプ

Common Event Infrastructure データベースとして使用できるのは、以下のデータベースです。

- Cloudscape V5.1
- DB2 Universal Database for OS/390 V7.1
- DB2 Universal Database for OS/390 V8.1

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

Common Event Infrastructure データベースがインストール・スクリプトによって自動的に作成されるのは、スタンドアロン・サーバー構成の場合のみであるため、各サーバーに 1 つ DBMS のインスタンスが存在します。Common Event Infrastructure データベースのそれ以外のインスタンスは、すべて手動で作成する必要があります。

製品構成スクリプトによって起動されるデータベース・アクション

Common Event Infrastructure データベースの構成は、プロファイル・テンプレートの ANT スクリプト `configCei.ant` によって実行されます。このスクリプトは、Common Event Infrastructure API を呼び出します。対象の構成に必要なすべてのプロパティは、応答ファイルで用意します。

SQL スクリプト

データベース構成を実行するには、応答ファイルを作成し、その応答ファイルをパラメーターとして指定して Common Event Infrastructure API を呼び出します。Common Event Infrastructure がその応答ファイルを処理してスクリプトを作成すると、それらのスクリプトは、以下の場所に配置されます。`${profilePath}/event/dbscripts/${dbtype}`

JDBC プロバイダー

Common Event Infrastructure データベースを作成するためのスクリプトは、以下の場所に格納されます。 `configuration_root/app_server_root/profiles/profilename/event/dsscripts/${dbtype}`

コンポーネントの JNDI 名は以下のとおりです。

- `jndiName="jdbc/cei"`
- `jndiName="jdbc/eventcatalog"`

テーブル

多数のテーブルが作成されます。対象のデータベース製品で生成されるテーブルを確認するには、生成されるスクリプトを参照してください。

スクリプトのエクスポート

生成された SQL スクリプトを実行するためのシェル・スクリプトが以下のディレクトリーに作成されます。

`configuration_root/app_server_root/profiles/profilename/event/dbscripts/dbtype`

ユーザー ID の特権

一般に、応答ファイルで指定するユーザー信任状には、テーブル・スペース、テーブル、索引、およびストアド・プロシージャを作成する権限が必要です。

追加情報

Common Event Infrastructure の構成について詳しくは、「*WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2 Common Event Infrastructure*」PDF の『イベント・データベースの構成』のトピックから検索できます。または、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2 オンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6rxmx/index.jsp>) で、『**WebSphere Process Server の管理**』>『**Common Event Infrastructure の管理**』>『**インストール後の構成 (Post-installation configuration)**』>『**イベント・データベースの構成**』にナビゲートして、このトピックを参照してください。

Business Process Choreographer データベース仕様

Business Process Choreographer にはデータベースが必要です。その目的で使用するのが Business Process Choreographer データベース (BPEDB) です。

Business Process Choreographer データベースは、Business Process Choreographer 専用です。

サポートされているデータベース・タイプ

Business Process Choreographer データベースとして使用できるのは、以下のデータベースです。

- Cloudscape V5.1
 - Cloudscape JDBC プロバイダー (XA)

注: Network Deployment 環境では、Cloudscape を Business Process Choreographer データベースとして使用することはできません。WebSphere Process Server for z/OS の Network Deployment 構成を作成する場合は、データベースとして DB2 for z/OS を作成および構成する必要があります。

- DB2 Universal Database for OS/390 V7、V8
 - DB2 レガシー CLI ベース・タイプ 2 JDBC ドライバー (XA)
 - DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー (XA)

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成の場合や、管理対象ノード構成またはデプロイメント・マネージャー構成の場合は、WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行する前に、Business Process Choreographer データベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。

WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行するときは、応答ファイル内の Business Process Choreographer データベース名およびストレージ・グループ名が、データベースおよびストレージ・グループの作成時に設定した名前と一致していることを確認してください。データベースおよびストレージ・グループについて詳しくは、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

各デプロイメント・ターゲット (サーバーまたはクラスター) は、Business Process Choreographer の各種アプリケーションをサポートするように構成できます。Business Process Choreographer の各デプロイメント・ターゲットには専用のデータベースが必要です。デプロイメント・ターゲット間でデータベースを共用することはできません。

製品構成スクリプトによって起動されるデータベース・アクション

スタンドアロン・サーバーの WebSphere Process Server 構成スクリプトを実行するときに、Business Process Choreographer のサンプル構成を作成するパラメーターを応答ファイル (Cloudscape の場合は standAloneProfile.rsp、DB2 for z/OS の場合は standAloneProfileDB2.rsp) に設定できます。このサンプル構成は、Network Deployment 環境ではサポートされません。

Business Process Choreographer サンプル構成パラメーターを応答ファイルに設定して、スタンドアロン・サーバーの構成スクリプトを実行すると、bpeconfig.jacl が呼び出され、応答ファイルに指定したデータベース設定に基づいてデータベースが作成されます。

重要: Business Process Choreographer サンプル構成のデータベースは、Cloudscape を使用する場合のみ作成してください。このデータベースは、**delayConfig=false** の場合にのみ構成されます。

Network Deployment 環境での Business Process Choreographer データベースの構成作業は、多数のパラメーターを必要とする複雑なプロセスになる可能性があるため、この作業を行うには、WebSphere Process Server 構成と切り離して、Business Process Choreographer 構成スクリプト *bpeconfig.jacl* を手動で実行します。

注: DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成の場合や、管理対象ノード構成またはデプロイメント・マネージャー構成の場合は、構成スクリプトを実行する前に、まずデータベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。 データベースおよびストレージ・グループの作成時に設定したデータベース名およびストレージ・グループ名が、応答ファイル内のデータベース名およびストレージ・グループ名と一致していることを確認してください。

SQL スクリプト

Business Process Choreographer データベースを作成して管理するためのすべてのスクリプトは、以下のディレクトリーにあります。

Business Process Choreographer データベースを作成して管理するためのすべてのスクリプトは、ディレクトリー `configuration_root/app_server_root/dbscripts/ProcessChoreographer/dbType` にあります。これらのスクリプトについては、

「*WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2 Business Process Choreographer*」PDF の『スクリプトによる *Business Process Choreographer* の管理』に詳しい説明があります。または、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2 オンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6rxmx/index.jsp>) で、『**WebSphere Process Server の管理**』>『**Business Process Choreographer の管理**』>『**スクリプトによる Business Process Choreographer の管理**』にナビゲートします。

具体的には、データベースを作成するためのスクリプト (簡易セットアップ)、テーブル・スペース、データベース・スペース、スキーマを作成するためのスクリプト (拡張セットアップ)、スキーマをクリアするためのスクリプト、スキーマをドロップするためのスクリプト、テーブル・スペースまたはデータベース・スペースをドロップするためのスクリプトがあります。これらのスクリプトは、データベース管理者が手動で実行することもできますし、ユーザーがスクリプト呼び出し用の `bpeconfig.jacl` スクリプトを実行することもできます。

JDBC プロバイダー

適切な JDBC プロバイダーが存在しない場合、これが作成されます。

データ・ソース名は次のとおりです。

`BPEDataSourcedbType`

データ・ソースの JNDI 名は次のとおりです。

`jdbc/BPEDB`

制約事項

以下のデータベース・タイプでは、「新規データベースの作成」が使用不可になります。

- DB2 Universal Database for OS/390 V7.1 (DB2UDBOS390_V7_1)
- DB2 Universal Database for OS/390 V8.1 (DB2UDBOS390_V8_1)

Network Deployment 環境では、Cloudscape はサポートされていません。

テーブル

多数のテーブルが作成されます。対象のデータベース製品で生成されるテーブルを確認するには、生成されるスクリプトを参照してください。

スクリプトのエクスポート

Business Process Choreographer では、スクリプトをエクスポートできません。
Business Process Choreographer データベースの構成に必要なすべてのスクリプトは、製品のインストール時に、

```
configuration_root/app_server_root/dbscripts/ProcessChoreographer/dbType
```

ディレクトリにデプロイされます。

ユーザー ID の特権

一般に、応答ファイルで指定するユーザー信任状には、テーブル・スペース、テーブル、索引、およびストアド・プロシージャを作成する権限が必要です。「新規データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。

メッセージング・エンジン・データベースの仕様

メッセージング・エンジン・データベースは、運用情報を格納するために使用します。さらに、障害が発生した場合のリカバリーのためにメッセージング・エンジンが必要とする重要なオブジェクトも格納されます。

メッセージング・エンジン・コンポーネントは、アプリケーション・サーバー内部の中核となるメッセージング機能を提供します。メッセージング・エンジンは CRA で稼働します。メッセージング・エンジン同士は相互に通信できます。メッセージング・エンジンがバスに定義されると、明示的に構成しなくても、相互通信が暗黙的に指定されます。

各メッセージ・エンジンには、DB2 for z/OS データベースのテーブル一式を備えた独自のデータ・ストアがあります。これらのテーブルは、メッセージング・エンジンが永続的なデータを保持するために使用します。例えば、永続メッセージはこのデータ・ストアに保管されます。

このセクションでは、Service Component Architecture (SCA)、Business Process Choreographer、Common Event Infrastructure のメッセージ・エンジンが使用するデータベースについて取り上げます。SCA のメッセージング・エンジンのデフォルトのデータベースの名前は SCADB、他のメッセージング・エンジンの場合は MEDB です。組み込みの Cloudscape データベースについては、各メッセージング・エンジンに独自のデータベースまたはスキーマがあります。デフォルトのスキーマの名前は IBMWSSIB です。

SCA メッセージング・エンジンの構成には、管理コンソールの「サービス・コンポーネント・アーキテクチャーの構成」パネルを使用します。

メッセージング・エンジン・データベースについては、さまざまな面を制御できます。例えば、各メッセージング・エンジンごとにデータベースを作成することも、1つのデータベースですべてのメッセージング・エンジンに対応することも可能です。

す。同様に、多数のデータベース・スキーマを使用することも、1つのデータベース・スキーマを使用することもできます。

サポートされているデータベース・タイプ

メッセージング・エンジン・データベースとしてサポートされているデータベースとバージョンを以下のリストにまとめます。

- Cloudscape V5.1
- DB2 z/OS 7 および 8 (DB2 レガシー CLI ベース・タイプ 2 JDBC ドライバー (XA))
- DB2 z/OS 7 および 8 (DB2 Universal JDBC ドライバー・プロバイダー (XA))

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

各メッセージング・エンジンには、それぞれのメッセージ・エンジンをサポートするための独自のデータベースまたはスキーマがあります。

- システム・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- アプリケーション・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Common Event Infrastructure バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Business Process Choreographer バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。

メッセージング・エンジンがデータベースとの対話に使用する JDBC データ・ソースの命名規則は、以下のとおりです。

- システム・バス: `<node><server>-SCA.SYSTEM.<cell>..Bus`
- アプリケーション・バス: `<node><server>-SCA.APPLICATION.<cell>.Bus`
- Common Event Infrastructure バス: `<node><server>|<cluster>-CommonEventInfrastructure_Bus`
- Business Process Choreographer バス: `<node><server>.-BPC.<cell>.Bus`

Cloudscape データベースの命名規則は、以下のとおりです。

- システム・バス: `configuration_root/app_server_root/profiles/profilenamel/databases/com.ibm.ws.sib/(<node>.<server>|<cluster>)-SCA.SYSTEM.<cell>.Bus`
- アプリケーション・バス: `configuration_root/app_server_root/profiles/profilenamel/databases/com.ibm.ws.sib/(<node>.<server>|<cluster>)-SCA.APPLICATION.<cell>.Bus`
- Common Event Infrastructure バス: `configuration_root/app_server_root/profiles/profilenamel/event/CloudScapeEventBusDB/(<node>.<server>|<cluster>)-CommonEventInfrastructure_Bus`
- Business Process Choreographer バス: `configuration_root/app_server_root/profiles/profilenamel/databases/com.ibm.ws.sib/(<node>.<server>|<cluster>)-BPC.<cell>.Bus`

`<cell>` のデフォルトは、セル名です。これは、独自のバス ID 名でオーバーライドできます。管理コンソールでカスタマイズ名を作成することはできませんが、管理用タスクを使用すればその操作を実行できます。

製品構成スクリプトによって起動されるデータベース・アクション

スタンドアロン・プロファイル

メッセージ・エンジン・データベースは、インストールおよび構成時に作成されません。

Network Deployment

管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「*servername*」 > 「Service Component Architecture」パネルで、Service Component Architecture のメッセージ・エンジンを構成できます。

プロファイルの作成時に、以下の管理用タスクが実行されます。

- リモート宛先の場所:
 - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer (remoteMELocation は true)
 - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster (remoteMELocation は true)
- ローカル宛先の場所:
 - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer
 - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster

どちらのタスクでも、以下のパラメーターが渡されます。

- busDataSource
- meAuthAlias
- busSchemaName
- createTables
- systemBusId (デフォルトはセル名)

Business Process Choreographer の場合は、bpeconfig.jacl スクリプトを使用して、メッセージング・エンジンの構成を実行します。Common Event Infrastructure の場合は、用意されているスクリプトを使用して、メッセージング・エンジンを構成できます。

SQL スクリプト

WebSphere Process Server 製品の一部として SQLスクリプトが作成されることはありません。必要に応じて、既存の WebSphere Application Server for z/OS の基本スクリプトを使用して、データベースやテーブルを作成できます。管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「*servername*」 > 「Service Component Architecture」パネルで MEDB を構成するには、まず MEDB を手動で作成する必要があります。

JDBC プロバイダー

Service Component Architecture

JDBC プロバイダーの実装クラスが、拡張構成で選択されている実装クラスと一致しなければならない場合は、その JDBC プロバイダーが再利用されます。通常、同じデータベース・タイプを使用する場合は、実装クラスも一致します。一致する

JDBC プロバイダーが resource.xml ファイル内で検出されない場合は、templates/system (プロファイル構成) にある jdbc-resource-provider-templates.xml ファイルで、一致する JDBC プロバイダーが検索されます。プロバイダーの突き合わせは、実装クラスについても行われます。

Business Process Choreographer

メッセージング・エンジン・データベースの JDBC プロバイダーの作成手順は、BPEDB の場合の作成手順とよく似ています。詳しくは、143 ページの『Business Process Choreographer データベース仕様』を参照してください。

Common Event infrastructure

メッセージング・エンジン・データベースの JDBC プロバイダーの作成手順は、CEIDB の場合の作成手順とよく似ています。詳しくは、141 ページの『Common Event Infrastructure データベースの仕様』を参照してください。

制約事項

既知の制約事項はありません。

テーブル

テーブルについては、データ・ストアの WebSphere Application Server for z/OS のトピックを参照してください。

スクリプトのエクスポート

スクリプトはエクスポートされません。

ユーザー ID の特権

一般に、応答ファイルで指定するユーザー信任状には、テーブル・スペース、テーブル、索引、およびストアード・プロシージャを作成する権限が必要です。

エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベースの仕様

メディエーション・モジュールで処理されるメッセージは、エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベース (EsbLogMedDB) ログに記録できます。

エンタープライズ・サービス・バスのロガー・メディエーション・データベース (EsbLogMedDB) は、WebSphere Process Server の MessageLogger メディエーション・プリミティブによって使用されます。スタンドアロン構成について、自動的に作成されます。スタンドアロン・サーバー構成または Network Deployment 環境で追加のデータベースを使用するための DDL ファイルのセットも用意されています。

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成の場合や、管理対象ノード構成またはデプロイメント・マネージャー構成の場合は、WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行する前に、Enterprise Service Bus データベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。

WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行するときは、応答ファイル内の Enterprise Service Bus データベース名およびストレージ・グループ名が、データベースおよびストレージ・グループの作成時に設定した名前と一致していることを確認してください。データベースおよびストレージ・グループについては、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

サポートされているデータベース・タイプ

スタンドアロン応答ファイル (standAloneProfile.rsp) を使用して構成スクリプトを実行すると、Cloudscape 5.1 データベースが自動的に作成されます。ユーザーは適切な DDL ファイルを使用して、他のすべてのサポートされているデータベース・タイプのデータベースを手動で作成できます。DDL ファイルは Table.ddl という名前で、*configuration_root/app_server_root/util/EsbLoggerMediation/dbType* ディレクトリーから検索できます。同じファイルを使用して、Network Deployment 環境用の EsbLogMedDB を作成することができます。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

スタンドアロン構成については、1 つの DBMS インスタンスのみが自動的に作成されますが、ユーザーは、他のインスタンスを必要な数だけ手動で作成できます (別のデータ・ソースを使用し、別のデータベースを使用するために、それぞれのメッセージ・ロガー・メディエーション・プリミティブを構成できます)。

製品構成スクリプトによって起動されるデータベース・アクション

スタンドアロン・サーバー構成の場合

- スタンドアロン・サーバーの WebSphere Process Server を構成するときに、Cloudscape データベースが存在しない場合は、このデータベースが *configuration_root/app_server_root/profile/profileName/databases* ディレクトリーに作成されます。
- サーバー・スコープで、適切なデータベース・プロバイダーが検出または作成され、対応するデータ・ソースが作成されます。
- このアクションは、WebSphere Process Server のすべてのスタンドアロン・プロファイルの拡張時に実行されます。この拡張アクションをオーバーライドすることはできません。

デプロイメント・マネージャー構成

Table.ddl ファイルを使用して、データベースを手動で作成します。

SQL スクリプト

install_root/bin にある createMessageLoggerResource.jacl ファイルが製品の構成時に使用されます。すべてのデータベース・タイプの DDL ファイルは、*configuration_root/app_server_root/util/EsbLoggerMediation/<dbType>* ディレクトリーにあります。

JDBC プロバイダー

サーバー・スコープで適切な JDBC プロバイダーが取得された場合は、そのプロバイダーが使用されます。データ・ソースの名前は、「ESB Logger Mediation Data

Source」です。メッセージ・ロガー・メディエーションを構成して別のデータ・ソースを使用する場合は、独自のデータ・ソースを作成して使用できます。

制約事項

Cloudscape 5.1 は、スタンドアロン・プロファイルで作成されます。Network Deployment では、自動作成は行われません。メッセージ・ロガー・メディエーションのランタイム・コードは、固定テーブル名 MSGLOG と固定スキーマ修飾子 ESBLOG の使用を前提とします。

ランタイムで使用するスキーマ修飾子を指定できます。その値を指定しなければ、デフォルト値の ESBLOG が使用されます。

DB2 データベースが z/OS 上にある場合にスキーマ修飾子をオーバーライドするには、サーバー・スコープ **NamespaceBinding** を以下のように指定します。

```
Binding Identifier:  ESBMessageLogger
Name In Namespace:  esb/messageLogger/qualifier
String Value:       <schema qualifier>
```

テーブル

MSGLOG という 1 つのテーブルだけが作成されます。

スクリプトのエクスポート

スクリプトはエクスポートされません。

ユーザー ID の特権

一般に、応答ファイルで指定するユーザー信任状には、テーブル・スペース、テーブル、索引、およびストアド・プロシージャを作成する権限が必要です。

セクター/ビジネス・ルール・グループ・データベースの仕様

ビジネス・ルールやセクターの成果物を含んだアプリケーションをインストールすると、それらの成果物は、サーバーによってデータベース・テーブルに格納されるので、ユーザーはアプリケーションを変更しなくてもそれらの成果物を動的に更新できます。

セクターとビジネス・ルール・グループのコンポーネントは、セクターとビジネス・ルールの成果物を保持するためにデータベースを使用します。それらの成果物は、WebSphere Integration Developer で作成され、サーバーにインストールされます。管理コンソールからセクターに変更を加えたり、ビジネス・ルール・マネージャーからビジネス・ルールに変更を加えたりすると、最新の情報に基づいてデータベースが更新されます。EAR に含まれている元の成果物は、アプリケーションのインストール後の更新に合わせて同期することはありません。

サポートされているデータベース・タイプ

以下のデータベースがサポートされています。

- Cloudscape V5.1
- DB2 Universal Database for z/OS V8.1
- DB2 Universal Database for z/OS および OS/390 V7.1

応答ファイル `standAloneProfile.rsp` を使用して構成スクリプトを実行する場合、データベースは Cloudscape であり、独立した RepositoryDB が使用されます。

データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

スタンドアロン・プロファイルまたは Network Deployment 構成 (サーバーまたはサーバー・クラスター) で使用できるデータベース・インスタンスは 1 つだけです。スタンドアロン・サーバー構成内またはセル内のサーバーのすべてのセクターとビジネス・ルールは、同じリポジトリを使用します。別個のセクターやビジネス・ルールのために別個のデータベース・インスタンスを使用することはサポートされていません。

製品構成スクリプトによって起動されるデータベース・アクション

スタンドアロン構成

- 応答ファイル `standAloneProfile.rsp` および Cloudscape を使用してスタンドアロン・アプリケーション・サーバーの WebSphere Process Server を構成する場合は、構成スクリプト (`zWPSConfigsh.sh` または `zWESBConfig.sh`) によって `configDynamicArtifactRepository.ant` スクリプトが呼び出されます。このスクリプトは、`configDynamicArtifactRepository.jacl` コマンドを呼び出して、RepositoryDB の Cloudscape JDBC プロバイダーをノード・レベルで作成します。
- RepositoryDB データベースは、`/configuration_root/app_server_root/cloudscape/databases/RepositoryDB` に作成されます。サーバー・インストールのデフォルト・プロファイルは、同じデータベースを使用します。複数のサーバーを開始して、複数のサーバーでルールを使用することはできません。Cloudscape では、一度に 1 つの JVM しかデータベースにアクセスできないためです。

デプロイメント・マネージャー構成

応答ファイル `DmgrDB2.rsp` を使用して Network Deployment 構成の WebSphere Process Server を構成する場合は、セクターとビジネス・ルール・グループのコンポーネントのための適切なテーブルを、セルの CommonDB にセットアップする必要があります。デプロイメント・マネージャーまたは管理対象ノード内のサーバーのすべてのセクターとビジネス・ルールは、このデータベースを使用します。

SQL スクリプト

テーブル作成のための SQL スクリプトは、`/configuration_root/app_server_root/dbscripts/CommonDB/dbType` にあります。例えば、`/WebSphere/V6R0/AppServer/dbscripts/CommonDB/dbType` などです。

JDBC プロバイダー

共通データベースのデータ・ソースが使用されます。

制約事項

DB2 v7.0 for z/OS には、基本キーの長さが 256 バイトを超えてはならないという制限があります。セクターやビジネス・ルールの基本キーは、名前、ネーム・スペース、タイプで構成されています。DB2 v7.0 for z/OS を使用する場合は、セクターやビジネス・ルールの名前とネーム・スペースが 245 バイトを超えないことを

確認してください。これらの値は、WebSphere Integration Developer で変更できません。タイプの値は変更不能であり、約 8 バイトの長さになっています。この制限については、以下の技術情報があります。

- 技術情報 1226352 – http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?rs=0&q1=1226352&uid=swg21226352&loc=en_US&cs=utf-8&cc=us&lang=en
- 技術情報 1226351 – http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?rs=0&q1=1226352&uid=swg21226352&loc=en_US&cs=utf-8&cc=us&lang=en

セレクターやビジネス・ルールを含んだアプリケーションをサーバーまたはセルからアンインストールしても、共通データベースまたは RepositoryDB データベースに格納されている成果物は除去されません。これらは、「*WebSphere Process Server for z/OS* バージョン 6.0.2 の管理」の PDF にある『ビジネス・ルールおよびセレクター・データの除去 (*Removing business rule and selector data*)』のトピックにある指示に従って、手動で除去する必要があります。または、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2 オンライン・インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6rxmx/index.jsp>) で、『**WebSphere Process Server の管理**』>『**WebSphere Process Server リソースの管理**』>『**ビジネス・ルールおよびセレクターの概要**』>『**ビジネス・ルールおよびセレクターを含むモジュールの考慮事項**』>『**リポジトリからのビジネス・ルールおよびセレクター・データの除去**』にナビゲートしてください。

テーブル

セレクターとビジネス・ルールの成果物を保持するために、以下の 3 つのテーブルがあります。

- ByteStore
- ByteStoreOverflow
- AppTimestamp

スクリプトのエクスポート

スクリプトは、CommonDB と同じ場所にエクスポートされます。ただし、Cloudscape を使用する場合は例外であり、スクリプトはエクスポートされません。

ユーザー ID の特権

一般に、指定するユーザー信任状には、テーブル・スペース、テーブル、索引、およびストアド・プロシージャを作成する権限が必要です。

JDBC プロバイダー

アプリケーションは、JDBC プロバイダーによってリレーショナル・データベースと対話できます。

アプリケーションは、JDBC プロバイダーを使用してリレーショナル・データベースと対話します。JDBC プロバイダーには、特定のベンダーのデータベースにアクセスするための特定の JDBC ドライバー実装クラスが用意されています。そのデータベースへの接続プールを作成するには、データ・ソースを JDBC プロバイダーに関連付けます。JDBC プロバイダーとデータ・ソース・オブジェクトを組み合わせ

て実行できる機能は、非リレーショナル・データベースに接続するための J2EE コネクター・アーキテクチャー (JCA) 接続ファクトリーの機能と同等になります。

一般に、ローカル DB2 接続の場合は DB2 Universal JDBC ドライバー・タイプ 2 実装を使用し、リモート DB2 接続の場合はタイプ 4 実装を使用することをお勧めします。「ローカル」とは、DB2 サブシステムが WebSphere Process Server と同じ LPAR 内にあるという意味です。これに対し「リモート」は、DB2 サブシステムが WebSphere Process Server とは別の LPAR 上にあることをいいます。

JDBC プロバイダーについて詳しくは、WebSphere Application Server for z/OS バージョン 6.0 インフォメーション・センターの『JDBC プロバイダー』を参照してください。

データ・ソース

データ・ソースは、アプリケーションとリレーショナル・データベースの間のリンクを提供します。

アプリケーションは、データ・ソースを使用して、リレーショナル・データベースへの接続を取得します。データ・ソースは、他の種類のエンタープライズ情報システム (EIS) に接続するための J2EE コネクター・アーキテクチャー (JCA) 接続ファクトリーに類似しています。

データ・ソースは、JDBC プロバイダーに関連付けられています。JDBC プロバイダーは、特定のベンダーのデータベースに対する JDBC 接続に必要なドライバー実装クラスを提供します。アプリケーション・コンポーネントは、データ・ソースを直接操作して、データベースに対する接続インスタンスを取得します。各データ・ソースに対応する接続プールによって、接続を管理できます。

さまざまな設定で複数のデータ・ソースを作成し、それらを同じ JDBC プロバイダーに関連付けることも可能です。例えば、同じベンダー・データベース・アプリケーション内でさまざまなデータベースにアクセスするために複数のデータ・ソースを使用する、といった状況が考えられます。WebSphere Process Server では、Sun Microsystems によって定義されている以下のいずれかまたは両方のデータ・ソース・インターフェースを実装するための JDBC プロバイダーが必要です。アプリケーションは、これらのインターフェースを使用して、1 フェーズまたは 2 フェーズのトランザクション・プロトコルで稼働できるようになります。

- **ConnectionPoolDataSource** - 2 フェーズ・コミット・トランザクション以外のローカル・トランザクションとグローバル・トランザクションにアプリケーションが参加することを可能にするデータ・ソース。接続プールのデータ・ソースがグローバル・トランザクションに関わる場合は、トランザクション・マネージャーがトランザクションのリカバリーを実施することはありません。複数のリソース・マネージャーが関わっている場合は、バックアップ・リカバリー・プロセスをアプリケーション側で用意する必要があります。
- **XADataSource** - 1 フェーズまたは 2 フェーズのトランザクション環境にアプリケーションが参加することを可能にするデータ・ソース。このデータ・ソースがグローバル・トランザクションにかかわる場合は、WebSphere Application Server for z/OS のトランザクション・マネージャーがトランザクションのリカバリーを実施します。

データ・ソースについて詳しくは、WebSphere Application Server for z/OS バージョン 6.0 インフォメーション・センターの『データ・ソース』を参照してください。

データベースを作成する際の考慮事項

WebSphere Process Server for z/OS 製品構成には、データベースを使用する機能が含まれます。

WebSphere Process Server for z/OS の構成計画の一部として、データベースと、データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS コンポーネントが必要とするデータベース・ストレージ・グループを作成します。

データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS コンポーネント機能には以下のものがあります。

- Common Event Infrastructure

Common Event Infrastructure は 2 つのデータベースを使用します。イベント・データベースおよびイベント・カタログ・データベースです。

このため、両方のデータベースに対応するデータベースとストレージ・グループを作成する必要があります。

- Business Process Choreographer

- 共通データベースを共有するコンポーネント。これらの共通コンポーネントには以下のものがあります。

- リレーションシップ・サービス
- メディエーション
- リカバリー
- ビジネス・ルール
- セレクター
- スケジューラー

WebSphere Process Server for z/OS 製品パッケージには、WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行する前に作成する必要があるデータベースおよびデータベース・ストレージ・グループに対するデフォルト値を持つサンプル・ファイルが含まれています。

サンプルの値を調整し、データベース作成ユーティリティーを使用してデータベースおよびストレージ・グループを作成できます。

詳しくは、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

データベースの命名規則

WebSphere Process Server for z/OS が構成されている 1 つのサーバーのみが DB2 サブシステムを使用する場合は、サンプル応答ファイルに指定されているデフォルトのデータベース名を使用できます。

WebSphere Process Server for z/OS が構成されている複数のサーバー (同一セル内または異なるセル内) が同じ DB2 サブシステムまたは同じデータ共有グループを使用する場合は、以下の DB2 コンポーネントを切り分けるための命名規則を計画する必要があります。

- データベース名
- ストレージ・グループ名
- テーブルのスキーマ修飾子
- VCAT (バッキング VSAM データ・セットの高位修飾子)
- 上記データ・セットのボリュームまたは SMS ストレージ・グループ

以下の例は、セル名が B6CELL の場合の (9 つのデータベースの) データベース命名規則を示したものです。

Data-base	Dbase Name	Storage Group	Schema -Owner	VCAT DSN-hlq
WPS:	B6WPSDB	B6WPSSTO	B6CELL	B6WPS
BPE:	B6BPEDB	B6BPESTO	B6CELL	B6WPS
SIBs:	B6SIBAPP	B6SIBSTO	B6CELLA	B6WPS
	B6SIBSCA	B6SIBSTO	B6CELLS	B6WPS
	B6SIBBPC	B6SIBSTO	B6CELLB	B6WPS
	B6SIBCEI	B6SIBSTO	B6CELLC	B6WPS
CEI:	B6EVTDB	B6EVTSTO	B6CELL	B6WPS
	B6EVCTDB	B6EVTSTO	B6CELL	B6WPS
ESB:	B6ESBDB	B6ESBSTO	B6CELL	B6WPS

スキーマ名および SQLID

DB2 テーブルが同一 DB2 サブシステム内でほかの WebSphere Process Server for z/OS セルまたは WebSphere Business Integration Server セルと共存するには、その DB2 テーブルの修飾スキーマ名が一意でなければなりません。管理コンソールを使用して、「データ・ソース」>「カスタム・プロパティ」定義内で現在のスキーマまたは SQL ID 値を設定できます。

これらの名前を DDL 定義内で DB2 テーブルおよび索引名のプレフィックスとして付けたり、テーブルの作成に使用する DDL の前に SET CURRENT SQLID および COMMIT ステートメントを挿入したりできます。以下に例を示します。

```
SET CURRENT SQLID = 'B6CELL';
COMMIT;
```

データベース・テーブルを一意的に修飾するためのもう一つの方法として、WebSphere Application Server for z/OS サーバントのユーザー ID を修飾子として使用する方法があります。各 SI バス・データベースでは、すべてのバスに同じテーブル名が使用されるため、それぞれのテーブルには固有のスキーマ名が必要です。これと同じスキーマ名を SI バスのメッセージング・エンジンのデータ・ストア・プロパティにも設定する必要があります。WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『メッセージング・エンジン』を参照してください。

認可および権限

データベース、ストレージ・グループ、テーブルなどを作成する DB2 スクリプトやジョブを実行する場合は必ず、「SYSADM」権限を持つユーザー ID (ここでは「sysadm1」) を使用します。このユーザー ID は、データ・ソースに認証別名を定義する場合にも使用します。

WebSphere Process Server for z/OS サーバントが開始したタスクや、デプロイメント・マネージャーが開始したタスクで使用されるユーザー ID には、WebSphere Process Server for z/OS ランタイムでのテーブル・アクセスおよびテーブル作成の権限が必要になる可能性があります。

DB2 管理者と協力して、ご使用の環境でこれらのデータベースやテーブルの作成およびアクセスに必要な権限を調べてください。

DB2 テーブル・スペースおよびテーブル用の DASD スペース所要量

生成されたサンプル DDL ステートメントを 9 つすべてのデータベースについて使用する場合、DB2 システムのデフォルト割り振りによっては、3390 DASD ストレージの 3500 シリンダーを超えるスペースが必要になる可能性があります。

単純なテスト環境では、サンプル DDL の USING STOGROUP <storage_group_name> 節に「PRIQTY nnn」パラメーターを追加または変更することによって、スペースを削減できます。

PRIQTY 値の単位は 1 K バイトです。この値が指定されない場合、デフォルト値は、ご使用の DB2 システム・デフォルトによって異なります。テスト環境では、これらの値を小さくすることができます。

データベースおよびストレージ・グループの作成

WebSphere Process Server for z/OS コンポーネントが使用するデータベースおよびストレージ・グループを作成します。WebSphere Process Server for z/OS では、データベースとそれに関連するストレージ・グループを作成するためのデフォルト値で事前に構成されているサンプル・スクリプトを用意しています。

重要: このトピックの情報は、DB2 for z/OS を使用する構成にのみ当てはまりません。

サンプル・ファイルにアクセスするためには、SMP/E を使用してシステムに WebSphere Process Server for z/OS をロード済みであり、インストール・スクリプト zSMPInstall.sh を正常に実行していなければなりません。

構成スクリプトを実行する前に、WebSphere Process Server for z/OS が使用するデータベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。構成スクリプトを実行すると、データベース・テーブルの DDL および SQL が作成されます。これらの表を保持するためのデータベースは、表の DDL および SQL を作成するためのコンテキストとして存在する必要があります。

注: WebSphere Process Server for z/OS には、**DBUtility.sh** というユーティリティがパッケージ化されています。このユーティリティは、インストール HFS ディレクトリー (例: /usr/lpp/zWPS/V6R0/bin/DBUtility.sh.) にパッケージ化されて

います。このユーティリティを使用すると、データベースおよびストレージ・グループを作成できるだけでなく、SQL を実行してデータベース表を作成することもできます。 **DBUtility.sh** は、データベース管理者に相談してから使用するようにしてください。SQL を実行してデータベース表を作成するために **DBUtility.sh** を使用することについては、『手動によるデータベースの構成』を参照してください。

1. 以下のディレクトリー・パスからサンプル・ファイルにアクセスします。

注: WebSphere Application Server for z/OS の *configuration_root/app_server_root* は、構成のタイプによって異なります。 スタンドアロン構成の場合は、変数 */configuration_root/app_server_root* が */WebSphere/V6R0M0/AppServer* になります。 デプロイメント・マネージャー構成の場合は、変数 */configuration_root/app_server_root* が */WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager* になります。

- Business Process Choreographer の場合は、データベースと関連するストレージ・グループのサンプル・ファイルは、ディレクトリー */configuration_root/app_server_root/dbscripts/ProcessChoreographer/DB2/createBpcDb2Zos.sql* 内にあります。
- Common Event Infrastructure では、event および eventcat データベースとそれに関連するストレージ・グループのサンプル・ファイルは、ディレクトリー */configuration_root/app_server_root/dbscripts/CEI/DB2/createCeiDb2Zos.sql* 内にあります。
- 共通のデータベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS フィーチャーでは、ディレクトリー */configuration_root/app_server_root/dbscripts/CommonDB/DB2/createCommonDb2Zos.sql* 内にサンプル・ファイルがあります。
- Enterprise Service Bus では、データベースとそれに関連するストレージ・グループのサンプル・ファイルは、ディレクトリー */configuration_root/app_server_root/dbscripts/EsbLoggerMediation/DB2/createEsbDb2Zos.sql* 内にあります。

これらのファイルは、DB2 バージョン 7 および DB2 バージョン 8 に適用されます。

2. 上記のディレクトリーにあるサンプル・ファイルを作業ディレクトリーにコピーします。 例えば、共通データベースのサンプル・ファイルをコピーするには、以下のようにします。 `cp /configuration_root/app_server_root/dbscripts/CommonDB/DB2/createCommonDb2Zos.sql/myworkingdirectory`
3. ファイル内の値を必要に応じて編集します。 命名要件に適合するように、データベース名およびストレージ・グループ名を変更します。

注: サンプル・ファイルは、ASCII フォーマットで提供されます。 このファイルの表示、編集、および実行に使用するツールの機能によっては、ファイルを読み取り可能なフォーマット (EBCDIC) に変換することが必要になる場合があります。 以下の例に示すように、`iconv` を使用してファイルを EBCDIC に変換してから、`vi` を使用します。

```
iconv -t IBM-1047 -f ISO8859-1 createCommonDb2Zos.sql >
createCommonDb2Zos_EBCDIC.sql
vi createCommonDb2Zos_EBCDIC.sql
```

注: ファイルを ASCII フォーマットから EBCDIC に変換する場合、ファイルを正しく実行するためには、再変換して、ASCII フォーマットに戻す必要があります。ファイルを ASCII に戻すには、iconv を使用します。次の例のようにします。

```
iconv -t ISO8859-1 -f IBM-1047 createCommonDb2Zos_EBCDIC.sql >
createCommonDb2Zos_ASCII.sql
```

注: サンプル・ファイルに指定した名前は、製品の構成スクリプトで参照される応答ファイル内の値として引き継ぐ必要があります。

4. データベースおよびストレージ・グループを作成します。 サンプル・ファイルは、構成プロセス中にプログラマチックに実行されるものではありません。標準のデータベース定義ツールや手順を使用して、データベースとストレージ・グループを作成するための SQL をサブミットします。
5. 出力を検査して、各サンプル・ファイルがエラーなしに正常に実行されていることを確認します。

以下に、WebSphere Process Server for z/OS に付属のデフォルトのデータベース名とストレージ・グループ名のサンプル・ファイルの例を示します。

Business Process Choreographer

```
-- #####
-- # Licensed Materials - Property of IBM
-- # 5724-L01, 5724-I82, 5655-N53, 5655-R15
-- # (C) Copyright IBM Corporation 2006. All Rights Reserved.
-- # US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or disclosure
-- # restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.
-- #####
SET CURRENT SQLID = 'WSADMIN';

DROP DATABASE BPEDB ;
DROP STOGROUP BPEDBSTO;
CREATE STOGROUP BPEDBSTO VOLUMES (WBIUS3,WBIUS4,WBIUS5) VCAT WSDB2;
CREATE DATABASE BPEDB
  STOGROUP BPEDBSTO
  BUFFERPOOL BP0
  CCSID UNICODE
  INDEXBP BP0;
COMMIT;
```

共通データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS フィーチャー:

```
-- #####
-- # Licensed Materials - Property of IBM
-- # 5724-L01, 5724-I82, 5655-N53, 5655-R15
-- # (C) Copyright IBM Corporation 2006. All Rights Reserved.
-- # US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or disclosure
-- # restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.
-- #####
SET CURRENT SQLID = 'WSADMIN';

DROP DATABASE WPRCSDB ;
DROP STOGROUP WPRCSSTO;
CREATE STOGROUP WPRCSSTO VOLUMES (WBIUS3,WBIUSR,WBIUS5) VCAT WSDB2;
CREATE DATABASE WPRCSDB
  STOGROUP WPRCSSTO
  BUFFERPOOL BP0
  CCSID UNICODE
  INDEXBP BP0;
COMMIT;
```

共通データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS フィーチャーには、以下のものがあります。

- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- メディエーション
- Application Scheduler
- カスタマイズ (セレクターとビジネス・ルール・グループ)

Common Event Infrastructure

```
-- #####
-- # Licensed Materials - Property of IBM
-- # 5724-L01, 5724-I82, 5655-N53, 5655-R15
-- # (C) Copyright IBM Corporation 2006. All Rights Reserved.
-- # US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or disclosure
-- # restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.
-- #####
SET CURRENT SQLID = 'WSADMIN';

DROP DATABASE EVENT ;
DROP DATABASE EVENTCAT ;
DROP STOGROUP EVTSTO;
CREATE STOGROUP EVTSTO VOLUMES (WBIUS3,WBIUS4,WBIUS5) VCAT WSDB2;
CREATE DATABASE EVENT
  STOGROUP EVTSTO
  BUFFERPOOL BP0
  CCSID UNICODE
  INDEXBP BP0;
CREATE DATABASE EVENTCAT
  STOGROUP EVTSTO
  BUFFERPOOL BP0
  CCSID UNICODE
  INDEXBP BP0;
COMMIT;
```

Enterprise Service Bus

```
-- #####
-- # Licensed Materials - Property of IBM
-- # 5724-L01, 5724-I82, 5655-N53, 5655-R15
-- # (C) Copyright IBM Corporation 2006. All Rights Reserved.
-- # US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or disclosure
-- # restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.
-- #####
SET CURRENT SQLID = 'WSADMIN';

DROP DATABASE ESBDB ;
DROP STOGROUP ESBDBSTO;
CREATE STOGROUP ESBDBSTO VOLUMES (WBIUS3,WBIUS4,WBIUS5) VCAT WSDB2;
CREATE DATABASE ESBDB
  STOGROUP ESBDBSTO
  BUFFERPOOL BP0
  CCSID UNICODE
  INDEXBP BP0;
COMMIT;
```

これで応答ファイルを編集する準備が整いました。詳しくは、『応答ファイルでの作業』を参照してください。

応答ファイルでの作業

SMP/E によるインストール時に z/OS システムにロードされた応答ファイルには、サポートされる WebSphere Process Server for z/OS 構成のデフォルト・プロパティが格納されています。

応答ファイルの内容には、ランタイム環境を定義するリソースのプロパティが含まれます。WebSphere Process Server for z/OS 構成を実行するコマンドの一部として、応答ファイルのパスを指定します。

製品に含まれるサンプル応答ファイルのリストについては、『応答ファイルの選択』を参照してください。

以下の構文図に、コマンドで応答ファイルを指定する場所を示します。

DB2 for z/OS を使用したスタンドアロン構成用の WebSphere Process Server の構成



注:

- 1 製品の構成に必要なプロパティを含む応答ファイルの絶対パスを入力します。上記のパスは、製品に付属のデフォルト応答ファイルに対するパスです。入力するパス名は、ご使用の環境に固有のプロパティ値で変更した応答ファイルのパス位置を表している必要があります。

応答ファイルを使用するための予備知識

構成スクリプトを実行する前に、応答ファイルの以下の特性を知っておく必要があります。

- 製品に付属する応答ファイルに含まれるデフォルト値を、ご使用の環境に合わせて編集する必要があります。
- 応答ファイルを編集する前に、データベースおよび関連ストレージ・グループを作成する必要があります。

応答ファイル内の一部のデータベース・プロパティは、このデータベースおよび関連ストレージ・グループの名前と一致していなければなりません。これらのインスタンスは、サンプル応答ファイルで注記されています。

- 応答ファイルで設定するプロパティによっては、追加の構成ステップを行う必要がある場合があります。

値を設定する前に、選択した応答ファイルのコメント・セクションを確認してください。コメント・セクションには、プロパティに特定の値を設定した場合に生じる結果など、プロパティの設定に関する重要な情報が記載されています。

- 応答ファイルにコメントを追加する場合は注意してください。

応答ファイルにコメントを書き込む場合、そのコメントをプロパティ値と同じ行に置いてしまうと、コメントの前にクロス・ハッチ文字 (#) を置いた場合でも、Ant スクリプトはコメントをパラメーター値の一部として読み取ろうとするため、予測不能な結果になってしまいます。例えば、この例に示すようなコメントを入力してはなりません。

```
#####  
# DB2 Properties  
#####  
dbJDBCClasspath=/shared/db2810/jcc/classes # DB2 ClassPath Location  
dbJDBCProperties=/u/hutch/wpswork/ # DB2JccConfiguration.properties
```

上記のサンプルに示すコメントを正しく追加する方法は、以下のようになります。

```
#####  
# DB2 Properties  
#####  
# DB2 ClassPath Location  
dbJDBCClasspath=/shared/db2810/jcc/classes  
# DB2JccConfiguration.properties  
dbJDBCProperties=/u/hutch/wpswork/
```

- プロパティ値の終わりの「空スペース」に注意してください。

応答ファイルのプロパティの終わりにスペースを埋め込むと、問題が発生することがあります。応答ファイルでは、プロパティ値の終わりに余分なスペースを入れないでください。

応答ファイルの読み取り

応答ファイルには、多くの有用な情報がコメントの形式で記載されています。

構成スクリプトを実行する前に、応答ファイルを印刷して、コメント化されたテキストに目を通してください。応答ファイルのコメントは、特定の環境のための値を設定する方法を理解するのに役立ちます。

応答ファイルの先頭には、**GLOBAL Properties** という名前のセクションがあります。以下に例を示します。

```
#####  
# GLOBAL Properties  
#####  
JMSUSER=ibmuser  
JMSPASS=ibmuser  
DBUSER=wsadmin  
DBPASS=wsadmin  
CONFIGSERVER=server1  
DBLOCATION=LOC1  
#####
```

GLOBAL Properties セクションには、「共通の値」をまとめて記述します。共通の値は、(複数のコンポーネントによって使用されるため) 応答ファイル全体にわたって複数の場所に表示される値です。これらの共通の値を一箇所にまとめておくと、編集処理が容易になります。例えば、サーバー・プロパティをすべて **server1** に設定する必要があるときは、グローバル・プロパティを使用すると、値を確認し

た後、必要な場合はグローバル・プロパティの値を変更するだけで全インスタンスを変更できます。応答ファイルで変更するプロパティのすべてのインスタンスを検索する必要はありません。

GLOBAL プロパティを使用するには、以降のプロパティの値としてグローバル・キーワードの前に \$ 記号を付けて指定します。例えば、`serverName=$CONFIGSERVER` のようになります。

グローバル・プロパティは、応答ファイル内で \$ 記号によって参照される箇所よりも前に出現していなければなりません。

グローバル・プロパティを使用する場合は、プロパティの値全体を指定する必要があります。つまり、次のような記述はできません。

```
templatePath=/usr/$USERPATH/dir
```

グローバル・プロパティにより、製品構成コマンドのコマンド行が単純化され、オーバーライド引数 (-Z) も使用しやすくなります。

プロパティのコメントは、プロパティの上に示します。プロパティおよびデフォルト値は太字のテキストで示します。以下に例を示します。

```
#####  
#  
# Profile name  
#  
# On z/OS, there is always one and only one profile and that profile is named  
# default in each of the configurations.  
#  
# The profile referred to here is the default profile installed and  
# and configured during the WebSphere Application Server for z/OS install.  
#  
profileName=default
```

応答ファイルの選択

作成する構成のタイプに合った正しい応答ファイルを選択します。

応答ファイル・パラメーターの多くは、WebSphere 内の JDBC プロバイダー・データ・ソース定義や DB2 内の対応するデータベース定義に影響を及ぼします。適切な応答ファイル・テンプレートを使用するようにしてください。応答ファイル・テンプレートは、`../zWPS/V6R0/zos.config` ディレクトリーからコピーできます。これらのテンプレートは、多くの部分が類似していますが、相違点も多数あります。応答ファイル・テンプレートのコメント・セクションを確認するようにしてください。

応答ファイルを選択するには、さまざまな WebSphere Process Server for z/OS 構成について理解する必要があります。

WebSphere Process Server for z/OS には、サポートされる構成タイプごとのサンプル応答ファイルが含まれています。

サンプル応答ファイルはシステムにロードされており、インストールの SMP/E フェーズ中に作成された HFS に含まれています。

zWPSConfig.sh または **zWESBConfig.sh** を実行するときは、キーワード `-response` の後に、応答ファイルのユーザー定義絶対パスを指定します。

構成アクションの一部として、スクリプトにより、構成マネージャーに応答ファイルの絶対パス名が渡されます。次に、管理コンソールを WebSphere Process Server for z/OS の定義で更新し、デフォルト・プロファイルを拡張する一連の Ant スクリプトが実行されます。

スタンドアロン構成の作成に使用する応答ファイル

WebSphere Process Server for z/OS には、スタンドアロン構成の作成用として以下の応答ファイルがあります。

- `standAloneProfile.rsp`
- `standAloneProfileDB2.rsp`

standAloneProfile.rsp

`standAloneProfile.rsp` のサンプルは、`/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfile.rsp` にあります。

注: 指定されたディレクトリーは、`smpe_root` (インストール HFS) `/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config` の使用を前提としています。

`standAloneProfile.rsp` には、Cloudscape データベースの構成パラメーターが含まれています。

この応答ファイルを使用すると、アプリケーションをテストするための機能を十分に備えた WebSphere Process Server for z/OS サーバーが最小限の労力で実現されるので、初めて構成する場合はこの応答ファイルを使用してください。

`standAloneProfile.rsp` を使用して作成されたスタンドアロン構成は、実稼働環境用ではありません。

standAloneProfileDB2.rsp

`standAloneProfileDB2.rsp` のサンプルは、`/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfileDB2.rsp` にあります。

注: 指定されたディレクトリーは、`smpe_root` (インストール HFS) `/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config` の使用を前提としています。

`standAloneProfileDB2.rsp` には、DB2 for z/OS データベースの構成パラメーターが含まれています。

この応答ファイルを使用するには、DB2 for z/OS データベースをセットアップするための追加の構成要件を満たす必要があります。

この応答ファイルは、DB2 for z/OS バージョン 7 および DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートします。デフォルト・プロパティは DB2 for z/OS バージョン 8 を想定しています。DB2 for z/OS バージョン 7 をインストールしている場合は、DB2 for z/OS バージョン 7 をサポートするように、この応答ファイルのデフォルト値を変更する必要があります。

この応答ファイルでは、特に DB2 for z/OS バージョン 7 に適用されるプロパティがコメント化されています。

Network Deployment 構成のデプロイメント・マネージャーの作成に使用する応答ファイル

WebSphere Process Server for z/OS には、Network Deployment 構成でデプロイメント・マネージャーを作成するための応答ファイルがあります。このサンプル応答ファイルは DmgrDB2.rsp という名前で、/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/DmgrDB2.rsp にあります。

注: 指定されたディレクトリーは、smpe_root (インストール HFS)
/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config の使用を前提としています。

DmgrDB2.rsp ファイルには、DB2 for z/OS データベースの構成パラメーターが含まれています。

この応答ファイルを使用するには、DB2 for z/OS データベースをセットアップするための追加の構成要件を満たす必要があります。

この応答ファイルは、DB2 for z/OS バージョン 7 および DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートします。デフォルト・プロパティは DB2 for z/OS バージョン 8 を想定しています。DB2 for z/OS バージョン 7 をインストールしている場合は、DB2 for z/OS バージョン 7 をサポートするように、この応答ファイルのデフォルト値を変更する必要があります。

この応答ファイルでは、特に DB2 for z/OS バージョン 7 に適用されるプロパティがコメント化されています。

Network Deployment セルを作成するには、リソース、コンテナ、アプリケーション、およびその他のインフラストラクチャーを手動で構成する必要がありますが、データベース・セットアップに関しては、DB2 を使用するスタンドアロン・サーバーの場合と同様です。

管理対象ノード構成の作成に使用する応答ファイル

WebSphere Process Server for z/OS には、管理対象ノード構成を作成するための応答ファイルがあります。このサンプル応答ファイルは ManagedDB2.rsp という名前で、/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/ManagedDB2.rsp にあります。

注: 指定されたディレクトリーは、smpe_root (インストール HFS)
/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config の使用を前提としています。

ManagedDB2.rsp ファイルには、DB2 for z/OS データベースの構成パラメーターが含まれています。

この応答ファイルを使用するには、DB2 for z/OS データベースをセットアップするための追加の構成要件を満たす必要があります。

この応答ファイルは、DB2 for z/OS バージョン 7 および DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートします。デフォルト・プロパティは DB2 for z/OS バージョン 8

を想定しています。DB2 for z/OS バージョン 7 をインストールしている場合は、DB2 for z/OS バージョン 7 をサポートするように、この応答ファイルのデフォルト値を変更する必要があります。

この応答ファイルでは、特に DB2 for z/OS バージョン 7 に適用されるプロパティがコメント化されています。

サンプル応答ファイル

WebSphere Process Server for z/OS には、読み取り専用 HFS にインストールされるサンプル応答ファイルが付属します。

目的

構成コマンドの一部として、作成する構成に関連付けられた応答ファイルを渡します。

応答ファイルは、WebSphere Process Server for z/OS 製品の構成用のプロパティを含みます。

次のセクションでは、応答ファイルのサンプルの内容を示しています。

重要: このセクションで示すサンプルは、文書化する目的でのみ記載されたものです。 このセクションのサンプルを実際の応答ファイルとして使用しないでください。これらのサンプルには、インフォメーション・センター内のトピックへのリンクなど、文書固有の情報が含まれています。WebSphere Process Server for z/OS 製品構成を作成するときは、読み取り専用 HFS から応答ファイルをコピーして、内容を調整してください。

Cloudscape を使用するスタンドアロン構成の応答ファイル (standAloneProfile.rsp)

以下に、Cloudscape データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS スタンドアロン構成を作成する際に使用されるデフォルト応答ファイルのサンプルを示します。CloudscapeCloudscape データベースを使用するスタンドアロン構成は、実稼働環境での使用には適していませんが、この構成にすると、アプリケーションをテストするための機能を十分に備えた z/OS 用サーバーが最小限の労力で実現されるので、初めて作成する場合はこの構成が適しています。

注: 以下のサンプル応答ファイルは、Business Process Choreographer および WebSphere Business Integration Server のプロパティを含みます。Business Process Choreographer および WebSphere Business Integration Server は、WebSphere Process Server for z/OS の ESB のみのサーバー構成用に構成されません。これらのプロパティは構成処理によって無視されます。

```
#####  
# Licensed Materials - Property of IBM  
# 5655-N53, 5655-R15  
# (C) Copyright IBM Corporation 2006, 2007. All Rights Reserved.  
# US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or disclosure  
# restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.  
#####  
#####  
#  
# Sample Response file for creating a WebSphere Process Server for z/OS  
# stand-alone configuration using a Cloudscape database  
#
```

```

#####
#####
#
# Common Properties
#
#####
#
# Augment
#
# The "augment" keyword is required in order for the configuration to
# invoke the profile augmentation actions.
#
# There is no value associated with this keyword. The "augment" keyword
# may be replaced with "unaugment" in order to undo the results from a
# previous augment action. However, "augment" must be specified for the
# configuration to complete successfully.
#
# Note: The uninstall command also references the response file.
# However, you do not need to change the value from "augment" to
# "unaugment" when you run the zSMPInstall.sh to uninstall the
# product. For more information on uninstalling the product, see
# the topic "Run the install script to uninstall the product" in the
# information center.

#
augment

#####
#
# Profile name
#
# The profile referred to here is the default profile installed and
# and configured during the WebSphere Application Server for z/OS
# installation.
#
# As "default" is the standard name for the profile, accept the default
# value for this property.
#
profileName=default

#####
#
# Profile path
#
# This value should reflect the default profile root directory for
# WebSphere Application Server for z/OS
#
# The server configuration for WebSphere Application Server for z/OS
# resides in a directory structure under a "profiles" directory. So, for
# a base stand-alone application server in the config_root, there will
# be a "profiles" directory, and in that directory there will be a
# "default" directory that contains all of the directories and files
# (such as commands, configuration files, and log files) that define
# the runtime environment for your server configuration.
#
# In most cases the WebSphere Application Server for z/OS installation
# uses the default value shown below.
#
# The /WebSphere/V6R0M0/AppServer portion of the profile path
# shown below should be the configuration HFS / app_server_root for your base appserver.
#
# If the default value was not used to install and configure
# WebSphere Application Server for z/OS, make sure you edit the
# value below to represent the profile path that was used for the
# WebSphere Application Server for z/OS installation.
#
#
profilePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default
#####
#
# Template path
#
# This value determines which component augment actions are performed as
# part of the configuration process. Valid values are as follows:
#
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.wbicare
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.bfm
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.wbiserver
#

```

```

# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.*
#
# If one of the first three values is specified, only the augmentation
# actions within that directory are performed. The fourth value is the
# default (.../default.*), which when specified invokes augment actions
# for all of the template paths.
#
# Caution: Changing the default value causes an incomplete configuration
# of WebSphere Process Server for z/OS and should only be done if there
# is a valid reason to do so.
#
# The /WebSphere/V6R0M0/AppServer portion of the template path
# shown below should be the configuration HFS / app_server_root of your AppServer.
#
templatePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.*

#####
#
# Cell name
#
# This value determines the cell name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
The
# default value is SY1.

#
#
cellName=SY1

#####
#
# Node name
#
# This value determines the node name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
The
# default value is SY1.

#
# Node name under one cell has to be unique.
The default value is SY1.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the node that you
# configured for your stand-alone appserver.
#
nodeName=SY1

#####
#
# Server name
#
# This value determines the server name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
The
# default value is SY1.

#
# The value assigned should be the LONGNAME of the server that you
# configured for your stand-alone appserver.
#
serverName=server1

#####
#
# WBI Core Properties
#
#####
#
# Common Event Infrastructure Configuration
#
# The following entries are used to create a sample Common Event Infrastructure
# (CEI) configuration. ceiSampleJmsUser, ceiSampleJmsPwd, and ceiSampleServer
# values are required.
#
#####
#
# Java messaging service (JMS) userid for the CEI sample configuration
#
# Specifies the value of the Java Messaging Service (JMS) userid for a Common

```

```

# Event Infrastructure (CEI) configuration. Default value is ibmuser.
#
ceiSampleJmsUser=ibmuser

#####
#
# Java messaging service (JMS) password for the CEI sample configuration
#
# Specifies the value of the Java Messaging Service (JMS) password for a Common
# Event Infrastructure (CEI) configuration. Default value is ibmuser.
#
ceiSampleJmsPwd=ibmuser

#####
#
# Server name for the CEI sample configuration
#
# Specifies the value of the server name for the Common Event Infrastructure (CEI)
# sample configuration.
# The default value is server1.
#
ceiSampleServerName=server1

#####
#
# Database product name for Common Event Infrastructure
#
# Specifies the default value of the database product name for Common Event
# Infrastructure (CEI) processing. The default is CLOUDSCAPE_V51_1.
#
ceiDbProduct=CLOUDSCAPE_V51_1

#####
#
# Configure SCA
#
#####
#
# The following entries are used to create a Service Component Architecture
# sample configuration.
#
#####
#
# Configure SCA security
#
# If you do not want to create a Service Component Architecture
# sample configuration, change the default value from true to false and
# leave the values for the properties specified below blank
#
configureScaSecurity=true

#####
#
# SCA security user id
#
# If you chose to create a Service Component Architecture configuration above
# then specify the userid for that configuration. Default value is ibmuser.
#
scaSecurityUserId=ibmuser

#####
#
# SCA security password
#
# If you chose to create a Service Component Architecture configuration above
# then specify the password for SCA security user id for that configuration.
#
scaSecurityPassword=ibmuser

#####
#
# Business Process Choreographer Properties
#
# Set the properties below to create a sample Business Process
# Choreographer (BPC) configuration. #
# If you do not wish to create a sample Business Process Choreographer
# configuration, remove the default values for bpcmqUser, bpcmqPwd and
# bpcadminGroups.
#

```

```

# The Business Process Choreographer sample using Cloudscape is valid
# for a stand-alone server configuration in a test environment only
# (it is not a valid configuration for a production environment).
#
# The values specified here for the Business Process Choreographer
# sample configuration are used to run the Business Process
# Choreographer configuration script (bpeconfig.jacl)
#
# If you choose not to create a sample Business Process Choreographer
# configuration at this time, you can run bpeconfig.jacl after running the
# product configuration script to create all of the Business Process
# Choreographer resources.
#
# Running bpeconfig.jacl is the recommended method for configuring the
# Business Process Choreographer resources used in WebSphere Process
# server for z/OS. For more information on running bpeconfig.jacl, see
# the topic "Using the bpeconfig.jacl script to configure Business
# Process Choreographer" in the information center.#

#####
#
# MQ User Name
#
# Specify the user name for the configuration of resources for the Business
# Process Container using WebSphere MQ. The default is ibmuser.
#
bpcmqUser=ibmuser

#####
#
# MQ Password
#
# Specify the password for the MQ User Name for the configuration of resources
# for the Business Process Container using WebSphere MQ. The default is ibmuser.
#
bpcmqPwd=ibmuser

#####
#
# Admin BFM Users
#
# Specify the security role for the business process system administrator. This
# is the security role used by the Business Process Choreographer to run a
# business process. The default is ibmuser.
#
bpcadminUsers=ibmuser#####
#
# WBI Server Properties
#
#####
#
# Application Scheduler configuration
#
# Application Scheduler is used to schedule migration application group
# events. If you choose to configure Application Scheduler, set the
# property to "true". Otherwise, specify false.
#
# You must specify the server (into which the Application Scheduler
# application is installed) in the appSchedulerServer property below.
#
# For information on the Application Scheduler, see the topic
# "Application Scheduler" in the information center.

#
configureAppScheduler=true

#####
#
# Indicate the application server name on this node if you chose to configure
# it for Application Scheduler use. Usually, for a stand-alone profile the
# server name is "server1".
# The default is server1.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the server that you
# configured for your stand-alone appserver.
#
appSchedulerServer=server1

```

```

#####
#
# Configure Database Authentication for process server
#
# Various WebSphere Process Server for z/OS components use a database connection.
#
# Choose a database type and enter the database configuration information
# based on that type.
#
#####
#
# Database name
#
# Specify the name of the WebSphere Process Server database. The default is
# WBIDB.
#
dbName=WBIDB
#####
#
# Database type
#
# Specify the type of the WebSphere Process Server database. The default is
# Cloudscape.
#
dbType=Cloudscape
#####
#
# Create new or use existing database
#
# You can choose to use an existing database for WebSphere Process Server or
# you can create a new database. To use an existing database, set the following
# property to "false". To create a new database set the following property
# to "true". The default is "true".
#
dbCreateNew=true
#####
#
# Location of database server (database product installation root)
#
# Specify the database location. The database server location is the
# installation root for the database product. The default location for db type
# of cloudscape is /WebSphere/V6R0M0/AppServer/cloudscape/databases/WBIDB
#
dbLocation=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/cloudscape/databases/WBIDB

```

DB2 for z/OS を使用するスタンドアロン構成の応答ファイル (standAloneProfileDB2.rsp)

以下に、DB2 for z/OS データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成を作成する際に使用されるデフォルト応答ファイルのサンプルを示します。DB2 for z/OS を使用する WebSphere Process Server for z/OS 構成には、データベースおよび DB2 サブシステムの構成に関連した前提条件作業があります。DB2 for z/OS を使用する WebSphere Process Server for z/OS 構成の準備について詳しくは、『データベースを作成する際の考慮事項』および『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

この応答ファイルは、DB2 for z/OS バージョン 7 および DB2 for z/OS バージョン 8 をサポートします。デフォルト・プロパティは DB2 for z/OS バージョン 8 を想定しています。DB2 for z/OS バージョン 7 をインストールしている場合は、DB2 for z/OS バージョン 7 をサポートするように、この応答ファイルのデフォルト値を変更する必要があります。

この応答ファイルでは、特に DB2 for z/OS バージョン 7 に適用されるプロパティがコメント化されています。

注: 以下のサンプル応答ファイルは、Business Process Choreographer および WebSphere Business Integration Server のプロパティーを含みます。 Business Process Choreographer および WebSphere Business Integration Server は、 WebSphere Process Server for z/OS の ESB のみのサーバー構成用に構成されません。これらのプロパティーは構成処理によって無視されます。

```
#####  
# Licensed Materials - Property of IBM  
# 5655-N53, 5655-R15  
# (C) Copyright IBM Corporation 2006, 2007. All Rights Reserved.  
# US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or disclosure  
# restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.  
#####  
#  
# Sample Response file for creating a WebSphere Process Server for z/OS  
# stand-alone configuration using a DB2 for z/OS database.  
#  
#####  
# GLOBAL PROPERTIES  
#  
# Global properties prepended by the symbol $ may used as substitution  
# for other values in this file. The global property value must be the  
# complete value to be substituted.  
#  
# See examples of $JMSUSER used in this file.  
#  
# Note: Global Properties must display in the response file before they  
# are referenced.  
#  
# For a description of how to use Global properties, see the section on  
# "Reading the response file" in Working with response files topic in the  
# information center.#  
#  
#####  
JMSUSER=ibmuser  
JMSPASS=ibmuser  
CONFIGSERVER=server1  
#####  
# The following Global Properties are used to set values for databases  
# used by WebSphere Process Server for z/OS components.  
#  
# The default values assigned are used to set the corresponding value  
# for all the component databases.  
#  
# If the same database product and version is used for all components,  
# then most component values can be set by simply using the value of  
# the Global Property.  
#  
# Note that some properties, such as dbName, must be unique for each  
# component and therefore cannot be set with a Global Property.  
#  
# If database products or versions differ for components, then  
# component-specific values must be set individually, and the Global  
# Properties can not be used.  
#  
# See the individual components for property descriptions. Note that  
# some components do not use all the database Global Properties.  
#  
# For information on databases used by WebSphere Process Server  
# for z/OS components, see "Database specifications" in the information  
# center.  
# For information on databases used by WebSphere Process Server  
# for z/OS components, see Database specifications in the information  
# center.  
#  
# The default values of the Global Properties in this response file  
# are for DB2 for z/OS version 8.  
#  
# For DB2 version 7, change the value of Global Property DBPRODUCT to  
# DB2UDBOS390_V7_1 and set the other the other Global Properties as  
# appropriate.  
#  
#####
```

```
DBPRODUCT=DB2UDBOS390_V8_1
DBLOCATION=LOC1
DBHOME=/db2810/jcc
DBPROPERTIES=/db2810/jcc/properties
DBJDBCCLASSPATH=/db2810/jcc/classes
DBUSER=wsadmin
DBPASS=wsadmin
DBHOSTNAME=localhost
DBSERVERPORT=446
```

```
#####
#
# Common Properties
#
#####
#
# Augment
#
# The "augment" keyword is required in order for the configuration to
# invoke the profile augmentation actions.
#
# There is no value associated with this keyword. The "augment" keyword
# may be replaced with "unaugment" in order to undo the results from a
# previous augment action. However, "augment" must be specified for the
# configuration to complete successfully.
#
# Note: The uninstall command also references the response file.
# However, you do not need to change the value from "augment" to
# "unaugment" when you run the zSMPInstall.sh to uninstall the
# product. For more information on uninstalling the product, see
# the topic "Run the install script to uninstall the product" in the
# information center.
```

```
#
augment
```

```
#####
#
# Profile name
#
# On z/OS, there is always one and only one profile and that profile is
# named "default" in each of the configurations.
#
# The profile referred to here is the default profile installed and
# configured during the WebSphere Application Server for z/OS
# installation.
#
# As "default" is the standard name for the profile, accept the default
# value for this property.
```

```
#
profileName=default
```

```
#####
#
# Profile path
#
# This value should reflect the default profile root directory for
# WebSphere Application Server for z/OS
#
# The server configuration for WebSphere Application Server for z/OS
# resides in a directory structure under a "profiles" directory. So, for
# a base stand-alone application server in the config_root, there will
# be a "profiles" directory, and in that directory there will be a
# "default" directory that contains all of the directories and files
# (such as commands, configuration files, and log files) that define
# the runtime environment for your server configuration.
#
# In most cases the WebSphere Application Server for z/OS installation
# uses the default value shown below.
#
# The /WebSphere/V6R0M0/AppServer portion of the profile path
# shown below should be the configuration HFS / app_server_root for your base
# appserver.
#
# If the default value was not used to install and configure
# WebSphere Application Server for z/OS, make sure you edit the
# value below to represent the profile path that was used for the
# WebSphere Application Server for z/OS installation.
```

```

#
#
profilePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default
#####
#
# Template path
#
# This value determines which component augment actions are performed as
# part of the configuration process. Valid values are as follows:
#
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.wbicore
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.bfm
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.wbiserver
#
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.*
#
# If one of the first three values is specified, only the augmentation
# actions within that directory are performed. The fourth value is the
# default (.../default.*),which when specified invokes augment actions
# for all of the template paths.
#
# Caution: Changing the default value causes an incomplete configuration
# of WebSphere Process Server for z/OS and should only be done if there
# is a valid reason to do so.
#
# The /WebSphere/V6R0M0/AppServer portion of the template path
# shown below should be the configuration HFS / app_server_root for your base
# appserver.
#
templatePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.*
#
# Cell name
#
# This value determines the cell name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
# The
# default value is SY1.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the cell that you
# configured for your stand-alone appserver.
#
cellName=SY1
#####
#
# Node name
#
# This value determines the node name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
# The
# default value is SY1.
#
# Node name under one cell has to be unique.
# The default value is SY1.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the node that you
# configured for your stand-alone appserver.
#
nodeName=SY1
#####
#
# Server name
#
# This value determines the server name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
# The
# default value is server1.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the server that you
# configured for your stand-alone appserver.
#
serverName=$CONFIGSERVER

```

```

#####
#
# Create new or use existing database
#
# For a configuration using DB2 for z/OS, the database will always be
# an existing database. The option to create a new database as part of
# the configuration process does not apply when the database is DB2
# for z/OS.
#
# As a prerequisite to creating a stand-alone configuration that uses
# DB2 for z/OS, you must create the databases and their associated
# storage groups.
#
# Because of this prerequisite, the value of this property must indicate
# that you are using an existing database.
#
# Accept the default value of false to indicate that you are not
# creating a new database.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.

#
# Accept the default value.
#
dbCreateNew=false

#####
#
# Delay Configuration of the database table and data source definitions
#
# If the database and storage groups were defined as described in "Creating
# the databases and storage groups", the configuration process can connect
# to the database and define the tables and tablespaces automatically.
#
# Specify "true" to prevent the configuration process from running
# the scripts that will create the data source and database table
# definitions automatically.
#
# Note: Delaying automatic database configuration will require you to
# run the scripts to create the data source and database table
# definitions manually. You can do this after you have run the
# configuration script successfully. For more information, see the
# topic "Configuring the databases manually" in the information
# center

#
# Specify "false" to allow the configuration process to run the scripts
# that will create the data source and database tables definitions
# automatically.
#
# The default value is "false".
#
# Note: Accepting the default value allows the configuration process
# to connect to the database and create the definitions for the data
# sources and database tables automatically. Always consult with your
# Database administrator with regard to updating the database
# automatically.
#
dbDelayConfig=false

#####
#
# WBI Core Properties
#
#####
#
# Common Event Infrastructure Configuration
#
# The following entries are used to create a sample Common Event
# Infrastructure(CEI) configuration. ceiSampleJmsUser, ceiSampleJmsPwd
# and ceiSampleServerName are required properties.
#
# The userids/passwords in this response file are used to create J2EE
# authentication aliases to access various resources that will be
# created as part of the augmentation actions invoked by the
# configuration script.

```

```

#####
#
# Java messaging service (JMS) userid for the CEI sample configuration
#
# Specifies the value of the Java Messaging Service (JMS) userid for a
# Common Event Infrastructure (CEI) configuration. Default value is
# ibmuser.
#
ceiSampleJmsUser=$JMSUSER
#####
#
# Java messaging service (JMS) password for the CEI sample configuration
#
# Specifies the value of the Java Messaging Service (JMS) password for a
# Common Event Infrastructure (CEI) configuration. Default value is
# ibmuser.
#
ceiSampleJmsPwd=$JMSPASS
#####
#
# Server name for the CEI sample configuration
#
# Specifies the value of the server name for the Common Event
# Infrastructure (CEI) sample configuration. The default value is
# server1.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the server that you
# configured for your stand-alone appserver.
The Common Event
# Infrastructure component will be configured on the server.
#
ceiSampleServerName=$CONFIGSERVER
#####
#
# Database name for Common Event Infrastructure
#
# The property for the Common Event Infrastructure database name
# should NOT be changed from the default value CEIDB.
#
# The configuration process defines two databases named EVENT and
# EVENTCAT respectively. These database names should also be set
# when you create the database and storage groups. These databases
# will hold the definitions for the CEI database tables and data
# sources.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.
ceiDbName=CEIDB
#####
#
# Database Storage Group for Common Event Infrastructure
#
# Specify the Database Storage Group name for the configuration of the
# Common Event Infrastructure database. This value will be substituted in
# all CEI generated DDL/SQL definitions.
#
# This value must match the storage group name set when you created the
# database and storage groups.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.
#
# The default value is EVTSTO.
#
ceiDbStorageGroup=EVTSTO
#####
#
# Database SQL ID for Common Event Infrastructure
#

```

```

# The following Common Event Infrastructure SQL ID is for future use
# only and should not be changed from the default value WSADMIN.
#
ceiDbSqlId=WSADMIN
#####
#
# Database product name for Common Event Infrastructure
#
# Specifies the default value of the database product name for Common
# Event Infrastructure (CEI) processing. The default value is
# DB2UDBOS390_V8_1.
#
# Valid Values are:
#
#         DB2UDBOS390_V8_1 for DB2 Version 8
#         DB2UDBOS390_V7_1 for DB2 Version 7
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
ceiDbProduct=$DBPRODUCT
#####
#
# Database Connection Location for Common Event Infrastructure
#
# Specifies the database location for Common Event Infrastructure
# database. This value will be used in place of the database name on the
# WebSphere data source definition.
#
# The default value is LOC1.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
ceiDbConnectionLocation=$DBLOCATION
#####
#
# Database Home Directory for Common Event Infrastructure
#
# Specify the Database Home JCC Directory. This value will vary
# depending on the version of DB2 being used and where the database
# is installed. #
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
# The default value is /db2810/jcc.
#
ceiDbHome=$DBHOME
#####
#
# Database DB2 JCC Properties Directory for Common Event Infrastructure
#
# Specify the directory that contains the DB2JccConfiguration.properties
# file.
This file will be required by systems containing multiple DB2
# instances or using DB2 DataSharing. #
# This value will vary depending on the version of DB2 being used and
# where it is installed. The default value is /db2810/jcc/properties.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
ceiDbJDBCProperties=$DBPROPERTIES
#####
#
# Database JDBC Driver Path for Common Event Infrastructure
#
# Specify the JDBC Driver Path for Common Event Infrastructure database.
# This will vary depending on the version of DB2 being used and where it
# is installed. The default value is /db2810/jcc/classes.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#

```

```

#
ceiDbJDBCClasspath=$DBJDBCClasspath
#####
#
# Database User ID for Common Event Infrastructure
#
# Specify the User ID for the configuration of the Common Event
# Infrastructure database. The default value is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
ceiDbUser=$DBUSER
#####
#
# Database Password for Common Event Infrastructure
#
# Specify the Password for the configuration of the Common Event
# Infrastructure database. The default value is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
ceiDbPwd=$DBPASS
#####
#
# Database Host Name for Common Event Infrastructure
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 data source and will
# only be used for annotating the WebSphere Data source.
# The
# configuration process creates a type2 provider only.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
# The default value is localhost.
#
ceiDbHostName=$DBHOSTNAME
#####
#
# Database Port Number for Common Event Infrastructure
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 Data source and is
# used for annotating the WebSphere Data source only. This value is not
# required.
#
# Configuration processing will only create a type2 provider. The
# default value is 446.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
ceiDbServerPort=$DBSERVERPORT
#####
#
# Configure SCA
#
#####
#
# The following entries are used to create a Service Component
# Architecture sample configuration.
#
#####
#
# Configure SCA security
#
# If you do not want to create a Service Component Architecture sample
# configuration, change the default value from true to false and
# remove the default values assigned to the properties below.
#
# Accepting the default value of true will set up an authentication
# alias for your SIBUS if you turn on security at some point.
#

```

configureScaSecurity=true

```
#####  
#  
# SCA security user id  
#  
# If you chose to create a Service Component Architecture sample  
# configuration, then specify the userid for that configuration.  
#  
# See the Global Properties section at the beginning of this response  
# file for information on setting values for global properties.  
#  
# The default value is ibmuser.  
#
```

scaSecurityUserId=\$JMSUSER

```
#####  
#  
# SCA security password  
#  
# If you chose to create a Service Component Architecture sample  
# configuration, then specify the password for SCA security user id for  
# that configuration.  
#  
# See the Global Properties section at the beginning of this response  
# file for information on setting values for global properties.  
#  
# Default value is ibmuser.  
#
```

scaSecurityPassword=\$JMSPASS

```
#####  
#  
# Enterprise Service Bus Properties  
#  
# The following entries are used to create an Enterprise Service Bus  
# Repository sample configuration.  
#  
#####  
#  
# Database name for Enterprise Server Bus (ESB)  
#  
# Specify the name of the Enterprise Service Bus database. This value  
# will be substituted in the generated DDL/SQL produced during the  
# configuration of ESB.  
#  
# This value must match the database name set when you created the  
# database and storage groups.  
#  
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the  
# information center for information on how to create the databases  
# for the various components.
```

```
#  
# The default value is ESBDB.  
#
```

esbDbName=ESBDB

```
#####  
#  
# Database Storage Group for Enterprise Service Bus  
#  
# Specify the Database Storage Group name for the configuration of the  
# Enterprise Service Bus database. This value will be substituted in the  
# generated DDL/SQL produced during the configuration for ESB.  
#  
# This value must match the storage group name set when you created the  
# database and storage groups.  
#  
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the  
# information center for information on how to create the databases  
# for the various components.
```

```
#  
# The default value is ESBDBST0.  
#
```

esbDbStorageGroup=ESBDBST0

```
#####
```

```

#
# Database SQL ID for Enterprise Service Bus
#
# Specify the Database SQL ID for the configuration of the Enterprise
# Service Bus database. This value will be substituted in the generated
# DDL/SQL produced during the configuration for ESB.
#
# The default value is ESBL0G.
#
esbDbSqlId=ESBL0G
#####
#
# Database product name for Enterprise Service Bus
#
# Specify the value of the database product name for Enterprise Service
# Bus (ESB) processing. #
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
# The default value is DB2UDB0S390_V8_1.
#
# Valid Values are:
#
#         DB2UDB0S390_V8_1 for DB2 Version 8
#         DB2UDB0S390_V7_1 for DB2 Version 7
#
esbDbProduct=$DBPRODUCT
#####
#
# Database Connection Location for Enterprise Service Bus
#
# Specifies the Database Connection Location for the Enterprise
# Service Bus database. #
# This value will be used in place of the database name on the
# Websphere data source definition.
#
# The default value is LOC1.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
esbDbConnectionLocation=$DBLOCATION
#####
#
# Database DB2 JCC Properties Directory for Enterprise Service Bus
#
# Specify the directory that contains the DB2JccConfiguration.properties
# file.
# This file will be required by systems containing multiple DB2
# instances or using DB2 DataSharing. This value will vary depending on
# the version of DB2 being used and where it is installed.
#
# The default value is /db2810/jcc/properties.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
esbDbJDBCProperties=$DBPROPERTIES
#####
#
# Database Home Classes Directory for Enterprise Service Bus
#
# Specify the Database Home Classes Directory. This value will vary
# depending on the version of DB2 being used and where it is installed.
#
# The default value is /db2810/jcc/classes.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
esbDbJDBCClasspath=$DBJDBCCLASSPATH
#####
#

```

```

# Database User ID for Enterprise Service Bus
#
# Specify the User ID for the WebSphere Process Server database.
# The default value is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
esbDbUser=$DBUSER

#####
#
# Database Password for Enterprise Service Bus
#
# Specify the Password for the WebSphere Process Server database.
# The default value is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
esbDbPwd=$DBPASS

#####
# Database Host Name for Enterprise Service Bus
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 Data source and will
# only be used for annotating the WebSphere Data source.
#
# The configuration process creates a type2 provider only.
#
# The default value is localhost.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
esbDbHostName=$DBHOSTNAME

#####
# Database Port Number for Enterprise Service Bus
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 Data source and will
# only be used for annotating the WebSphere data source. This value is
# not required.
#
# The configuration process creates a type2 provider only.
#
# The default value is 446.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
esbDbServerPort=$DBSERVERPORT

#####
# Business Process Choreographer Properties
#
#####
# Set the properties below to create a sample Business Process
# Choreographer (BPC) configuration. #
#
# If you do not wish to create a sample Business Process Choreographer
# configuration, remove the default values for bpcmqUser, bpcmqPwd and
# bpcadminGroups.
#
# The Business Process Choreographer sample is valid for a stand-alone
# server configuration only. The values specified here for the Business
# Process Choreographer sample configuration are used to run the Business
# Process Choreographer configuration script (bpeconfig.jacl)
#
#
# If you choose not to create a sample Business Process Choreographer
# configuration at this time, you can run bpeconfig.jacl after running the
# product configuration script to create all of the Business Process
# Choreographer resources.
#
# Running bpeconfig.jacl is the recommended method for configuring the

```

```
# Business Process Choreographer resources used in WebSphere Process
# server for z/OS. For more information on running bpeconfig.jacl, see
# the topic "Using the bpeconfig.jacl script to configure Business
# Process Choreographer" in the information center.#
```

```
#
#####
#
# MQ User Name for Process Choreographer
#
# Specify the user name for the configuration of resources for the
# Business Process Container using WebSphere MQ. The default value is
# ibmuser.
#
# This property is used in setting up an authentication alias for your
# Process Choreographer JMS resources that are created.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
```

bpcmqUser=\$JMSUSER

```
#####
#
# MQ Password for Process Choreographer
#
# Specify the password for the MQ User Name for the configuration of
# resources for the Business Process Container using WebSphere MQ. The
# default value is ibmuser.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
```

bpcmqPwd=\$JMSPASS

```
#####
#
# Admin Users for Process Choreographer
#
# Specify the security role for the business process system
# administrator. This is the security role used by the Business Process
# Choreographer component to run a business process. The default value
# is ibmuser.
#
# This property should be a user from your SAF registry that you are
# going to associate with the business process administrator role.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
```

bpcadminUsers=\$JMSUSER

```
#####
#
# Database Name for Process Choreographer
#
# Specify the DB2 Database name used by the Business Process Container.
# This value will be substituted in the DDL/SQL produced by the
# configuration process for Business Process Choreographer.
#
# This value must match the database name set when you created the
# database and storage groups.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.
```

```
#
# The default is BPEDB.
#
```

bpcDbName=BPEDB

```
#####
#
# Database Storage Group for Process Choreographer
#
# Specify the Database Storage Group name for the configuration of the
# Business Process Container. This value will be substituted in the
# DDL/SQL produced by the configuration of the Business Process
```

```

# Choreographer component.
#
# This value must match the storage group name set when you created the
# database and storage groups.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.

#
# The default value is BPEDBSTO.
#
bpcDbStorageGroup=BPEDBSTO

#####
#
# Database SQL ID for Business Process Choreographer
#
# Specify the DB2 SQL ID used by the Business Process Container. This
# value will be substituted in the DDL/SQL produced by the configuration
# of the Business Process Choreographer component.
#
# The default is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
bpcDbSqlId=$DBUSER

#####
#
# Database product name for Process Choreographer
#
# Specify the value of the database product name for Business Process
# Container. #
# The default value is DB2UDBOS390_V8_1.
#
# Valid Values are:
#
#   DB2UDBOS390_V8_1 for DB2 Version 8
#   DB2UDBOS390_V7_1 for DB2 Version 7
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
bpcDbProduct=$DBPRODUCT

#####
#
# Database Connection Location for Process Choreographer
#
# Specify the Database Location for the configuration of the Business
# Process Container. This value will be used in place of the database name
# on the WebSphere data source definition. The default value is LOC1.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
#
bpcDbConnectionLocation=$DBLOCATION

#####
#
# Database DB2 JCC Properties Directory for Process Choreographer
#
# Specify the directory that contains the DB2JccConfiguration.properties
# file.
# This file will be required by systems containing multiple DB2
# instances or using DB2 DataSharing. This value will vary depending on
# the version of DB2 being used and where DB2 is installed. The default
# value is /db2810/jcc/properties.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
bpcDbJDBCProperties=$DBPROPERTIES

#####
#

```

```

# Database Home Classes Directory for Process Choreographer
#
# Specify the Database Home Classes Directory for Process Choreographer.
# This value will vary depending on version of DB2 being used and where
# DB2 is installed.
#
# The default value is /db2810/jcc/classes.
#
bpcDbJDBCClasspath=$DBJDBCCLASSPATH

#####
#
# Database User ID for Process Choreographer
#
# Specify the User name for authenticating the JDBC resources for the
# Business Process Container. The default value is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
bpcDbUser=$DBUSER

#####
#
# Database Password for Process Choreographer
#
# Specify the Password for authenticating the JDBC resources for the
# Business Process Container. The default value is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
bpcDbPwd=$DBPASS#####
#
# WBI Server Properties
#
#####
#
# Application Scheduler configuration
#
#
# Application Scheduler is used to schedule migration application group
# events. If you choose to configure Application Scheduler, set the
# property to "true". Otherwise, specify false.
#
# You must specify the server (into which the Application Scheduler
# application is installed) in the appSchedulerServer property below.
#
# For information on the Application Scheduler, see the topic
# "Application Scheduler" in the information center.

#
configureAppScheduler=true

#####
#
# Indicate the application server name on this node if you chose to
# configure it for Application Scheduler use. Usually, for a stand-alone
# profile the server name is "server1". The default is value server1.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the server that you
# configured for your stand-alone appserver.
#
appSchedulerServer=$CONFIGSERVER

#####
#
# Configure the Common Database for the process server
#
# Various WebSphere Process Server components use a common database
# connection. The following properties define the values for the Common
# database. #
# For information on the components that share a common database, see
# the topic "Common database specifications" in the information center
#

#
#
#####

```

```

#
# Database name
#
# Specify the name of the WebSphere Process Server for z/OS database. This value
# will be substituted in the generated DDL/SQL produced during the
# configuration for components sharing the common database.
#
# This value must match the database name set when you created the
# database and storage groups.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.

```

```

#
# The default value is WPRCSDB.
#

```

dbName=WPRCSDB

```

#####
#

```

```

# Database Storage Group
#
# Specify the Storage Group name for the WebSphere Process Server
# database. This value will be substituted in the generated DDL/SQL
# produced during the configuration for components sharing the common
# database. #
# This value must match the storage group name set when you created
# the database and storage groups.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.

```

```

#
# The default value is WPRCSST0.
#

```

dbStorageGroup=WPRCSST0

```

#####
#

```

```

# Database type
#
# Specify the type of the WebSphere Process Server database.
# The default value is DB2UDBOS390_V8_1.
#
# Valid values are:
#
#         DB2UDBOS390_V8_1 for DB2 Version 8
#         DB2UDBOS390_V7_1 for DB2 Version 7
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#

```

dbType=\$DBPRODUCT

```

#####
#

```

```

# Database Connection Location
#
# Specify the Database Connection Location WebSphere Process Server.
# Specifies the default database location for WBI Server. This value
# will be used in place of the database name on the Websphere data
# source definition.
#
# The default value is LOC1.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#

```

dbConnectionLocation=\$DBLOCATION

```

#####
#

```

```

# Database DB2 JCC Properties Directory
#
# Specify the directory that contains the DB2JccConfiguration.properties
# file.
#

```

```

# This file will be required by systems containing multiple DB2
# instances or using DB2 DataSharing. This value will vary depending
# on the version of DB2 being used and where DB2 is installed.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
# The default value is /db2810/jcc/properties.
#
dbJDBCProperties=$DBPROPERTIES
#####
#
# Database Home Classes Directory
#
# Specify the Database Home Classes Directory. This value will vary
# depending on the version of DB2 being used and where DB2 is installed.
#
# The default value is /db2810/jcc/classes.
#
dbJDBCClasspath=$DBJDBCCLASSPATH
#####
#
# Database User ID
#
# Specify the User ID for the WebSphere Process Server database.
# The default value is wsadmin.
#
dbUserId=$DBUSER
#####
#
# Database Password
#
# Specify the Password for the WebSphere Process Server database.
# The default value is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbPassword=$DBPASS
#####
#
# Database Host Name
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 data source and will
# only be used for annotating the WebSphere Data source.
#
# The configuration creates a type2 provider only.
#
# The default value is localhost.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbHostName=$DBHOSTNAME
#####
#
# Database Port Number
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 data source and will
# only be used for annotating the WebSphere data source. This value is
# not required.
#
# The configuration creates a type2 provider only.
#
# The default value is 446.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbServerPort=$DBSERVERPORT

```

Network Deployment 構成用の応答ファイル (DmgrDB2.rsp)

以下に、DB2 for z/OS データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS のデプロイメント・マネージャー構成を作成する際に使用されるデフォルト応答ファイルのサンプルを示します。DB2 for z/OS を使用する WebSphere Process Server for z/OS 構成には、データベースおよび DB2 サブシステムの構成に関連した前提条件作業があります。DB2 for z/OS を使用する WebSphere Process Server for z/OS 構成の準備について詳しくは、『データベースを作成する際の考慮事項』および『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

```
#####
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5655-N53, 5655-R15
# (C) Copyright IBM Corporation 2006, 2007. All Rights Reserved.
# US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or disclosure
# restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.
#####
#
# Sample Response file for creating a WebSphere Process Server for z/OS
# deployment manager configuration using DB2 for z/OS database.
#
#####
# GLOBAL PROPERTIES
# Global properties prepended by the symbol $ may used as substitution for
# other values in this file. The global property value must be the complete
# value to be substituted. #
# See examples of $JMSUSER used in this file.
#
# Note: Global Properties must physically appear in the response file before
# they are referenced.
#
# For a description of how to use Global properties, see the section on
# "Reading the response file" in Working with response files topic in the
# information center.#
#####
JMSUSER=ibmuser
JMSPASS=ibmuser
CONFIGSERVER=dmgr
#####
# The following Global Properties are used to set values for databases
# used by WebSphere Process Server for z/OS components.
#
# The default values assigned are used to set the corresponding value
# for all the component databases.
#
# If the same database product and version is used for all components,
# then most component values can be set by simply using the value of
# the Global Property.
#
# Note that some properties, such as dbName, must be unique for each
# component and therefore cannot be set with a Global Property.
#
# If database products or versions differ for components, then
# component-specific values must be set individually, and the Global
# Properties can not be used.
#
# See the individual components for property descriptions. Note that
# some components do not use all the database Global Properties.
#
# For information on databases used by WebSphere Process Server
# for z/OS components, see "Database specifications" in the information
# center.
# For information on databases used by WebSphere Process Server
# for z/OS components, see Database specifications in the information
# center.
#
# The default values of the Global Properties in this response file
# are for DB2 for z/OS version 8.
#
# For DB2 version 7, change the value of Global Property DBPRODUCT to
# DB2UDBOS390_V7_1 and set the other the other Global Properties as
# appropriate.
```

```

#
#####
DBPRODUCT=DB2UDB0S390_V8_1
DBLOCATION=LOC1
DBPROPERTIES=/db2810/jcc/properties
DBJDBCCLASSPATH=/db2810/jcc/classes
DBUSER=wsadmin
DBPASS=wsadmin
DBHOSTNAME=localhost
DBSERVERPORT=446
#####
#
# Common Properties
#
#####
# The "augment" keyword is required in order for the configuration to
# invoke the profile augmentation actions.
#
# There is no value associated with this keyword. The "augment" keyword
# may be replaced with "unaugment" in order to undo the results from a
# previous augment action. However, "augment" must be specified for the
# configuration to complete successfully.
#
# Note: The uninstall command also references the response file.
# However, you do not need to change the value from "augment" to
# "unaugment" when you run the zSMPInstall.sh to uninstall the
# product. For more information on uninstalling the product, see
# the topic "Run the install script to uninstall the product" in the
# information center.

#
augment

#####
#
# Profile name
#
# On z/OS, there is always one and only one profile and that profile is
# named "default" in each of the configurations.
#
# The profile referred to here is the default profile installed and
# and configured during the WebSphere Application Server for z/OS
# installation.
#
# As "default" is the standard name for the profile, accept the default
# value for this property.
#
profileName=default

#####
#
# Profile path
#
# This value should reflect the default profile root directory for
# WebSphere Application Server for z/OS
#
# The server configuration for WebSphere Application Server for z/OS
# resides in a directory structure under a "profiles" directory. So, for
# a base stand-alone application server in the config_root, there will
# be a "profiles" directory, and in that directory there will be a
# "default" directory that contains all of the directories and files
# (such as commands, configuration files, and log files) that define
# the runtime environment for your server configuration.
#
# In most cases the WebSphere Application Server for z/OS installation
# uses the default value shown below.
#
# The /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager portion of the profile path
# shown below should be the configuration HFS / app_server_root for your
# deployment manager.
#
profilePath=/WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profiles/default

#####
#
# Template path
#
# This value determines which component augment actions are performed as
# part of the configuration process. Valid values are as follows:

```

```

#
# /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profileTemplates/dmgr.wbicare
# /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profileTemplates/dmgr.bfm
# /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profileTemplates/dmgr.wbiserver
#
# /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profileTemplates/dmgr.*
#
# If one of the first three values is specified, only the actions within that
# directory are performed. The fourth value is the default (.../dmgr.*),
# which causes all of the actions in the first three template paths to be
# performed.
#
# Caution: Changing the default value causes an incomplete configuration of
# WebSphere Process Server for z/OS and should only be done if there is
# a valid reason to do so.
#
# The /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager portion of the template path
# shown below should be the configuration HFS / app_server_root for your
# base appserver.
#
templatePath=/WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profileTemplates/dmgr.*
#####
#
# Cell name
#
# This value determines the cell name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
# The default value
# is v1cell.

#
# The value assigned should be the LONGNAME of the cell that you configured
# for your DeploymentManager appserver.
#
cellName=v1cell

#####
#
# Node name
#
# This value determines the node name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
#
#
# Node name under one cell has to be unique.
# The default value is v1dmnode.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the node that you configured
# for your DeploymentManager appserver.
#
nodeName=v1dmnode

#####
#
# Server name
#
# This value determines the server name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.

# Server name under one node has to be unique.
# The default value is dmgr.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the server that you
# configured for your DeploymentManager appserver.
#
serverName=$CONFIGSERVER

#####
#
# Create new or use existing database
#
# For a configuration using DB2 for z/OS, the database will always be
# an existing database. The option to create a new database as part of the
# configuration process does not apply when the database is DB2 for z/OS.
#
# As a prerequisite to creating a deployment manager configuration that
# uses DB2 for z/OS, you must create the databases and their associated
# storage groups.

```

```

#
# Because of this prerequisite, the value of this property must indicate
# that you are using an existing database.
#
# Accept the default value of false to indicate that you are not
# creating a new database.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.

#
# Accept the default value.
#
dbCreateNew=false

#####
#
# Delay Configuration of the database table and datasource definitions
#
# If the database and storage groups were defined as described in "Creating
# the databases and storage groups, the configuration process can connect
# to the database and define the tables and tablespaces automatically.
#
# Specify "true" to prevent the configuration process from running
# the scripts that will create the data source and database table
# definitions automatically.
#
# Note: Delaying automatic database configuration will require you to
# run the scripts to create the data source and database table
# definitions manually. You can do this after you have run the
# configuration script successfully. For more information, see the
# topic "Configuring the databases manually" in the information
# center

#
# Specify "false" to allow the configuration process to run the scripts
# that will create the data source and database tables definitions
# automatically.
#
# Always consult your Database administrator with regard to updating DB2
# automatically.
#
# The default value is "true"
#
dbDelayConfig=true

#####
#
# WBI Core Properties
#
#####
#
# Configure SCA
#
#####
#
# The following entries are used to create a Service Component Architecture
# sample configuration.
#
#####
#
# Configure SCA security
#
# If you do not want to create a Service Component Architecture
# sample configuration, change the default value from true to false and
# leave the values for the properties specified below blank.
#
# Accepting the default will set up an authentication alias for your SIBUS
# if you turn on security at some point.
#
configureScaSecurity=true

#####
#
# SCA security user id
#
# If you chose to create a Service Component Architecture configuration above
# then specify the userid for that configuration. Default value is ibmuser.

```

```

#
scaSecurityUserId=$JMSUSER
#####
#
# SCA security password
#
# If you chose to create a Service Component Architecture configuration above
# then specify the password for SCA security user id for that configuration.
# Default value is ibmuser.
#
scaSecurityPassword=$JMSPASS
#####
#
# WBI Server Properties
#
#####
#
# Application Scheduler configuration
#
# Application Scheduler is used to schedule migration application group
# events. If you choose to configure Application Scheduler, set the
# property to "true". Otherwise, specify false.
#
# You must specify the server (into which # the Application Scheduler
# application is installed) in the appSchedulerServer property below.
#
# For information on the Application Scheduler, see the topic
# "Application Scheduler" in the information center.
#
#
configureAppScheduler=false
#####
#
# Indicate the application server name on this node if you chose to
# configure it for Application Scheduler use. Usually, for a
# DeploymentManager profile the server name is "dmgr".
#
# The default is value dmgr.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the server that you
# configured for your DeploymentManager appserver.
#
appSchedulerServer=$CONFIGSERVER#####
#
# Configure the Common Database for the process server
# Various WebSphere Process Server components use a common database
# connection. The following properties define the values for the Common
# database. #
# For information on the components that share a common database, see
# the topic "Common database specifications" in the information center
#
#
#####
#
# Database name
#
# Specify the name of the WebSphere Process Server database. This value
# will be substituted in the generated DDL/SQL produced during the
# configuration for components sharing the common database.
#
# This value must match the database name set when you created the
# database and storage groups.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.
#
# The default value is WPRCSDB.
#
dbName=WPRCSDB
#####
#
# Database Storage Group

```

```

#
# Specify the Storage Group name for the WebSphere Process Server database.
# This value will be substituted in the generated DDL/SQL produced during the
# configuration for WPS.
#
# This value must match Storage Group name set When you created the database
# and storage group.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.

#
# The default value is WPRCSST0.
#
dbStorageGroup=WPRCSST0

#####
# Specify the type of the WebSphere Process Server database.
# The default value is DB2UDBOS390_V8_1.
#
# Valid values are:
#
#     DB2UDBOS390_V8_1 for DB2 Version 8
#     DB2UDBOS390_V7_1 for DB2 Version 7
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbType=$DBPRODUCT

#####
#
# Database Connection Location
#
# Specify the Database Connection Location WebSphere Process Server.
# Specifies the default database location for WBI Server. This value
# will be used in place of the database name on the Websphere data
# source definition.
#
# The default value is LOC1.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
#dbConnectionLocation=$DBLOCATION

#####
#
# Database DB2 JCC Properties Directory
#
# Specify the directory that contains the DB2JccConfiguration.properties
# file.
#
# This file will be required by systems containing multiple DB2
# instances or using DB2 DataSharing. This value will vary depending
# on the version of DB2 being used and where DB2 is installed.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
# The default value is /db2810/jcc/properties.
#
#
dbJDBCProperties=$DBPROPERTIES

#####
#
# Database Home Classes Directory
#
# Specify the Database Home Classes Directory. This value will vary
# depending on the version of DB2 being used and where DB2 is installed.
#
# The default value is /db2810/jcc/classes.
#
#
dbJDBCClasspath=$DBJDBCCLASSPATH

#####
#

```

```

# Database User ID
#
# Specify the User ID for the WebSphere Process Server database.
# The default value is wsadmin.
#
dbUserId=$DBUSER

#####
#
# Database Password
#
# Specify the Password for the WebSphere Process Server database.
# The default value is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbPassword=$DBPASS

#####
#
# Database Host Name
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 data source and will
# only be used for annotating the WebSphere Data source.
#
# The configuration creates a type2 provider only.
#
# The default value is localhost.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbHostName=$DBHOSTNAME

#####
#
# Database Port Number
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 data source and will
# only be used for annotating the WebSphere data source. This value is
# not required.
#
# The configuration creates a type2 provider only.
#
# The default value is 446.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbServerPort=$DBSERVERPORT

```

Network Deployment 構成内の管理対象ノード用の応答ファイル - ManagedDB2.rsp

以下に、DB2 for z/OS データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS の管理対象ノード構成を作成する際に使用されるデフォルト応答ファイルのサンプルを示します。DB2 for z/OS を使用する WebSphere Process Server for z/OS 構成には、データベースおよび DB2 サブシステムの構成に関連した前提条件作業があります。DB2 for z/OS を使用する WebSphere Process Server for z/OS 構成の準備について詳しくは、『データベースを作成する際の考慮事項』および『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

```

#####
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5655-N53, 5655-R15
# (C) Copyright IBM Corporation 2006, 2007. All Rights Reserved.
# US Government Users Restricted Rights - Use, duplication or disclosure
# restricted by GSA ADP Schedule Contract with IBM Corp.
#####
#####
#
# Sample Response file for creating a WebSphere Process Server for z/OS

```

```

# managed node configuration using DB2 for z/OS database.
#
#####
# GLOBAL PROPERTIES
# Global properties prepended by the symbol $ may used as substitution for
# other values in this file. The global property value must be the complete
# value to be substituted. #
# See examples of $JMSUSER used in this file.
#
# Note: Global Properties must physically appear in the response file before
# they are referenced.
#
# For a description of how to use Global properties, see the section on
# "Reading the response file" in Working with response files topic in the
# information center.#

#####
JMSUSER=ibmuser
JMPASS=ibmuser
#####
# The following Global Properties are used to set values for databases
# used by WebSphere Process Server for z/OS components.
#
# The default values assigned are used to set the corresponding value
# for all the component databases.
#
# If the same database product and version is used for all components,
# then most component values can be set by simply using the value of
# the Global Property.
#
# Note that some properties, such as dbName, must be unique for each
# component and therefore cannot be set with a Global Property.
#
# If database products or versions differ for components, then
# component-specific values must be set individually, and the Global
# Properties can not be used.
#
# See the individual components for property descriptions. Note that
# some components do not use all the database Global Properties.
#
# For information on databases used by WebSphere Process Server
# for z/OS components, see "Database specifications" in the information
# center.
# For information on databases used by WebSphere Process Server
# for z/OS components, see Database specifications in the information
# center.
#
# The default values of the Global Properties in this response file
# are for DB2 for z/OS version 8.
#
# For DB2 version 7, change the value of Global Property DBPRODUCT to
# DB2UDBOS390_V7_1 and set the other the other Global Properties as
# appropriate.
#
#####
DBPRODUCT=DB2UDBOS390_V8_1
DBLOCATION=LOC1
DBPROPERTIES=/db2810/jcc/properties
DBJDBCCLASSPATH=/db2810/jcc/classes
DBUSER=wsadmin
DBPASS=wsadmin
DBHOSTNAME=localhost
DBSERVERPORT=446
#####
#
# Common Properties
#
#####
# The "augment" keyword is required in order for the configuration to
# invoke the profile augmentation actions.
#
# There is no value associated with this keyword. The "augment" keyword
# may be replaced with "unaugment" in order to undo the results from a
# previous augment action. However, "augment" must be specified for the
# configuration to complete successfully.
#
# Note: The uninstall command also references the response file.
# However, you do not need to change the value from "augment" to

```

```

# "unaugment" when you run the zSMPInstall.sh to uninstall the
# product. For more information on uninstalling the product, see
# the topic "Run the install script to uninstall the product" in the
# information center.

#
augment
#####
#
# Profile name
#
# On z/OS, there is always one and only one profile and that profile is
# named "default" in each of the configurations.
#
# The profile referred to here is the default profile installed and
# and configured during the WebSphere Application Server for z/OS
# installation.
#
# As "default" is the standard name for the profile, accept the default
# value for this property.
#
profileName=default
#####
#
# Profile path
#
# This value should reflect the default profile root directory for
# WebSphere Application Server for z/OS
#
# The server configuration for WebSphere Application Server for z/OS
# resides in a directory structure under a "profiles" directory. So, for
# a base stand-alone application server in the config_root, there will
# be a "profiles" directory, and in that directory there will be a
# "default" directory that contains all of the directories and files
# (such as commands, configuration files, and log files) that define
# the runtime environment for your server configuration.
#
# In most cases the WebSphere Application Server for z/OS installation
# uses the default value shown below.
#
# The /WebSphere/V6R0M0/AppServer portion of the profile path
# shown below should be the configuration HFS / app_server_root for your
# base application server.
#
profilePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default
#####
#
# Template path
#
# This value determines which component augment actions are performed as
# part of the configuration process. Valid values are as follows:
#
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/managed.wbicore
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/managed.bfm
# /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/managed.wbiserver
#
# /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/profileTemplates/managed.*
#
# If one of the first three values is specified, only the actions within that
# directory are performed. The fourth value is the default (../managed.*),
# which causes all of the actions in the first three template paths to be
# performed.
#
# Caution: Changing the default value causes an incomplete configuration of
# WebSphere Process Server for z/OS and should only be done if there is
# a valid reason to do so.
#
# The /WebSphere/V6R0M0/AppServer portion of the template path
# shown below should be the configuration HFS / app_server_root for your
# base appserver.
#
templatePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/managed.*
#####
#
# Cell name
#

```

```

# This value determines the cell name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
The default value
# is v1cellx.

#
# The value assigned should be the LONGNAME of the cell associated with the
# unfederated empty managed node
#
cellName=v1cellx

#####
#
# Node name
#
# This value determines the node name within the WebSphere Application
# Server for which this Process Server configuration applies.
#
#
# Node name under one cell has to be unique.
The default value is v1dmnodea.
#
# The value assigned should be the LONGNAME of the node that you configured
# for your managed appserver.
#
nodeName=v1dmnodea

#####
#
# Create new or use existing database
#
# For a configuration using DB2 for z/OS, the database will always be
# an existing database. The option to create a new database as part of the
# configuration process does not apply when the database is DB2 for z/OS.
#
# As a prerequisite you must create the databases and their associated
# storage groups.
#
# Because of this prerequisite, the value of this property must indicate
# that you are using an existing database.
#
# Accept the default value of false to indicate that you are not
# creating a new database.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.

#
# Accept the default value.
#
dbCreateNew=false

#####
#
# Delay Configuration of the database table and datasource definitions
#
# If the database and storage groups were defined as described in "Creating
# the databases and storage groups", the configuration process can connect
# to the database and define the tables and tablespaces automatically.
#
# Specify "true" to prevent the configuration process from running
# the scripts that will create the data source and database table
# definitions automatically.
#
# Note: Delaying automatic database configuration will require you to
# run the scripts to create the data source and database table
# definitions manually. You can do this after you have run the
# configuration script successfully. For more information, see the
# topic "Configuring the databases manually" in the information
# center

#
# Specify "false" to allow the configuration process to run the scripts
# that will create the data source and database tables definitions
# automatically.
#
# Always consult your Database administrator with regard to updating DB2

```

```

# automatically.
#
# The default value is "true"
#
dbDelayConfig=true

#####
#
# WBI Core Properties
#
#####
#
# Configure SCA
#
#####
#
# The following entries are used to create a Service Component Architecture
# sample configuration.
#
#####
#
# Configure SCA security
#
# If you do not want to create a Service Component Architecture
# sample configuration, change the default value from true to false and
# leave the values for the properties specified below blank.
#
# Accepting the default will set up an authentication alias for your SIBUS
# if you turn on security at some point.
#
configureScaSecurity=true

#####
#
# SCA security user id
#
# If you chose to create a Service Component Architecture configuration above
# then specify the userid for that configuration. Default value is ibmuser.
#
scaSecurityUserId=$JMSUSER

#####
#
# SCA security password
#
# If you chose to create a Service Component Architecture configuration above
# then specify the password for SCA security user id for that configuration.
# Default value is ibmuser.
#
scaSecurityPassword=$JMSPASS

#####
#
# WBI Server Properties
#
#####
#
# Application Scheduler configuration
#
# Application Scheduler is used to schedule migration application group
# events. If you choose to configure Application Scheduler, set the
# property to "true". Otherwise, specify false.
#
# You must specify the server (into which the Application Scheduler
# application is installed) in the appSchedulerServer property below.
#
# For information on the Application Scheduler, see the topic
# "Application Scheduler" in the information center.
#
configureAppScheduler=false#####
#
# Configure the Common Database for the process server
# Various WebSphere Process Server components use a common database
# connection. The following properties define the values for the Common
# database. #
# For information on the components that share a common database, see
# the topic "Common database specifications" in the information center
#

```

```

#
#####
#
# Database name
#
# Specify the name of the WebSphere Process Server database. This value
# will be substituted in the generated DDL/SQL produced during the
# configuration for components sharing the common database.
#
# This value must match the database name set when you created the
# database and storage groups.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.

#
# The default value is WPRCSDB.
#
dbName=WPRCSDB

#####
#
# Database Storage Group
#
# Specify the Storage Group name for the WebSphere Process Server database.
# This value will be substituted in the generated DDL/SQL produced during the
# configuration for WPS.
#
# This value must match Storage Group name set When you created the database
# and storage group.
#
# See the "Creating the databases and storage groups" topic in the
# information center for information on how to create the databases
# for the various components.

#
# The default value is WPRCSST0.
#
dbStorageGroup=WPRCSST0

#####
# Specify the type of the WebSphere Process Server database.
# The default value is DB2UDBOS390_V8_1.
#
# Valid values are:
#
#         DB2UDBOS390_V8_1 for DB2 Version 8
#         DB2UDBOS390_V7_1 for DB2 Version 7
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbType=$DBPRODUCT

#####
#
# Database Connection Location
#
# Specify the Database Connection Location WebSphere Process Server.
# Specifies the default database location for WBI Server. This value
# will be used in place of the database name on the Websphere data
# source definition.
#
# The default value is LOC1.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbConnectionLocation=$DBLOCATION

#####
#
# Database DB2 JCC Properties Directory
#
# Specify the directory that contains the DB2JccConfiguration.properties
# file.
#

```

```

# This file will be required by systems containing multiple DB2
# instances or using DB2 DataSharing. This value will vary depending
# on the version of DB2 being used and where DB2 is installed.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
# The default value is /db2810/jcc/properties.
#
#
dbJDBCProperties=$DBPROPERTIES
#####
#
# Database Home Classes Directory
#
# Specify the Database Home Classes Directory. This value will vary
# depending on the version of DB2 being used and where DB2 is installed.
#
# The default value is /db2810/jcc/classes.
#
dbJDBCClasspath=$DBJDBCCLASSPATH
#####
#
# Database User ID
#
# Specify the User ID for the WebSphere Process Server database.
# The default value is wsadmin.
#
dbUserId=$DBUSER
#####
#
# Database Password
#
# Specify the Password for the WebSphere Process Server database.
# The default value is wsadmin.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbPassword=$DBPASS
#####
#
# Database Host Name
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 data source and will
# only be used for annotating the WebSphere Data source.
#
# The configuration creates a type2 provider only.
#
# The default value is localhost.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbHostName=$DBHOSTNAME
#####
#
# Database Port Number
#
# This property is used for defining a type 4 DB2 data source and will
# only be used for annotating the WebSphere data source. This value is
# not required.
#
# The configuration creates a type2 provider only.
#
# The default value is 446.
#
# See the Global Properties section at the beginning of this response
# file for information on setting values for global properties.
#
dbServerPort=$DBSERVERPORT

```

応答ファイルの変更

WebSphere Process Server for z/OS には、WebSphere Process Server for z/OS のランタイム環境を作成する際に使用されるパラメーターを組み込んだサンプル応答ファイルが付属しています。構成を環境に合わせてカスタマイズするためには、構成スクリプトを実行する前に、応答ファイルの内容を変更する必要があります。

サンプル応答ファイルを変更する前に、以下の点を確認してください。

- データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS コンポーネントに対してデータベースおよびストレージ・グループを作成します。

詳しくは、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

- WebSphere Process Server for z/OS によってサポートされている各種の構成タイプを理解します。

『構成の計画』を参照してください。

- 応答ファイルの編成方法と、応答ファイルの読み取りおよび編集方法を理解します。

『応答ファイルでの作業』を参照してください。

- このタスクでは、ユーザーがインストール済みのファイルへのアクセス権を持つこと、および MVS システム・コマンドと、フラット・ファイルを編集するためのツールの知識を持つことを前提とします。

デフォルトの応答ファイル内のプロパティ値は、WebSphere Process Server for z/OS の構成スクリプトを実行する前に変更します。

1. 目的の応答ファイルを、そのインストール先にした HFS からコピーします。編集権限のあるディレクトリーにファイルをコピーし、**my_options_file.rsp** などの新しい名前を付けて保管します。
2. 応答ファイル内の値を編集し、WebSphere Process Server for z/OS の構成に合わせてプロファイルのプロパティ値をカスタマイズします。サンプル応答ファイルには、プロパティを説明する詳細なコメントが記述されています。コメント記入済みの応答ファイルについても、『サンプル応答ファイル』に記載されています。
3. 変更したファイルを、それがコピーされたディレクトリーに保管します。構成スクリプトを実行すると、変更済みの応答ファイルへのパスがコマンドに組み込まれます。

応答ファイルを変更したら、製品の構成スクリプトを実行できます。

スタンドアロン構成の作成

スタンドアロン応答ファイルを使用して **zWPSConfig.sh** または **zWESBConfig.sh** を実行すると、WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成が作成されます。これを行うには、スタンドアロン・アプリケーション・サーバー用の WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルを WebSphere Process Server for z/OS 構成データで拡張します。

DB2 for z/OS を使用する WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成を作成する場合は、以下の手順を実行してください。

- DB2 内で作成するすべてのデータベース、ストレージ・グループ、テーブル、索引、およびビューに適用する命名規則を決定します。

詳しくは、『データベースを作成する際の考慮事項』を参照してください。

- DB2 データ定義言語 (DDL) ステートメントを実行するのに、SPUFI のような z/OS ツールを使用するか、シェル・スクリプトや Ant スクリプトなどの UNIX ツールを使用するかを決定します。
- DB2 内の WebSphere Process Server for z/OS オブジェクトに適用するセキュリティの扱い方を決定します。

DB2 および JMS キューへのアクセスに必要な追加の RACF グループおよびユーザー ID を準備します。

詳しくは、『データベースを作成する際の考慮事項』を参照してください。

- ご使用の DB2 用に DB2 Universal ドライバーが構成されていることを確認します。

「*WPS for z/OS Datasource & Database Configuration Hints & Tips*」というタイトルの技術情報にデータベースの構成に関するいくつかの役に立つヒントがあります。

注: 「*WPS for z/OS Datasource & Database Configuration Hints & Tips*」の技術情報は、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 601 に適用されますが、DB2 の準備に関する情報の一部が役に立つ可能性があります。

WebSphere Process Server for z/OS 構成プロセスは、z/OS UNIX System Services の実用的な知識があることを前提としています。以下の資料が利用できます。

- z/OS V1R7.0 UNIX System Services User's Guide
- z/OS V1R7.0 UNIX System Services Command Reference

構成スクリプトを実行する前に、以下の点を確認してください。

1. インストール・プロセスと構成プロセスの作業の流れを理解するために、59 ページの『WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成の計画』を見直すこと。
2. インストール済み環境でセキュリティおよびシステムのアクセス権を管理するシステム・プログラマーによって、正しくシェルを利用できるようにユーザーがセットアップされていること。

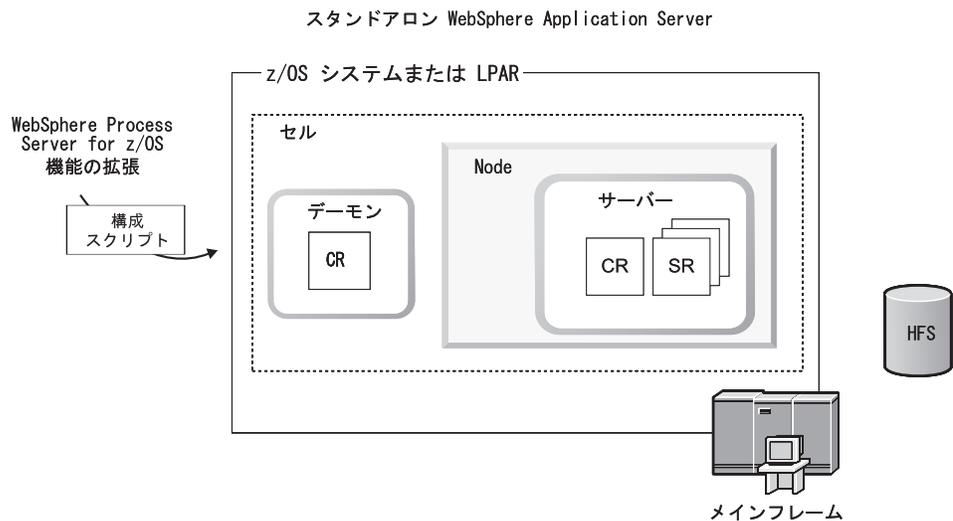
これには、ユーザーの RACF (セキュリティ) プロファイルに変更を加え、UNIX シェル内でホーム・ディレクトリを作成する作業が含まれる場合があります。ユーザーは常に、UNIX セッションの開始時にホーム・ディレクトリから作業を始めます。このディレクトリ内で、プログラムの実行に必要なとなる可能性のあるすべての環境変数ファイルを保持します。これらのファイルには、Java プログラムで使用される Java クラスのロケーションなど、特定の言語に必要な情報が含まれています。ホーム・ディレクトリを、作業データの保持用のルート・ディレクトリとして使用することもできます。WebSphere Application Server for z/OS に使用するセキュリティ定義を管理しやすくする

ためのツールや手法については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『Resource Access Control Facility Tools』を参照してください。

DB2 for z/OS を使用する WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成を作成する場合、これらのデータベースおよびテーブルを作成し、これらにアクセスするための権限については、『データベースを作成する際の考慮事項』を参照してください。

3. WebSphere Application Server for z/OS の製品コードがシステムにロードされており、スタンドアロン・アプリケーション・サーバーを構成済みであること。

WebSphere Process Server for z/OS の構成プロセスでは、WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルを拡張するため、このプロファイルを WebSphere Process Server for z/OS 構成データで拡張する前に、構成済みのスタンドアロン・アプリケーション・サーバーの準備を整える必要があります。



注: WebSphere Process Server for z/OS の管理対象ノード構成を作成している場合は、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターに説明されているように、空のクラスターを作成する手順に従う必要があります。WebSphere Process Server for z/OS の管理対象ノード構成を作成するための構成後プロセスの一環として、スタンドアロン・アプリケーション・サーバーを複製し、管理対象ノード応答ファイルを使用して構成スクリプトを実行したときに作成される「サーバーレス」ノードにデータを取り込みます。

4. WebSphere Process Server for z/OS 製品コードがシステムにロードされていること。

システム・プログラマーが、WebSphere Process Server for z/OS テープの内容をシステムに正常にロードして、SMP/E インストールを完了したこと。

5. WebSphere Application Server 構成 HFS のバックアップを取ること。

6. WebSphere Process Server for z/OS のインストール・スクリプトが実行されていること。

インストール・スクリプトを実行すると、WebSphere Application Server 構成 HFS から WebSphere Process Server for z/OS SMP/E コードへのシンボリック・リンクが作成され、管理コンソールが WebSphere Process Server for z/OS 定義によって更新されます。

インストール・スクリプトを実行するときに、**-runtime** パラメーター値が WebSphere Application Server for z/OS スタンドアロン・サーバーの構成 HFS へのパスであることを確認してください。例えば、**-runtime /WebSphere/V6R0/AppServer** です。

詳しくは、107 ページの『インストール・スクリプトの実行』を参照してください。

7. DB2 を使用する WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成を作成する場合は、製品の構成に必要なデータベースおよびストレージ・グループを作成する必要があること。

詳しくは、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

8. WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成を作成するために、どの応答ファイルを使用するかを決定すること。

以下の 2 つの応答ファイルから選択することができます。

- standAloneProfile.rsp

このサンプル応答ファイルには、Cloudscape データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン・サーバーを作成および構成するためのパラメーターが格納されています。

このサンプル standAloneProfile.rsp は、<smpe_root>/usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfile.rsp 内にあります。

- standAloneProfileDB2.rsp

このサンプル応答ファイルには、DB2 for z/OS データベースを使用する WebSphere Process Server for z/OS スタンドアロン・サーバーを作成および構成するためのパラメーターが格納されています。

注: DB2 for z/OS を WebSphere Process Server for z/OS スタンドアロン・サーバーのデータベースとして使用するには、追加のセットアップ手順が必要です。155 ページの『データベースを作成する際の考慮事項』を参照してください。

詳しくは、『応答ファイルの選択』を参照してください。

9. スタンドアロン応答ファイルを作業ディレクトリーにコピーすること。

例えば、Cloudscape データベース・パラメーターが指定されたスタンドアロン応答ファイルをコピーする場合は、以下のコマンドを実行します。

```
cp /usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfile.rsp
```

ここで、`/usr/lpp/zWPS/V6R0/` は、WebSphere Process Server for z/OS の `SMP_ROOT` を表します。

10. 応答ファイルに適切な許可があることを確認すること。

Cloudscape を使用するスタンドアロン構成の場合は、以下のコマンドを実行します。

```
chmod 755 standAloneProfile.rsp
```

DB2 for z/OS を使用するスタンドアロン構成の場合は、以下のコマンドを実行します。

```
chmod 755 standAloneProfileDB2.rsp
```

11. スタンドアロン応答ファイルをご使用の環境の仕様に合わせて調整すること。

応答ファイル内のプロパティの編集については、『応答ファイルでの作業』を参照してください。

`standAloneProfileDB2.rsp` の場合、以下のフィールドを変更します (常に `LONG` 名を使用します)。

```
JMSUSER=jmsuser-> このユーザー ID は、作成されるリソースの J2C 認証別名を作成するために使用されます。
JMSPASS=password
JMSUSER=db2user
DBPASS=password
CONFIGSERVER=dmgr
DBLOCATION=LOC1-> SSID ではなく、DB2 LOCATION であることが必要です。
profilePath=/WebSphere/V6R0/DeploymentManager/profiles/default
templatePath=/WebSphere/V6R0/DeploymentManager/profileTemplates/dmgr.*
cellName=cell1
nodeName=cell1dmnod
dbType=DB2UDBOS390_V8_1_dbJDBCClasspath=/usr/lpp/db2810/jcc/classes
dbJDBCProperties=/etc/db2cfg
```

重要: 上記にリストしたプロパティは、スタンドアロン構成用にカスタマイズする必要のあるプロパティを示しています。サンプル応答ファイル内のその他のすべてのプロパティでは、デフォルト値を受け入れることができます (その多くは変数置換を使用します)。作成されるデータベースおよびストレージ・グループに応じて、以下の変更も合わせて行う必要があることがあります。

```
dbName=WPSDB
dbStorageGroup=WPSDBST0
```

データベースおよびストレージ・グループの作成については、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

`standAloneProfileDB2.rsp` 応答ファイルを使用する場合は、データベースの構成を先送りする値が「`true`」(`dbDelayConfig=true`) に設定されていることを確認してください。データベースの構成の先送りは、構成スクリプトにより、データベース・リソースを作成する DDL スクリプトが自動的に実行されないことを意味します。 `dbDelayConfig=true` を指定した場合、DDL 内のデータベース定義がディレクトリーに書き込まれます。構成プロセスの後にこれを手動で実行する必要があります。データベースとして Cloudscape を使用する場合、この値は適用されません。 Cloudscape の場合は、データベース定義が自動的に実行されます。詳しくは、234 ページの『手動によるデータベースの構成』を参照してください。

12. **オプション:** `DB2JccConfiguration.properties` ファイルを作成し、カスタマイズすること。

DB2JccConfiguration.properties ファイルは、DB2 Universal JDBC ドライバーが、タイプ 2 のデータ・ソースを使用して DB2 z/OS と接続するときを使用します。

DB2JccConfiguration.properties ファイルを作成し、カスタマイズするには、以下の手順を実行します。

- a. ご使用の DB2 SSID が DSN8 と等しくない場合、/etc/db2cfg/ 内に **DB2JccConfiguration.properties** ファイルを作成します。
- b. WebSphere のコントローラー領域のユーザー ID と WebSphere Process Server for z/OS 構成ジョブを実行するユーザー ID で、プロパティ・ファイルを読み取ることができるように、必ずディレクトリーに許可を設定します。
- c. DB2JccConfiguration.properties ファイルに以下の行があり、このファイルがすべてに対して読み取り可能であることが必要です。

このプロパティ・ファイル

```
db2.jcc.ssid=DB15
```

ここで、**DB15** はインストールの SSID です。

DB2JccConfiguration.properties ファイルでコーディングすることができる、想定されるその他のすべてのプロパティについては、「*DB2 Universal Database for z/OS V8.1 Application Programming Guide and Reference for Java*」(SC18-741) を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン構成を作成するには、以下の作業を実行します。

1. ディレクトリーをアプリケーション・サーバーの bin ディレクトリーに変更します。

```
cd /WebSphere/V6R0/AppServer/bin/
```

2. まだ管理者のユーザー ID に切り替えていない場合は、管理者のユーザー ID に切り替えます。以下に例を示します。

```
su wsadmin
```

3. **オプション:** 製品の構成スクリプト実行時間内で実行できるように、場合によっては、OMVS の制限時間を増やす必要があります。OMVS の制限時間を増やすには、MVS コンソールから以下のように入力します。

```
SETOMVS MAXCPUIME=86400
```

4. OS/390 UNIX コマンド・シェルにアクセスします。ISPF コマンド・シェルで TSO コマンド OMVS を入力するか、他の任意の ISPF パネルから TSO OMVS と入力します。

UNIX シェル内に入ると、コマンド・プロンプト (通常はドル (\$) またはポンド (#) 記号) は、システムが入力を受け入れる準備ができていていることを示します。

5. コマンド・プロンプトから、WebSphere Process Server for z/OS 構成コマンドを実行します。コマンドの実行方法については、次の構文図を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS を構成するための構文図

►--zWPSConfig.sh--augment--►



注:

- 1 作成している製品構成情報に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例では、製品に付属している応答ファイルへのデフォルトのパスを示します。コマンドを実行する場合、**-response** パラメータは、環境に固有の値を使用して変更した応答ファイルへの絶対パスを表します。
- 2 **-trace** を指定すると、コマンドが適切なトレース・ファイルに書き込みを行います。

WebSphere Process Server for z/OS を ESB 専用サーバーとして構成するための構文図

►--zWESBConfig.sh--augment--►



注:

- 1 WebSphere Process Server for z/OS をインストールする構成に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例のこの絶対パス名では、ユーザーがデフォルトの応答ファイルを使用していることを前提にしています。応答ファイルをカスタマイズしたい場合、このパス名は、カスタマイズされたファイルの絶対パスを表す必要があります。
- 2 **-trace** を指定すると、コマンドが適切なログ・ファイルに書き込みを行います。

注: 前述の手順は、OS/390 UNIX コマンド・シェルからインストール・スクリプトを実行する方法を示しています。別の方法としては、Telnet を使用してプロンプトからインストール・スクリプトを実行することもできます。Telnet を使用してインストール・スクリプトを実行するには、システム・プロンプトで「telnet TCPIP-Address port number」と入力します。Telnet コマンドの例は、telnet 99.9.99.999 2023 です。99.9.99.999 は TCP IP アドレス、2023 はポート番号を表します。

標準出力からのメッセージを確認します。これらは、zWPSConfig.sh または zWESBConfig.sh が実行された画面に表示されるか、あるいはコマンド行でリダイレクト記号（「>」）が使用された場合は、指定されたファイルに出力されます。

エラー・メッセージは表示されていないはずですが。

-augment オプションを指定して zWPSConfig.sh または zWESBConfig.sh を正常に実行した例を以下に示します。

```
コマンド引数の構文解析中...
引数の構文解析が完了しました
構成のセットアップ中...
runtimeRootDirName: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WAS_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WBI_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
構成のセットアップが完了しました
プロファイルの拡張中...
プロファイルの拡張が完了しました
```

データベースの構成を先送りにするよう選択した場合は、DDL スクリプトの形式で生成されたデータベース定義を実行する必要があります。このようなスクリプトは、configuration_root/app_server_root /profiles/default/databases 内にあります。

応答ファイルに、Business Process Choreographer のサンプル構成の値を指定した場合、ビジネス・プロセス・コンテナ、ヒューマン・タスク・コンテナ、および Business Process Choreographer Explorer が含まれるサンプル構成が Process Server 構成の一部となります。管理コンソールを調べて、BPEContainer、BPCEplorer、および TaskContainer で始まる名前のエンタープライズ・アプリケーションを探すことによって、これらのコンポーネントが構成されていることを確認することができます。

注: このサンプル構成は、実動システムには適していません。使用できる Business Process Choreographer 構成は 1 つに限られるため、Business Process Choreographer の構成を続行して WebSphere MQ や各種のデータベースを使用するには、その前にサンプル構成を削除しておく必要があります。この手順については、Business Process Choreographer PDF の『Business Process Choreographer 構成の除去』で説明しています。

データベースの構成を先送りにするよう選択した場合は、DDL スクリプトの形式で生成されたデータベース定義を実行する必要があります。このようなスクリプトは、WebSphere Application Server for z/OS の構成ルート configuration_root/app_server_root/profiles/default/dbscripts 内にあります。例えば、WebSphere/V6R0/AppServer/profiles/default/dbscripts です。

詳しくは、『製品構成の確認』を参照してください。

Network Deployment 構成の作成

デプロイメント・マネージャー応答ファイルを使用して **zWPSConfig.sh** または **zWESBConfig.sh** を実行すると、WebSphere Process Server for z/OS の Network Deployment 構成が作成されます。これを行うには、アプリケーションのインストール、リソースやバスなどの作成のための多数の Ant スクリプトを実行し、デプロイメント・マネージャー・セル用の WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルを WebSphere Process Server for z/OS 構成データで拡張します。1 つの Sysplex 全体に複数の管理対象サーバー・ノードが存在する 1 つの Network Deployment 環境内で、WebSphere Process Server for z/OS を構成することができます。

WebSphere Process Server for z/OS 構成には、多数の DB2 データベースとテーブルが必要です。

DB2 for z/OS の準備に関しては、以下のことを行う必要があります。

- DB2 内で作成するすべてのデータベース、ストレージ・グループ、テーブル、索引、およびビューに適用する命名規則を決定します。

詳しくは、『データベースを作成する際の考慮事項』を参照してください。

明確にすべき重要な点は、命名規則と、スキーマ名および J2C 認証別名の選択です。

- DB2 データ定義言語 (DDL) ステートメントを実行するのに、SPUFI のような z/OS ツールを使用するか、シェル・スクリプトや Ant スクリプトなどの UNIX ツールを使用するかを決定します。
- DB2 内の WebSphere Process Server for z/OS オブジェクトに適用するセキュリティの扱い方を決定します。

DB2 および JMS キューへのアクセスに必要な追加の RACF グループおよびユーザー ID を準備します。

詳しくは、『データベースを作成する際の考慮事項』を参照してください。

- ご使用の DB2 用に DB2 Universal ドライバーが構成されていることを確認します。

「*WPS for z/OS Datasource & Database Configuration Hints & Tips*」というタイトルの技術情報にデータベースの構成に関するいくつかの役に立つヒントがあります。

注: 「*WPS for z/OS Datasource & Database Configuration Hints & Tips*」の技術情報は、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 601 に適用されますが、DB2 の準備に関する情報の一部が役に立つ可能性があります。

WebSphere Process Server for z/OS 構成プロセスは、z/OS UNIX System Services の実用的な知識があることを前提としています。以下の資料が利用できます。

- z/OS V1R7.0 UNIX System Services User's Guide
- z/OS V1R7.0 UNIX System Services Command Reference

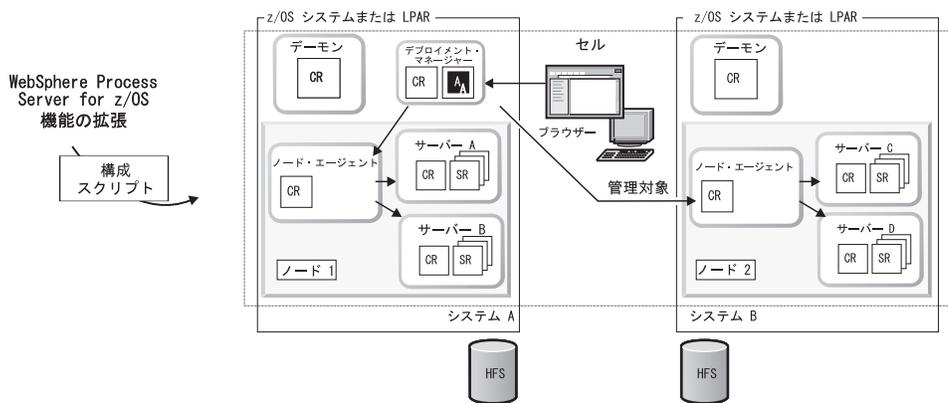
デプロイメント・マネージャー構成を作成する前に、以下の点を確認してください。

1. インストール・プロセスと構成プロセスの作業の流れを理解するために、59 ページの『WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成の計画』を見直すこと。
2. インストール済み環境でセキュリティーおよびシステムのアクセス権を管理するシステム・プログラマーによって、正しくシェルを利用できるようにユーザーがセットアップされていること。

これには、ユーザーの RACF (セキュリティー) プロファイルに変更を加え、UNIX シェル内でホーム・ディレクトリーを作成する作業が含まれます。ユーザーは常に、UNIX セッションの開始時にホーム・ディレクトリーから作業を始めます。このディレクトリー内で、プログラムの実行に必要な可能性のあるすべての環境変数ファイルを持続します。これらのファイルには、Java プログラムで使用される Java クラスのロケーションなど、特定の言語に必要な情報が含まれています。ホーム・ディレクトリーを、作業データの保存用のメイン・ディレクトリーとして使用することもできます。WebSphere Application Server for z/OS に使用するセキュリティー定義を管理しやすくするためのツールや手法については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『Resource Access Control Facility Tools』を参照してください。

3. WebSphere Application Server for z/OS 製品コードがシステムにロードされており、Network Deployment セルと空の管理対象ノードを構成済みであること。

WebSphere Process Server for z/OS の構成プロセスでは、WebSphere Application Server for z/OS デフォルト・プロファイルを拡張するため、このプロファイルを WebSphere Process Server for z/OS 構成データで拡張する前に、構成済みのデプロイメント・マネージャー・セルの準備を整える必要があります。



重要: WebSphere Application Server for z/OS 内で空の管理対象ノードを作成するときに、ジョブ **BBOWMNaN** を実行しないようにしてください。このジョブを実行すると、ノードが指定のデプロイメント・マネージャー・セルに統合されます。WebSphere Process Server for z/OS 構成プロセスの一部としてデプロイメント・マネージャー・セルを統合するため、ここではノードを統合する必要はありません。

4. WebSphere Process Server for z/OS 製品コードがシステムにロードされていること。

システム・プログラマーが、WebSphere Process Server for z/OS テープの内容をシステムに正常にロードして、SMP/E インストールを完了したこと。詳しくは、103 ページの『インストール・メディアから z/OS への製品コードのロード』を参照してください。

5. WebSphere Process Server for z/OS のインストール・スクリプトが実行されていること。

デプロイメント・マネージャーのノードに対して zSMPInstall.sh スクリプトを実行して、WebSphere Process Server for z/OS の機能用にセルの準備をします。

インストール・スクリプトを実行すると、WebSphere Application Server for z/OS の構成ルート (WAS_HOME と呼ばれる) から WebSphere Process Server for z/OS SMP/E コードへのシンボリック・リンクが作成され、管理コンソールが WebSphere Process Server for z/OS 定義によって更新されます。

インストール・スクリプトを実行するときに、**-runtime** パラメーター値が WebSphere Application Server for z/OS デプロイメント・マネージャーの構成ルートであることを確認してください。例えば、**-runtime /WebSphere/V6R0/DeploymentManager** などです。

詳しくは、107 ページの『インストール・スクリプトの実行』を参照してください。

6. WebSphere セルの構成 HFS データ・セットのバックアップを取る。デプロイメント・マネージャーの構成 HFS と空のノードの構成 HFS の両方のバックアップを忘れずに取ってください。
7. Network Deployment 構成では、DB2 for z/OS データベースしかサポートされないため、WebSphere Process Server for z/OS 構成スクリプトを実行する前に DB2 の前提条件となるアクションを必ず実行してください。

詳しくは、WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成の計画に関するセクションの DB2 for z/OS のセットアップに関する考慮事項 (DB2 for z/OS setup considerations) および 157 ページの『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

8. デプロイメント・マネージャー応答ファイルを作業ディレクトリーにコピーすること。以下に例を示します。

```
cp /usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/DmgrDB2.rsp
```

9. 応答ファイルに適切な許可があることを確認すること。

```
chmod 755 DmgrDB2.rsp
```

10. デプロイメント・マネージャー応答ファイルをご使用の環境の仕様に合わせて調整すること。

応答ファイル内のプロパティーの編集については、『応答ファイルでの作業』を参照してください。

DmgrDB2.rsp の場合、応答ファイルの以下のフィールドを変更します (常に LONG 名を使用します)。

```
JMSUSER=jmsuser----> このユーザー ID は、作成されるリソースの J2C 認証別名を作成するために使用されます。  
JMSPASS=password  
DBUSER=db2user
```

```
DBPASS=password
CONFIGSERVER=dmgr
DBLOCATION=LOC1 ----> SSID ではなく、DB2 LOCATION である必要があります。
profilePath=/WebSphere/V6R0/DeploymentManager/profiles/default
templatePath=/WebSphere/V6R0/DeploymentManager/profileTemplates/dmgr.*
cellName=c11ce11d
nodeName=c11dmnod
dbType=DB2UDBS390_V8_1
dbJDBCClasspath=/usr/lib/db2810/jcc/classes
dbJDBCProperties=/etc/db2cfg
```

重要: 上記にリストしたプロパティは、デプロイメント・マネージャー構成用にカスタマイズする必要のあるプロパティを示しています。サンプル応答ファイル内のその他のすべてのプロパティでは、デフォルト値を受け入れることができます (その多くは変数置換を使用します)。作成されるデータベースおよびストレージ・グループに応じて、以下の変更も合わせて行う必要があることがあります。

```
dbName=WPSDB
dbStorageGroup=WPSDBST0
```

データベースおよびストレージ・グループの作成については、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

データベースの構成を先送りする値が「true」(**dbDelayConfig=true**) に設定されていることを確認してください。データベースの構成の先送りは、構成スクリプトにより、データベース・リソースを作成する DDL スクリプトが自動的に実行されないことを意味します。 **dbDelayConfig=true** を指定した場合、DDL 内のデータベース定義がディレクトリーに書き込まれます。構成プロセスの後にこれを手動で実行する必要があります。詳しくは、234 ページの『手動によるデータベースの構成』を参照してください。

11. **オプション:** DB2JccConfiguration.properties ファイルを作成し、カスタマイズすること。

DB2JccConfiguration.properties ファイルは、DB2 Universal JDBC ドライバーが、タイプ 2 のデータ・ソースを使用して DB2 z/OS と接続するときを使用します。

DB2JccConfiguration.properties ファイルを作成し、カスタマイズするには、以下の手順を実行します。

- a. ご使用の DB2 SSID が DSN8 と等しくない場合、/etc/db2cfg/ 内に **DB2JccConfiguration.properties** ファイルを作成します。
- b. WebSphere のコントローラー領域のユーザー ID と WebSphere Process Server for z/OS 構成ジョブを実行するユーザー ID で、プロパティ・ファイルを読み取ることができるように、必ずディレクトリーに許可を設定します。
- c. DB2JccConfiguration.properties ファイルに以下の行があり、このファイルがすべてに対して読み取り可能であることが必要です。

このプロパティ・ファイル

```
db2.jcc.ssid=DB15
```

ここで、**DB15** はインストールの SSID です。

DB2JccConfiguration.properties ファイルでコーディングすることができる、想定されるその他のすべてのプロパティについては、「*DB2 Universal*

Database for z/OS V8.1 Application Programming Guide and Reference for Java」(SC18-741)を参照してください。

WebSphere Process Server for z/OS のデプロイメント・マネージャー構成を作成するには、以下の作業を実行します。

1. デプロイメント・マネージャー・サーバーを停止します (必要な場合)。
stopManager コマンドを使用して、デプロイメント・マネージャーを停止するか、または管理コンソールを使用して、デプロイメント・マネージャー・サーバーを停止することができます。

サーバーの停止方法について詳しくは、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『アプリケーション・サーバーの停止』を参照してください。

2. 構成スクリプトを実行する準備をします。 OS/390 UNIX コマンド・シェルから構成スクリプトを実行する場合は、以下の手順を実行します。
 - a. OS/390 UNIX コマンド・シェルにアクセスします。
 - b. ISPF コマンド・シェルで TSO コマンド OMVS を入力するか、他の任意の ISPF パネルから TSO OMVS と入力します。
 - c. UNIX シェル内に入ると、コマンド・プロンプト (通常はドル (\$) またはポンド (#) 記号) は、システムが入力を受け入れる準備ができていることを示します。

Telnet プロンプトから構成スクリプトを実行する場合は、以下の手順を実行します。

- a. Telnet セッションに戻ります (必要な場合)。

システム・プロンプトから **telnet TCPIP-Address port number** と入力します。

Telnet コマンドの例は、telnet 99.9.99.999 2023 です。99.9.99.999 は TCP IP アドレス、2023 はポート番号を表します。

- b. 管理者ユーザー ID から自分のユーザー ID に切り替えます。
3. ディレクトリーをデプロイメント・マネージャーの bin ディレクトリーに変更します。

```
cd /WebSphere/V6R0/DeploymentManager/bin/
```

4. まだ管理者のユーザー ID に切り替えていない場合は、管理者のユーザー ID に切り替えます。 以下に例を示します。

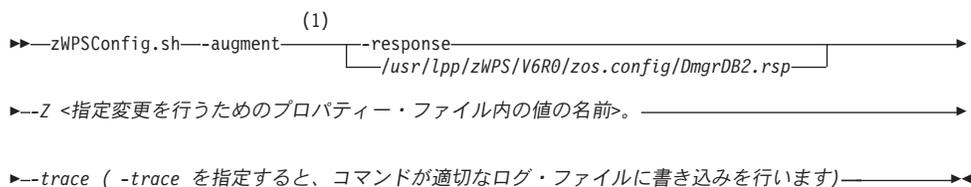
```
su wsadmin
```

5. **オプション:** 製品の構成スクリプト実行時間内で実行できるように、場合によっては、OMVS の制限時間を増やす必要があります。 OMVS の制限時間を増やすには、MVS コンソールから以下のように入力します。

```
SETOMVS MAXCPUIME=86400
```

6. 製品の構成スクリプトを、以下の構文図に示されているように実行して、デプロイメント・マネージャーで WebSphere Process Server for z/OS を構成します。

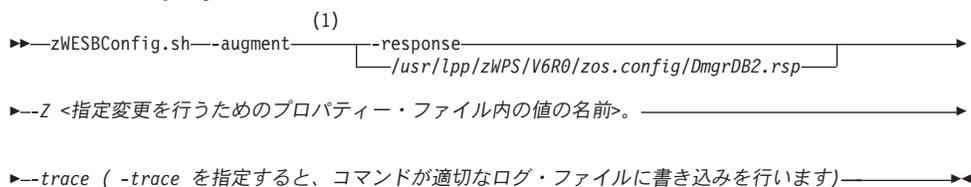
Network Deployment 構成を作成するための構文図



注:

- 1 WebSphere Process Server for z/OS をインストールする構成に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例のこの絶対パス名では、ユーザーがデフォルトの応答ファイルを使用していることを前提にしています。応答ファイルをカスタマイズしたい場合、このパス名は、カスタマイズされたファイルの絶対パスを表す必要があります。

Network Deployment 構成を ESB 専用サーバーとして作成するための構文図



注:

- 1 WebSphere Process Server for z/OS をインストールする構成に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例のこの絶対パス名では、ユーザーがデフォルトの応答ファイルを使用していることを前提にしています。応答ファイルをカスタマイズしたい場合、このパス名は、カスタマイズされたファイルの絶対パスを表す必要があります。

重要: このジョブの実行時間は、おおよそ 75 分です。このジョブの実行中に、空の管理対象ノードの構成手順を開始することができます。

7. 構成 HFS データ・セットのほかのバックアップを実行します。

標準出力からのメッセージを確認します。これらは、**zWPSConfig.sh** または **zWESBConfig.sh** が実行された画面に表示されるか、あるいはコマンド行でリダイレクト記号 (「>」) が使用された場合は、指定されたファイルに出力されます。

エラー・メッセージは表示されていないはずですが。

-augment オプションを指定して **zWPSConfig.sh** または **zWESBConfig.sh** を正常に実行した例を以下に示します。

```

コマンド引数の構文解析中...
引数の構文解析が完了しました
構成のセットアップ中...
runtimeRootDirName: /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager
WAS_HOME: /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager
WBI_HOME: /WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager
構成のセットアップが完了しました
プロファイルの拡張中...
プロファイルの拡張が完了しました

```

データベースの構成を先送りにするよう選択した場合は、DDL スクリプトの形式で生成されたデータベース定義を実行する必要があります。このようなスクリプトは、WebSphere Application Server for z/OS の構成ルート `configuration_root/app_server_root/profiles/default/dbscripts` 内にあります。例えば、`WebSphere/V6R0/DeploymentManager/profiles/default/dbscripts` などです。

空の管理対象ノード構成の作成

`zWPSConfig.sh` または `zWESBConfig.sh` を実行すると、空の管理対象ノード構成が WebSphere Process Server for z/OS 構成データで拡張されます。

WebSphere Process Server for z/OS 構成には、多数の DB2 データベースとテーブルが必要です。「*WPS for z/OS Datasource & Database Configuration Hints & Tips*」というタイトルの技術情報にデータベースの構成に関するいくつかの役に立つヒントがあります。

注: 「*WPS for z/OS Datasource & Database Configuration Hints & Tips*」の技術情報は、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 601 に適用されますが、DB2 の準備に関する情報の一部が役に立つ可能性があります。

WebSphere Process Server for z/OS 構成プロセスは、z/OS UNIX System Services の実用的な知識があることを前提としています。以下の資料が利用できます。

- z/OS V1R7.0 UNIX System Services User's Guide
- z/OS V1R7.0 UNIX System Services Command Reference

管理対象ノード構成を作成する前に、以下の点を確認してください。

1. 208 ページの『Network Deployment 構成の作成』の手順を完了していること。
2. WebSphere Process Server for z/OS のインストール・スクリプトが実行されていること。

インストール・スクリプトを実行すると、`$WAS_HOME` から WebSphere Process Server for z/OS SMP/E コードへの `symlink` が作成され、管理コンソールが WebSphere Process Server for z/OS 定義によって更新されます。

詳しくは、107 ページの『インストール・スクリプトの実行』を参照してください。

3. デプロイメント・マネージャー応答ファイルを作業ディレクトリーにコピーすること。以下に例を示します。

```
cp /usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/ManagedDB2.rsp
```

4. 応答ファイルに適切な許可があることを確認すること。

```
chmod 755 ManagedDB2.rsp
```

5. デプロイメント・マネージャー応答ファイルをご使用の環境の仕様に合わせて調整すること。

応答ファイル内のプロパティの編集については、『応答ファイルでの作業』を参照してください。

`ManagedDB2.rsp` の場合、応答ファイルの以下のフィールドを変更します (常に LONG 名を使用します)。

```
JMSUSER=jmsuser---> このユーザー ID は、作成されるリソースの
J2C 認証別名を作成するために使用されます。
JMSPASS=passw0rd
DBUSER=db2user
DBPASS=passw0rd
CONFIGSERVER=dmgr
DBLOCATION=LOC1 ----> SSID ではなく、DB2 LOCATION である必要があります。
profilePath=/WebSphere/V6R0/DeploymentManager/profiles/default
templatePath=/WebSphere/V6R0/DeploymentManager/profileTemplates/dmgr.*
cellName=c11cell1d
nodeName=c11dmnod
dbType=DB2UDBOS390_V8_1
dbJDBCClasspath=/usr/lpp/db2810/jcc/classes
dbJDBCProperties=/etc/db2cfg
```

重要: 上記にリストしたプロパティは、デプロイメント・マネージャー構成用にカスタマイズする必要のあるプロパティを示しています。サンプル応答ファイル内のその他のすべてのプロパティでは、デフォルト値を受け入れることができます (その多くは変数置換を使用します)。作成されるデータベースおよびストレージ・グループに応じて、以下の変更も合わせて行う必要があることがあります。

```
dbName=WPSDB
dbStorageGroup=WPSDBSTO
```

データベースおよびストレージ・グループの作成については、『データベースおよびストレージ・グループの作成』を参照してください。

データベースの構成を先送りする値が「true」(**dbDelayConfig=true**) に設定されていることを確認してください。データベースの構成の先送りは、構成スクリプトにより、データベース・リソースを作成する DDL スクリプトが自動的に実行されないことを意味します。 **dbDelayConfig=true** を指定した場合、DDL 内のデータベース定義がディレクトリーに書き込まれます。構成プロセスの後にこれを手動で実行する必要があります。詳しくは、234 ページの『手動によるデータベースの構成』を参照してください。

6. ご使用の DB2 SSID が DSN8 と等しくない場合、`/etc/db2cfg/` 内に **DB2JccConfiguration.properties** ファイルを作成します (まだ作成していない場合)。

このプロパティ・ファイルに以下の行があり、このファイルがすべてに対して読み取り可能であることが必要です。

```
db2.jcc.ssid=DB15
```

ここで、**DB15** はインストールの SSID です。

空の管理対象ノード構成を作成することが目的である場合は、以下の作業を実行します。

1. 構成スクリプトを実行する準備をします。 OS/390 UNIX コマンド・シェルから構成スクリプトを実行する場合は、以下の手順を実行します。
 - a. OS/390 UNIX コマンド・シェルにアクセスします。
 - b. ISPF コマンド・シェルで TSO コマンド OMVS を入力するか、他の任意の ISPF パネルから TSO OMVS と入力します。
 - c. UNIX シェル内に入ると、コマンド・プロンプト (通常はドル (\$) またはポンド (#) 記号) は、システムが入力を受け入れる準備ができていることを示します。

Telnet プロンプトから構成スクリプトを実行する場合は、以下の手順を実行します。

- a. Telnet セッションに戻ります (必要な場合)。

システム・プロンプトから **telnet TCPIP-Address port number** と入力します。

Telnet コマンドの例は、telnet 99.9.99.999 2023 です。99.9.99.999 は TCP/IP アドレス、2023 はポート番号を表します。

b.

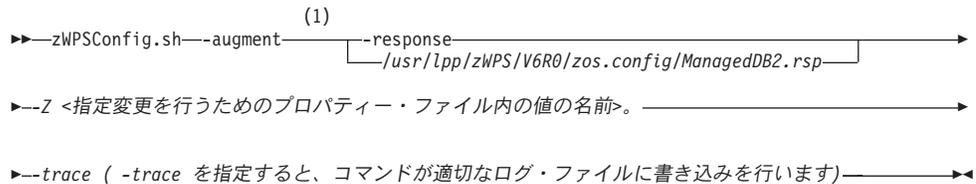
- c. 以下のディレクトリーに移動します。

2. ユーザー ID を次の管理者ユーザー ID に切り替えます (まだ wsadmin の立場で実行中でない場合)。su wsadmin (pwd = passw0rd)
3. **オプション:** 製品の構成スクリプト実行時間内で実行できるように、場合によっては、OMVS の制限時間を増やす必要があります。OMVS の制限時間を増やすには、MVS コンソールから以下のように入力します。

```
SETOMVS MAXCPUIME=86400
```

4. 製品の構成スクリプトを、以下の構文図に示すように実行します。

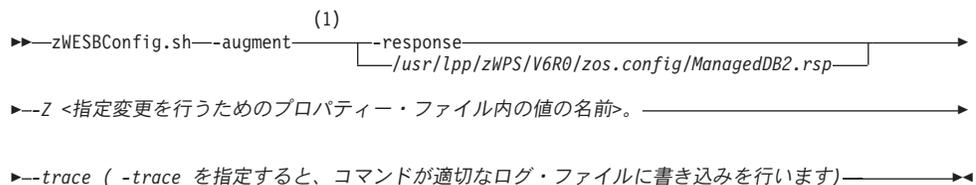
管理対象ノード構成を作成するための構文図



注:

- 1 WebSphere Process Server for z/OS をインストールする構成に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例のこの絶対パス名では、ユーザーがデフォルトの応答ファイルを使用していることを前提にしています。応答ファイルをカスタマイズしたい場合、このパス名は、カスタマイズされたファイルの絶対パスを表す必要があります。

Network Deployment 構成を ESB 専用サーバーとして作成するための構文図



注:

- 1 WebSphere Process Server for z/OS をインストールする構成に関連付けられている応答ファイルの絶対パスを入力します。この例のこの絶対パス名では、ユーザーがデフォルトの応答ファイルを使用していることを前提にしています。応答ファイルをカスタマイズしたい場合、このパス名は、カスタマイズされたファイルの絶対パスを表す必要があります。

標準出力からのメッセージを確認します。これらは、**zWPSConfig.sh** または **zWESBConfig.sh** が実行された画面に表示されるか、あるいはコマンド行でリダイレクト記号 (「>」) が使用された場合は、指定されたファイルに出力されます。

エラー・メッセージは表示されていないはずですが。

-augment オプションを指定して **zWPSConfig.sh** または **zWESBConfig.sh** を正常に実行した例を以下に示します。

```
コマンド引数の構文解析中...
引数の構文解析が完了しました
構成のセットアップ中...
runtimeRootDirName: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WAS_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WBI_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
構成のセットアップが完了しました
プロファイルの拡張中...
プロファイルの拡張が完了しました
```

応答ファイルに、Business Process Choreographer のサンプル構成の値を指定した場合、ビジネス・プロセス・コンテナ、ヒューマン・タスク・コンテナ、および Business Process Choreographer Explorer が含まれるサンプル構成が Process Server 構成の一部となります。管理コンソールを調べて、BPEContainer、BPCEplorer、および TaskContainer で始まる名前のエンタープライズ・アプリケーションを探すことによって、これらのコンポーネントが構成されていることを確認することができます。

注: このサンプル構成は、実動システムには適していません。使用できる Business Process Choreographer 構成は 1 つに限られるため、Business Process Choreographer の構成を続行して WebSphere MQ や各種のデータベースを使用するには、その前にサンプル構成を削除しておく必要があります。この手順については、Business Process Choreographer PDF の『Business Process Choreographer 構成の除去』で説明しています。

詳しくは、『製品構成の確認』を参照してください。

空の管理対象ノードのデプロイメント・マネージャーへの統合

WebSphere Process Server for z/OS の空の管理対象ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合するには、BBOWMNAN ジョブを実行します。

この手順を行う前に、以下を実行してください。

- WebSphere Process Server for z/OS がインストールされていること、および WebSphere Process Server for z/OS デプロイメント・マネージャーとカスタム・ノードが作成されていることを確認します。この手順では、構成プロセス中にカスタム・ノードを統合しなかったことが前提となっています。
- デプロイメント・マネージャーが稼働していることを確認します。稼働していない場合は、Telnet セッションまたは MVS コンソールのいずれかから、以下のように入力して始動します。

デプロイメント・マネージャーを Telnet セッションから始動するには、以下の手順を実行します。

1. wsadmin ユーザー ID である su wsadmin の立場であることを確認します。

2. コマンド `cd /WebSphere/V6R0/DeploymentManager/bin ./startManager.sh` を実行します。

MVS コンソールからデプロイメント・マネージャーを始動するには、以下のようになります。

1. MVS コンソールから以下のような対応する START コマンドを実行します。

```
START <proc name> ,JOBNAME=<DMserverShortName> ,ENV=<cellShortName> .<DM nodeShortName> .<DM serverShortName>
```

- デプロイメント・マネージャーが WebSphere Process Server for z/OS プロファイル (WebSphere Application Server for z/OS デプロイメント・マネージャー・プロファイルではなく) であることを確認します。
- デプロイメント・マネージャーがデフォルトの SOAP JMX コネクター・タイプを使用し、コネクターが使用可能であることを確認します。

重要: 以下の項目のいずれかに該当する場合は、この時点ではカスタム・ノードを統合しないでください。

- デプロイメント・マネージャーが稼働していないか、実行しているかどうかが不明。

注: デプロイメント・マネージャーが稼働していない場合、またはその他の理由で使用できないときに空の管理対象ノードを統合すると、統合に失敗し、結果として生成されるプロファイルの拡張は使用不可になります。この場合、このカスタム・プロファイル・ディレクトリーをプロファイル・リポジトリ (デフォルトでは、*install_root* 内の *profiles* ディレクトリー。ここで *install_root* は WebSphere Process Server のインストール・ディレクトリー) から移動させてから、同じ名前での管理対象ノード・プロファイルを作成する必要があります。

- デプロイメント・マネージャーが、まだ WebSphere Application Server for z/OS 構成データで構成または拡張されていない WebSphere Process Server for z/OS プロファイルであることを確認します。
- SOAP コネクターが使用不可になっている。
- デプロイメント・マネージャーが、デフォルトではないリモート・メソッド呼び出し (RMI) を優先 Java Management Extensions (JMX) コネクターとして使用するよう再構成されている。(優先コネクター・タイプを確認するには、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールで「システム管理 (System Administration)」>「デプロイメント・マネージャー (Deployment manager)」>「管理サービス (Administration services)」を選択します。)

以下の手順で、空の管理対象ノードをデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。

1. 空の管理対象ノードのビルド時に作成した BBOWMNAN ジョブを実行します。このジョブが RC=0 で完了することを確認します。
2. トレースをオフにします。MVS コンソールから、以下の MVS コマンドを実行します。

```
f <DMControlRgn>,traceinit
```

3. ノード・エージェントは統合時に開始していなければなりません。開始しないように選択した場合は、ここでそのノードのノード・エージェントを開始します。 `cd /WebSphere/V6R0/AppServer/bin./startNode.sh`

空の管理対象ノードがデプロイメント・マネージャーに統合されます。

空の管理対象ノードを統合したら、デプロイメント・マネージャーの管理コンソールに移動して、空の管理対象ノードをカスタマイズします。

コンソールの設定を調整するための変数の jacl スクリプトのダウンロードおよび実行

wpsFixvars.jacl を実行して、構成スクリプトによって作成された変数の内容を調整します。

デプロイメント・マネージャーおよび管理対象ノード用の構成スクリプトを正常に実行したことを確認します。

管理コンソールからサーバー構成を管理する前に、wpsFixvars.jacl スクリプトをダウンロードし、実行します。

wpsFixvars.jacl スクリプトは、管理コンソールの変数の設定をカスタマイズします。

注: 管理コンソールを使用して、手動で変数の設定をカスタマイズすることもできます。変数の設定の手動での調整については、『管理コンソールを使用した変数の設定の調整』を参照してください。

1. サンプル・スクリプトが存在するサイトにアクセスします。

変数設定を修正するためのサンプル・スクリプトが収容されているサポート・サイトは、次のとおりです。Techdocs - The Technical Sales Library。

2. サンプル・スクリプトをバイナリー形式で作業ディレクトリーにアップロードします。
3. デプロイメント・マネージャーのディレクトリーに移動します。 `cd /WebSphere/V6R0/DeploymentManager/bin`
4. スクリプトを以下のように実行します。

```
./wsadmin.sh -conntype none -f /u/wsuser/wpswork/wpsFixvars.jacl -wbiInstallRoot  
"/WebSphere/V6R0/DeploymentManager" -node "cl1dmmod"  
-jcchome /usr/lpp/db2810/jcc -jccproperties /etc/db2cfg/ DB2JccConfiguration.properties
```

空の管理対象ノードを統合することにより、構成アクティビティーを続行します。

管理コンソールを使用した変数の設定の調整

構成スクリプトによって作成された変数の内容を調整するには、管理コンソールから以下の手順を実行します。

デプロイメント・マネージャーおよび管理対象ノード用の構成スクリプトを正常に実行したことを確認します。

管理コンソールからサーバー構成を管理する前に、構成スクリプトによって作成された変数の設定を調整する必要があります。これは、この記事で説明するように、管理コンソールから手動で行うことができます。あるいは、『コンソールの設定を調整するための変数の jacl スクリプトのダウンロードおよび実行』の説明に従って、wpsFixvars.jacl スクリプトを実行し、変数の設定をカスタマイズすることもできます。

1. DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_PATH 変数をセル・レベルで追加します。
いくつかの JDBC リソースは、セル・レベルで作成されます。したがって、その場所に DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_PATH 変数を定義する必要があります。

DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_NATIVEPATH 変数がある場所に存在していることが必要です。

「環境」>「WebSphere 変数」を選択し、セル名以外のすべてを削除して空白にします。

「適用」をクリックします。

2. 「新規作成」を選択して、DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_PATH に適切な値を入力します。
3. 「OK」をクリックします。

名前: DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER

値: /usr/lpp/db2810/jcc/classes

4. デプロイメント・マネージャー JVM 上で、Common Event Infrastructure 用の ws.ext.dirs フィールドを設定します。

デプロイメント・マネージャーの JVM では、ws.ext.dirs フィールドを `${CEI_HOME}/lib:${CEI_HOME}/client` に設定する必要があります。

デプロイメント・マネージャーを初めて始動する前に、ここでこの設定を行います。

デプロイメント・マネージャーでこの設定を行わないと、後でイベント・アプリケーションをデプロイしようとしたときに、以下のメッセージが表示されません。

例外メッセージ:
com.ibm.websphere.management.exception.InvalidConfigDataTypeException:
ADMG0007E: 構成データ・タイプ EventInfrastructureProvider が無効です。
(The configuration data type EventInfrastructureProvider is not valid.)

5. 管理コンソールにログオンし、デプロイメント・マネージャー JVM の「カスタム・プロパティ」に進みます。

「システム管理 (System Administration)」->「デプロイメント・マネージャー (Deployment Manager)」->「プロセス定義 (Process Definition)」->「サーバント (Servant)」->「Java 仮想マシン (Java Virtual Machine)」->「カスタム・プロパティ」

6. 「新規作成」を選択し、各フィールドで以下のように入力します。

名前: ws.ext.dirs

値: `${CEI_HOME}/lib:${CEI_HOME}/client`

7. 「OK」をクリックします。
8. デプロイメント・マネージャー JVM に、db2.jcc.properties カスタム・プロパティを設定します。

同じ「カスタム・プロパティ」ダイアログから、「新規作成」を選択し、各フィールドで以下のように入力します。

名前: db2.jcc.propertiesFile

値: /etc/db2cfg/DB2JccConfiguration.properties

9. 「OK」をクリックします。

10. 構成を保管して、ノードと同期化します。

空の管理対象ノードを統合することにより、構成アクティビティを続行します。

セル間で Service Component Architecture の各種サービスにアクセスできるようにする

Service Component Architecture (SCA) の利点の 1 つは、利用者が他のサービス・モジュールにすでに存在するサービスを使用できるということです。サービス・プロバイダーとサービス・コンシューマーは異なるセルにあっても構いません。このような分散システムでは、各セルに各種サービスを配置することによって、サービスの分離や管理を効率的に実施できます。

例えば、サーバー A のアプリケーションが、別のセルにあるサーバー B のサービスを必要とするとしてします。そのようにしてサービスを使用するには、セル間の通信を構成する必要があります。

サービス・プロバイダーはサービスのすべてのコンシューマーに対応するために、セルのサービスに対して非同期インターフェースと同期インターフェースの両方を用意する必要があります。

サービス・コンシューマーについては、アプリケーションの対話スタイルを呼び出すために実行する構成の種類を制限することができます。アプリケーションで使用される対話スタイルを管理者が知らない場合、両方のスタイルを構成します。

セル間でのサービスの使用の非同期的視点

222 ページの図 8 は、プロバイダー・セル上にサービスがあり、そのモジュールを、コンシューマー・セル 1 とコンシューマー・セル 2 が非同期的に使用する環境を示しています。非同期環境でサービスを利用できるようにするには、プロバイダー・セルとコンシューマー・セルの双方がセル間の接続を定義する必要があります。可用性を重視するのであれば、特定のノードに障害が起こっても接続が使用可能のままであり続けるクラスター接続を使用するのがベストです。接続は、各セルまたはクラスターのメッセージング・エンジンの間で行われることに注意します。

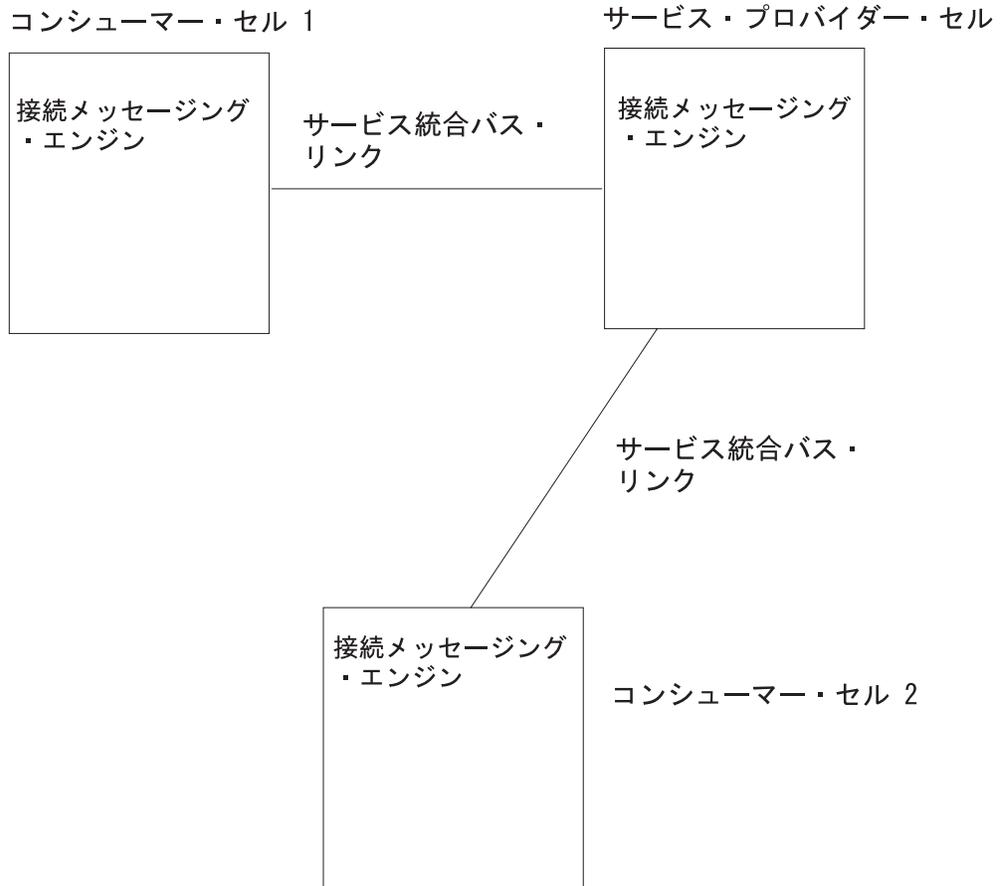


図8. セル間の非同期環境

サービス・プロバイダー・セルとコンシューマー・セルの間の接続はサービス統合バス・リンクで、この接続は手動で構成できます。構成を完了するには、サービス・プロバイダー・セルは、コンシューマー・セルが使用するサービスとの通信において使用する必要がある IP アドレスとポートを公開する必要があります。

セル間でのサービスの使用の同期的視点

223 ページの図9 は、プロバイダー・セル上にサービスがあり、そのモジュールを、コンシューマー・セル 1 とコンシューマー・セル 2 が同期的に使用する環境を示しています。同期環境でサービスを利用できるようにするには、プロバイダー・セルとコンシューマー・セルの双方がセル間の接続を定義する必要があります。可用性を重視するのであれば、特定のノードに障害が起こっても接続が使用可能のままであり続けるクラスター接続を使用するのがベストです。

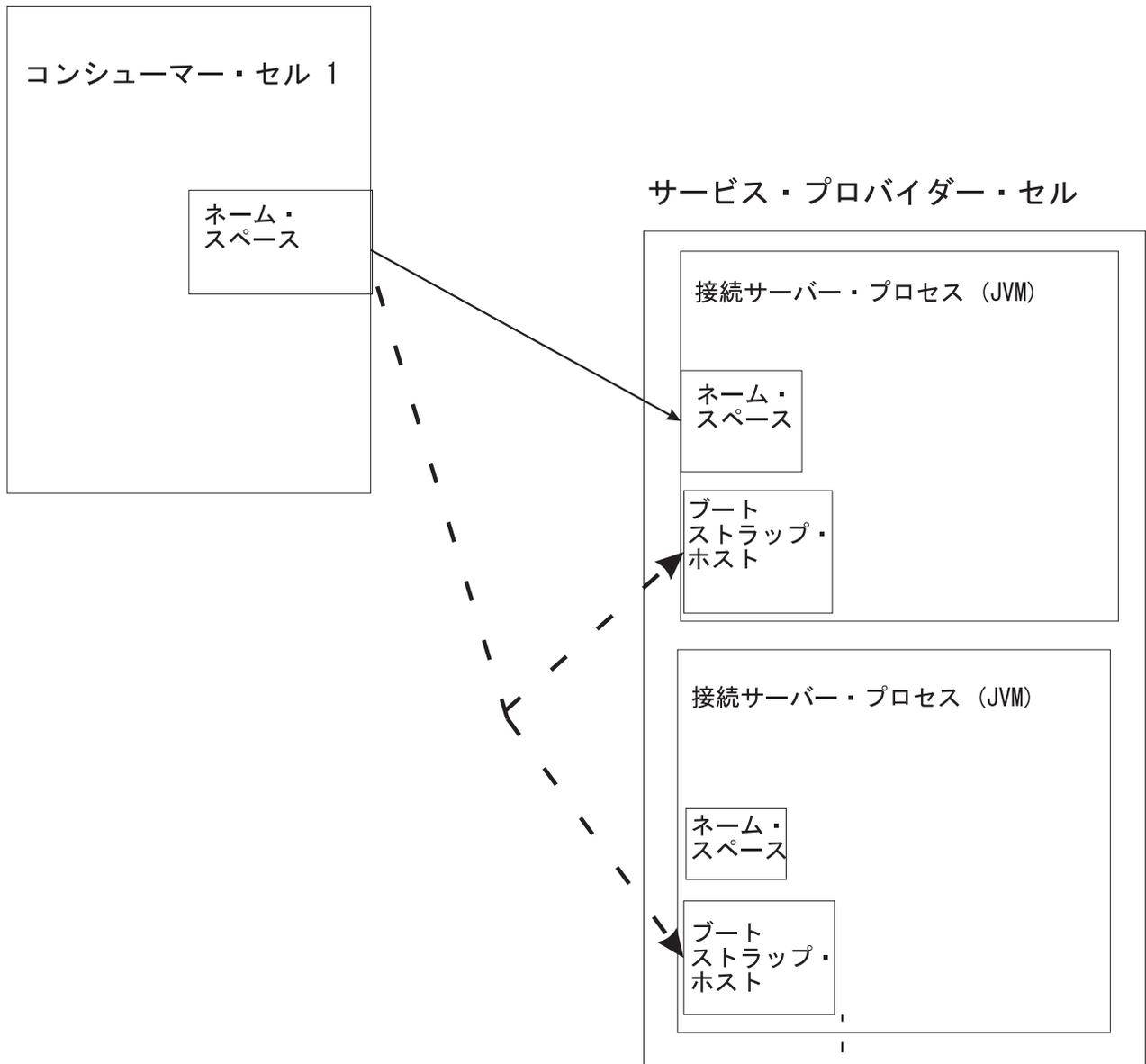


図9. セル間の同期環境

サービスへの参照を含む Java Naming and Directory Interface (JNDI) ネーム・スペースを公開することで、プロバイダー・セルのサービスが利用可能になります。コンシューマー・セルでは、公開された JNDI ネーム・スペースに結合するネーム・スペースを作成することで、サービスが使用できるようになります。

セルの外部から Service Component Architecture の各サービスへの同期アクセスの提供

提供側セル上のサービスを参照する使用側セルに対して、使用側セルの管理者は提供側セルへの接続を設定する必要があります。Java Naming and Directory Interface (JNDI) のリンクの構成のために使用側セルの管理者が必要とする情報を設定して提供します。

このタスクは、以下のことを前提としています。

- 提供側セル上にサービスが収容されている Service Component Architecture (SCA) モジュールがインストール済みである。
- 提供側セル上で管理コンソールを使用している。

別のセルにある SCA モジュールが、ご使用の SCA モジュールの検索に、そのセル内に JNDI 名を設定することによりご使用の SCA モジュールと同期して通信する。このタスクを実行する場合は、別のセルの JNDI 名をセットアップしてそれを使用可能に設定します。

1. オプション: このセルのブートストラップ・ホストとして別のセルにより使用される 2 つ以上のサーバーを指定します。

注: 少なくとも 2 つのブートストラップ・ホストを定義すれば、何かの理由でいずれかのホストに障害が発生しても、サービスの可用性を確保できます。

例えば、図 10 におけるサービス・プロバイダー・セル内の 2 つのサーバーに、ブートストラップ・ホストが含まれています。この目的で、図の上部のサーバーの IP アドレスは 9.26.237.144 であり、下部のサーバー 9.26.237.150 です。

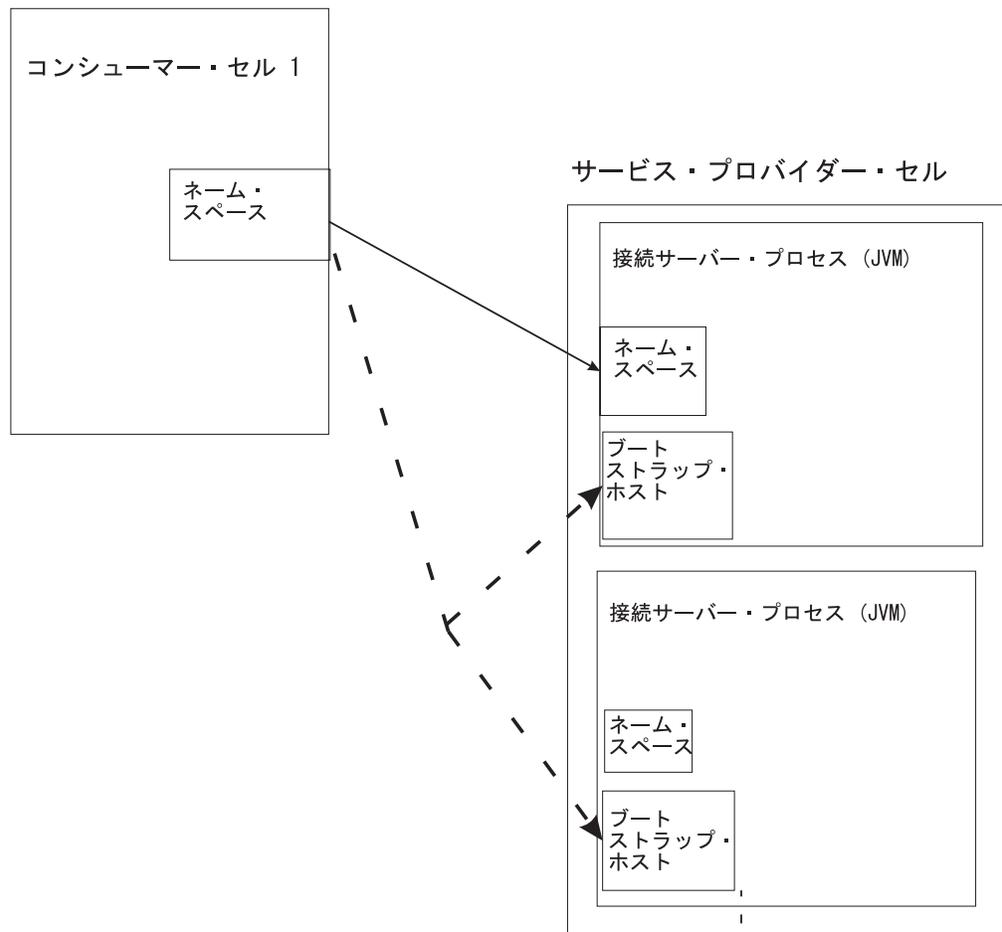


図 10. セル間の同期環境

重要: この手順では、単一のブートストラップ・ホストの構成のみを説明していません。可用性が必須ではない場合は、少なくとも 1 つのホストを提供側セルに設定し、可用性が要件である場合は、2 つ以上を設定します。

ヒント:

- 仮想ホストを使用すると、保守でハードウェアの交換やアップグレードが必要な場合のサービスの可用性が向上します。
 - 可用性が必須ではない場合は、単一のブートストラップ・ホストを使用できます。
2. ステップ 1 (224 ページ) で選択した各サーバーごとに、ブートストラップ・ポート番号を見つけます。

この情報は、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」>「*server_name*」>「通信 (Communications)」>「+ ポート (+ Ports)」>「Bootstrap_Address」をクリックすると表示されます。

例えば、図における両方のサーバーのポートは 2810 です。

3. 提供側セルにあるサービスを使用するすべてのセルに対して、それらの IP アドレスとポート番号を公開します。

この例では、以下のようなブートストラップ・ホストがこのセルに設定されたことを公表するメモが、使用側に送信されます。

- 9.26.237.144:2810
- 9.26.237.150:2810

公開する形式は、次の通りです。

```
corbaname:iiop:9.26.237.144:2810;9.26.237.150:2810
```

4. 使用側が呼び出す Enterprise Java Bean (EJB) の JNDI 名を提供します。

セルのその他の物理的な構成変更にかかわらず、公開されたブートストラップ・ホストの IP アドレスおよびポートは保持される必要があります。

別のセル内の Service Component Architecture サービスの同期呼び出し

別のセル内の Service Component Architecture (SCA) モジュールを非同期に呼び出す場合は、ネーム・スペース・バインディングを追加して、リモート SCA サービスにバインドする必要があります。

このタスクは、以下のことを前提としています。

- ユーザーのセルで呼び出すサービスが実行されているセルのブートストラップ・ホスト情報を受け取っている。
- 使用側セル上で管理コンソールを使用している。
- ターゲット・サービスを使用する SCA モジュールが既にインストールされている。

別のセル内の SCA サービスと同期して通信するには、JNDI ネーム・スペースを構成してそのサービスを検出できるようにする必要があります。以下のタスクは、JNDI ネーム・スペースを構成する場合に実行します。

注: このタスクの目的から、サービス使用側のモジュールはセル A に存在し、サービス提供側のモジュールはセル B に存在します。

以下のタスクに対し、223 ページの図 9 には構成に使用される IP 情報が含まれています。

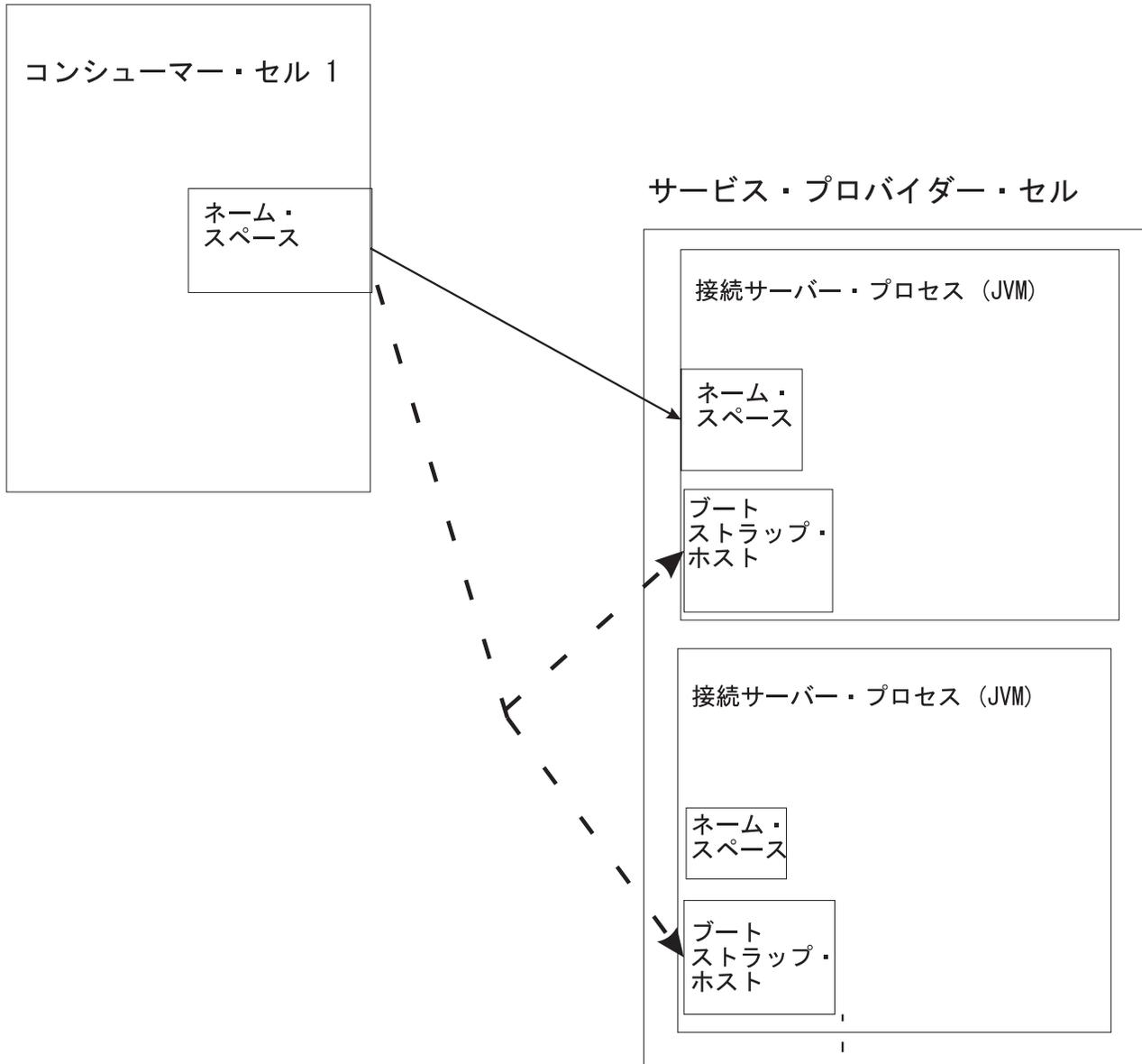


図 11. セル間の同期環境

1. 提供側セルの管理者からブートストラップ・ホストの情報を入手します。

223 ページの図 9 におけるブートストラップ・ポートが 2810 であると仮定すると、この情報は `corbaname:iiop:9.26.237.144:2810` (`corbaname:iiop:9.26.237.150:2810`) のようになります。

2. 呼び出し側のセル (この例ではセル A) で、提供側セルのエクスポートを指す新規のネームスペース・バインディングを作成します。

「環境」>「ネーミング (Naming)」>「ネームスペース・バインディング (Name Space Bindings)」パネルで、「セル」のスコープを選択して「適用」をクリックします。スコープを変更した状態で、画面の「新規作成」をクリックして、新しいバインディングを作成します。

ウィザードで、以下の値を指定します (それぞれの値は、この例の構成に合わせています)。

- a. バインディング・タイプは Indirect です。
- b. 基本プロパティは、以下のとおりです。
 - 「バインディング ID (Binding identifier)」は固有のストリングです (例: sca_import_test_sca_cross_simple_custinfo_CustomerInfo)。
 - 「ネーム・スペース内の名前 (Name in Name Space)」は、提供側セルで呼び出すサービスの Enterprise Java Bean (EJB) の JNDI 名です (例: sca/SimpleB0CrsmB/export/test/sca/cros/simple/custinfo/CustomerInfo)。この名前は、提供側セルのエクスポート・インターフェースに使用されます。
 - 「提供側 URL (Provider URL)」は、ステップ 1 (226 ページ) において受信する提供側セルのブートストラップ・ホスト情報です。例えば、corbaname:iiop:9.26.237.144:2810 (corbaname:iiop:9.26.237.150:2810) です。
 - 「JNDI 名」は、提供側セルで呼び出すサービスを表す Enterprise Java Bean (EJB) の JNDI 名です (例: sca/SimpleB0CrsmB/export/test/sca/cros/simple/custinfo/CustomerInfo)。これは、「ネーム・スペース内の名前 (Name in Name Space)」と同じ値にする必要があります。

注: 提供側セルにモジュールをデプロイすると、この名前が自動的に作成されます。この名前を入手するには、提供側セルの管理者に連絡してください。

作業を終了したら、「次へ」をクリックし、「要約」ページで値を確認します。確認後、「終了」をクリックします。

管理コンソールに新しいバインディングが表示されます。

3. 「保管」をクリックして変更を保管します。

アプリケーションを開始します。セル A の SCA モジュールがセル B の SCA モジュールを同期して呼び出せるようになりました。

セル間の非同期による Service Component Architecture サービスの提供

別々のセルにある Service Component Architecture (SCA) の各モジュール間で通信できるようにするには、2 つのセル間の通信リンクを構成する必要があります。このトピックでは、別のセルにある SCA サービスを非同期に呼び出すモジュールからの通信を可能にする、提供側セルでの構成作業について説明します。

このタスクは、以下のことを前提としています。

- 提供側のセル上で管理コンソールを使用している。

- 関連する SCA の各モジュールは既にインストールされているが、使用するモジュールは開始されていない。
- 使用側のモジュールを実行するセルを別の管理者が担当している。

別のセルにインストールされている SCA モジュールのサービスを必要とする SCA モジュールを開始する前に、両方のセルを構成して、各セルが要求をやり取りできるようにする必要があります。非同期呼び出しを使用する SCA モジュールの場合、このプロセスには、外部バスとサービス統合バス (SIBus) のリンクが必要になります。

注: このタスクの目的から、サービス使用側のモジュールはセル A に存在し、サービス提供側のモジュールはセル B に存在します。

この構成で使用される情報は、図 12 にあります。

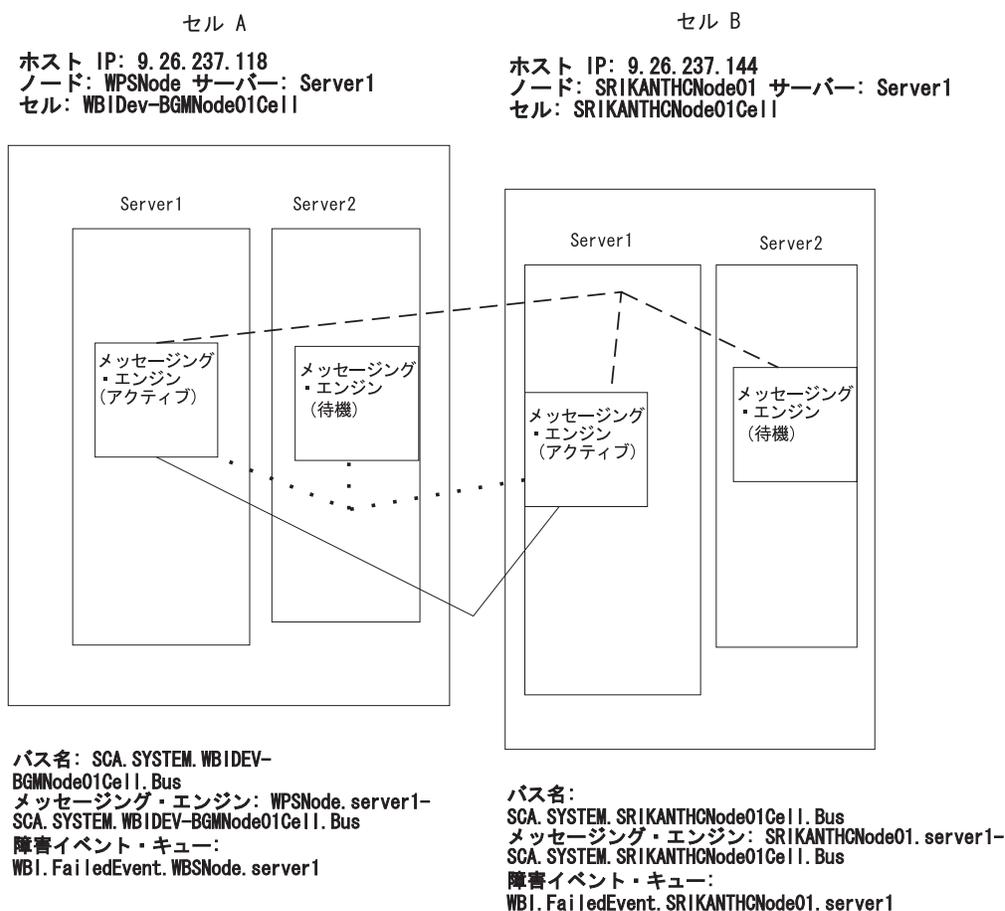


図 12. 別のセルにある SCA モジュールの呼び出し

1. このセルへの接続に使用される、他のセルに公開する IP アドレスを定義します。以下のいずれかの方法を選択してください。
 - スタンドアロンのプロファイルがそのサービスをホストする場合は、そのサーバー・ハードウェアの IP アドレスを使用します。
 - 各セルを分離する必要がある場合は、仮想 IP アドレスを使用します。

ヒント: 仮想 IP アドレスを使用すると、保守でハードウェアの交換やアップグレードが必要な場合のサービスの可用性が向上します。

- そのサービスに可用性が必要な場合は、複数の IP アドレス (例: 9.26.237.144 と 9.26.427.123) を使用します。

注: 少なくとも 2 つのホストを定義すれば、何かの理由でいずれかのホストに障害が発生しても、サービスの可用性を確保できます。

2. サーバーまたはクラスター・メンバーを作成し、それを SCA システム・バスのメンバーに含めます。結果のメッセージング・エンジンが、使用側セルへの接続に使用されます。
3. 提供側のセルを識別する情報を、サービスを使用する側のモジュールが実行されているセルの管理者に伝えます。これには、以下の情報が含まれます。
 - ホスト IP アドレス
 - ポート番号 - これは、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」>「*server_name*」>「通信 (Communications)」>「+ ポート (+ Ports)」により **BOOTSTRAP_ADDRESS** の値を表示して検索します。
 - バス名 - これは、「サービス統合」>「バス」をクリックし、SCA.SYSTEM バスの絶対バス名を見つけて検索します。
 - メッセージング・エンジンは、「サービス統合」>「バス」>「*SCA_SystemBusName*」>「メッセージング・エンジン」をクリックし、使用側のセルに提供されるサービスで使用されるメッセージング・エンジンを見つけて検索します。
 - 失敗イベント・キュー名 - これは、「サービス統合」>「バス」>「*SCA_SystemBusName*」>「*moduleDest*」を表示し、「例外宛先 (Exception destination)」の属性を調べて検索します。この属性を選択した場合は、以下を実行します。
 - 「指定 (Specify)」、テキスト・フィールドの値を使用します。
 - 「システム (System)」、 「サービス統合」>「バス」>「*SCA_SystemBusName*」>「宛先」をクリックし、システム例外宛先の値を使用します。

注意:

- *SCA_SystemBusName* の形式は SCA.SYSTEM.cellname.Bus です。
 - *moduleDest* の形式は sca/moduleName です。
4. 使用側セルを識別する情報を、そのセルの管理者から取得します。これには、以下の情報が含まれます。
 - ホスト IP アドレス
 - ポート番号
 - バス名
 - メッセージング・エンジン
 - 障害イベント・キュー名
 5. 外部バスを作成し、ルーティング定義タイプを Direct, service integration bus link に設定します。WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターにある『外部バスの追加』を参照してください。

6. オプション: 呼び出し側システムに送信する応答が必要である各宛先ごとに、提供側サーバー上に宛先を作成し、別のセル内の使用側 SCA モジュールを示すように構成します。これを実行するには、宛先の作成、転送ルーティング・パスの設定、および例外宛先の設定を行います。

注: 呼び出し側システムが応答を必要としない場合は、この手順をスキップします。

- a. 宛先を作成します。

セル B の例から、セル A の使用側モジュールからの情報に基づき、以下のようにセル A のバスに追加の宛先を作成します。

```
sca/SimpleBOCrsmA/import/test/sca/cros/simple/custinfo/CustomerInfo  
sca/SimpleBOCrsmA/component/test/sca/cros/simple/cust/Customer
```

- b. 使用側セル上にあるその相手先を示すように転送パスを設定します。

以下ようになります。

```
SCA.SYSTEM.WBIDev-BGMNode01Cell.Bus:  
sca/SimpleBOCrsmA/import/test/sca/cros/simple/custinfo/CustomerInfo  
SCA.SYSTEM.WBIDev-BGMNode01Cell.Bus:  
sca/SimpleBOCrsmA/component/test/sca/cros/simple/cust/Customer
```

- c. 作成した両方の宛先について、障害イベント・キューの例外の宛先を設定します。

この例では、値は `WBI.FailedEventSRIKANTHCNode01.server1` になります。

7. ステップ 2 (229 ページ) で作成されたメッセージング・エンジンにおいて、ステップ 4 (229 ページ) からの情報を使用して SIB リンクを設定します。

詳細については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『サービス統合バス・リンクの追加』を参照してください。

例えば、セル B で以下のようにします。

```
SIB Link: TestCrossCell  
Remote ME: WPSNode.server1.SCA.SYSTEM.WBIDev-BGMNode01.Cell.Bus  
Bootstrap: 9.26.237.118:7276:BootstrapBasicMessaging
```

制約事項: 呼び出し側システムに応答を送信するサービスを提供する場合は、各リンクごとに 1 つの呼び出し側システムのみが許可されます。

重要: ブートストラップのポート番号は、SIB エンドポイント・アドレス・ポートです。セキュリティーが使用可能になっている場合は、セキュア SIB エンドポイント・アドレス・ポートを使用する必要があります。

8. オプション: システムでセキュリティーが使用可能になっている場合は、外部バスに送信側の役割を追加します。オペレーティング・システムのコマンド・プロンプトから、両方のシステムで各アプリケーションが使用するユーザーを必ず定義してください。役割を追加するコマンドは、以下のとおりです。

```
wsadmin $AdminTask addUserToForeignBusRole -bus busName  
-foreignBus foreignBusName -role roleName -user userName
```

各部の意味は、次のとおりです。

busName

コマンドを入力するシステムのバスの名前です。

foreignBusName

ユーザーを追加する外部バスです。

userName

外部バスに追加するユーザー ID です。

9. 接続を検証します。使用側の管理者と調整し、接続に関連する各サーバーを再始動してそのサーバーをリサイクルします。

以下のようなメッセージが表示されます。

```
[8/24/05 11:00:09:741 PDT] 00000086 SibMessage I [SCA.SYSTEM.WBIDev-BGMNode01Cell.Bus-WP5Node.server1-SCA.SYSTEM.WBIDev-BGMNode01Cell.Bus]
CMSIP03821: メッセージング・エンジン 20733357480CD708 がサブスクリプション要求に応答しました。
パブリッシュ・サブスクリプション・トポロジーは整合状態になっています。
(messaging engine 20733357480CD708 responded to subscription request,
Publish Subscribe topology now consistent.)
```

10. 使用側セルごとに、4 (229 ページ) から 9 のステップを繰り返します。

アプリケーションを開始します。

セル間の非同期による Service Component Architecture サービスの使用

別々のセルにある Service Component Architecture (SCA) の各モジュール間で通信できるようにするには、2 つのセル間の通信リンクを構成する必要があります。このトピックでは、別のセルにある SCA サービスを非同期に呼び出すモジュールからの通信を可能にする、使用側セルでの構成作業について説明します。

このタスクは、以下のことを前提としています。

- 使用側のセル上で管理コンソールを使用している。
- 関連する SCA の各モジュールは既にインストールされているが、使用するモジュールは開始されていない。
- 提供側のモジュールを実行するセルを別の管理者が担当している。

別のセルにインストールされている SCA モジュールのサービスを必要とする SCA モジュールを開始する前に、両方のセルを構成して、各セルが要求をやり取りできるようにする必要があります。非同期呼び出しを使用する SCA モジュールの場合、このプロセスには、外部バスとサービス統合バス (SIBus) のリンクが必要になります。

注: このタスクの目的から、サービス使用側のモジュールはセル A に存在し、サービス提供側のモジュールはセル B に存在します。

この構成で使用される情報は、232 ページの図 13 にあります。

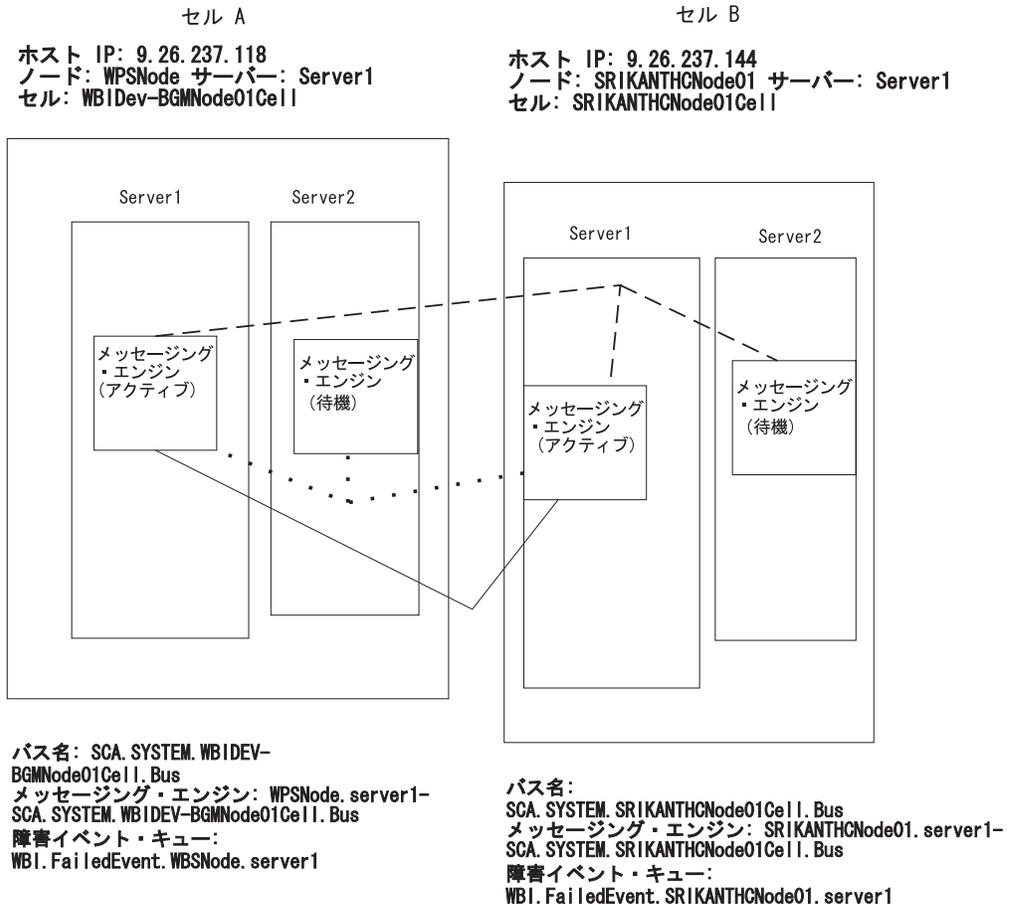


図 13. 別のセルにある SCA モジュールの呼び出し

1. サーバーまたはクラスター・メンバーを作成し、それを SCA システム・バスのメンバーに含めます。結果のメッセージング・エンジンが、使用側セルへの接続に使用されます。
2. サービスを提供するセルを識別する情報を、そのセルの管理者から取得します。提供する情報には、以下が含まれます。
 - ホスト IP アドレス
 - ポート番号
 - バス名
 - メッセージング・エンジン
 - 障害イベント・キュー名
3. ユーザーのモジュールが呼び出す、サービスを提供するセルの管理者に、ユーザーのセルについての情報を伝えます。提供する情報には、以下が含まれます。
 - ホスト IP アドレス
 - ポート番号 - これは、「サーバー」>「アプリケーション・サーバー」>「server_name」>「通信 (Communications)」>「+ ポート (+ Ports)」により **BOOTSTRAP_ADDRESS** の値を表示して検索します。
 - バス名 - これは、「サービス統合」>「バス」をクリックし、SCA.SYSTEM バスの絶対バス名を見つけて検索します。

- メッセージング・エンジンは、「サービス統合」>「バス」
>「SCA_SystemBusName」>「メッセージング・エンジン」をクリックし、使用側のセルに提供されるサービスで使用されるメッセージング・エンジンをいくつか検索します。
 - 失敗イベント・キュー名 - これは、「サービス統合」>「バス」
>「SCA_SystemBusName」>「moduleDest」を表示し、「例外宛先 (Exception destination)」の属性を調べて検索します。この属性を選択した場合は、以下を実行します。
 - 「指定 (Specify)」、テキスト・フィールドの値を使用します。
 - 「システム (System)」、 「サービス統合」>「バス」
>「SCA_SystemBusName」>「宛先」をクリックし、システム例外宛先の値を使用します。
4. ステップ 2 (232 ページ) の情報を使用し、この提供側セルのバスを表す外部バスを作成して、ルーティング定義タイプを Direct, service integration bus link に設定します。複数の提供側セルが必要な場合は、提供側セルごとにこのステップを繰り返します。

詳細については、WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターの『外部バスの追加』を参照してください。

この例では、セル A の外部バスは、SCA.SYSTEM.SRIKANTHCNode01Cell.Bus になります。セル B の外部バスは、SCA.SYSTEM.WBIDev-BGMNode01Cell.Bus になります。

5. ステップ 1 (232 ページ) で作成されたメッセージング・エンジンにおいて、ステップ 2 (232 ページ) の情報を使用して SIB リンクを設定します。

詳細については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センターの『サービス統合バス・リンクの追加』を参照してください。

この例では、セル A の SIB メディエーション・リンクは、以下のようになります。

```
SIB Link: TestCrossCell
Remote ME: SRIKANTHCNode01.server1-SCA.SYSTEM.SRIKANTHCNode01Cell.Bus
Bootstrap: 9.26.237.144:7277:BootstrapBasicMessaging
```

重要: ブートストラップのポート番号は、SIB エンドポイント・アドレス・ポートです。セキュリティーが使用可能になっている場合は、セキュア SIB エンドポイント・アドレス・ポートを使用する必要があります。

6. 各 SCA モジュールの宛先を表示します。
7. 使用側のサービス・モジュール (提供側システムのターゲットに接続する必要がある) の発信宛先の転送パスを変更します。

接続する宛先の宛先名には、importlink が入ります。例えば、セル A の宛先は、sca/SimpleBoCrsmA/importlink/test/sca/cros/simple/custinfo/CustomerInfo になります。宛先名のプレフィックスとして外部バス名を追加して、パスを変更してください。この例では、2 番目のセルの外部バス名は、SCA.SYSTEM.SRIKANTHCNode01Cell.Bus です。結果は、以下のようになります。

```
SCA.SYSTEM.SRIKANTHCNode01Cell.Bus:sca/SimpleBoCrsmA/importlink/  
test/sca/cros/simple/custinfo/CustomerInfo
```

- オプション: システムでセキュリティーが使用可能になっている場合は、外部バスに送信側の役割を追加します。オペレーティング・システムのコマンド・プロンプトから、両方のシステムで各アプリケーションが使用するユーザーを必ず定義してください。役割を追加するコマンドは、以下のとおりです。

```
wsadmin $AdminTask addUserToForeignBusRole -bus busName  
-foreignBus foreignBusName -role roleName -user userName
```

各部の意味は、次のとおりです。

busName

コマンドを入力するシステムのバスの名前です。

foreignBusName

ユーザーを追加する外部バスです。

userName

外部バスに追加するユーザー ID です。

- 接続を検証します。使用側の管理者と調整し、接続に関連する各サーバーを再始動してそのサーバーをリサイクルします。

以下のようなメッセージが表示されます。

```
[8/24/05 11:00:09:741 PDT] 00000086 SibMessage I [SCA.SYSTEM.WB1Dev-BGMNode01Cell].Bus:WPSNode.server1-SCA.SYSTEM.WB1Dev-BGMNode01Cell].Bus]  
CWS1P03821: メッセージング・エンジン 2D733357480CD70B がサブスクリプション要求に応答しました。  
パブリッシュ・サブスクリプトポロシーは整合状態になっています。  
(messaging engine 2D733357480CD70B responded to subscription request,  
Publish Subscribe topology now consistent.)
```

アプリケーションを開始します。

手動によるデータベースの構成

応答ファイル内で特定のプロパティを設定するには、データベース・テーブルを手動で作成する必要があります。応答ファイルにデータベース・テーブルの構成を先送りするプロパティを設定した場合、製品の構成の後に、生成された SQL と DDL を別々に実行する必要があります。

データベースを手動で構成する前に、以下の点を確認してください。

- データベースとストレージ・グループを作成した。
- インストール・スクリプト `zSMPInstall.sh` を実行済みであること。
- 構成スクリプトを実行し、応答ファイルでデフォルトの設定である **dbDelayConfig=true** を受け入れて、データベース・テーブルおよびデータ・ソース定義の構成を先送りするよう選択していること。

データベースおよびストレージ・グループを作成すると、構成スクリプトはデータベースに接続して、データベース定義を自動的に作成できます。ただし、御社のデータベース管理者が、スクリプトによるデータベースの自動更新を許可しない場合は、デフォルト値である **dbDelayConfig=true** を受け入れる必要があります。

応答ファイルでデフォルト値である `dbDelayConfig=true` を受け入れると、構成スクリプトにより SQL は生成されますが、データベース定義を自動作成するコードは実行されません。その代わりに、SQL がディレクトリーに書き出されません。

データベース管理者、つまりデータベース定義を作成する権限を持つユーザーが、以下の手順を実行して、データベースを手動で構成してください。

1. データベース・テーブルおよびデータ・ソース定義を作成するために必要な生成済み SQL にアクセスします。データベース・テーブルおよびデータ・ソース定義を作成する SQL が以下のディレクトリーに書き込まれます。

注: ディレクトリー・パスの変数の部分 は、WebSphere Application Server for z/OS 構成 HFS と `app_server_root` ディレクトリー名の組み合わせを表します (例: `/WebSphere/V6R0M0/AppServer`)。これは、`WAS_HOME` と呼ばれます。

注: 以下のパス名では、DB2 for z/OS バージョン 8 が前提となっています。DB2 for z/OS バージョン 7 を使用する場合は、ディレクトリー・パスの DB2 for z/OS 製品を示す部分がそれに依りて変わります。例えば、`/DB2zOSV8` の代わりに、パス名に `/DB2zOSV7` が入ります。

- Business Process Choreographer の SQL: `configuration_root/app_server_root/profiles/default/dbscripts/ProcessChoreographer/DB2zOSV8/BPEDB/createDatabase.sql`
- Common Event Infrastructure の SQL: `configuration_root/app_server_root/profiles/default/dbscripts/CEI/DB2zOSV8/CEIDB/ceidef.sql`
- Enterprise Service Bus の SQL: `configuration_root/app_server_root/profiles/default/dbscripts/EsbLoggerMediation/DB2zOSV8/ESBDB/Table_esb_DB2UDBOS390_V8_1.sql`
- 共通データベースの SQL: `configuration_root/app_server_root/profiles/default/dbscripts/CommonDB/DB2zOSV8/dbname`

ここで、`dbname` は以下のいずれかの値になります。

- `createTable_AppScheduler.sql`
- `createTable_CommonDB.sql`
- `createTable_customization.sql`
- `createTable_lockmanager.sql`
- `createTable_mediation.sql`
- `createTable_Recovery.sql`
- `createTable_Relationship.sql`
- `insertTable_CommonDB.sql`

2. 好みのデータベース・ツールを使用して SQL を実行し、データベース・テーブルを作成します。

WebSphere Process Server for z/OS には、`DBUtility.sh` というユーティリティーがパッケージ化されています。このユーティリティーは、WebSphere Application Server for z/OS の拡張構成 HFS (例: `/WebSphere/V6R0/AppServer/bin/`)

DBUtility.sh) に置かれています。このユーティリティを使用して SQL を実行すると、データベース表を作成できます。以下に、**DBUtility.sh** ユーティリティに使用されている構文の例を示します。

```
/wasv6config/v2cell/dmgr/DeploymentManager/bin/DBUtility.sh createTable
-DsqlScriptPath.default=/wasv6config/v2cell/dmgr/database/v2adropandcreate.sql
-DdbType=DB2UDBOS390_V8_1 -DdbName=xxxxxV2
-DprofilePath=/wasv6config/v2cell/dmgr/DeploymentManager/profiles/default
-DdbJDBCProperties=/shared/db2810/jcc/properties
-DdbConnectionLocation=WBDDDB2
-DdbJDBCClasspath=/shared/db2810/jcc/classes
-DdbUserId=sysadm1
-DdbPassword=sysadm1
-DdbDelayConfig=false
-DdbCreateNew=false
```

データベースを更新するユーティリティについては、必ずデータベース管理者に相談してください。

これで、データベースを手動で構成できました。さらに理解を深めるために、管理コンソールで JDBC プロバイダーやデータ・ソースの定義を確認することもできます。

Business Process Choreographer の構成

ビジネス・プロセスおよびヒューマン・タスク用に Business Process Choreographer コンテナを構成する方法、および Business Process Choreographer Explorer と Business Process Choreographer Observer を構成する方法については、WebSphere Process Server for z/OS パージョン 6.0.2 インフォメーション・センターで、『**WebSphere Process Server のインストールと構成 (Installing and configuring WebSphere Process Server)**』 > 『**ソフトウェアの構成 (Configuring the software)**』 > 『**Business Process Choreographer の構成 (Configuring Business Process Choreographer)**』のトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer PDF* でも検索できます。

スタンドアロン・サーバーとしての WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成の確認

以下の一連の作業を実行すると、WebSphere Process Server for z/OS のスタンドアロン・サーバーとしての構成を検証し、アプリケーションをホストするための、新しいランタイム環境の準備ができていることを確認することができます。

WebSphere Process Server for z/OS がスタンドアロン・サーバーとしてインストールされ、構成されていることを確認する前に、以下の作業を行う必要があります。

- スタンドアロン・サーバーとして WebSphere Process Server for z/OS をインストールし、構成するための本書に記載されている手順を完了します。
- 使用するデータベースは Cloudscape です。

WebSphere Process Server for z/OS の構成の確認方法の説明が必要な場合は、以下の技術サポート文書にアクセスしてください。

- 「Performing Installation Verification for WPS on z/OS V6.0.1」

「Performing Installation Verification for WPS on z/OS V6.0.1」というタイトルの技術サポート文書にある手順に従うと、WebSphere Process Server for z/OS の機能と管理を理解するために必要なスキルを習得することができます。これにより、ランタイム・データベースとして DB2 を使用する構成や、たいいていの場合 Network Deployment トポロジーを必要とする構成など、さらに拡張した構成の準備に役立てることができます。

製品保守の適用

WebSphere Process Server for z/OS は WebSphere Application Server 内にインストールされ、構成されるため、WebSphere Process Server for z/OS に適用される保守は、WebSphere Application Server 製品を介して、WebSphere Application Server の製品保守の適用手法を使用して行われます。

製品の Preventive Service Planning (PSP) のアップグレードの情報については、IBM ソフトウェア・サポート・センターにお問い合わせください。WebSphere Process Server for z/OS の PSP のアップグレードの詳細については、*WebSphere Process Server for z/OS* のプログラム・ディレクトリーを参照してください。プログラム・ディレクトリーには、必要なプログラム一時修正 (PTF) がリストされていますが、IBM ソフトウェア・サポート・センターから最新情報を入手することができます。

ご使用のシステムに新しいサービス・リリースを適用する場合は必ず、以下に示す手順に従ってください。

製品保守の適用については、WebSphere Application Server for z/OS のインフォメーション・センターにある『製品保守の適用』を参照してください。

WebSphere Application Server for z/OS のホスト・クラスターのアップグレード時に、クライアントに対するサービスを維持することができます。

サービス・レベルの適用または前の受け入れ済みサービス・レベルへの復元

WebSphere Process Server for z/OS は、WebSphere Application Server にインストールされて構成されるため、WebSphere Process Server for z/OS に適用されたサービス・レベルは、WebSphere Application Server 製品を通じて適用されます。サービス・レベルの適用または前の受け入れ済みサービス・レベルへの復元には、WebSphere Application Server の技法を使用します。

製品データ・セットおよび製品 HFS に適用されているサービスでは、低いサービス・レベルで構成される既存のアプリケーション・サービス提供環境の構成 HFS に対して、対応する変更を加えることが必要な場合があります。これらの「保守後」または「インストール後」の更新のほとんどは、自動的に実行することができます。これは、ポストインストーラーによって実行されます。サービスの適用方法の説明については、WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内の『サービス・レベルの適用または前の受け入れ済みサービス・レベルへの復元』を参照してください。

アンインストール

『アンインストール』のセクションでは、WebSphere Process Server for z/OS のアンインストール方法について説明します。

概説

z/OS でのインストールと同様、アンインストールもコマンド行から実行されます。

アンインストール・プログラムを実行すると、管理コンソールが誤動作する原因になる場合があります。このため、アンインストール・スクリプトを実行する前に、WebSphere Process Server for z/OS のアンインストールに関する最新の技術情報を確認してください。

適切なコマンド引数およびパラメーターを指定した **zSMPInstall.sh** を使用し、アンインストール・コマンドを実行します。適切なコマンド引数およびパラメーターと共に **-uninstall** を指定して **zSMPInstall.sh** を実行すると、WebSphere 環境を、インストール前のレベルに復元します。

注: Common Event Infrastructure および Business Process Choreographer コンポーネントは、別々にアンインストールされます。Common Event Infrastructure および Business Process Choreographer のアンインストール方法については、適切なヘルプ・トピックを参照してください。

アンインストール・プロセスでは、以下のアクションが実行されます。

- 構成マネージャーのスクリプト・アクションを実行することにより、WebSphere Process Server フィーチャーを使用不可に設定する。

これにより、管理コンソール・プラグイン拡張機能がすべて除去されます。

- WSPROFILE スクリプト・アクションを使用してプロファイル拡張を除去する。

これにより、WebSphere Application Server のデフォルト・プロファイルの拡張が解除されます。

- インストール後ファイルを削除し、コード・ベース許可を除去する。

インストール・スクリプトの実行による WebSphere Process Server for z/OS のアンインストール

インストール済み構成から WebSphere Process Server for z/OS 定義を除去するには、**-uninstall** キーワードを指定して**zSMPInstall.sh** を実行します。

アンインストール・プログラムを実行すると、管理コンソールが誤動作する原因になる場合があります。このため、アンインストール・スクリプトを実行する前に、WebSphere Process Server for z/OS のアンインストールに関する最新の技術情報を確認してください。

WebSphere Process Server for z/OS インストール・プロセスは、z/OS UNIX System Services の実用的な知識があることを前提としています。以下の資料が利用できます。

- z/OS V1R7.0 UNIX System Services User's Guide

- z/OS V1R7.0 UNIX System Services Command Reference

WebSphere Process Server for z/OS 定義を除去して、WebSphere Process Server for z/OS をインストールおよび構成する前のレベルに WebSphere 環境を復元することが目的である場合は、このタスクを実行します。

1. OS/390 UNIX コマンド・シェルにアクセスします。 ISPF コマンド・シェルで TSO コマンド OMVS を入力するか、他の任意の ISPF パネルから TSO OMVS と入力します。

UNIX シェル内に入ると、コマンド・プロンプト (通常はドル (\$) またはポンド (#) 記号) は、システムが入力を受け入れる準備ができていることを示します。

2. コマンド・プロンプトから、アンインストール・コマンドを実行します。 コマンドの実行方法については、次の構文図を参照してください。

アンインストール・コマンド構文図

```

▶--zSMPInstall.sh--smprout /usr/lpp/zWPS/V6R0-----▶
                                                                 (1)
▶--runtime /WebSphere/V6R0M0/AppServer--uninstall--response--usr/lpp/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfile.rsp-----▶

```

注:

- 1 応答ファイルのいずれかの絶対パス名を構成に応じて入力します。前述のパス・ファイル名は、アンインストーラーがデフォルト応答ファイルを使用していることを前提とします。応答ファイルがカスタマイズされた場合、パス名は、カスタマイズされたファイルの絶対パスを表す必要があります。

注: 前述の手順は、OS/390 UNIX コマンド・シェルからインストール・スクリプトを実行する方法を示しています。別の方法としては、Telnet を使用してプロンプトからインストール・スクリプトを実行することもできます。Telnet を使用してインストール・スクリプトを実行するには、システム・プロンプトで「**telnet TCPIP-Address port number**」と入力します。Telnet コマンドの例は、telnet 99.9.99.999 2023 です。99.9.99.999 は TCP IP アドレス、2023 はポート番号を表します。

製品は、使用した応答ファイル・プロパティーに応じて適切な構成になるようにアンインストールされます。

-uninstall オプションを指定することにより、以下の処理が実行されます。

- 関連の管理コンソール・プラグイン拡張機能を除去する構成マネージャーのスクリプト・アクションを実行することにより、製品の機能を使用不可にする
- デフォルト・プロファイルの拡張を解除する

アンインストールが正常に実行されなかった場合は、関連のログ・ファイルおよびトレース・ファイルを確認します。

• 標準出力メッセージ

標準出力メッセージは、製品をアンインストールするためにインストーラー・スクリプトを実行した画面に直接表示されます。コマンド行の末尾でリダイレクト記号とファイル名を使用して、これらのメッセージをファイルにリダイレクトすることもできます。例えば、インストール・コマンドの末尾に構文 >run.log を

追加すると、標準出力メッセージが現在の作業ディレクトリーの **run.log** という名前のファイルにリダイレクトされます。標準出力メッセージが以下のように表示されます。

```
コマンド引数の構文解析中...
引数の構文解析が完了しました
構成のセットアップ中...
runtimeRootDirName: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WAS_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WBI_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
アンインストールのために構成マネージャーを実行中...
アンインストールのための構成マネージャーの実行が完了しました
プロファイルの拡大解除中...
プロファイルの拡大解除が完了しました
```

- **ログ・ファイル**

ログ・メッセージは、ランタイム・ディレクトリー内の **zSMPInstall.log** ファイルに書き込まれます。このファイルの標準的なロケーションは、`/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPInstall.log` です。

- **トレース・ファイル**

ランタイム・ディレクトリー内の `zSMPInstall.trace` (ASCII) ファイルを確認します。このファイルの標準的なロケーションは、`/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPInstall.trace` です。

通常、トレース・ファイル内にエラー・メッセージ (つまり、「E」サフィックスの付いているメッセージ) はありません。

その他のトラブルシューティング・タスクを以下のように実行します。

- **構成マネージャーの更新タスクのアクションを見直します。**

これらのアクションは、ログ・ファイル (ASCII) に書き込むことによって記録されます。ログ・ファイル名は、`cmtInstall.log` です。

このファイルの標準的なロケーションは、`/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi` ディレクトリー内です。

この構成マネージャー・ログを検索して、`>SEVERE<` または `>>WARNING<` レベルのメッセージがあるかどうかを調べ、処理中の全体的なエラーを判別します。

インストール・ディレクトリーから実行される各 Ant スクリプトは、独自のログ (ASCII) に書き込みます。

Ant スクリプトを含むインストール・ディレクトリーのデフォルト名は、`/WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/version/install.wbi/6.0.0.0/config/full/uninstall` です。

生成された Ant ログは、製品ログ・ディレクトリーに書き込まれます。このディレクトリーのデフォルト名は、`/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi` です。Ant ログには、以下のログがあります (これらのログを確認して、処理中のエラーを判別します)。

- `90SDeleteFirstStepsFilesWBI.ant.log`
- `90SRemoveJavaOptions.ant.log`
- `90SUninstallCEI.ant.log`

- 98SUndeployBPCAdminConsolePlugins.ant.log
- 98SUndeployServerAdminConsolePlugins.ant.log
- 99SUndeployCoreAdminConsolePlugins.ant.log

これらのログのそれぞれには、通常は「Build Successful」メッセージが含まれています。

- **拡張解除ログの内容を確認します。**

プロファイル拡張解除タスクは、アクションの記録をログ・ファイル (ASCII) に書き込むことによって行います。ログ・ファイルの名前は、**wasprofile_unaugment_default.log** です。このファイルの標準的なロケーションは、WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wasprofile ディレクトリー内です。この WAS プロファイル拡張ログを検索して、>SEVERE< または >WARNING< レベルのメッセージがあるかどうかを調べ、処理中の全体的なエラーを判別します。

通常、SEVERE メッセージは存在しません。

Business Process Choreographer のアンインストール

Business Process Choreographer コンポーネントを WebSphere Process Server のインストール済み環境から除去するには、WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2 インフォメーション・センターで、『**WebSphere Process Server のインストールと構成 (Installing and configuring WebSphere Process Server)**』>『**ソフトウェアのアンインストール (Uninstalling the software)**』>『**Business Process Choreographer 構成の除去 (Removing the Business Process Choreographer configuration)**』のトピックを参照してください。この情報は *Business Process Choreographer PDF* でも検索できます。

Common Event Infrastructure 構成の除去

WebSphere Process Server をアンインストールする準備として Common Event Infrastructure 構成の除去が必要な場合は、まず最初に、デプロイされたエンタープライズ・アプリケーションおよびデータベース構成を除去しなければなりません。

Common Event Infrastructure は、WebSphere Process Server の基本インストールでインストールされますが、構成しなければアクティブになりません。このトピックでは、以前に構成された Common Event Infrastructure のインスタンスの除去方法についてのみ説明します。Common Event Infrastructure の構成を除去するには、以下のステップを実行します。

Common Event Infrastructure アプリケーションの除去

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションおよびリソースを WebSphere Process Server から除去する必要がある場合は、event-application.jacl スクリプトを使用します。

必要に応じて、event-application.jacl スクリプトを使用する代わりに管理コンソールを使用して、イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションを手動で除去できます。管理コンソールを使用する場合は、Common Event Infrastructure

リソースも手動で除去する必要があります。これらのリソースについて詳しくは、共通イベント・インフラストラクチャーの構成に関するセクションの『デフォルト構成』を参照してください。

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションを除去するには、wsadmin ツールを使用して event-application.jacl スクリプトを実行します。

Windows システムでこのスクリプトを実行するには、*profile_root*\event\application ディレクトリーに移動して、以下のコマンドを(すべて 1 行で) 実行します。

```
wsadmin -f event-application.jacl -profile event-profile.jacl -action uninstall  
-node node_name -server server_name
```

Linux または UNIX システムでこのスクリプトを実行するには、*profile_root*/event/application ディレクトリーに移動して、以下のコマンドを(すべて 1 行で) 実行します。

```
wsadmin.sh -f event-application.jacl -profile event-profile.jacl  
-wsadmin_classpath install_root/event/lib/cei_installer.jar -action  
uninstall -node node_name -server server_name  
[-appname app_name] [-trace]
```

event-application.jacl スクリプトで使用するパラメーターは、次のとおりです。

node_name

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションを除去する WebSphere Process Server ノード。

server_name

イベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションを除去する WebSphere Process Server。このパラメーターはオプションです。サーバーを指定しない場合、ノードのすべてのサーバーからエンタープライズ・アプリケーションが除去されます。

app_name

除去したいデプロイされたイベント・サーバー・エンタープライズ・アプリケーションの名前です。このパラメーターはオプションです。アプリケーション名を指定しない場合、すべての登録された Common Event Infrastructure エンタープライズ・アプリケーションが除去されます。

オプションの **-trace** パラメーターを使用すると、標準出力にデバッグに関する追加情報が出力されます。

イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションの除去

Common Event Infrastructure をアンインストールする前に、イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションを除去しなければなりません。

イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションを除去するには、wsadmin ツールを使用して event-message.jacl スクリプトを実行します。

event-message.jacl スクリプトのパラメーターは、以下のとおりです。

node_name

イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションを除去する WebSphere Process Server ノード。

To discover the node name, run the *profile_root/bin/setupCmdLine* and echo *\$WAS_NODE* コマンドを実行します。

server_name

イベント・メッセージング・エンタープライズ・アプリケーションを除去する WebSphere Process Server。このパラメーターはオプションです。サーバーを指定しない場合、指定されたノードのすべてのサーバーからアプリケーションが除去されます。

app_name

除去するデプロイされたメッセージング・エンタープライズ・アプリケーションの名前です。このパラメーターは必須です。Common Event Infrastructure をインストールするときにデフォルト値を使用した場合、アプリケーション名は EventServerMdb です。

オプションの **-trace** パラメーターを使用すると、標準出力にデバッグに関する追加情報が出力されます。

イベント・データベースの除去

イベント・データベースを除去したい場合は、提供されたスクリプトを使用することができます。Common Event Infrastructure をアンインストールする前に、データベースを除去する必要があります。

データベースを構成する際に、構成スクリプトにより、データベースおよび Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーを除去するためのスクリプトも作成されます。イベント・データベースを除去するためのスクリプトは、*profile_root/event/dbscripts* ディレクトリーのデータベース専用サブディレクトリーに配置されます。JDBC プロバイダーを除去するためのスクリプトは、*profile_root/event/dsscripts* ディレクトリーのデータベース専用サブディレクトリーに配置されます。

注: イベント・データベースは、同じ JDBC プロバイダー構成を使用して複数のイベント・サーバーで共有することができます。このため、JDBC プロバイダー構成の除去を行うのは、関連するイベント・データベースをアンインストールした場合のみにしてください。

イベント・データベースおよび JDBC プロバイダーを除去するために、以下のテーブルから適切なスクリプトを実行します。

タイプ	オペレーティング・システム	データベース・スクリプト	JDBC 構成スクリプト
Cloudscape	Windows	rm_event_cloudscape.bat	rm_cloudscape_jdbc_provider.bat
Cloudscape	Linux/UNIX	rm_event_cloudscape.sh	rm_cloudscape_jdbc_provider.sh
DB2	Windows	rm_event_db2.bat	rm_db2_jdbc_provider.bat
DB2	Linux/UNIX	rm_event_db2.sh	rm_db2_jdbc_provider.sh
Oracle	Windows	rm_event_oracle.bat	rm_oracle_jdbc_provider.bat

タイプ	オペレーティング・システム	データベース・スクリプト	JDBC 構成スクリプト
Oracle	Linux/UNIX	rm_event_oracle.sh	rm_oracle_jdbc_provider.sh
Cloudscape	z/OS (Windows スクリプト)	rm_event_cloudscape.bat	rm_cloudscape_jdbc_provider.bat
Cloudscape	z/OS (Linux/UNIX スクリプト)	rm_event_cloudscape.sh	rm_cloudscape_jdbc_provider.sh
DB2	z/OS (Windows スクリプト)	rm_event_db2zos.bat	rm_db2zos_jdbc_provider.bat
DB2	z/OS (Linux/UNIX スクリプト)	rm_event_db2zos.sh	rm_db2zos_jdbc_provider.sh

適切なスクリプトを実行することによって、いつでも、イベント・データベースおよび JDBC プロバイダーを除去することができます。JDBC プロバイダーを除去するには、該当するスクリプトを使用し、JDBC プロバイダーを除去する有効範囲を指定します。

```
rm_db_jdbc_provider scope [server_name]
```

生成されたスクリプトはこれらのパラメーターを使用します。

scope JDBC プロバイダーを除去する有効範囲。有効な値は cell、node、および server です。

server_name

scope が server である場合に、JDBC プロバイダーを除去する WebSphere Process Server の名前。(scope が cell または node である場合、このパラメーターは無視されます)。

インストールおよび構成のトラブルシューティング

製品のインストールおよび構成が正常に完了しなかった場合は、この情報を使用して、問題を評価し、訂正してください。

このトピックでは、ユーザーがインストールまたは構成を試みたが、正常に完了しなかったことを前提とします。

インストーラー・プログラムは、以下のようにして、正常終了したかどうかの指標を複数記録します。

- 標準出力メッセージ

標準出力メッセージは、インストール・スクリプト (zSMPInstall.sh) または構成スクリプト zWPSConfig.sh または zWESBConfig.sh を実行した画面に直接表示されます。コマンド行の末尾でリダイレクト記号とファイル名を使用して、これらのメッセージをファイルにリダイレクトすることもできます。例えば、インストール・コマンドの末尾に、構文 `>>run.log` を追加すると、現在の作業ディレクトリーの **run.log** という名前のファイルに標準出力メッセージをリダイレクトします。

- ログ・ファイルのメッセージ

インストール時のログ・メッセージは、ランタイム・ディレクトリーの **zSMPIInstall.log** ファイルに書き込まれます。このファイルの標準的なロケーションは、/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPIInstall.log です。

構成時のログ・メッセージは、ランタイム・ディレクトリーの **zWPSConfig.log** ファイルまたは **zWESBConfig.log** ファイルに書き込まれます。これらのファイルの標準的な場所は、それぞれ /WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWPSConfig.log および /WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWESBConfig.log です。

- トレース・ファイルのメッセージ

インストール時のトレース・メッセージは、ランタイム・ディレクトリーの **zSMPIInstall.trace** ファイルに書き込まれます。このファイルの標準的なロケーションは、/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPIInstall.trace です。

構成時のトレース・メッセージは、ランタイム・ディレクトリーの **zWPSConfig.trace** ファイルまたは **zWESBConfig.trace** ファイルに書き込まれます。これらのファイルの標準的な場所は、それぞれ /WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWPSConfig.trace および /WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWESBConfig.trace です。

WebSphere Application Server for z/OS を正常にインストールおよび構成したことを確認します。 WebSphere Application Server for z/OS をインストールおよび構成中に問題が発生した場合は、 WebSphere Application Server for z/OS インフォメーション・センター内のインストールのトラブルシューティング情報を参照してください。

既知の問題とその解決方法に関する IBM サポートからの最新情報については、 WebSphere Process Server のサポート・ページを参照してください。

1. 標準出力からのメッセージを確認します。 エラー・メッセージは表示されていないはずですが、標準出力メッセージは、インストール・コマンドを実行した画面に表示されるか、コマンド行でリダイレクト (「>」) 記号を使用して指定したファイルに表示されます。

-install オプションを使用してインストール・スクリプトを正常に実行した例を以下に示します。

```
コマンド引数の構文解析中...
引数の構文解析が完了しました
構成のセットアップ中...
runtimeRootDirName: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WAS_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
WBI_HOME: /WebSphere/V6R0M0/AppServer
構成のセットアップが完了しました
シンボリック・リンクの作成中...
invokeSymLink
シンボリック・リンクの作成が完了しました
インストール後ファイル更新の実行中...
インストール後更新が完了しました
構成マネージャー更新の実行中...
構成マネージャー更新が完了しました
プロファイルの拡張中...
プロファイルの拡張が完了しました
```

エラー・メッセージは、インストールが失敗したことを示します。標準出力に表示される一部のエラーは、見ればすぐに分かるようになっており、容易に訂正することができます。インストールが、ログ・ファイルおよびトレース・ファイルが作成された時点まで完了している場合は、以下のステップに進みます。

- ランタイム・ディレクトリー内の `zSMPInstall.log` (ASCII) ファイルを確認します。このファイルの標準的なロケーションは、`/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPInstall.log` です。デプロイメント・マネージャー構成の場合、このファイルの標準的なロケーションは `/WebSphere/V6R0M0/DeploymentManager/logs/wbi/zSMPInstall.log` です。

エラー・メッセージがある場合は、エラーが発生したときに以下のタスクのうちどのタスクが進行中であったかを判別します。

- シンボリック・リンクの作成
- インストール後ファイルの作成
- コードベース許可の更新
- 構成マネージャーの更新

エラー発生の際に進行中であったタスクを知ることが、トレース・ファイルの情報を評価する際に役立ちます。

- ランタイム・ディレクトリー内の `zSMPInstall.trace` または `zWPSConfig.trace` / `zWESBConfig.trace` (ASCII) ファイルを確認します。スタンドアロン構成の場合、これらのファイルの標準的なロケーションは `/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPInstall.trace` または `/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWPSConfig.trace` です。デプロイメント・マネージャー構成の場合、このファイルの標準的なロケーションは `/WebSphere/V6R0M0/DeploymentManger/logs/wbi/zSMPInstall.trace` または `/WebSphere/V6R0M0/DeploymentManger/logs/wbi/zWPSConfig.trace` です。

インストールが正常に完了した場合は、通知メッセージ (CWPIZ0044I などのサフィックスが **I** のメッセージ) のみがトレース・ファイルにリストされます。

警告メッセージ (サフィックスが **W** であるメッセージ) またはエラー・メッセージ (サフィックスが **E** であるメッセージ) がトレースにリストされている場合は、さらに見直す必要があります。

警告またはエラーが、シンボリック・リンクの作成タスク、インストール後ファイルの作成タスク、またはコードベース許可の更新タスク中に発生した場合は、問題の診断および訂正に役立つ情報がトレース・メッセージに含まれています。

構成マネージャーの更新タスクで警告またはエラーが発生した場合は、次のステップに進みます。

プロファイル拡張タスクで警告またはエラーが発生した場合は、ステップ 5 に進みます。

- 構成マネージャーの更新タスクのアクションを見直します。これらのアクションは、ログ・ファイル (ASCII) に書き込むことによって記録されます。ログ・ファイル名は、`cmtInstall.log` です。

このファイルの標準的なロケーションは、/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi ディレクトリー内です。

この構成マネージャー・ログを検索して、>SEVERE< または >WARNING< レベルのメッセージがあるかどうかを調べ、処理中の全体的なエラーを判別します。

インストール・ディレクトリーから実行される各 Ant スクリプトは、独自のログ (ASCII) に書き込みます。

エラーの発生時にどの Ant ファイルが実行されたかを判別する場合に、前の「Buildfile」を探することができます。

Ant スクリプトを含むインストール・ディレクトリーのデフォルト名は、/WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties/version/install.wbi/6.0.0.0/config/full/installです。

生成された Ant ログは、製品ログ・ディレクトリーに書き込まれます。このディレクトリーのデフォルト名は、/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi です。Ant ログには、以下のログがあります (これらのログを確認して、処理中のエラーを判別します)。

```
100SUpgradeCoreAdminConsolePlugins.ant.log
101SUpgradeServerAdminConsolePlugins.ant.log
101SWbiWebuiUpgrade.ant.log
102SUpgradeIscdeploy.ant.log
90SConfigNoProfileFirstStepsESB.ant.log
90SConfigNoProfileFirstStepsWBI.ant.log
90SConfigureWSPProfileForWBI.ant.log
90SInstallCEI.ant.log
90SUpdateJavaOptions.ant.log
91SConfigNoProfileFirstStepsCharset.ant.log
98SDeployBPCAdminConsolePlugins.ant.log
98SDeployServerAdminConsolePlugins.ant.log
99SDeployCoreAdminConsolePlugins.ant.log
99WbiProfileUpgrade.log
```

問題がなかった場合は、ファイルの最後に **BUILD SUCCESSFUL** というメッセージが表示されています。

5. WebSphere Application Server プロファイル拡張タスクのアクションを確認します。プロファイル拡張タスクは、アクションの記録をログ・ファイル (ASCII) に書き込むことによって行います。ログ・ファイルの名前は、**wasprofile_augment_default.log** です。このファイルの標準的なロケーションは、/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wasprofile ディレクトリー内です。

このプロファイル拡張ログを検索して、>SEVERE< または >WARNING< レベルのメッセージがあるかどうかを調べ、処理中の全体的なエラーを判別します。

個々の Ant アクション・ログは、/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default/logs内にあります。

エラーの発生時にどの Ant ファイルが実行されたかを判別する場合に、前の「Buildfile」を探することができます。

インストール・エラーの原因となった問題のトラブルシューティングを行い、インストール・スクリプトを正常に実行した後で、以下のステップを実行する必要があります。

1. WebSphere Application Server を始動します。
2. 管理コンソールを起動し、製品コンポーネントがインストールされたことを確認します。

例えば、WebSphere Process Server を正常にインストールすると、BPCEContainer、BPCEExplorer、および TaskContainer で始まる名前のエンタープライズ・アプリケーションの下に Process Choreographer が存在することが分かります。

WebSphere Process Server for z/OS のインストールおよび構成のメッセージ参照情報

WebSphere Process Server for z/OS のメッセージ参照情報には、インストール・スクリプトまたは構成スクリプトの実行時に表示されることがあるメッセージ・コードをリストします。

インストール・エラー・メッセージについて

WebSphere Process Server for z/OS メッセージ・コードのトラブルシューティングを行うときに、「説明」フィールドと「ユーザー応答」フィールドのデータを使用してください。

メッセージ・コードは CWPIZyyyyz という形式で表示されます。各部位には次のような意味があります。

- CWPIZ = WebSphere Process Server for z/OS メッセージ接頭語
- yyyy = 番号に割り当てられている数値 ID
- z = メッセージ・タイプの記述子 (E、I、または W)。各記述子は以下のタイプを示します。
 - E = エラー・メッセージ
 - I = 通知メッセージ
 - W = 警告メッセージ

WebSphere Process Server for z/OS インストール・エラー・メッセージについては、インフォメーション・センターの「解説 (Reference)」>「メッセージ (Messages)」>「CWPIZ」で説明しています。

WebSphere Process Server for z/OS インストール・エラー・メッセージは、ランタイム・ディレクトリーの zSMPIInstall.log ファイルに書き込まれます。このログ・ファイルの標準 / デフォルトの場所は、/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPIInstall.log です。

WebSphere Process Server for z/OS 構成エラー・メッセージは、ランタイム・ディレクトリーの zWPSConfig.log ファイルおよび zWESBConfig.log ファイルに書き込まれます。これらのログ・ファイルの標準のデフォルトの場所は、それぞれ /WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWESBConfig.log および /WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zWPSConfig.log です。

ログ・ファイル

製品のインストールおよび構成処理中に、さまざまなログ・ファイルが作成されます。

目的

製品のインストールおよび構成処理中に問題が発生した場合は、該当するログを参照してください。

ログ・ファイルにリダイレクトされる標準出力

標準出力メッセージは、コマンド行引数を検証するアクションの開始および完了などの高位のアクションを報告します。

デフォルトでは、これらのメッセージは、製品インストール・スクリプトを実行した画面に直接表示されます。ただし、コマンド行の末尾でリダイレクト記号とファイル名を使用して、これらのメッセージをリダイレクトすることができます。例えば、インストール・コマンドの末尾で `>>run.log` を指定すると、現在の作業ディレクトリーの `run.log` という名前のファイルに標準出力メッセージをリダイレクトします。

標準出力メッセージは、ログおよびトレース・ファイルがオープンされる前に発生した重大エラーも報告します。例えば、次のメッセージ・ブロックは、必要なキーワード (`-runtime`) がインストール・コマンドに含まれていなかった場合に表示されます。

```
parsing command arguments...
CWPIZ0101E -runtime keyword and value not specified on command line.
com.ibm.ws390.installer.InstallFailureException: -runtime keyword and value not specified
CWPIZ0017E install task failed.
```

ログ・ファイル

これらのメッセージには、標準出力に書き込まれたメッセージが含まれますが、インストーラー・プログラムが使用した追加情報および設定も提供します。

例えば、次のログの一部は、使用される応答プロパティおよびそれらの値を示します。また、シンボリック・リンクの作成時に使用されるソース・ディレクトリーおよびターゲット・ディレクトリーも示します。

```
response property: profilePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default
response property: nodeName=SY1
response property: scaSecurityPassword=ibmuser
response property: dbType=Cloudscape
response property: ceiSampleJmsUser=ibmuser
response property: scaSecurityUserId=ibmuser
response property: configureScaSecurity=true
response property: mqUser=ibmuser
response property: serverName=server1
response property: adminBFMGgroups=ibmuser
response property: profileName=default
response property: dbCreateNew=true
response property: ceiSampleJmsPwd=ibmuser
response property: cellName=SY1
response property: dbLocation=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/cloudscape/databases/WBIDB
response property: mqPwd=ibmuser
response property: was.install.root=/WebSphere/V6R0M0/AppServer
response property: augment=
response property: ceiDbProduct=CLOUDSCAPE_V51_1
response property: wbi.install.root=/WebSphere/V6R0M0/AppServer
response property: ceiSampleServerName=server1
response property: templatePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profileTemplates/default.*
```

```
response property: dbName=WBIDB
構成のセットアップが完了しました
シンボリック・リンクの作成中...
Source=/usr/lpp/zWPS/V6R0M0
```

```
Target=/WebSphere/V6R0M0/AppServer
シンボリック・リンクの作成が完了しました
インストール後ファイル更新の実行中...
インストール後更新が完了しました
構成マネージャー更新の実行中...
構成マネージャー更新が完了しました
```

トレース・ファイル

これらのメッセージは、ランタイム・ディレクトリー内の **zSMPIInstall.trace** ファイルに書き込まれます。

以下の例では、いくつかの予備的通知メッセージを示してから、ユーザーがインストール・スクリプト・コマンド行で指定した応答ファイル内で必要な `profileName` プロパティーが検出されなかった (あるいは `-Z` オーバーライドとしても提供されなかった) ことを示す **CWPIZ0322E** エラーを示します。

後続の **CWPIZ0017E** エラー・メッセージは、`zSMPIInstall.sh` 実行の最終的な結果を示す一般メッセージです。

```
[8/16/05 17:00:45:380 EDT] 0000000a ManagerAdmin I BB000222I:
TRAS0017I: The startup trace state is *=info.
```

```
[8/16/05 17:00:48:230 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I:
CWPIZ0044I Begin install task.
```

```
[8/16/05 17:00:48:273 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I:
CWPIZ0117I WPS installer log data will be written to
/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPIInstall.log.
[8/16/05 17:00:48:282 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I:
CWPIZ0024I WPS installer trace data will be written to
/WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPIInstall.trace.
[8/16/05 17:00:48:292 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I:
CWPIZ0014I トレース仕様は ".*all=disabled" です。
```

```
[8/16/05 17:00:48:298 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I:
CWPIZ0045I WPS SMP/E root directory is /zrockuser/wbi/Install.
```

```
[8/16/05 17:00:48:302 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I:
CWPIZ0052I WAS SMP/E root directory is /web/usr/lpp/zWebSphere/V6R0.
```

```
[8/16/05 17:00:48:307 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I:
CWPIZ0046I Destination application server root directory is
/WebSphere/V6R0M0/AppServer.
```

```
[8/16/05 17:00:48:314 EDT] 0000000a WPSInstaller E BB000220E:
CWPIZ0322E profileName property not specified in Response File.
```

```
[8/16/05 17:00:48:318 EDT] 0000000a WPSInstaller E BB000220E:
CWPIZ0017E install task failed.
```

A trace file from a `zSMPIInstall.sh` executed with the trace specification argument set to `"*=all=enabled"` provides additional debugging information. It may contain information that is meaningful only to a developer. The following is a partial trace using `"*=all=enabled"`:

```
***** Start Display Current Environment *****
Host Operating System is z/OS, version 01.04.00
Java version = J2RE 1.4.2 IBM z/OS Persistent Reusable VM build cm142-20050623
(JIT enabled: jitc), Java
Compiler = jitc, Java VM name = Classic VM
was.install.root = /WebSphere/V6R0M0/AppServer
user.install.root = /WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default
Java Home = /web/usr/lpp/zWebSphere/V6R0/java/J1.4
ws.ext.dirs = /WebSphere/V6R0M0/AppServer/java/lib:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/java/lib/
ext:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/classes:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/
installedChannels:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/ext:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/deploytool/itp
/plugins/com.ibm.etools.ejbdeploy/runtime:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/MQSeries/pubsubroot/lib
Classpath = /zrockuser/bbzconfig.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/admin.jar:/WebSphere/V6R0M0
/AppServer/lib/ant.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/bootsrapws390.jar:/WebSphere/V6R0M0
/AppServer/lib/bootsrap.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/configmanager.jar:/WebSphere
/V6R0M0/AppServer/lib/emf.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/ras.jar:/WebSphere/V6R0M0
/AppServer/lib/runtimefw.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/utills.jar:/WebSphere/V6R0M0
/AppServer/lib/wasjmx.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/wasproduct.jar:/WebSphere/V6R0M0
/AppServer/lib/wccm_base.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/wjmxapp.jar:/WebSphere/V6R0M0
```

```

/AppServer/lib/wsanttasks.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/wsexception.jar:/WebSphere
/V6R0M0/AppServer/lib/wsprofile.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default/properties:
/WebSphere/V6R0M0/AppServer/properties:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/bootstrap.jar:/WebSphere
/V6R0M0/AppServer/lib/j2ee.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/lmproxy.jar:/WebSphere/V6R0M0
/AppServer/lib/urlprotocols.jar:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib/bootstrapws390.jar
Java Library path = /web/usr/lpp/zWebSphere/V6R0/java/J1.4/bin/classic/libjvm.so:/web/usr
/lpp/zWebSphere/V6R0/java/J1.4/bin/classic:/web/usr/lpp/zWebSphere/V6R0/java/J1.4/bin/:
/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib:/WebSphere/V6R0M0/AppServer
/MQSeries/pubsubroot/lib:/mqm/java/bin:/mqm/java/lib:/db2810/lib:/db2beta/db2710/lib:
/web/usr/lpp/WebSphere/lib:/lib:/usr/lib:/java/J1.3/bin:/java/J1.4/bin:/java/J5.0/bin:
/staf/lib:/WebSphere/V6R0M0/AppServer/lib:/usr/lib
Current trace specification = *all
***** End Display Current Environment *****
[10/3/05 16:35:05:709 EDT] 0000000a ManagerAdmin I BB000221I: TRAS0017I:
The startup trace state is *all.
[10/3/05 16:35:08:638 EDT] 0000000a WPSInstaller > setup Entry
/web/usr/wbi/zWebSphere/V6R0
APPSERVER
zSMPInstall.sh
-smproot
/web/usr/wbi/zWPS/V6R0
-runtime
/WebSphere/V6R0M0/AppServer
-response
/web/usr/wbi/zWPS/V6R0/zos.config/standAloneProfile.rsp
-prereqonly
-trace
**all=enabled
[10/3/05 16:35:08:640 EDT] 0000000a WPSInstaller 3 logFileDeleted
true
[10/3/05 16:35:08:660 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I: CWPIZ0044I:
Begin install task.
[10/3/05 16:35:08:702 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I: CWPIZ0117I:
WPS installer log data will be written to /WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPInstall.log.
[10/3/05 16:35:08:712 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I: CWPIZ0024I:
WPS installer trace data will be written to /WebSphere/V6R0M0/AppServer/logs/wbi/zSMPInstall.trace.
[10/3/05 16:35:08:722 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I: CWPIZ0014I:
トレース仕様は "**all=enabled" です。
[10/3/05 16:35:08:726 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I: CWPIZ0052I:
WAS SMP/E root directory is /web/usr/lpp/zWebSphere/V6R0.
[10/3/05 16:35:08:730 EDT] 0000000a WPSInstaller > checkPathName Entry
/web/usr/wbi/zWPS/V6R0
[10/3/05 16:35:08:731 EDT] 0000000a WPSInstaller < checkPathName Exit
[10/3/05 16:35:08:732 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I: CWPIZ0045I:
WPS SMP/E root directory is /web/usr/wbi/zWPS/V6R0.
[10/3/05 16:35:08:736 EDT] 0000000a Symlink > isSymlink Entry
/web/usr/wbi/zWPS/V6R0
[10/3/05 16:35:08:737 EDT] 0000000a Symlink 3 absolute path
/web/usr/wbi/zWPS/V6R0
[10/3/05 16:35:08:737 EDT] 0000000a Symlink 3 canonical path
/web/usr/wbi/zWPS/V6R0
[10/3/05 16:35:08:738 EDT] 0000000a Symlink < isSymlink Exit
false
[10/3/05 16:35:08:738 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I: CWPIZ0046I:
Destination application server root directory is /WebSphere/V6R0M0/AppServer.
[10/3/05 16:35:08:744 EDT] 0000000a WPSInstaller I BB000222I: CWPIZ0247I:
Response file is /web/usr/wbi/zWPS/V6R0/zos.config/sample.rsp.
[10/3/05 16:35:08:764 EDT] 0000000a WPSInstaller 3 response property
profilePath=/WebSphere/V6R0M0/AppServer/profiles/default
[10/3/05 16:35:08:765 EDT] 0000000a WPSInstaller 3 response property
nodeName=SY1

```

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711
東京都港区六本木 3-2-12
IBM World Trade Asia Corporation
Intellectual Property Law & Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation 577 Airport Blvd., Suite 800
Burlingame, CA 94010
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報がある場合、それらはこのプログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立つよう提供されています。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

警告: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。IBM、IBM logo、AIX、CICS、Cloudscape、DB2、DB2 Connect、DB2 Universal Database、developerWorks、IMS、Informix、iSeries、Lotus、Lotus Domino、MQSeries、MVS、OS/390、Passport Advantage、pSeries、Rational、Redbooks、Tivoli、WebSphere、z/OS、zSeries

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

この製品には、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org/>) により開発されたソフトウェアが含まれています。



IBM WebSphere Process Server for z/OS バージョン 6.0.2



Printed in Japan